

五
十

創立50周年記念

Hakodate University 50th Anniversary

函館大学史



創立50周年記念
Hakodate University 50th Anniversary

函館大学史

巻 頭 言



学校法人野又学園
学園長

野 又 肇

函館大学創立50周年記念誌を刊行するにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本学園は、昭和13年に函館計理学校として認可を受け、学園訓「報恩感謝・常識涵養・実践躬行」を生活の信条として知・情・意の円満にして高度に発達した人間の育成、即ち、人間教育と職業教育を目的として創立されました。本学園は現在、函館大学、函館短期大学、函館看護専門学校、函館歯科衛生士専門学校、函館短期大学付設調理製菓専門学校、函館大学附属有斗高等学校、函館大学附属柏稜高等学校、函館短期大学附属幼稚園、函館自動車学校の9校を設置しております。

函館大学は昭和40年1月に文部省の設置認可を受け、北海道で5校目の私立大学として同年4月開学いたしました。本学の目的は地域社会の教育、学術研究、文化の中心として函館市は勿論のこと、北海道、ひいては国家社会に貢献することにあります。

本学はこの半世紀の間に、昭和43年5月の十勝沖地震による災害、オイルショック、18歳人口の急増・急減、サブプライムローンの破綻による景気の長期低迷、規制緩和による競争の激化などを乗り越えて、1万名に近い卒業生を社会に送り出してまいりました。卒業生の皆様が社会の各界、各層で活躍していることは誠に喜ばしい限りであります。これも

偏に、ご指導、ご支援いただきました父母、同窓生、地域社会、企業、関係諸団体の皆様のおかげでありまして、心から厚く感謝申し上げる次第であります。

現在は高度知識基盤社会、高度情報化社会、高度技術、高度資格、高度学歴社会、そして、国際化社会でもあります。高度の知識、技術、資格、学歴がなければ、誰でもできる単純作業に甘んじなければなりません。平均寿命80歳を超える長寿社会にあって長い人生を幸せに全うすることは大変に難しいことです。学ぶことの必要性、学ぶことの大切さ、学ぶことの面白さ、学ぶことの喜び、学ぶことこそが人生を幸せに生きることであり、教育の目的でもあります。大変厳しい社会環境にありますが、その厳しい環境の中でも逞しく生きていけるようにしっかりと教育改革を進めて教育に当たることが重要であります。

本学は50周年を機に、改めて建学の精神の原点に立ち返り、創立者の提唱した学園訓「報恩感謝・常識涵養・実践躬行」を生活の信条として具現化し、知・情・意の円満にして高度に発達した人間を育成して、国家社会に貢献してゆく決意を新たにしているところであります。

皆様の一層のご健勝とご多幸を祈念すると同時に、ご指導、ご鞭撻をお願い申し上げて、発刊のご挨拶といたします。

刊 行 に あ た っ て



学校法人野又学園
理事長・学長

野 又 淳 司

この度、「函館大学創立50周年記念誌」の発刊に際し、日頃、函館大学に対するご支援やご協力をいただいている関係諸機関をはじめ、本学園の運営助成を賜っております函館市・北海道・文部科学省の関係各位そして卒業生の皆様方に対し、心から感謝申し上げる次第であります。

さて、私立学校は創立時の建学の精神に基づいた教育機関であります。本学園の創立は昭和13年の函館計理学校に始まり、昭和28年には函館商科短期大学の開学、そして昭和40年に函館大学が開学いたしました。このように本学園では一貫して商業・商学の教育を行ってきており、平成27年は本学園創立77年、函館大学創立50年の節目に当たります。

函館大学は北海道で5番目に設立された私立大学であり、これまでに輩出した9638名の卒業生が、函館市内の経済界の要職を務め、また、国内外を問わず幅広い分野で活躍していることを心からうれしく思います。

私が幼少の頃から、家には創立者野又貞夫先生が色紙に記された言葉が多数あり、その言葉とともに私も成長してきたように思います。

学園訓3カ条である「報恩感謝・常識涵養・実践躬行」は、家のあちらこちらにあるのですが、自らを映す鏡としてつねに私とともにあります。

私を与えられた子供部屋には、古い格言「いつまでもあると思うな親と金、ないと思うな運と災難」が飾られていました。昭和43年に函館大学校舎が十勝沖地震により全壊し、その復興に当たっては本当に多数の皆様

に支えられ、本学の今があります。このような事実があつてこそ、この格言から本物の道德心を学び得たと感じます。

居間にはテレビがあり、その横には「雲の上にはいつも太陽が輝いている」が飾られています。これはおそらくロングフェローの詩、“The Rainy Day”の一節“Behind the clouds is the sun still shining”の訳だと思えます。元は悲しい詩のはずですが、不思議と意欲がわいてくる言葉です。

応接室・書斎にあるのは、「生涯学べ」です。書斎には中国の古典思想や近代文学の全集があり、手を伸ばしていました。孔子、孟子、老子、孫子などは現代においても人間学として経営に役立ち、いまでも折に触れて手に取ります。文学からも同じように学ぶことができます。人間は千年を経ても共通した性質があるのです。

さて、そう考えると50年という歳月は、大した年月ではないのかもしれませんが、この半世紀で私たちの住む世界は大きく変わったように感じますが、変わらないものが確かにあるのです。人間そのものと、人と人がつくる社会には、普遍的なものがあると私は考えますし、社会科学の精神はここにあります。これが一言で伝えられたならば学園や教育はどれほど楽でありましょうか。先達の苦勞と努力に思いを馳せ、心からの敬意を表する次第です。

結びになりますが、この記念誌を函館大学の新たな半世紀への第一歩とし、建学の精神と理想を高らかに掲げて邁進する覚悟です。皆様の倍旧のご支援を希う次第であります。



建学の精神

本学園は昭和十三年に創立され、開校以来職業教育を第一目標とし、職業教育を通じて真の学問の道を授けようと努力している。惟うに真の学問とは言うまでもなく知・情・意を円満にして而も高度に発展せしむることである。従って学問と徳性とは別々に考えるものでなく不離一体の関係にある。徳性の涵養を離れた学問はなく、学問とはあくまでも、知・情・意の総合的体得に外ならない。

換言すれば学問とは信の一字につきる。信は真に通じ「かの天に斗あるが如く人は信を常とすべし」の古語にある通り、天空の道しるべは斗で

ある。即ち星であるが如く人間生活の道標は実に信の一字に要約されている。

こうした意味に於いて、本学園訓の三カ条たる報恩感謝、常識涵養、実践躬行の終局的発展は真の学問追究を意味しているのである。

創立者の建学の精神はこうした意味の学問を通じて北海道総合開発の一端として地域教育の開拓に寄与し、男子も女子も一定の職業教育を受け、立派な専門職を持つことそれ自身が常識涵養の範疇に包括され、あくまでも地域社会に貢献し得るような人材の養成にある。

校舎の変遷



昭和40年 開学時校舎

杉林に囲まれた
堂々とした4階建て
校舎でした。



昭和43年 十勝沖地震 による 校舎倒壊

けが人が1名と
奇跡的なこと
でした。



昭和44年 復興校舎

1年で復興校舎
完成。



昭和45年 校舎全景

写真右下は
震災校舎を粉碎して
土盛りした
グラウンドです。



昭和51年 開学10周年 校舎増築

現在、喫茶がある棟です。
この年の10月に
創立者 野又貞夫先生が
逝去されました。



昭和60・62年増築

S60 図書館・研究室棟
S62 体育館・武道館
学生会館

テニスコートも出来ました。
教員住宅もまだあります。



平成4年 講義棟・研究室棟 増築

急増期に対応。



平成13年 専攻塾棟増築 平成21年 第2学生寮新築

オール電化の第2学生寮新築。
旧学生寮は取壊しとなりました。



歴代理事長・学園長



(創立者)初代理事長・初代学園長・初代学長

故 野 又 貞 夫



二代理事長・三代学園長

野 又 肇



二代学園長

故 野 又 シ ン



三代理事長・九代学長

野又 淳司



報恩感謝

四恩即ち、神仏の恩、父母の恩、師の恩、社会の恩に感謝しながら日常生活をすることこそ人間の幸福と言えよう。これを体得することは家庭教育の中心であり、仁の行いであり、情の世界であり、真実の人生はここから生まれる。誠に自己の真の姿を映す鏡の精神である。

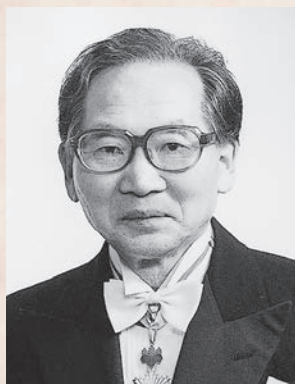
常識涵養

常識とは健康なる判断力である。正邪、善悪の判断をわきまえて行動しさえすれば人間生活は悔ゆることはない。それには知識が前提となる。世の中の進歩と共に一定の知識を身につけなければ正確なる判断をすることが不可能になる。学校教育の目的もここにある。円満なる人格の持主となる聖の精神である。

実践躬行

人間は一定の職業を持って社会生活をしなければならない。自ら実際に践み行わなければならない。依頼心は禁物である。これがためには大いなる勇気を要し、堅固なる意志の強さがなければならぬ。他人に迷惑をかけず、自律の生活をする姿こそ貴賤の差なく美しいものである。社会教育の神髄はここにある。この道徳的良心こそ身を持つる剣の精神であろう。

歴代学長



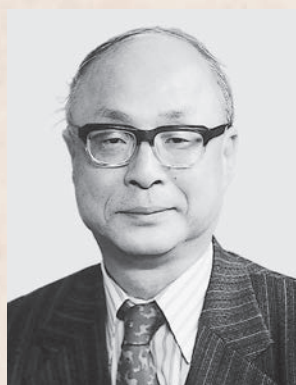
二代学長

村田 喜一



三代学長

佐藤 裕



四代学長

和泉 雄三



五代学長

大野 和雄



六代学長

河村 博旨



七代学長

小笠原 愈



八代学長

溝田 春夫



Contents

巻頭言 学園長 野 又 肇
刊行にあたって 理事長・学長 野 又 淳 司
建学の精神／校舎の変遷／歴代理事長・学園長／学園訓／歴代学長

I 創立50周年を祝して 1

北海道知事	高 橋 はるみ	2
函館市長	工 藤 壽 樹	3
函館商工会議所会頭	松 本 榮 一	4
日本私立大学協会北海道支部支部長	森 本 正 夫	5

II 創立50周年に寄せて 7

第6代学長	河 村 博 旨	8
第7代学長	小笠原 愈	11
第8代学長	溝 田 春 夫	12
名誉教授	永 野 弥三雄	13
協学会会長	吉 川 達 也	14
協学会副会長	高 橋 亨	15
元事務局長	石 崎 福 邦	16

III 創立50周年のあゆみ 17

IV 教育・研究のあゆみ 67

カリキュラムのあゆみ	68
函館大学論究のあゆみ	72
函大商学論究のあゆみ	81
研究所のあゆみ	91
教員の研究活動	98
国際交流のあゆみ	107

V 図書館のあゆみ 117

VI 学友会・大学祭・同窓会・協学会のあゆみ 129

学友会のあゆみ	130
大学祭のあゆみ	132
同窓会のあゆみ	136
協学会のあゆみ	137



Hakodate
University
50th
Anniversary

VII 母校に寄す（寄稿文）.....139

松尾正寿（1期）／渡邊兼一（3期）／同窓会札幌支部長 西谷憲一（2期）／
同窓会関東支部長 川原敏裕（15期）／古久根 靖（19期）／高橋和将（28期）／
増田博巳（31期）／山縣 優（32期）／坂田 遼（41期）

VIII クラブ活動記録149

硬式野球部／軟式庭球部／陸上部／スキー部／卓球部／排球部／剣道部／空手部／
山岳部／サッカー部／ハンドボール部／少林寺拳法部／バスケットボール部／柔道
部／洋弓部／羽根球部／ボウリング部／準硬式野球部／硬式庭球部／ゴルフ部／ボ
クシング同好会／トランポリン同好会／ラグビー部／アルティメット部／杖道同好
会／美術部／茶道部／吹奏楽部／マーケティング研究会／経済学研究会／モダン・
ジャズ研究会／会計学研究会／写真部／ローターアクト部／フォークソング部／ア
ニメサークル／連絡船を守る会／将棋同好会／弁論部／応援団／ボディビル同好会

IX 創立者年譜187

X 沿革年譜191

XI 資料195

函館大学学則	196
校地・校舎面積推移表	210
校舎配置図	211
校内見取図	212
学費年別推移表	214
学生異動表	218
現教職員	219
旧教職員	221
部・館長・室長、委員会所属	226
歴代会長・副会長一覧	248
校歌・学園歌	250
新聞記事に見る大学のあゆみ	252
大学案内	266

編集後記	270
------------	-----

I

創立50周年を祝して





函館大学開学50周年に寄せて

北海道知事

高 橋 はるみ

函館大学が、開学50周年という節目の年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴学は、昭和40年の開学以来、約1万名の有為な人材を社会に送り出され、経済界をはじめとした各分野において活躍されるなど、本道の発展に多大なるご貢献を果たしてこられたところであり、野又学長をはじめ、関係者の皆様のこれまでのご尽力に対し深く敬意を表します。

我が国はいま、人口減少問題をはじめとした様々な課題に直面しています。18歳人口のさらなる減少が見込まれる中、高等教育機関においても、スピード感のある経営改善や、地方に高度な大学機能の集積を進める取組、さらには地域の活力を支える人材の育成など地域課題解決に向けた取組が求められています。

一方、道内では、アジアにおける経済成長などを背景に外国人来道者数が年々増加しているとともに、平成28年3月の北海道新幹線の開業により、特に歴史的なつながりの深い青森県をはじめとした東北地域や首都圏などと、観光やビジネスなど様々な分野において連携・交流が拡大するものと期待されており、本道は新たな飛躍への大きなチャンスを迎えています。こうした中、貴学におかれましては、経済・法学・情報など地域社会からのニーズの高い教育の提供に努められるとともに、グローバル化に対応した語学教育などにもご尽力いただいているほか、高等学校との連携の積極的な推進や公開講座、地域連携事業の実施など、地域に開かれた取組を進められるなど、地域の振興にも大きな役割を担っていただいております。今後とも、本道の発展にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、貴学が、この50周年の記念すべき年を契機に、さらなる輝かしい歴史を刻まれますとともに、関係の皆様が益々活躍されますよう祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



祝 辞

函館市長

工 藤 壽 樹

このたび、函館大学が創立50周年という節目の年を迎えられることを、心からお慶び申し上げます。

貴学におかれましては、昭和40年に北海道内5番目の私立大学として誕生し、以来、半世紀もの永きにわたり、学園訓である「報恩感謝、常識涵養、実践躬行」を具体的信条として、知・情・意を高度に、かつ円満に発達させる真の学問を追求するという建学の精神のもと、北海道開発および産業の興隆、文化の発展に役立つ職業人の養成に努められ、今日では、道南唯一の4年制の社会科学系私立大学として地域にとって並び無い高等教育機関としての地位を確立するとともに、これまで9千名を超える優れた人材を輩出し、数多くの卒業生が各界各層でご活躍されているなど、本市の振興・発展に多大なる貢献を果たしていることに対しまして、深く敬意を表する次第であります。

また、近年は、西部地区への「バイエリア・サテライト」の開設や「北海道新幹線と観光」研究プロジェクトの実施など、学生が地域の課題解決に取り組む事業を数多く展開しているほか、平成27年3月には、貴学と本市との間で、教育、文化、学術および地域振興に関する各分野の協力関係を深めるための相互協力協定を交わしたところであり、貴校が持つ知的資源が地域振興に果たす役割は、今後ますます大きくなるものと確信しているところであります。

さて、今日、本市では、人口減少、特に若者の流出や経済の低迷が喫緊の課題となるなか、平成28年3月に控えた新幹線開業はもとより、函館アリーナの供用開始による新たなコンベンションやスポーツ大会の誘致、さらには、中心市街地の活性化などを契機に交流人口の拡大を図りながら、観光関連産業のみならず、すべての産業に経済波及効果をもたらし、若者の雇用の場を創出していきたいと考えているところであります。

そうしたなか、地域に若者を呼び込むために大学と地域が連携し、ともに取り組むことは、地方創生の時代にあって、とても意義深いものがあり、貴学には、これまでも増して、人材の育成を通じて、地域社会への貢献が期待されるところであります。

結びにあたりまして、歴史と伝統を誇る函館大学の今後ますますのご発展とともに、将来にわたって、我がまち函館の未来を担う多くの若者が社会に巣立っていくことができますよう心からお祈り申し上げまして、お祝いの言葉といたします。



開学50周年を祝して

函館商工会議所会頭

松 本 榮 一

函館大学様が開学50周年を迎えられましたことに、心からお祝い申し上げます。

また開学以来、道南唯一の社会科学系私立大学として、数多くの卒業生を輩出され、優秀な人材が当道南地域はもとより、広く国内外でご活躍されておりますことに、あらためまして深い敬意を表するしだいです。

ご承知のとおり我が国経済は、消費税率の引き上げによる個人消費の停滞、円安による原材料の高騰、電気料金の値上げ等、企業には厳しい経営環境が続いており、地方の中小企業の多くでは、アベノミクスによる景気回復を充分には実感できずに推移しています。加えて北海道においては、人口減少等に伴う地域経済の減退傾向が顕著であり、政府が掲げる地方創生への取り組みが待ったなしの状況となっています。

一方で、地域が大きな期待を寄せる北海道新幹線については、開業までいよいよ1年を切って間近に迫り、開業イベントやプロモーション活動の推進に加え、新幹線効果を最大限に、且つ継続的に活かすための諸事業を、地域一丸となって展開していかなければなりません。

また、新幹線等高速交通網の進展により時間距離が短縮され、広域の経済交流が盛んとなることにより、観光産業を中心に大きなビジネスチャンスが生まれますが、新たな競争の時代が到来することにもなります。

当地域は全産業に占める3次産業の比率が高く、バランスある産業構造形成のためには、2次産業の振興発展が喫緊の課題でもあり、本所が提唱する南進政策のもと、積極的に東北・北関東・首都圏へ事業展開することが重要であると考えます。

こうした地域課題に果敢に取り組み、未来に貢献する若い有為な人材が地域にとっては必要不可欠であり、貴学が担われる役割にさらに大きな期待を寄せるところです。

どうかこの記念すべき50周年を新たな飛躍への出発点として、今後とも当地域発展のため、ご尽力賜りますようお願い申し上げます。

結びに、貴学の今後ますますのご発展を祈念申し上げましてお祝いの言葉と致します。



函館大学創立50周年を祝して

日本私立大学協会北海道支部支部長

森 本 正 夫

函館大学が創立50周年という記念すべき節目の年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。

貴大学は昭和40年に野又貞夫先生が開学されました。先生は、これに遡る事27年前に函館計理学校を開設したころより一貫して地域に対する一方ならぬ思いがあり、地域社会に貢献できる人材の育成を目指してこられたとお聞きしております。学園訓の「報恩感謝」「常識涵養」「実践躬行」は真の学問追究を意味し、先生は「学問とは信の一字につきる。」(著書『解道自楽』)とも述べられています。

こうした社会で信頼され貢献できる人間を育成することを目指しておられた野又貞夫先生の精神が、様々な困難を乗り越えて受け継がれ、ついに50周年を迎えられたことは、ひとえに野又肇前理事長をはじめ、歴代の学長先生方、また法人・大学関係者各位の並々ならぬご尽力の賜物として深く敬意を表するものであり、北海道私学全体にとりまして大きな喜びであります。

今日、少子高齢化やグローバル化の進展など急激に社会が変化するなか、私立大学の役割は益々重要となっております。私どもは、地域における優れた人材の育成と未来をきり拓く新しい知の創造を担う大学づくりに向け、相携えて叡智を結集し、共に北海道私学の発展に全力で邁進しなければなりません。

貴大学はこれまでも伝統の実践教育を重視しながら、「ビジネスの創造」や「国際化」など社会のニーズに対応し、近年では、より地元と密着した地域連携事業を推進するなど、特色ある教育に取り組まれるとともに、地元函館はもとより、北海道、全国で活躍する数多くの有為な人材を輩出されております。今後におかれましても、この創立50周年を大きな節目としながら、貴大学で学ばれる学生諸君が、将来に向かって大きく羽ばたかれますことを願うとともに、貴大学が一層の躍進を遂げられますことを心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

II

創立50周年に寄せて



創立50周年に寄せて一言お祝詞を

第6代学長

河村 博 旨



函館大学創立50周年の記念誌の発行の由、心からお慶びを申し上げます。

歴代の理事長、学長はじめ事務局長や教職員の方々のご苦勞とご尽力に感謝し、敬意を表したく存じます。

創立のご苦勞ご苦心を捧げられた野又貞夫、シンゴ夫妻の先生がご存命であれば、きっと大変にお喜びであろうと推測。

短大時代は勿論、大学の創立3年目の十勝沖地震の被災による本校舎の全壊の悲哀。

しかし、この被害で日本全国ばかりか、世界中に地震の被害と共に函館大学もテレビ、ラジオ、新聞、雑誌等々にマスコミでPRしてもらっている、と思うと5億円や10億円のPR代金と思うと安いもの。と明確に笑顔で語られた貞夫先生の発言。

ビックリしたり感心したり、立派な経営者とはこういう人物のことかと敬服したことをはっきりと記憶。今も懐かしく思い出します。

決断、勇気、大胆、かつ細心で心やさしいお人柄、教員控え室での楽しくて役に立つジョークの上手だったこと。

新婚当初のこと、「河村君、いいことを教えてあげよう、」と言って一言。キーナンバーの9に年代世代の数の桁（十に）をかけざんすること。

31歳だったらその30の3を9にかけざんすると27。

この27の20を日数、7を回数としてみる。分かるかい。

20日に7回のセックスが理想という考え方。日本の昔の医者貝原益軒先生の説らしいよ。このことを心得て実行すると夫婦円満間違いなし、ということですよ。

これより多すぎると健康を害し易いし、少なすぎると奥さんの不満がたまるので夫婦仲に問題が発生し易いということだよ。

夫婦円満であると仕事も充実して楽しい人生となるということ。貞夫先生の有難いご忠告、ご助言。

卒業生の媒酌人を務めた際にも、貞夫先生のご忠告を新郎新婦に伝言したことも懐かしく思い出し、感謝の心で熱くなる胸の内。

「報恩感謝、常識涵養、実践躬行」この学園訓三カ条も、教員控え室でいろいろ具体例を示して解説して頂いたこと。これが今も私の人生観、「座右の銘」となっていること。これも貞夫先生の教えのお陰と感謝することも少なくない。

ここで思い出したいこと一つ。

教職員の採用試験では必ず、学園訓三カ条のその人ならの解釈理解を200字～400字程度で記述させること。これも採否の重要な条件の一つ

とすること。さらに、卒業生に一言の冊子「学報」にも教職員全員にこの学園訓三カ条を必ず引用して、卒業生を送る言葉を書かせること。

教職員共に昇進昇格の時には、必ずこの学園訓解釈の文章を審査の対象に入れる（含める）こと。理事長、学長、理事、評議員をはじめ、教職員各自から学園訓を体得してこそ、学生、卒業生の人格教育で薫陶（くんとう一徳をもって人を感化し、すぐれた人間をつくること）が可能となるはず。

学長職13年もの長期に亘って務めさせて頂きながら、不可能だった学園訓の教職員、学生、卒業生への浸透と反省したい。お詫びもしたい。特に貞夫、シン先生ご夫妻のご霊前にお詫びを申し上げたい。学長として、やりたくても実行できなかったことを述べると、まだまだあります。

教職員の採用と大学の特色の一つ。

(A) 教授職の人材としては、専任については、学歴制約をつけること。

一橋大学の大学院の博士課程(後期課程)を修了した人材に限定を原則とする。例外としても東大、早大、慶大までに限定。悪くても、京大、神戸大学までを例外扱いの大学とする。

教授の半数以上に博士号取得者とする。海外は、ハーバード大などのアメリカのアイビーリーグの大学の大学院、スタンフォード大などの名門大学の大学院修了者に限り採用。ロシア、中国、ヨーロッパ、オーストラリアなどの大学も名門大学の大学院の修了者に限定して採用。

この程度の人材の採用で大学教育だけでも高校の進路指導者の関心を誘うことは問

違いないはず。大企業の人事採用担当者からも強い関心を寄せられるはず。地方公務員などの採用でも不利な評価は受けないはず。

(B) 可能な限り、40歳ごろまでに2年間以上は海外の大学に留学を強制。但し、海外の大学の大学院出身者は別の扱いとする。

(C) 正教授に昇格昇進する時には、専門家の間で通用する論文一冊以上(1ページ900字程度で200ページ以上)担当教科の入門書、テキスト1冊以上を出版していること。

出版費用は大学の全額負担。各500冊以上出版して、半分以上は大学の図書館から他大学の図書館に寄贈。送付する送料などは大学の負担。

(D) 事務職員の男子の場合は、東京六大学クラスの出身者に限定した採用を原則とする。北海道生まれで、道内の高校、道内の大学の卒業、道内の企業に就職(中途採用)という事例は極力避ける。卒業生の就職先の企業訪問でも道内のみの経歴の人材は不利となり易い。人脈も狭い。地理勘も良くない場合が多い。相手との話題にも不自由するケースが多くなり易い。同窓会等、県人会等での人脈の開拓も不自由が多い場合がある。女子事務職員の場合は、関東などの大学の就職課などに研修出向をさせる。大企業の人事・総務課でもいいから研修出向を1~2年させる。人材育成の一環。

(E) 卒業生の就職先は、上場企業一部、二部、ジャスダック、マザーズなどの証券市場に株式を上場公開している会社中心とする。卒業生の50%以上は、上場企業と地方公務員という函館大学とする。これも、高校の

進路指導の先生方にも強い関心を持たれる条件の重要な一つのはず。在学生、卒業生の父母からも好意と関心を抱かれるはず。クラブ活動も大切な人材育成の条件ですが、これも大変に困難です。

(A) まず、札幌中心の道内の大会で遠征の時間、費用に問題が生じやすい。函館市や、道南での練習、対抗の試合をしようにも大学が少なすぎる。強化クラブの限定とコーチ指導者の獲得には困難を伴う場合が多い。ハード面から言うと、クラブ以外の一般学生の利用できる野球グラウンド、テニスコート、体育館が不十分すぎる。土地代金の安価な函館のこと。大学の坂上の有斗のグラウンドの奥にでも土地を求めて野球グラウンドやソフトボール、サッカーグラウンド可能ならば、乗馬場つきの乗馬クラブのようなユニークなクラブも北海道らしくて面白いと考えていたが、実現できなかったことの一つ。競馬場の乗馬クラブの協力を得ることも可能ではという人もいたのですが、実行力不足で出来ませんでした。

(B) 音楽の練習室も建ててもらったのですが、やや狭いのが難点。5つ、6つと複数のクラブが同時に練習可能な練習施設と楽器の保管庫の完備。指導者の人材の確保も問題。しかし、学生のニーズは強くて多いはずで。芸能界のプロダクションなどのマネジメントの得意な人材を育成できないものかと夢想して、苦心してみましたが大変に困難。指導者の確保も極めて困難、と困難だらけと感じたのは私のリーダーシップの不十分だったことが大半の原因のようにも思っています。

最後に、理事長、学長兼務のリーダー役を務めだった貞夫先生は、道央道東の網走や釧路の方までも学生募集に自ら出張されたこと。過労から出張先で倒れて入院ということもあったこと。

網走や釧路の高校、帯広の高校などで進路指導部の先生方から野又貞夫先生のご活躍の噂や思い出話を拝聴したこと。リーダー自ら学生募集に出張されていたことに感謝したり、感心し、敬服の念を強くしたことも懐かしく思い出します。

また、教員の定着率のよくないことを心配して、二代目の野又肇先生と相談して、中大の幹部教授を紹介して頂いて、中大の大学院の修了者をたくさん採用して頂きましたことも懐かしい思い出です。肇先生のご苦勞も察したいものです。

今度の三代目理事長野又淳司先生(学長兼務)は一橋大の出身。日本の商学部の起源、源流、メッカともいうべき一橋大学の商学部。

ここのゼミの先生や先輩、後輩を通して、人脈を拡大強化して頂いて、専任の教授コースの人材を一橋大学の大学院からの採用を中心とする函館大学とすることを切に切にお願いし、祈願したく存じます。

最後の最後に学園と大学の発展と野又肇、淳司父子の強運長久を心から祈念申し上げて、私のお祝いの心の一端を述べて擱筆と致したく存じます。

創立50周年に寄せて

第7代学長

小笠原

愈



函館大学が創立50周年を迎えられましたこと
をお慶びし、時代や近隣地域のニーズに応える
高等教育機関として堅実な歩みを刻み続けてお
りますことに敬意を表します。

私は、平成14年12月10日に函館短期大学長と
の兼務で就任し、平成19年10月31日に不意の病
に陥って退職するまでの勤務でしたが、この間
に戴きました野又肇理事長先生をはじめ、教務
指導や管理事務に携わる方々の温かなご協力、
ご指導を思い出し、感謝の念でいっぱいです。

当時は、高校生の激減と大学の乱増等により、
入学者の激減が一挙に迫るなかで地域社会との
結びつきに活路を見だし、経営の改善を創ろ
うと共に努力を重ねたことを思い出します。特
に、学園創設者故野又貞夫先生が説かれた「真
に教化された人」と野又肇先生の「学園訓」に基
づく教育策の立案と具現化」の意を体して、教育
システムの改善と教育の質の向上、近隣の高等
学校との連携等に真摯に取り組んだことを思い出
します。

例えば、英語ビジネス学科設置による英語教
職課程や小学校英語指導者養成団体登録、図書
館内に放送大学函館学習室の開設、キャリア開
発や教職教育のセンター、開学以来の歩みを示
す展示情報コーナー、福祉ビジネス専攻塾等の
開設、地元3大学との研究連携、野球専用のグ

ラウンドや冬場の練習場の設置、さらに近隣の
高等学校との連携協定（函館商業高等学校等6
校）の締結等です。いずれも、教務、学生、入
試の各担当部長等の積極的な尽力を得て成就で
きたことであり、こうした協働により、激減を
重ねていた入学者の漸増や野球部の北海道代表
としての神宮球場での活躍。卒業生の教職や福
祉の職種への進出等が見られるようになったこ
ことを思い出します。

実は、私は、先般、図らずも平成26年度函館
市文化賞を市長様から受賞しましたが、その贈
呈式の謝辞で、野又肇先生に触れたフレーズで
目頭が熱くなったことに気づかれた出席者のあ
る方から、式後に、「野又氏は、大きな教育者で
すね」とささやかれ、「はい、私が函館に戻っ
てからの大きな心の師です。」と応えさせて頂き、
心からの感謝の念がこみ上げて参りました。

実は、4月19日の新聞紙上で、野又淳司先生
の三代目理事長と九代学長就任の抱負に接し、
今後、ご祖父、お父上の意を体し、大学を地域
の振興・再生の中枢を担うキャンパスにする発
展への意欲を読み取り、秘かに、心から感動を
覚えさせていただきました。50周年を機に、す
ばらしい大学への途を創られますよう心から祈
念申し上げます。

創立50周年に寄せて

第8代学長

溝田 春夫



この度、創立50周年を迎えられましたこと心よりお祝い申し上げます。

函館大学は学園創立者である野又貞夫先生によって昭和40年に北海道内5番目の私立大学として函館で開学され、今日まで半世紀の時を刻み続けてきました。その間に多くの卒業生を社会に送り出し、卒業生が全国、各界で活躍されていることは大変喜ばしいことであるとともに大学の大きな使命の一つである人材教育において大学としての重要な役割を果たしてきたことを関係者の一人として嬉しく思っています。これまで大学の発展に貢献されてこられました先輩教職員をはじめ多くの関係者の皆様のご支援とご努力に感謝するとともに敬意を表するだけです。

私は昭和56年4月の就任から平成27年3月の退任までの34年間を函館大学で過ごし、多くの学生、教職員、関係者の方々とめぐり合うことができました。特に、最後の7年半は皆様の協力と支援をいただき、微力ながら学長として大学の運営にかかわることができ、感謝しております。この間、大学は18歳人口の急増・急減や国際化など社会の大きな環境変化に置かれてきました。平成4年前後には18歳人口がピークとなり関東を中心に全国から多くの受験生を迎え、在籍学生数が急増して活気のあるキャンパスと

なりました。学科増設や校舎などの施設も次々と増設され赴任時とくらべると3倍から4倍の規模に拡大されました。しかし、その後急減期を迎えるとともに、学生数は減少し、大学は厳しい環境に置かれるようになりました。このことは全国の大学で直面する大きな問題となっています。人材教育はもちろん地域貢献など大学が社会から求められている使命や期待がますます大きくなり、国からの要請も厳しくなってきました。最近では国立大学を中心に管理面での強化が進み、大学を巡り大きな変化が進んでいます。この変化が日本の教育の将来にどのような影響を与えるのかは今後の結果を待つこととなりますが、いずれにしても良い方向に向くよう関係者の努力が必要になってきます。今日ほど大学のあり方が問われている時代は無いのではないのでしょうか。

教育はこれで良いということはありません。常に改善を加え、より良いものにしていくことが大切です。これからも引き続きより良い教育を目指して大学の改革を進めていくことが必要ですが、学生、卒業生、教職員のためにも関係者が協力して、地域に無くてはならない大学として函館大学が発展していくことを心より願っております。

函館大学創立50周年を祝して

名誉教授

永 野 弥三雄

50年というと半世紀ですが、今年亡くなったシンガポールの初代首長リ・クァンユーをたたえて「わずか50年であれだけの国を築いた人」といわれました。

さて、同じ50年の函館大学はどうだったでしょうか。創立10周年の記念歌に「大地（つち）震い（ふるい）たる試練」とありますが、実に昭和43年5月の十勝沖地震で本校舎が崩壊したのです。暫くして新築されますが、初代野又貞夫学長、2代目野又肇事務局長、をはじめ創立期の諸先生の大変なご苦勞によって、まさに死線を越えたのでした。そして、着実に発展を重ね、現在の少子化という困難な状況に対応しながら安定した経営となっています。

昭和50年に、私は教授として就任し、産業概論、経営管理論などを担当しましたが、ふり返ってみると、最もやり甲斐のあったのは、1・2年次のS・L、3・4年次の専門ゼミでした。さまざまな地方出身のゼミ生と、じかに話し合っ、それぞれの個性にかなう人生の方向、とりあえずは就職を指導することは楽しみでし

た。ここでゼミ卒業生のうちで接触の多い3人を思い出しますと、54年卒で白子のり大阪支店営業部長の岡部茂君（親子二代函大卒です）、今度の統一地方選挙で羅臼町長となった61年卒の湊屋稔君、函館どつく品質課検査係長で、基幹産業連・函館どつく労働組合委員長をつとめる平成4年卒の松田陽一君、この人達でいえることはそんなに目立つことはないのですが、まわりと調和しながら、常識をもって確実に仕事をこなしていることです。

ここまで述べてハタと気づくことですが、意識的ではないにせよ、実に本学の建学の精神を実践していることです。開学以来卒業生1万有余人は、地元をはじめ全国各地で就職して家庭人として生活をしていますが、其の地域の産業社会を底からささえている存在となっています。つまり、広く信用される人材となっています。

ですから、野又学園函館大学はこれからの50年も新しい三代目野又淳司学長共々、建学の精神を具現化して発展してゆくものと確信しております。

創立50周年に寄せて

協学会会長

吉 川 達 也

このたび、函館大学が創立されて、50周年の節目を迎えることになりました。

ここに、函館大学に在籍する学生の保護者並びに本学教職員及び賛同する有志をもって組織する協学会といたしまして、心からお喜びを申し上げます。

顧みますと、本学は、我が国が戦後の疲弊混乱期から脱し、漸く先進国への道をたどりはじめた時代の昭和40年1月に設置認可され、創立者である野又貞夫先生の「わが望みこの新しき学び舎にかけて幾年暮らしてきしか」ご遺徳の如く、同年の4月に開学されたのであります。

爾来、50年の歳月を経て、いわば半世紀を数えたこととなります。これまでの間、幾多の苦難と変遷を経て、今日ここに社会科学系の私立大学として、名実ともに充実・発展を成し、確固たる姿を見るに至りました。

卒業生は、9千5百余名を数え、函館市内は

もとより北海道内外の各界・各分野において幅広く活躍し、社会的に多大な実績貢献を果たしてきていることに、あらためて深甚なる敬意を表するものです。

函館大学協学会は、本学で勉学を修める学生たちのキャンパス生活はもとより、家庭と学校との関係を緊密にし、父母と先生とが互いに理解をもって、学生及び教職員の福祉を増進する為に努力することを目的にして諸事業を推進しているところです。

については、この50周年事業を良い機会として、本学の歩みと併せて、協学会の会員相互が一層の親睦と絆を深めることはもとより、今後とも、皆様の温かいご理解をいただき、絶大なるご支援とご協力をお願い申し上げる次第です。

おわりに、函館大学が「後続くを信ず」と、今後益々の発展と隆昌の一途をたどることを祈念いたしまして、お祝いの言葉と致します。

函館大学創立50周年に寄せて

協学会副会長

高 橋 亨

地域の私学の雄である野又学園が求める建学の精神、「知・情・意」を高度にかつ円満に発達させる具体的な学問追究の府として、1965年（昭和40年）に創立された函館大学が、この度、50年という大きな節目の時を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。

併せて、これまで長い間大学を支えていただきました、創始者・野又貞夫先生、野又肇前理事長はじめ、数多くの関係者の皆様のご尽力に対しまして深く敬意を表します。

北海道第3の都市函館市に、商学を専門とした私学の大学が設立されることを、商都函館の市民も大いなる期待をもって歓迎をいたしました。

その市民の期待を背に、教職員、学生が一丸となって努力を重ね、確実にその地歩を固められ、今や地方の大学として独自の教育内容を持つ、まさしくキラリと光る大学へと変遷を重ねて参りました。

この間、開学から3年目の1968年（昭和43年）には十勝沖地震に見舞われ、校舎本館が全壊するなどの苦難にも遭遇しましたが、多くの皆さんからのご支援のもと、みごと再建を果たして今日に至っていることは皆さんもご承知のとおりです。

商学の目指す、「生産」、「流通」、「販売」、「経営」は、その時々世相を反映する景気・経済と切っても切れない関係にあり、時代の流れに合わせた教育を行うことが求められるわけですが、函館大学は、これまで、高度な職業能力を身につけるための「専攻塾」制度を取り入れ、一人の学生に複数の教官が入学から卒業、就職まで4年間しっかりサポートするシステムを導入し、それが、高い就職率にも結びつき、保護者の皆さんからも大きな信頼を得て今日を迎えていますし、私の息子も函館大学にお世話になり、本当に感謝しております。

景気が漂流し、地域創生がキーワードになっている時代にあって、国際的な経済成長の取り組みや地域の商工業の発展において、函館大学の存在はますます重要性を増しているものと思います。

少子化が進行し18才人口も減少の一途を辿っていますが、これからもキラリと光る大学を目指し、新たな歴史を歩んでいただきたいと心から願っています。

函館大学の益々のご発展と、関係されておられる皆様の益々のご活躍をご祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立50周年に寄せて

元事務局長

石 崎 福 邦

本学がめでたく創立50周年を迎えるにあたり記念誌を発行され、過去の歩みを振り返り、未来への発展へ繋ぐ糧とされますことは誠に意義深く、心からお慶び申し上げます。

私が函館大学に奉職したのは、昭和53年3月から平成15年3月の24年間であります。本学にとりまして、私にとりまして也非常に変化に富んだ年月でありました。

縁あって民間企業から大学教務課長への転身でしたが、大山さん、新関さんはじめ課員に恵まれました。しかし大学全体の意思決定プロセスの違いに戸惑いました。何事にも教授会の承認を得てからという風潮が事務職員にもあり、責任の所在が見えず戸惑ったものでした。夜半まで教授会の議論が白熱したりしました。今考えますと、多分に大学の自治、学問の自由に対する国権の関与に一定の歯止めをかけた現憲法の解釈において、私学の理事会の権能と国家権力のそれとを同一視するような誤りが教職員の一部にあったのではないかと思います。

当時の教務課分掌は教務（学科課程、授業）、入試（と募集）、公開講座、国際交流、協学会（いわゆるPTA）事務局と広範囲に及んでいま

した。公開講座には宅地建物取引主任の夜間の資格講座も含まれ、教務男子職員が交替で昼間に引き続き夜間勤務に服しました。

18歳人口の急増急減への対応にも大変苦勞いたしました。入試選抜における課外活動等評価制度の導入、志願者急増に対応した入試会場の急増設、人材派遣会社からの入試立会補助者の確保、国策に沿った臨時定員100名増と教員組織の整備（特任教授制度）、新校舎増設と校舎管理体制増強等々、総務課の黒澤さんはじめ事務局全体が刻々変わる体制に対応してくれました。

教務面では、留年防止のため欠席者の早期発見指導制度の導入、事務処理の電算化、単位互換制度導入、上場企業のリーダーを特別講師として多数迎え、多様なビジネスを主眼とした各種コース制の導入、教職英語免許課程の設置等々矢継ぎ早に対応が迫られました。

地方大学はいま厳しい環境に置かれていますが、本学は学園三訓を信条として地域に根差した教育研究の展開と人材の輩出を目標に尽力されています。これらが評価され、一層発展することを心から祈念するものです。

創立50周年に寄せて

同窓会会長

木村 一雄

建学の理念「報恩感謝」「常識涵養」「実践躬行」脈々と受け継がれる野又学園。

初代学長（創立者）野又貞夫先生「わが望みこの新しき学び舎にかけて、幾年くらしてきたか」と、念願の、昭和40年4月26日第1回入学式を挙げてから、50年の歴史を迎え、同窓会一同を代表し、心から感謝と御祝いを申し上げます。

私は、昭和51年度第9回卒であり、野又貞夫先生の最後の卒業生でもあり、「生涯学べ」を、いつも、心情としております。今、大学50年を迎えるにあたり、同窓会長として、函館大学の最大の応援団・土台であることを、誇りに思うところです。

函館大学が、社会に貢献できる人材育成を掲げ、社会で活躍している卒業生は、現在約9,500余名を数え、経済界は勿論、各界で幅広く活躍し、函館大学の同窓生（卒業生）として、実績を積み重ねており、函館市・北斗市・七飯町はもとより、各都道府県においても率先して社会

貢献をしていることに見ると、函館大学の社会人教育に対し、改めて、深甚なる敬意を表すものであります。

しかし、これからの大学運営は、少子化と共に難しい舵取りの始まりでもあります。

函館大学は、創立者野又貞夫先生から野又肇先生が継承され、昭和51年10月から40年間野又学園・函館大学の教育に懸命に心を砕かれました。そして、50周年を迎えた今年度からは野又淳司新理事長・新学長としてスタートの年となりました。

同窓会といたしましては、函館大学と共に、更なる絆を深め、卒業生として模範となるよう努めて参ります。

おわりに、函館大学のますますの発展を祈念すると共に、函館大学及び同窓会に対しまして、今後とも、絶大なるご支援とご協力をお願い申し上げます。

函館大学50周年、おめでとうございます。

III

創立50周年のあゆみ





設立申請の報道
(昭和39.8.1付『北海道新聞』)



設置認可申請書



設置認可書

プロローグ（誕生期／昭和37年）

昭和22年学園創立者野又貞夫先生は函館に大学を創ることを唯一の政見として果敢に市議会議員選挙に立候補し当選、翌年の1月、議員提案として函館経済専門学校という夜学を設置し、これを母体として短大をと計画、満場一致で可決された。しかし、4年が過ぎてもその実現は見ることなく市長、市当局においても教育への関心は薄く、ならばと次の立候補を断念し自ら大学を設置しようと決意した。

昭和26年には、この取組はとりあえず夜間の短大として開校し、3、4年後には新制大学へ移行しようという構想であった。何度か構想が練られた後、昭和27年6月3日野又学園理事会・評議員会が開催され、「函館商科短期大学設置について」議論が交わされた。

その結果、「万難を排して函館商科短期大学を昭和28年4月より開学する」ことが決議され、認可申請へと歩を進めたのである。

かくして昭和28年1月31日文部省から正式認可があり、「函館商科短期大学」の誕生となったのである。

その後、昭和37年栄養専門学校の短期大学昇格に関連して現有の函館商科短期大学の移転（設置基準に関連して）も条件とされたが、短大教員及び商科の一部学生からの移転反対があり、

移転を断念せざるを得ず、商科短大の廃止を決し、大学創設へと進むこととなった。昭和38年9月20日発起人会が開催され、直ちに函館大学設置期成後援会（会長花光春之助）が発足。市民及び経済界等多数の寄附及び図書の寄贈を受け、設置の準備を整え、設置認可申請書を文部大臣宛に提出した。これを受けて文部省から昭和40年1月25日設置認可となり、学生募集に入った。同年3月15日、195人の志願者をもって入学試験を実施、107人の入学者が決定した。

わが望み この新しき学び舎に

かけて幾年 暮らしてきしか

（故野又貞夫先生作）

行く年の悲しみ去りて しみじみと

今日の喜び 涙とまらず

（故野又シン先生作）

この二首は、函館大学設置認可の報に接した喜びを創立者御夫妻が歌われたものである。

開学記念式典（揺籃期・その1／昭和40年）

〇…待望あまりにも久しかった4年制大学が誕生して間もない5月6日、函館大学商学部商学科の開学記念式典が大学大講堂において挙行された。

開学式典では、創立者であり、初代学長に就



大学設置審議会答申の報道
(昭和39.12.20付『北海道新聞』)



野又貞夫先生ユニフォームを着て野球



震災前校舎

任された野又貞夫先生が、次のような式辞を述べられた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『桜花まさに開かんとする北海の春、本日茲に函館大学開学祝賀の式典を挙ぐるに当り、来賓各位のご参列を辱ういたしましたことは私も最も光栄に存じ且欣快に堪えないところで御座います。

顧みますれば当市に4年制大学の必要性を強調されましたのは今から18、9年以前のことであります。ご承知の如く函館市は北海道の玄関に位置し、産業都市・貿易都市としてまた戦前は北洋漁業の策源地として殷賑を極めて参りました。また教育文化方面におきまして函館は早くより開け幾多のみるべき教育施設もあったのであります。

戦後は北洋漁業を失い、教育方面においても大学の至って少ない、私立大学は皆無の状況で今日を迎えて参りました。しかし函館は決して斜陽都市ではなく、また、地理的条件を失ったのでもなく、いまだに根強い底力を示し、浮遊資本は全道を押し、風光明媚、気候温暖と、かてて加えて人情の厚い住み良い町として知られて居るのであります。

爾来本学園はこうした函館の文化方面の体質の意味に於て、小さいながらも函館に皆無の学校しかも職業教育を目標として、昭和13年以来

27年に亘り教育施設の拡充に努力して参りました。その間男女両高校、短期大学、各種学校等を設置し、茲に最高学府たる函館大学の設置を見るに至ったのであります。

惟うに大学の創設は大事業でありまして、巨額の資金と多数の人材を通じて、広く深く世の中に結びついてゆく点に於て比類を見ない大事業であります。

本学園がかかる大事業を茲に達し得たのもひとえに本学園をとりまく先輩・友人・恩師など幾多の方々の御恩の賜物であります。

本学が東北、北海道を通じ唯一の私立大学商学部として国立小樽商科大学と相伴って産業界に有為の人材を送り得ることとなったのも、来賓各位の教育的熱意の表れでありまして、衷心より御礼申し上げる次第であります。特に小樽商科大学学長加茂儀一先生の全面のご協力と、北海道大学学長杉野目晴貞先生を主査とする大学設置審議会並びに私大審議会の諸先生と、文部省各係官の誠意ある御配慮と御好意の然らしむ所で、誠に有難く、東北、北海道文化に貢献して下さいました御功績に対し重ねて謝意を表すもので御座います。

抑々大学はその基本的性格として一面に於て教育機関であると同時に研究機関であります。他面に於て私立大学には設置者の建学の理想があります。即ち教授団を中心として学問的な活



体育館でダンスパーティ



グラウンドにてサッカー部



震災校舎

動がいきいきと続けられ、その研究の成果が教育内容に反映され、最高学府としての権威を自ら維持する力が備わっていなければならないと同時に、大学の教員は他の学校と異なり同じ大学によって生み出されるのであります。大学が学術の中心であるという意味は、教えられる学生が教師の水準に追いつき、これを追いついて学問の発展を進め、それを次の学生に受け継がせるという無限の前進を続ける力を大学は持っているのです。

さらにかかる大学の本質からして私立大学は個性的で、特性的でなければなりません。本学の建学の精神は一にも二にも知情意の円満にして高度に発達した人間の形成、即ち真の学問をした人間像の確立に他なりません。即ち学園訓に示す報恩感謝、常識涵養、実践躬行を身を以て体現し得る人材の養成こそ永遠のいのちを持つ本学の学風たるべく、社会もまた、かかる学風の樹立を目指す今後の本学を待望しているのです。

願わくは本学第1回の入学生諸君よ、諸君の責任の重大さを充分認識され、希望と気力と勇気を以て本学の学風の樹立に心からの努力を払い、以て、真の学問を身につけていただきたいと思ひます。

本日茲に開学祝賀会を挙げましたのも諸君と共に新しい大学創りに師弟同行、苦楽を共にし

て本学の将来を祝福し、立派な大学にしたい一念でこれにより来賓各位の御恩に酬いゝものと存じます。諸君宜しくこれを諒として戴きたい。以上、所懐の一端を述べて私の式辞と致します。』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

野又貞夫先生の式辞に应えて、函館大学第1回入学生を代表して、西川明君が、建学の精神を守り、新生函館大学の礎石をつくるため勉学に励みたいと、力強く宣誓した。

この開学式典は、去る4月26日の入学式に引き続き挙行されたもので、その間オリエンテーション等が行われていた。式典には、町村金吾北海道知事代理（大谷渡島支庁地方部長）をはじめ、吉谷一次函館市長、渡辺熊四郎函館商工会議所会頭ら来賓、父兄等多数出席し、函館大学の開学を祝い、真の学問の府としての成長を祈った。

そして試練は続く(揺籃期・その2／昭和43年)

○…新しい函館の希望の星となった函館大学も順調に校舎の増築や施設の充実をすすめてきた開学4年目に、不運な十勝沖地震が発生し、最大の震災を受けてしまった。

それは函館大学にとって、否、東北・北海道にとって永久に忘れ得ない、あの十勝沖地震、



復興校舎建築地鎮祭

昭和44年9月7日 学園創立30周年
震災復興校舎落成記念式典

復興校舎落成

昭和43年5月16日午前9時49分…の出来事である。

地球は生きている。動いている。荒れ狂っている。と誰もが感じたであろう一瞬の出来事であった。

震動が止むどころか、ますます強くなる一方であった。4階建ての校舎が揺れている。前庭や、グラウンドに避難した学生・教職員の足場も揺れている。不安と恐怖が全身を走る。そして、校舎がよもやと疑う間もあらばこそ、あたかも固い鉛をむりやり捻じ曲げるように崩落してしまう。まさに別世界の空間に、無理に立たされている感じであった。

とにかく、これほどの直下型地震に遭遇し、校舎が崩落したことは、直ちに、世界に報道された。

誠に不運な天災を受けた函館大学であったが、幸いにも1人の死者もなく、僅か負傷者1名に終わったことと、授業は、震災後の翌日より開始できたことは喜ばなければならない。

函館は災害都市か？と思われるほど不幸なことがつづいている。明治40年の大火、昭和4年の駒ヶ岳の爆発、昭和9年の大火、昭和29年の洞爺丸事件、そして、昭和43年の、十勝沖地震。さらに、昭和45年の東亜国内航空「ばんだい号」事件…等々災害が続いている。

実は、この昭和43年度中に、理科系学部として薬学部の学部増設のため準備を進めていた最

中の出来事であった。これで新設学部どころでなくなった。災害復興のため校舎等の再建が焦眉の急である。

野又貞夫学長の夜を徹しての再建のための超人的活動がはじまった。筆舌には表せない最大の試練を一身に受け、不断の苦闘微笑にむかえ、再建の計画が着実に実施の段階へ進み、昭和43年9月19日地鎮祭並びに起工式が執り行われた。そして、昭和44年9月7日学園創立30周年記念並びに函館大学震災復興校舎落成記念式典が举行されたのである。

この年の7月8日、函館大学協学会の設立総会があった。家庭と大学との関係を密にし、父母と先生とが互いに理解をもって、学生及び教職員の福祉を増進するため努力することを目的に結成された。

初代会長に菊田小太郎氏、同副会長に岩平正吉、吉川梅雄、田中友勝、3氏が就任された。

函館大学第1回卒業式

(復興期・その1／昭和44年3月)

1回生勇躍して巣立つ・昭和44年3月13日
○…手塩にかけ、愛情をもって教え育てた本学第1回生が、勇躍して卒業する喜びの春を迎えた。野又貞夫学長は、卒業生諸君に次のような式辞を贈ったのである。



新校舎 図書室での学習風景



裁判所にて模擬裁判



マーケティングクラブの面々

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『本日茲に本学第1回卒業証書授与式を挙げるに当り、来賓、父兄多数御来駕下され、遠くは東京からも馳せ参じた方が有る程で、誠に有難く、厚く御礼申し上げます。

さて卒業生の諸君、おめでとう。いよいよ最高学府たる4年の大学教育を終え、商学士として、さらに進学又は就職されることになりましたことは誠に御目出度く存じます。御父兄の御喜びもさぞかしと拝察される次第であります。思えば諸君はこのたび本学の第1回生として、巣立たれるのであります。本学が設置されたのは昭和40年、早くも4年を経過しました。諸君が入学したからこそ本学も今日あるのであります。諸君の功績たるや多とすべきであります。何となれば、いまだ未知の大学、新しい大学に敢然として入学しました。本学も第1回生は厳格なる試験を実施し、半数を選抜して入学を許可したので、諸君は正しく開拓者・パイオニアの精神を以て入学されたことと存じます。その意気たるや賞すべきものがあります。第1回の卒業生こそ、粗末に出来ないと思います。諸君はいつまでも本学を母校として愛して下さい。先日東京である会社の社長と会いました。その社長は東大出でした。私は東大問題に対して意見を述べました。「社長さん、あなたの母校である東大のことを言って失礼だと思いますけれど、東大

なんかつぶした方が良いですね」と言った。そうしたら、その社長曰く「私は東大を母校とは思っていませんよ。単なる出身校に過ぎません」と言った。なるほど味のある言葉であります。母校には母の愛がある。ペスタロッチもこう言っている。「学校は母の愛の懷に居るところである。」出身校に母の愛のまなざしがあつてこそ、母校となるのであります。

諸君は今日を限りに本学とお別れする。願ひれば諸君の在学4年間は正に有為転変の4年でありました。入学当時はまだ未完成の校舎が漸く出来上がった途端に地震による崩壊である。諸君の入った校舎は無い。今や復興途上にあります。

諸君はこの思わざる災難にもかかわらず毅然として学生の本分を守り、なんらの動揺も無く、今日を迎えた。この経験は諸君の将来に何か暗示するものに外なりません。

「いつまでもあると思うな、親と金。無いと思うな、運と災難」をつくづく感じさせられた1年でありました。

どうか本学で学んだ知識を緯とし、S・Lまたはゼミに於て得た情意を経とし、知情意の円満に発達した人材にならんことを期待して已みません。

学園訓たる報恩感謝・常識涵養・実践躬行に徹して波荒い世間を渡って戴きたい。そして、あ



大三軒の山小屋を建てた山岳部



今はなき応援団



新校舎 講義風景

くまで独立独歩、独立自営の精神を発揮し、願わくは、函館実業界の最高権威の指導者養成の使命を全うされんことを念願してやみません。

第1回なるが故に思うこともたくさんあって述べきれないが、何卒、ご健康に留意してご奮闘されることをお別れに際して祈念したい。

今や大学紛争正に酣である。現体制を破壊すれば自動的に良い社会が出現するという弁証的誤った考え方に立つ彼らの行動は許されないと思う。幸いにして常識ある諸君と本日は一同に会して平穏に、いとも厳肅に、而も盛大に卒業式をあげ得たことは、誠にうれしい極みであります。

今年秋には本学園創立30周年並びに校舎落成の記念式を挙げるから是非その節はご参列願いたい。以上申し上げて式辞と致します。』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

なお、卒業式終了後、同窓会の発会式が行われ、会長に飯田石勝氏、副会長に宮腰泰直、酒井和博両氏が、また、幹事長に佐藤弘之氏を選出、共に門出を祝った。

また、第1回卒業生主催による謝恩会が開催された。

この年の5月17日には、復興新築校舎上棟式が挙行され、新築校舎が竣工完成の運びとなる。

そして、9月7日学園創立30周年記念並びに函館大学震災復興校舎落成記念式典が挙行された。

また、函館大学校舎落成記念式典の関連行事として、9月6日午前10時から新校舎3階大講堂で、元北海道大学学長・理学博士、杉野目晴貞先生の記念講演会が開催された。

演題は、「学生諸君に期待する」というもので、ユネスコ活動を中心に話を進め、国際的経済人としての資質を高め、北海道総合開発のプロモーターになるよう期待すると結んだ。

また、11月22日には、新校舎で北海道経済学会、第38回秋季大会を開催した。

震災復興校舎落成記念式典

(復興期・その2／昭和44年9月)

○…学園創立30周年と震災復興校舎の落成を祝う式典が昭和44年9月7日、新装成る函館大学大講堂で挙行され、学園長・函館大学学長の野又貞夫先生は、次のような式辞を述べられた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『とき正に燈火親しむとき、本日茲に学校法人野又学園創立30周年記念、並びに函館大学震災復興校舎落成記念の式典を挙行するに当り、来賓諸氏を始めとし父兄、同窓生、多数ご来駕下さいましたことは誠に有難く衷心より御礼申し上げます。』

顧みれば本学園が創立されましたのは昭和13年9月19日であり、翌年4月から柏木町の一角



学生食堂



授業風景その1



授業風景その2

で開校の運びになったのであります。爾来幾星霜、四半世紀を越え、その間に設置されました学校は十数校に及びましたが、何れの学校もその当時は函館に未だ設置されていなかった学校ばかりでありました。ご承知の如く函館は全道に於ける文化の発祥地であります。当時は学校数もたくさんありましたが、その後は遅々として進まず、教育都市というには余りにも貧弱の感がありました。

それで私は嘗って東京以北唯一の大都市であった函館を何とかして、他都市に劣らざるものにしたいという考えのもとに、小さいながらも函館に皆無の学校施設の拡充に全力を注いで参りました。凡そ学校施設の充実に先ず先立つものは資金であります。次は有為の人材であります。特に大学設置に於てその感を深くいたします。それで私は先ず一番作り易い各種学校から始め、漸次大学経営に進んだのであります（中略）

翻ってこの30年の月日は決して平穏なものではありませんでした。（中略）家庭を犠牲にしては穩忍自重、かくして30年は夢の如く過ぎました。今にして思えばむしろ懐かしく思い出深い幻としてよみがえって参ります。常に道を解して自ら楽しむ道楽の心境で今日までやってきましたが、齡古希を迎えることになっています。更に昨年5月の地震に於ては函館大学は甚大な

被害を受けました。宇宙中継により全世界に報道された大事件でした。私は当日、公務出張のため旅装をととのえて、本部別館にいましたが、いざ揺れ出したので外に飛び出し、大学本館の崩れるのを呆然と眺めておりました。この呆然と眺めていたのも束の間、私の頭に浮かんだものは、校舎の中に入っている五百余名の学生及び教職員の安否でした。次に考えさせられたことは明日からの授業のことでした。校舎の再建など考える暇さえ頭の中には全然浮かんで来ませんでした。

私は1人の死者もなく、僅か1人の怪我人で済んだこと、明日からの授業再開に支障のないことを知ったとき、漸く安堵しました。それからというものは何千人の見舞い客、観光客、視察団、学者、研究者、政治家などの応対に心身共に疲れ果てましたが、愈々復興再建計画に乗り出したのは1週間後でした。東奔西走、めまぐるしい日暮しを続けた後、遂に再建のメドがつき、約1年4ヵ月にして、かくも立派な校舎を見ることができました。この復興費については保険は1円もきかず、すべては融資を以て賄われました。

この復興にあたり設計・監督・施工に当たった山下・池田の両氏は勿論のこと、時の文部大臣灘尾弘吉氏の同情ある激励と配慮に加うるに、文部省、大蔵省、私学振興会、北海道開発長官、町村知事、国会、道会、市会の各議員、矢野市長を



復興校舎落成記念式典



電子計算室で講義する佐藤裕教授



語学演習室（LL教室）

始め市民各位、恩師、先輩、後輩、教職員及び同一経営学校のPTAの各位、更には全国私立大学協会各大学学長の誠意ある督励と親身溢るる御同情を受けたことは私として生涯忘るることのできない感激でした。

「禍を転じて福にせよ」との皆様のご声援に応えるべく一生懸命努力した結果、漸くその目的を達することができました。

本学園に学ぶ学生諸君も、生徒、園児諸子も「いつまでもあると思うな親と金、ないと思うな運と災難」「災難は忘れた頃にやって来る」という諺を常に考え、苦難に耐えて屈せず、実践躬行し、延いては報恩感謝の誠をいたし、常識豊かな立派な社会人になって頂きたいと思います。30周年記念に当り、想いを柏木町の一角に走らせ、このたびの大学新築校舎を喜ぶと同時に、大切に使用し、この記念式を契機として益々研鑽を加え、国家社会のため有為の人材として活躍されんことを切に期待して已みません。

本日のこの式典を挙げるに当り、過去を顧み、将来を憶うとき万感胸に迫るものがありますが、ご来臨の皆様を重ねて衷心より深甚なる感謝の意を表して式辞と致します。

なお、このたびは全国多数の貴重なるご寄附を2,000万円以上も戴いておりますので、祝賀会は之を取止め祝杯程度に致しましたことを不悪らず御了承願います。』

電子計算室と語学演習室が始動

（内部充実期・その1／昭和45年）

○…第1回生を世に送り出し、大学本館校舎も完成して2年目を迎え、教育と研究の府として内部充実を図る初年度に入った。

まず、この年には、国際化時代に対応できるビジネスマンとして外国語の堪能な学生を養成するため、語学演習室を設け、聞ける・話せるを指導する時間を設定した。

また、情報の収集と整理、集計、レポートの作成のできる情報処理能力を養成するため、電子計算機（FACOM230-10）を導入し、経営情報システム論や電子計算機概論などの学科目の充実を図った。

教授陣の充実に伴い、従来の「北海道産業開発研究所」のほかに、「函館大学経営研究所」を新しく設置し、日本経営学会所属の先生方が研究活動に入った。また、この年の7月4、5日には、第22回日本人口学会を本学の当番校で開催し、研究成果の発表があった。なお、人口学会の前夜祭として記念講演があり、講師には、人口学会会長の南亮三郎先生と国際経済の第一人者大来佐武郎先生が講演された。

計報も記さなければならない。

昭和45年2月22日、本学教授兼教務部長、理学博士山口英二先生(生物学)が急逝された。存

命中に函館市文化賞を受賞されていた。

昭和47年9月8日、本学助教授鈴木達先生（美術概論・商業美術）が急逝された。（同日付教授昇任）

先生は、本学開学以来八年間、教育・研究に尽瘁され、彫刻家としても著名な先生で、多数の作品が市内におかれている。葬儀会場の聖徳寺には先生の作品である大仏像が安置されていたのも印象的であった。

教育組織の強化と指導の強化

（内部充実期・その2／昭和46年）

○…大学の建学の精神の発揚と学生生活環境の充実を図るため種々の改善工夫が行われた。

まず、校務多忙の学長を補佐し、率先して研究教育リーダーの必要な時節となり、村田喜一教授が副学長に就任された。また、大学の管理運営の最高責任者である事務局長に野又肇氏が就任し、内部充実のために敏腕を振るわれた。さらに、大学の広報活動を主務とした企画部が設けられ、初代部長に亀谷栄教授が当たられた。

一方、学生の教育・研究指導の改善策として、科目試験及び履修に関する規則が変更され、第2年次における進級基準を60単位と改められた。また、3年次へ進級した学生を対象にその祝賀と、今後の勉勵を期するため市民会館小ホール

でパーティを開催し、教職員と学生の心の交流を深めた。

教員の研究成果を発表する論究を「函館大学論究」と「函大商学論究」とに分割し、一般教育系と専門教育系の専門研究誌として充実させることになった。

この年の9月17日網走に出張中の野又貞夫学長が心臓病のため網走病院に入院加療される。

12月26日、日本経営学会北海道部会研究大会を開催した。

大学安定成長期に入る

（安定成長期・その1／昭和48年）

○…昭和48年に入り、内部充実が着実に進む中で市民への大学開放として、従来も実施してきた公開講座を幅広く展開することになった。その第一陣として、「宅地建物取引主任者資格試験」の受験講座を開催した。

小熊信一郎氏より洋書101冊の寄贈があり、森岡文庫ならびに小熊文庫を各々に開設して活用の便をはかった。

7月14日には、日本会計研究学会北海道部会第3回研究報告会が本学で開催された。

この年の11月3日文化の日にあたり、学長野又貞夫先生は、多年に亘る私学教育の振興と地域社会に貢献した労苦が認められ、勲三等瑞宝



野又貞夫先生
正五位勲三等瑞宝章を叙勲

章を授与されるという本学にとって、またとない喜びの日を迎えた。

11月25日には、心ばかりの祝賀会を開催し、野又貞夫先生の叙勲の栄誉を祝い、益々の御健康を祈念した。

野又貞夫先生の叙勲にあたり学園をあげて祝賀の真心を示したわけであるが、ここに和泉雄三（後に第四代函館大学学長）教授からの祝辞を披露しておきたい。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『学長先生、勲三等の叙勲おめでとうございます。

いかめしい勲三等という栄誉ある勲章を持っておられる方には、一見見られないようなザックバランな先生ですが、それだけに、なお胸間の勲章が光って見えるというものでしょう。

私が函館大学に着任した理由の一つは野又学長先生の温かい、それでいて気宇広大な人柄にうたれたこと。もうひとつは、先生の函館といういわば文化の谷間に学術育成の種を植え付けるのだという、地方文化向上の情熱であったと思っています。

函館に来て、これで6年有余を過ごしたわけですが、来てみて函館が学術文化の谷間にあるという先生のご批判が、本当だと思うようになりました。同時に函館が文化の谷間に沈淪するような悪条件下にあるだけではなく、やりようによっては、北海道学術文化の一拠点になりう

る条件をも持っていることを知りました。生涯かけて函館の教育と学問の発展に奮闘された先生の御心持の一端が、何かわかるような気がしております。

地方の文化と学問、教育の発達に、自らの意思から私財を傾け、全生涯をささげて来られた先生の御努力は今日、7つの学校を持つ野又学園となって現実化されている訳ですが、私に言わせれば、このような地方にいて、様々の批判やら悪口やらをのりこえ、50年もの間、情熱を傾けてこられた私学創立者に対しては、三等は少し軽きに失するという感じです。中央にいる人、官界の中央に長くいる人、国立大学の長老教授、学長、経済界の中央リーダー、それはそれぞれに「評価」してよいのは勿論ですが、日本を支えているのは「地方」なのであり、教育を支えているのは「私学」であることを、もっともっと認識してもらいたいと思います。

地方私学の創立と経営、その発展はとても難しいことであり、ほんとうに日本の発展と向上に直接資するものだからです。

43年の十勝沖地震という大事故に際しての先生の行動も立派でした。尊敬する先生、御健康に留意され、今後とも、本学の、いや私学のリーダーとして過ごされるよう祈ってお祝いの言葉と致します。』（野又学園だより昭和48年号より）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

12月1日には、貿易論ゼミナールにおいて、国際性の涵養の一助として香港へ海外研修を実施し成果を収めた。これを契機に同ゼミナールでは、毎年テーマを決めて海外研修する道を拓いた。

市民への大学開放・公開講座

(安定成長期・その2／昭和49年)

○…市民・各層から熱望されていた各種国家試験講座について、種類を増やして開設することになった。

税理士資格試験受験講座（黒坂、増尾両助教授、桑原、村上両専任講師のほか税理士の石黒氏が担当）

中小企業診断士（商業部門）資格試験受験講座（大野、三根、石原の三助教授、上平、白川両専任講師のほか加藤講師が担当）

宅地建物取引主任者資格受験講座（神田教授、蘇田専任講師、川嶋講師が担当）

以上の3講座は、昭和49年4月16日より7月19日まで、毎週火・金曜日に実施された。

この年の10月17日には、函館大学主催の公開シンポジウムが拓銀ホールで開催された。テーマは「地方都市における商業近代化を考える」でパネラーには、明治大学の三上富三郎教授、青山学院大学の坂井幸三郎教授、東海大学の清

水滋教授、そして本学の大野和雄助教授が登壇した。翌18日には、日本広告学会第5回全国大会が本学主管で市民会館において開催された。

この年の10月4日、本学専任講師村上憲一郎先生の訃報があり悲しみに涙した。数々の業績に応えるため助教授に昇任とし、ご冥福を祈念した。

函館大学創立10周年を迎える

(安定成長期・その3／昭和50年)

○…昭和50年6月10日、函館大学創立10周年記念協賛会が組織され、各種事業の推進母体となる。

6月18日、創立記念事業として新校舎の増築ならびに学生談話室の新築を含む工事が着工される。

そして、12月7日、函館大学創立10周年・校舎増築記念式典ならびに祝賀会を盛大に開催した。

なお、記念式典に於いて、野又貞夫学長は、次のような式辞を述べた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『昭和50年も残り少なくなりました本日、茲に本学創立10周年記念並びに校舎増築落成記念式典を挙行致しましたところ、来賓、父兄、卒業生の各位におかれましては、遠路、悪路の折柄、本学までお寒いところ態々御来学下さいましてまことにありがたく厚く御礼申し上げます。



創立10周年記念式典



創立10周年記念校舎増築

さて、顧みますと本学は昭和40年4月に開学いたし、北海道で第5番目に設置された4年制大学でございます。道南及び東北地方、唯一の商学部の私立大学であります。したがって、本学の志願者は北海道は勿論のこと、東北地方からも笈を負うて、函館大学にやって参ります。かくして本道開発第2期計画の一役を荷って、函館を中心とした産業開発、流通市場の拡大、大港湾整備計画の完成を目指しての、最高学府たる大学の設立は、これらの開発のための人的資源の獲得と中央から離れた北海道に、近代技術・経営実践のための最新の学問を体得し、信念を以て実行する実際的な産業人の育成を理念として、今日に至りました。(中略)

惟うに、本学建学の精神は、職業教育を通じて、真の学問の道を設けようという指導方針の確立であります。真の学問とは何ぞやと申しますに、学問とは、即ち知・情・意の円満にして高度に発展させることであります。茲に開学10周年を迎え、更に新校舎増築の喜びを目のあたりにした今日、更に思いを辿り、野又学園創立の昔に走らせ、今こそ双脚しかと磐石踏み、不断の苦闘を微笑に迎え、まなこは遠く無限のかなたをのぞみつつ学園建学の精神の高揚に邁進すべく、一段の飛躍を祈念して勇躍し、私の式辞に代えさせて頂きます。』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

なお、この年の2月17日、本学教授林重信先生(教育原理)が逝去された。

先生は、生来頭脳明晰、思想穏健、真に教育学者として識見高く、本学教授会などでは、長老格として高邁なる意見を披露され、最後の結論は常に妥当な万人の納得するような方向に誘導させるあたり、その敏腕に我々一同常に敬服していた偉大な教授であった。また、高丘会の初代会長として会の向上発展に尽くされ教職員からの信望絶大なるお人柄であった。

ちなみに、御子息より金80万円を本学図書充実費に当てるようにとの御厚志を頂戴している。これを機に先生のご功績を讃え、学生のために「林文庫」を創設して、多くの方に利用されている。

また、慶事では、この年の11月3日に学長野又貞夫先生が、函館市文化賞を受賞された。

野又貞夫学長は、これまでに、北海道知事表彰、藍綬褒章、勲三等瑞宝章叙勲、その他いくつもの輝かしい表彰を受けておられるが、それらにもまして、地元函館市が道南の教育、文化、産業の振興発展に寄与された功績を高く評価し、文化賞という形でその労に報いられたことは、私学教育への認識を新たにしたものとして、野又学園関係者一同の喜びであり、大いなる祝意が市民から届けられた。

 函館大学創立者・初代学長先生急逝す

(鎮魂期／昭和51年)

○…昭和51年10月5日午後4時55分、学校法人野又学園理事長・学園長、函館大学創立者・初代学長野又貞夫先生は、入院中の高橋病院で急性肺炎のため急逝された。

先生の偉大な功績に対し、学校法人野又学園葬をもって葬儀が執り行われた。

10月8日 午後6時 通夜

(斎場 函館女子商業高等学校体育館)

10月9日 午後1時

(斎場 同上)

告別式では、矢野康函館市長の弔辞に続き野又学園教職員代表として黒坂正次教授より次のような弔辞が献げられた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『学校法人野又学園理事長・学園長故野又貞夫先生の御霊前に学園に勤務する教職員を代表して謹んで告別の言葉を捧げます。それにしてもあまりにも突然の御逝去、愕然とするのみ、ただ哀惜の念、言う術なく悲痛の極み、無情と嘆くのみであります。思えば、先生が本学園を創立され昭和14年当時の御苦労は私達には知る由もありません。それは良き理解者であり、良き協力者である奥様だけが知っておられます。「毎日の生活は苦しかったが、何一つ不満も言わずそっ

と金を工面して俺を元気づけ、励ましてくれたよ』と先生がぼつんと話された事がありました。こうした先生ご夫妻のご苦勞の毎日が本学園創立当時の姿でありましょう。そして、昭和48年、私学教育と、私学経営の功績による勲三等瑞宝章叙勲という栄光のときを迎えられたのであります。そして、来年は喜寿と金婚式を迎えるというこの時、奥様を残されて先立たれるとは、何とこの世は無情なのでしょうか、何故に今暫しと思われてなりません。

先生は率直にして、飾り気がなく、事を起こすに待て、しばしがありませんでした。その反面、綿密周到な計画と、公正な判断力で本日まで学園を育てて参りました。私達教職員は、このような先生のお人柄に敬服し、信賴して参りました。そしてまた、昨日は大学、今日は幼稚園と、御元気な姿で廻られては私達教職員に温かい御心遣いを賜り、慈父として私たちは先生の御人柄を慕って参りました。それなのに忽然として幽明境を異にし、残念でたまりません。先生、今はなきお姿ですけれど今までどおり学校に毎日お出でください。私達全員でお迎え申し上げます。「新緑かおる学園に」と先生と一緒に学園歌を歌わせて頂きます。そしていつまでも先生とともに学び、先生とともに悲しみとうございます。

私達一同、先生の御意思を継ぎ、お互いに励ましあって学園の興隆に尽くし、御高恩の万分の一

に報いるよう努力することをお誓いいたします。
学園長故野又貞夫先生どうか安んじてお眠り
ください。』

建学の精神、村田喜一学長が継ぐ

(学風継承期／昭和52年)

○…函館大学の創立者・初代学長故野又貞夫先生が急逝されたあと、副学長として御活躍の村田喜一教授が、第二代学長に就任された。同時に、野又肇事務局長は学校法人野又学園理事長に就任された。新事務局長には事務長兼教務部長の森正雄氏が就任された。

昭和52年度入学式に於いて、村田新学長は次のような式辞を述べ、新入生を歓迎した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『今日は諸君の希望がかなえられ、目出度く入学のこと、更に御父兄の方々が多数御参列のもとに、この喜びをわかち合えることを、心から御喜び申し上げます。

扱て本学は昭和40年、商学部商学科として発足いたし、今日は第13回目の入学者を迎えた次第でこの様に、歴史的に見ると未だ新しい大学ですが、創立者の建学の精神は、学問を通じ、北海道総合開発の一端として、地域教育の開発ならびに我が国の商業・経済の高度発展に寄与し、地域社会に貢献し得る人材の養成を目的とした

もので、随って建学の精神を基調とした、誠実で気力に満ちた、ビジネスエリートや各界のリーダーを養成すべく、教官・学生共々に無限の可能性を追求すべく斬新な学風を培っているものです。

なお、学生個人個人に対しては、自ら開発出来るような、カリキュラム、研究の方法がとられております。例えば学部の特徴を生かし、公認会計士、税理士、中小企業診断士、不動産鑑定士等の国家試験受験が可能になるようなカリキュラムが組まれ、学習指導がとられております。

冒頭私は皆様に、御入学の祝福を申し上げた次第ですが、たぶん諸君も亦、この喜びと決意を新たに、この席に臨まれた方々も少なくないと思存します。こうした方々に対し私は先ず第一に、陳腐な言葉ですが、この今の気持ちを忘れないで戴きたい。

「初心忘る可からず」という言葉がありますが、私は更に「初心貫く可し」と付け加えて申し上げます。自分のことを申し上げて大変恐縮ですが、自身も亦この言葉を常に反すうして数十年を過ごして参ったものです。

第二に、皆様方はこれから本学に於いて高度の専門課程を修得することになりますが、この専門の学修の体得は勿論ですが、これとともに、これからの学内生活に於いて学友、教官共々の共同生活のなかより、何が邪であるか、何が大切

であるか、何が然らざるか、この様な正邪・善悪を判断する力を体得して戴きたい。この物事を判別し得る力を良識といってよく、この良識によって、世の在り方を律する、これを教養と申すべきでありましょう。どうぞこの良識と教養を深く身につけ、はぐくんで戴きたいと存じます。

第三に、単位取得の問題についてですが、最近新聞紙上で留年の問題が大きく採り上げられておりますが、必要単位習得不足のものは勿論、卒業不可能であることは当然であります。一般に単位に対する理解が少ないようです。新制大学に於ける単位は、1週に1時間、15週を以て1単位となっておりますが、これは1時間の講義に対して2時間の学修、計3時間が基本となっている、ということが忘れ去られているのです。

即ち、講義以外の各々2時間の学修によって諸君が学識と素養を身につけることができるのです。ところが、このような本質が忘れ去られ、良く大学に入ると暇がありすぎる、時間が余る・・・など一般に言われていますが、これはただ今申し上げた単位の本質を知らないからです。

諸君等は今後、1日2時限の講義を受けた場合は4時間、3時限の場合は6時間を学修とともに、豊かな心の糧を蓄積する培養基として戴きたいと希うものです。

次に、諸君等は若い善意に満ちている、純真である、その盛んな体力と精神力を、人の為に惜し

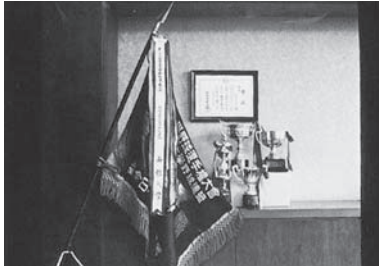
げもなく使う純真さがある。こうしたことから世の一般の人々は学生に対し敬愛の念を抱き、その力や正義感に信頼をおいています。加えて大学の学生は大人として紳士としてあつかわれ、目されています。それだけに、常に謙虚なる心構えで行動し、世の人々の期待に副わなければならないと思います。只往々にして、大学に入学した後は、大人として扱われる自由さから、其の自由が置き換えられることがあるが、私達は、大人としての集団生活を、社会生活を営む以上、各々定められたルール・規制を逸脱することのないよう行動することを銘記すべきであります。

最後に諸君等は、これから4ヵ年を、充実した毎日を過ごせるか否は、君たちの考え方如何にあると存じます。どうぞ今後とも身も心も健やかに学窓生活を有意義に過ごされる様、祈念いたし、式辞と致します。』

本学の野球部・全道大会優勝・神宮球場へ

(躍動期／昭和53年)

○…北海道六大学野球春季リーグ（道地区大学野球連盟主催・北海道新聞社後援）は、函館大学が初優勝し日頃の奮闘努力が実った。つづいて、6月3日全日本大学野球選手権大会に駒を進め、開会式では、昨年の優勝校を先頭に各地区の優勝校15大学の入場行進が南から順に行わ



硬式野球部
道六大学初優勝全国大会へ



村田喜一先生
勲三等旭日中綬章を叙勲

れ、選手は勿論のこと、教職員応援団一同、感激の一瞬を味わった。

6月6日、千葉工大と対戦0対5で初戦を飾れなかった。しかし、この貴重な経験が今後の発展の土台として、野球部ばかりでなく、全クラブ活動、全学生の励みとなったことは、確かである。

なお、全国大会に出場する野球部に対し、200余万円もの御寄附を函館大学協学会はじめ多数の市民、同窓会、教職員から頂戴した。

なお、昭和53年度から教務、学生指導、就職指導の三部長のほか、各部に次長を置きスタッフの強化に努めた。また、函館大学北海道産業開発研究所長の選出にあたっては、所員の直接選挙で選び、当選者を学長が委嘱することになった。

村田先生勲三等に輝く

(国際化への導入期／昭和54年)

学長村田喜一先生は、4月29日天皇誕生日の佳き日に、永年にわたる教育並びに学術の振興に寄与された功績により、勲三等に叙され旭日中綬章が授与された。

函館大学では、創立者・初代学長故野又貞夫先生につぐ二度目の慶事とし、6月7日、函館大学協学会・大学教職員が中心となって祝賀会

を開き、村田学長に祝意を表し、今後の御活躍を祈念した。

昭和54年12月19日から27日の7泊9日間の日程で、「野又学園訪米の翼」のチャーター便が函館発着で飛んだ。野又肇理事長を団長に39名の函大生と函館短期大学、函館保育専門学院、函館短期大学付設調理師学校の学生並びに引率教職員を含む総勢121名という研修団である。研修先は、サンフランシスコとロサンゼルス of 2都市であるが、学術文化交流やショッピングセンターを中心とするマーケティングの研究、幼児教育施設の訪問など多彩かつ有益な視察をしながら国際友好親善の架け橋をかけ帰国した。

ハンドボール部全道優勝に輝く

(特色再発見期／昭和55年)

○…ハンドボールの全道大会が5月15日より18日まで函館市で開催された。一部リーグで函大ハンドボール部は、道内の有力大学チームを破り、晴れて全道優勝の栄冠に輝いた。

つづく8月13日より16日まで、東京駒沢体育館で行われた東日本インターカレッジに出場し、立教大学と対戦、25対19で初戦を飾ったが、国士舘大学と対戦、10対35で惜敗した。

6月3日、函館大学主催の特別講演会・公開講座を開催した。演題は「中東の石油問題とソ

連」というテーマで、講師にヘブライ大学の教授で石油問題・中東問題の権威として有名なモデルハイ・アビール博士を招いての講演であり、市民も多数参加して好評を博した。

また、学長職位者の任期切れを契機に、従来の方法であった、設置者（理事会）からの適任者推薦方式に対し、教授会メンバーによる直接選挙で上位者を理事会へ推薦する方法に意見が分かれ、約半年余りも何れの方式が妥当なるかをめぐり、論戦がくりひろげられた。村田喜一学長も、心労の多い教授会運営が続いた。

この状況を、十勝沖地震の揺れに例えられ、激震続く函大、学長選をめぐって対立…などという新聞記事まで飛び出す始末。函館大学の社会的信用、信頼感を自ら失う思いをし、苦闘の一面をさらけ出した。

結論的には、教授会自治を尊重し、教授会の責任において、適任者（学長候補者）を選出することとし、選挙規程の制定、選管の発足、そして選挙が行われ、佐藤裕教授を推薦者として理事会に推すことになった。

これを受けて、理事会では、第三代学長として佐藤裕教授を承認し、結着した。

佐藤新学長「地球思考」を訴える

（特色再発見期その2／昭和56年）

○…第三代学長に就任された佐藤裕先生は、第13回卒業式に次のような式辞を卒業生に贈った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『本日茲に第13回卒業式を挙行するにあたり、来賓・父兄・同窓・多数の御来臨をかたじけのない衷心よりお礼申し上げます。

さて、卒業生諸君、卒業おめでとう。学窓を巣立って社会に船出しようとする諸君の胸中には、恐らく大きな期待とそれをも打ち消しかねないほどの不安とが、複雑に入り混じっていることでありましょう。

諸君が身をもって生きてゆかねばならない我々の社会には、実にさまざまな事件が起こり問題が生まれます。国際的な大事件から身の廻りの小さな出来事まで、諸君は毎日毎瞬いわば事件の渦中にのみこまれ、問題の山にうずもれて生きてゆかねばならないことでありましょう。このような状況の中にあって最も大切なことは、個々の現象に振りまわされないということです。そのためには、表面的な個々の奥にひそむ基本的なもの、本質的なものを洞察する精神が必要であります。この精神こそ、諸君が本学において学んできた真理への探究心すなわち学問的態度でなければなりません。諸君のこれ



昭和53年 貿易論ゼミナール(高月教授) アメリカ西海岸都市研修



サンリオ本社訪問
マーケティングゼミナール(大野教授)

からの人生にとって、本学で身につけた専門的知識はもちろんひとつの力となるでありましょうが、それよりも寧ろ今日必要となるものは、このような一般的な問題解決能力であります。その開発は卒業をもって終わったものではありません。むしろ、これからの実社会における厳しい現実との対決のなかでこそ、鍛えられ磨かれてゆくのであります。まさに、学問は一生涯続くのであります。

我々の生きるこの社会は、これからどうなっていくのでしょうか。色々な見方もあるかと思いますが、私は国際化社会から国際社会へと発展して行くと思います。世界のどの国へ行っても日本の商品がショウウィンドウに飾られています。われわれの日常生活の中で使われている品物の多くは、世界中の国々から日本へ持ち込まれたものであります。いまや、どんな商売も、国際的な視野を持たなければやってゆけないところまで来ているのです。このように社会全体が国際的な枠組みをぬきにしては成り立たなくなった時、それは国際化社会と呼んでいいのでありましょう。80年代は、日本の社会が、このような国際化社会に完全に脱皮してゆく過程をなすのであります。

私は、あえて国際化社会と国際社会とを区別しました。その違いは社会と国家とのかかわり方の違いであります。社会が国家という基本的

な枠組みの上に立つかぎり、国際という言葉はあくまでも其の国を中心にした外国との関係をあらわしています。これが国際化社会であります。社会の基本的枠組みが、国家という次元を超えて、いわば世界即ち地球全体にまで拡大された時、我々は国際社会に生きることになるでありましょう。私はこのような国際社会の実現こそ我々人類の目指すべき目標であろうと考えるのであります。大目標を現実のものにするためには、我々一人ひとりが常に世界的視点、地球的視点に立って物事を考え判断するという思考方法を身につけなければなりません。「地球思考」こそ、これからの社会を生きるものにとって、必須の条件であろうと思うのであります。

報恩感謝・常識涵養・実践躬行の3カ条を、波荒い人生の旅路を照らすともしびとし、国際社会的視野に立つ、「地球思考」を基盤に据えて、諸君それぞれの人生を切り拓いていって頂きたいのであります。

諸君の多幸を祈って一言式辞と致します』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

8月29日、30日の2日間にわたり、本学の教育と研究の諸活動について語り合い、検討しようとして第1回函館大学夏季セミナーを自主的に開催した。

会場は鹿部ということもあって、リラックスした雰囲気ですぐに研修の実を挙げた。



函館大学経営研究所主催のハワイ大学ムネオ・J・ヨシカワ博士学術講演会開催

この成果を評価し、毎年夏季・冬季セミナーを開き研修をつづけ、大学の特色を再発見し、飛躍のため熱心に意見交換をしながらコンセンサスを得られるよう努力した。

9月10日函館大学経営研究所主催により、学術講演会が開催された。テーマは「経営マンと国際感覚－異文化間コミュニケーション」で、講師はハワイ州立大学教授ムネオ・ヨシカワ博士を迎えての講演会であった。大講堂に集まった学生・市民・教職員400名は、ヨシカワ博士の講義に魅了された。先生は「日本が世界が変化し続けている。国際化・多極化・多様化しかりである。地球上には、150有余の国々があり、イデオロギー・文化が異なり、貧富の差がある。ここでは、共存の道しか生存の道はない。日本にとって、いかにこれら150数カ国と協力していくかが、相互依存の世界に於いて重大な命題である。」とし、特に、学生に対し、「自己変革のために努力し、学び続け、絶えず他人から学び取る姿勢をもってもらいたい。」と強調、学び続けることは、生き続ける事である、と結んだ。

カリキュラム総見直し

(特色再発見期その3／昭和57年)

○…商学部商学科として、より一層の充実を図るため、2月9日函館大学カリキュラム調査委

員会(委員長 蘇田三千穂教授)を発足させ、全国の商科系大学のカリキュラム実施状況を調査し、その傾向を捉え、本学の開講科目上の特色付けを考究した。

この調査報告を基調に、本学のカリキュラムのあり方について近未来志向でどんなタイプが考えられるか等を、更に検討するべく、函館大学カリキュラム検討委員会(委員長 蘇田三千穂教授)を組織した。

また、本学開学20周年記念事業委員会(委員長 和泉雄三教授)をスタートさせ、各種委員会をはじめ各研究所、電算室等々からの施設拡充についてのアンケート調査を開始した。

ハワイ・ロア大学と姉妹校提携

(国際交流発展期その1／昭和58年)

○…函館大学では野又学園訪米の翼を実施以来、アメリカの私立大学と本格的に交流するため、姉妹校候補を求めてきた。幸いにして、昭和58年4月ハワイ州ホノルル市にあるハワイ・ロア大学と正式に姉妹校提携の調印を済ませ、本格的交流の基礎作りに入った。

両大学の姉妹校記念事業として、ハワイ・ロア大学の学長フィリップ・J・ボサート博士を迎えての学術講演会が9月9日、本学大講堂で開催された。



ハワイ・ロア大学への留学生

演題は「コンピュータと教育—第三の波に関する哲学的考察」というもので、ボサート博士は、新しい情報革命の局面を分析しながら、現代教育に与える第三の波として、その対応を急がなければならない。また、すべては人間の創造したコンピュータ革命であり、人間らしく教育・研究活動にエネルギーを燃やすチャンスが到来している、と結んだ。

12月10日付をもって、和泉雄三教授が、第四代学長に就任された。

これは、任期満了により退任された佐藤裕前学長の後任として、学内選挙の結果、理事会に推薦され、就任したもので、新学長は、学部学科増、定員確保に意欲を燃やし、大学の市民開放などの政策を発表された。特に、函館大学協学会だよりを通して次のような挨拶を述べている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『親愛なる協学会の皆様』

私、図らずも12月10日付で、第四代学長に任ぜられました。教授会で推薦され、理事会で決定されたものであります。あれから、ハワイ・ロア大学への訪問を中心に、忙しい日を送っています。

私は、就任の際、理事会、教授会に、次のことを抱負として述べました。

第一に、将来、学部学科及び定員増の実現。私

の就任期間の3年間に、その糸口を発見したいこと。これを成長路線と呼びました。

第二に、国際性の推進。ハワイ・ロア大学との姉妹校提携を発展させ、これを基礎に実現する。留学生の受け入れも含む。

第三に、開かれた大学にすること。市民に支持される大学にする。差し当たり、市民講座を昭和59年度から、大規模かつ永続的に開設する。

一、学部学科増

私は、函館大学が商学部商学科のみであることに問題があると考えています。それも、大学の停滞の一つの原因になっているかと思います。もともと、商学部商学科だけ開設していることと、大学の充実とは、何ら、関係がありません。一学部一学科だけでも、立派にやっていくことは出来ます。

然し、函館市、道南の地域住民はそれに満足しておりますか？そうではないと思います。そうでないからこそ、国立の複合大学を作れという運動が、早くからあるのではないのでしょうか？地域社会のニーズに応えることが、地方私大の一つのあり方です。この観点からいうと、函館大学を、文科系の総合大学にすることが、必要ではないのでしょうか？

二、学生達の気持ち

現在、学生を募集しても、道内では、北海学園大、札幌大、札幌大の方へ流れ易い。つまり本学

は、道内の同種大学に比べて、学生を引き付ける魅力に乏しいといえる。誠に残念なことです。

其の理由は色々あるでしょう。

私は、この学生達に活気をつけたい。そのために、もう少し学生数を多くしたいと希望しています。1,500人～2,000人くらいが適当だと思います。

三、国際性をもつこと

昨年、本学は、ハワイ・ロア大学と姉妹校の提携をしました。私自身、ハワイ・ロア大学を訪問して来ました。そして、良い学校と提携したと喜んで帰りました。この大学は、学風、学生の構成、どこから見ても、国際色豊かな学校でした。その校風は、とても自由で、人種・性の差別がない、明るいものでした。それは、つまり、国際性を豊にもっていることと、決して無縁ではないと思います。ハワイ・ロア大学との提携を益々深めて行き、将来、教員、職員、学生の交換交流を図って行きたい。函館大学へ行くと、他国人の教師留学生がたくさんいる。また、あそこに入ると、留学もし易い、あの大学にいけば、留学しなくとも良い、といわれる程、国際色豊かな大学にしたいものです。

四、開かれた大学をめざして

地方の私大、それも文系、社会科学系の大学が、地域住民に支持され、愛されなくて、何の大学ぞや、といいたい。良い学生を育てることが、それ

に応える根本的な道であることは、いうまでもありません。これが基本です。然し、函館市民道南の人々に、愛され、親しみをもたれることもまた、必要であり、重大なことです。

今年から、私が、市民講座を学内外で開くことを、新聞を通じて、お約束したのはそのためです。

以上、私の希望、抱負を述べさせて頂きました。

協学会の皆さんにお願い

大言壮語と受け取られても良いのです。私は、アイデアを持ち、夢を持ちたいのです。それが、函館大学の明日を切り拓いて行く尖兵足り得ると思います。

そのためには、皆さんのご支援が是非欲しい。第一、莫大な金がかかります。

資金がなければ、すべては、正に夢で終わります。そして、資金は支持と信頼の土台の上に、初めて創られ得ると思います。

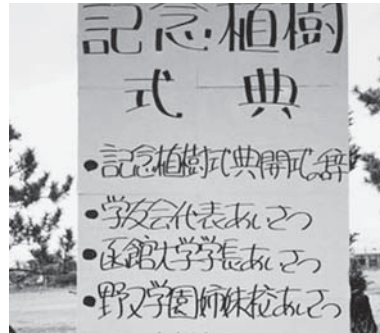
皆さんの、ご支援とご協力とを、切にお願いいたします。』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

また、この年の11月には、学生生活に関する全数調査を実施し、本学学生の意識をはじめ生活、学習活動全般にわたる実態を捉えた。これを総括した学生委員会（委員長荒木猛講師）をはじめ、集計に協力した電算室長佐藤裕教授、溝田春夫助教授並びに学生課職員の努力が結実した。



第1回 海外研修旅行



20周年記念植樹

函館大学海外研修団ハワイに飛ぶ

(国際交流発展期その2／昭和59年)

○…昭和58年4月1日から5日まで、ハワイ・ロア大学との姉妹校提携調印の事前視察として、姉妹校提携委員会（委員長高月晋教授）が派遣され、無事に調印にこぎつけた後を受け、1月23日から27日の5日間にわたり、和泉雄三学長、高月晋委員長、江縁廣局長の3名は、ハワイ・ロア大学を表敬訪問し、友好親善の実をあげ、昭和59年7月に派遣する学生研修団の受け入れ等について協議してきた。

昭和59年6月19日には、第一回函館大学海外研修団の結団式並びにオリエンテーションを行った。同研修団は、ハワイ・ロア大学へ、14日間の短期研修をする学生39名と引率教官3名の合計42名で組織した。

一方、函館大学の将来展望にたった地域大学としての特色ある教育および研究活動について総合的にどうあらねばならないか等々を調査・研究する学長の諮問機関として、「函館大学中長期構想委員会」（委員長大野和雄教授）が11月20日発足した。また、2月17日には、函館大学の公開講座実施委員会（委員長永野弥三雄教授）が発足し、開かれた大学作りのため、継続的に、学術・文化・スポーツ・教養にわたる各種の公開講座を企画、実施することになった。

さらに、この年の特記事項としては、留学生3名の受け入れと、姉妹校ハワイ・ロア大学から特派された交換教授の来学である。

留学生3名のうち1名はカナダのノバスコシア州ハリファックス市長の令嬢で他の2名は、ロア大学の学生男女各1名である。

更に交換教授として来学したケン・スクーランド助教授は国際経済学専攻の優秀な業績のある学者で、本学での担当科目は、国際経済学と英会話の2科目となった。

創立20周年を迎えた記念の年

(成長発展期／昭和60年)

○…昭和40年に開学した本学は、この年に数えて満20周年を迎えることになった。

この記念すべき佳き年にふさわしい諸事業が企画され、実施されている。

まず、函館大学図書館と記念講堂ならびに新研究棟、演習室等の施設拡充のための新築工事が着工された。其の完成を待って、記念式典、記念文化講演会等が企画されている。

4月3日、4日には、姉妹校ハワイ・ロア大学学長ボサート博士の表敬訪問を受け、本学教授陣と国際交流についての意見交換を行った。

7月13日には、第2回函館大学海外研修団（団長高月晋教授）が出発した。



ゼミナール授業風景

また、前年11月に学長より諮問を受けていた「中長期構想委員会」（委員長大野和雄教授）では、3月11日と8月14日にそれぞれ中間報告を済ませ、正式答申は8月23日に提出された。

昭和60年以降

中・長期構想の策定／昭和60年

中・長期構想委員会正式答申を受けて、従来の商学科に本学初のコース制（商学・会計、経営情報、国際英文秘書）を導入し、教育カリキュラムを一新し新たな取り組みを開始した。この後、18歳人口の急増期を迎えたこともあり、平成2年からは200名を超える入学者となり、この入学者増に対応すべく講義棟の増築を実施し、平成4年には3,000名を超える志願者を数えた。平成11年度まで臨時的定員増を実施し入学定員を300名とすることで、平成10年まで390名を超える入学者を獲得した。さらに来るべき急減期に備えるべく、同時期に授業料の改定も断行し、大きな積立て金を確保することができた。

◆法令改正と本学の取り組み

平成15年4月改正施行の学校教育法は、従前、認可制度下にあった学部・学科設置につき、授与する学位の種類及び分野を変更しない場合は、届出で足りることとした。これを受け、本学は

後述の事由から商学科に「英語国際ビジネス学科」（入学定員50名）を届出により開設し、平成17年4月から商学科（150名）との2学科とした。それまで大学設置基準内の努力規定として各大学に課していた自己点検・評価が、国が認証する評価機関による、いわゆる第三者評価として義務化されたことを受け、平成19年に高等教育評価機構による評価を受けた。

平成21年4月に大学設置基準が改正施行された。その概略は①学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育上の目的を学則に定め、公表すること、②学生に対して、授業の方法及び内容ならびに一年間の授業の計画（シラバス）をあらかじめ明示すること、③学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うこと、④授業の内容及び改善を図るための組織的な研修及び研究を実施すること等である。②～④はすでに本学では実施していたことであるが、これを機に更に徹底した。①に関しては平成20年4月改正施行の学則変更で対応した。

◆入学年齢人口と本学入学者数の動向／

平成4年～

平成4年度のわが国における18歳人口は約



平成15年度卒業式



平成26年度卒業式

205万人に上ったが、その後減少傾向が続いている。本学においても、平成8年度の新入生416名（除編入生）をピークに減少傾向が続いた。本学では専攻塾制度の導入を初めとする教育システムの変更（後述）や平成17年度に英語国際ビジネス学科を新設するなど、教育制度や学科の見直しを行い、これに対応してきた。

18歳人口の急増に対応するために平成4年に講義棟を増築（3階建4,012㎡）し、平成4年度から臨時的定員増（入学定員200名から300名）を実施したが、この期限切れと共に平成12年4月から臨時定員の恒常定員化（300名）をはかった。学外から各分野のオーソリティである特別講師を招き、ビジネス及び各分野の実験を学生に体験してもらう試みをしたり、後述の専攻塾制度の導入にあわせて塾棟（3,034㎡）の増築を敢行したが、その後の急激な志願者の減少に伴い、平成16年4月からは、入学定員を200名へ戻したものの歯止めがかからなかった。平成22年度からは入学定員を150名とするも減少傾向は止まらず、平成25年度にはさらに入学定員を120名と減員したが70名前後の入学者に留まり、平成27年度からは入学定員を100名とした。

◆教育制度の改革と環境整備／平成13年

志願者、入学者の減少を踏まえて教育改革のため、制度の見直しが行われ、後に詳述すると

おり、平成13年度入学生から専攻塾制度を導入した。この制度の導入により、それまでの3コース制（商学・会計、経営情報、国際英文秘書）が5専攻塾（国際英文秘書、会計、IT、情報・商業教職、ビジネス・アスリート）と6コース制（マーケティング、経営、金融、企業法、マスコミと出版ビジネス、芸能ビジネスの6コース）へと転換された。平成17年度入学生からは6コース制を廃止し、5専攻塾とゼミナールコースとした。

暫く教員採用が見込まれない教職課程「職業（中学）」を平成12年度から廃止し、代わって、新しく高等学校普通科の必修科目となった「情報（高校）」の教職課程認定を受け、さらに平成14年度には「英語（中学・高校）」、平成20年度には中学・社会、高校・公民の教職課程認定を受けた。平成16年には小学校英語指導者養成団体として「NPO法人小学校英語指導者認定協議会」に登録し、学生の教育とともに地域における英語教育の向上に貢献することとなった。

◆商学科・専攻塾制度と英語国際ビジネス学科の誕生

平成17年4月からは本学初の学科増を実施、従来の商学科の定員を200名から150名に削減し、代わって、国際英文秘書専攻塾を発展的に解消して英語国際ビジネス学科（50名）を設置し、



専攻塾発表会

クリスマスファンタジー
イルミネーション参加

平成18年度大学祭

商学部における英語教育の充実を図った。

前述のとおり、専攻塾制度は、入学者の減少とその対応の論議から生まれたものである。入学者が平成11年度の369名から平成13年度に211名にまで急落したが、少子化における入学者数確保が喫緊の課題であることは自明であった。理事会と大学との間に設置された函館大学運営協議会及びその作業部会としての小委員会は、入学者減の原因分析と課題の明確化を求めて数多くの会議を重ねた。構成員は野又肇理事長、河村博旨学長はじめ大学の幹部教職員であった。打開策の論点は多岐に亘ったが、議論の焦点は教育そのものの社会的評価であり、どのようにして教育責任が遂行されるかであった。最終的には野又肇理事長の発案による専攻塾制度が採択された。野又肇理事長は、前年の平成12年に山口県萩市の松下村塾を訪れている。幕末に長州藩士の吉田松陰が講義した私塾である。「このわずか十畳半の部屋から、たった一人の塾長が、一年という短期間に、どのようにして日本の近代化を担った伊藤博文、山縣有朋等数々の逸材を生み出したのか」が最大の関心事であった。吉田松陰は自分の信念を塾生たちにつけ、しかし一方的に教えるのではなく、塾生たちと一緒に問題を考えていったという。「もうおまえには教えるものがない」ほどに吉田松陰は教育に打ち込んだ。ここに教育の原点があ

る、との確信を得て野又肇理事長は帰函した。

このことが運営協議会において熱く語られ、委員の心を動かしたのである。卒業要件の124単位と専任教員の担当可能な授業時数から、一つの専攻塾に専任教員3名がそれぞれの専攻分野を活かした共通テーマの下で、30名の固定した学生を4年間一貫して受け持つ基本形が作られた。さらに、民間企業の各分野のトップの方々を特別講師として迎え、より実践的な講義内容を展開した。

この専攻塾制度は大学における新しい教育制度の試みとして、文部科学省から「高度高等教育研究推進指定」を受け、平成16年度から3ヵ年間、特別補助を得てその有効性が検証され、成果は平成18年度末に「専攻塾の教育の有効性に関する研究」と題してまとめられている。専攻塾はある意味で拘束性の強い教育制度であることから、一方では、これによらないコース制を残している。また、専攻塾制度の求めるところは教育責任の遂行にあり、また教育責任の遂行は一つ専攻塾の形式に限るものではないことを付言しておく。

専攻塾制度の導入に伴い、専攻塾での教育に対応するため平成13年に専攻塾棟(研究室含む)の増築(3階建2,137㎡)を行うとともに、図書館の増床(2階建751㎡)と完全防音・冷暖房完備の音楽棟(1階建193㎡)の新築を行った。



港まつりイカ踊りに参加



商品開発展示会開催

一方、前述のとおり、平成17年4月から、英語国際ビジネス学科を設置した。その背景には二つのことがある。その一つは、平成14年度に認定を受けた「英語（中学・高校）」の教職課程の設置である。文科省は戦後の一時期を除き、一学科に分野の異なる複数免許の開設を認めなかった。ところが、高等学校普通科必修科目「情報」を置き、これを一気にカバーするために全国の大学に「情報（高校）」教職課程の設置を依頼する形となった。本学はこれに応じ、平成12年に課程認定を受けた。そのことが契機で、「英語」免許課程設置の可否を文科省に照会したところ、あっさり許可が出た。もともと商業英語をはじめ英語に堪能な専任教員を配置していたこともあり、ビジネス英語等、「生きて働く英語」力の養成を特色に「英語（中学・高校）」教職課程を申請し認定された。その際、英語科目の増設を行った。これにより、当時開設されていた「国際英文秘書専攻塾」の塾生は一層充実したカリキュラムで学ぶこととなった。もう一つの背景は、平成15年4月の学校教育法改正施行である。前述のとおり、これにより授与する学位の種類及び分野を変更しない場合の学科設置は届け出れば足りることになり、ハードルが低くなった。この二つの背景から、入学者確保の打開策の一つとして、特に女子学生の確保を視野に入れて、平成17年4月の新学科設置に及

んだのである。

また、さらなる志願者の減少に歯止めをかけべく、平成22年度4月からは従来の専攻塾制度から、3コース制（企業経営コース、市場創造コース、英語国際コース）として新カリキュラムでの特徴化を目指した。これに伴い平成22年度入学生からは英語国際ビジネス学科の募集を停止した。

以下に、現在、商学科に置かれている各コースの特色を紹介する。

- ▷「企業経営コース」……企業の財務・会計や、企業の組織・経営についての専門知識と技能を有し、企業の一員として、また企業のリーダーとして活躍する人材になることを目指す。
- ▷「市場創造コース」……市場で提供される商品やサービスについての専門知識と技能を有し、新たな顧客を獲得する戦略的思考を身につけ、企業の業績向上、取引先や消費者への価値の提供を通じて、自己実現を達成する人材になることを目指す。
- ▷「英語国際コース」……国際経済の仕組みや語学についての専門知識と技能を有し、外国人との積極的な交流を通じて自己実現を達成する人材になることを目指す。

平成16年4月には本学における教職教育の一層の充実を図ることを目的に、情報・商業教職専攻塾を発展的解消して「教職教育センター」



平成19年
大学機関別認証評価認定（第1回）



平成26年
大学機関別認証評価認定（第2回）

を開設し、教職課程の管理及び運営と学生の能力開発及び支援という2つの事業を行っている。教職希望者は期限付き採用を含めると高い内定実績を上げている。

また、入学者増をはかるための一方途として、遠方からの入学生の生活費軽減を目的に、平成20年に学生駐車場奥にオール電化の第二学生寮を建築し、十勝沖地震の際生き残った第一学生寮は耐震強度の問題があり、老朽化が進んだ旧柔道場であった合宿所とともに平成24年度に取り壊しとなった。さらに市外からの学生数の増加に鑑み、大学近隣のアパートを購入し、1万円で貸与する方式をとった。その後の利用者増を踏まえ、民間アパートを借り上げ、入学年度のみ1万円で貸与し、2年目からは低廉な借り上げ価格で貸与している。

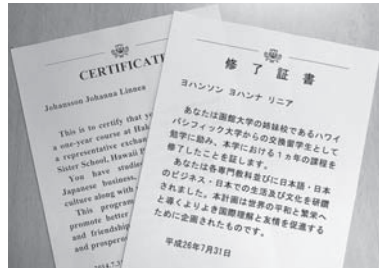
◆日本高等教育評価機構大学機関別認証評価 (平成19年・26年)

学校教育法改正の趣旨による第三者評価を得るため、本学及び法人本部の教職員からなる自己点検・評価委員会が組織され、平成9年6月5日に第1号の報告書『函館大学発展のために－現状と展望』が刊行され、次いで平成14年12月25日には第2号『函館大学発展のために－現状と展望』が刊行され、来る日本高等教育評価機構の評価に備えた。平成17年からこの自己点

検・評価委員会が中心となり100頁からなる「自己点検評価報告書」が作成され、教授会、野又学園教育向上委員会、理事会の承認を得て日本高等教育評価機構へ付帯資料とともに提出された。同機構により平成19年9月25日から3日間の実地調査（面談を含む）を受けて審査の結果、平成20年3月19日付で「適格」認定評価を受けた。平成26年10月には第2回目の同機構の審査を受け、平成27年3月に第1回に引き続き適格の認定を受けた。

◆国際交流の発展

平成7年7月、オーストラリア・ニューカッスル大学から姉妹校提携書類が送られてきた。これは前年の函館市とレークマコーリー市との姉妹都市としてスポーツ交流のため来函した剣道チームが宮崎正孝教授に指導を受け、大変感激し、同行したニューカッスル大学の評議員の方2名により学長との懇談の中で姉妹校の話が出されたことに端を発する。その後、平成6年12月に行われた海外研修旅行（オーストラリア）に委員長高橋真助教授、コーディネーター田中弘樹助教授、大山紀明総務課長の3名が同行し、表敬訪問するとともに、契約実現に向けての話し合いがなされた結果であった。そして、平成7年12月には河村博旨学長、国際交流委員長藤嶋暁助教授、コーディネーター田中弘樹助教授、



受入留学生修了証書

平成17年5月
中国南開大学浜海学院大学来学調印式

石崎福邦事務局長の4名が表敬訪問し、学長のホームズ氏、副学長のグラハム氏、交換留学生コーディネーター、日本語講師、ジョン・ペシャー理事などの歓迎を受け、今後の具体的プログラム等の話し合いを約し、平成8年の姉妹校締結に結びついた。平成9年5月には同国バララット大学（現フェデレーション大学）との姉妹校締結もすることが出来、本学学生の留学先が広がってきた。

この後、平成12年10月には新規姉妹校提携先を開拓するため国際交流委員長高橋真助教授とコーディネーター田中弘樹助教授の2名がイギリスのチ・チェスター大学（平成13年11月26日締結）、ウォルバー・ハンプトン大学（平成13年11月22日締結）、バース・SPA大学（平成13年11月27日締結）の3校へ可能性打診のためイギリスへ渡り、姉妹校締結することで合意を得た。

次いで平成13年6月24日には函館市が海外航路開拓の中で天津との航路開設運動が具体化するためには、学術・文化交流が必要となるとの理由で、国際交流委員長高橋真助教授とコーディネーター坂野学助教授の2名が天津への訪問団に同行、周恩来元首相が出身の南開大学との姉妹校提携の話が出てくることになった。相手方は4年制本科と3年制専科とに分かれており短大卒業程度の専科生を派遣し、四大として不足する単位を本学で取得し卒業することにし

たいとの提案であり、急遽本学でも編入による受け入れの具体的問題解決の検討に入り、平成13年10月1日に姉妹校提携締結に至り2名の学生を受け入れることとなった。

南開大学はその後、専科を母体とした南開大学浜海学院を設立し、本学と姉妹校提携が進み、平成17年3月11日締結に至った。日本語学科の学生を本学への編入生として派遣することとなった。

平成14年には韓国中部大学校から姉妹校提携の協議要請があり、理事長から姉妹校提携はこれ以上増やさなくてもよいのではないかとの見解が出され、再度協議することとしたが、これについては平成14年9月3日に姉妹校提携を締

■姉妹提携校一覧

ハワイ・ロア大学（アメリカ S58.4.17契約）
→ハワイ・パシフィック大学と合併
ハワイ・パシフィック大学（アメリカH6.7.5提携）
ニューカッスル大学（オーストラリアH8.2.22提携）
バララット大学（オーストラリアH9.5.29提携。現フェデレーション大学）
南開大学（中華人民共和国H13.10.1提携）
ウォルバーハンプトン大学（イギリスH13.11.22提携）
チチェスター学園大学（イギリスH13.11.26提携）
バースSPA大学（イギリスH13.11.27提携）
中部大学校（大韓民国H14.9.3提携）
南開大学浜海学院（中華人民共和国H17.3.11提携）



エゾシカカレー開発プロジェクト



平成26年ハンドボール全日本出場

結した。

学術・文化交流及び教員・学生の交換を主目的として海外との姉妹校提携を進めてきており、現在、5カ国9大学と提携を結んでいる。この中では、オーストラリアのニューカッスル大学、アメリカのハワイ・パシフィック大学を中心に一年間の長期留学はもちろん、夏季休業時に学内選考の上、経費の一部を補助して実施する4週間の語学研修プログラムの実施や、隔年で実施する海外研修旅行で国際感覚や語学力の向上を図っている。また姉妹校から交換留学生を受け入れており、学生の国際性の涵養に一定の役割を果たしている。

近年、中国の南開大学浜海学院との交流が進み、教員の半年間の相互派遣（南開大学浜海学院からは石秀梅・宗京津先生、本学からは坂野学准教授）や浜海学院学生の本学での短期研修（2週間）が行われている。平成21年4月から函館大学と南開大学浜海学院の「本科生共同育成プログラム合意書（DDP）」が締結され、第1回留学生5名が3年次への編入生として入学し、現在に至っており、留学生は本学卒業後、日本の大学院に進学する者や帰国して日系企業等に就職している。

◆学生の活躍

この10年間、学生数の減少があった反面、学

生の活躍には見るべきものがある。平成17年、経済産業省、日本情報処理開発協会等主催の「第26回 U-20プログラミングコンテスト」でIT専攻塾の学生が「GPS携帯電話を活用したバス発着時刻提供プログラム」システム（略称「バス参る」）を発表し、「経済産業大臣賞」優秀賞を受賞した。各専攻塾単位では、市内の高等教育機関と企業が合同で開催するアカデミックフォーラム（現アカデミックリンク）へ毎年参加し、研究成果の発表をしている。応用的・実践的な学習としては、「萌えキャラ」を起用した商品を開発するグループが企業との連携で売り上げ1,000万円を達成した。職員が関わって学生と取り組むSDプロジェクトでは、外国人観光客の誘致および長期滞在における食の環境について調査研究する「HIFプロジェクト」、函館特産のがごめ昆布を使用したスイーツの開発を目的とした「がごめスイーツプロジェクト」、歯が弱くなった年配者のためにおいしい食事を探り当てることや予防歯科の進展に寄与して行こうという「歯がいいはこだてプロジェクト」、レストランを中心とした食育に注目し、未就学児を保育園に預けて食育を行い親はレストランで料理を楽しむというコンセプトの「三ツ星レストランプロジェクト」と4つのプロジェクトが行動を起こし目的に向かって勉強会や調査研究を行っている。また、「函館の新しいグルメ



少林寺拳法部全国大会優勝



ボウリング部全日本学生選手権優勝

坂田遼君、西武ライオンズドラフト
4位指名

を開発しよう」とエゾジカカレーの開発をしたグループが出るなど「企業パートナーシッププログラム」を通して産学連携の一環として市内企業との新たな取り組みをしている。

課外クラブの活躍も相次いでいる。少林寺拳法部は新潟県の少林寺師範夏川勉先生の尽力により、新潟県はもとより全国から有望な選手を派遣していただいたこともあり、平成14年度から平成23年度まで快進撃を続け、道内大会はもちろん全日本大会でも毎年優勝および上位入賞を果たした。ボウリング部は平成17年度に初の全国制覇を遂げ、平成23年度には2度目の全国制覇を成し遂げた。ハンドボール部は全日本学生選抜チームの監督もされた松喜美夫監督の指導のもと、道内278連勝（平成26年9月末現在）と、道内敵なしで偉大な記録を伸ばしており、東日本及び全日本学生大会の常連校となっている。硬式野球部は宮腰泰直前監督からチームを引き継いだ卒業生の阪内俊喜監督と巨人軍出身の中山俊之コーチの就任により、平成20年春季大会で20年ぶりの全道優勝を果たし、全日本大学野球選手権大会に出場、1回戦で広島経済大学に勝利し、2回戦には当大会優勝校となった東洋大学に惜敗した。23年秋季リーグでは優勝により明治神宮大会に出場し、1回戦九州共立大学に接戦の末敗れはしたものの、大学及び卒業生は大いに盛り上がった。

軟式庭球部は男子が平成20年全道春季大会で8年ぶりの優勝をし、全日本学生王座決定戦に出場したが、関西学院大学、東北福祉大学に敗れた。次の年も全道春季大会を連覇し連続となる全日本大学王座決定戦に駒を進め、中央大学には接戦の末敗れたものの、四国代表松山大学に勝利した。一方女子は平成22年度春季大学対抗で初優勝し、全日本学生王座決定戦に駒を進め、優勝校日本体育大学には敗れたものの、韓国大学代表に初勝利。平成25年度には2回目の団体優勝により、全日本学生王座決定戦に駒を進めたが、九州産業大・東北福祉大に破れ、決勝トーナメント出場はならなかったが意気盛んである。女子バスケットボール部は創部4年目で平成19年度に全道初優勝を果たし、全国大会へと駒を進め、桜花学園大学に惜敗したものの成果を挙げ、平成20年度春季大会においても全道優勝した。

悪夢よみがえる東日本大震災（平成23年）

平成23年3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東130キロ、仙台市の東方70キロ（英語版の記述に基づく）の太平洋の海底を震源とする東日本大震災が発生した。地震の規模はマグニチュード9.0で、日本周辺における観測史上最大の地震である。震源は広大で、岩手県沖か



東日本大震災募金活動

ら茨城県沖までの南北約500キロ、東西約20キロのおよそ10万平方キロメートルという広範囲すべてが震源域とされる。最大震度は宮城県栗原市で観測された震度7で、警察庁では2014年（平成26年）3月11日現在、死者は15,884人、行方不明者は2,633人、建物の全・半壊400,152戸、全焼・半焼297戸であると発表している。

この未曾有の大震災に昭和43年十勝沖地震で校舎崩壊の経験を持つ本学では、幸いにも在学生への大きな被害はなく、事態に対応して学生が動き、ハンドボール部は本学を会場に例年行われている函館市長杯をチャリティマッチとするとともに、街頭では本学ローターアクト部および軟式庭球部が立ち上がり、募金活動を実施し、150万円を超える義援金を集め、赤十字を通して被災者への思いを届けた。

経済動向と就職状況（平成12年～）

平成12年3月卒の全国四大生の求人倍率は0.99倍となり、バブル経済崩壊以降、就職氷河期の最低値を更新した。その後の景気回復とともに求人倍率は漸増傾向に転じ、平成20年には2.14倍まで回復した。就職協定の廃止（平成9年）以降、採用活動の早期化は年度を追うごとに顕著となり、採用・応募手法ではインターネットの活用が必須の時代となった。平成20年

3月の卒業生は134名でそのうち就職希望者は117名、就職内定率は95.7%であった。商学部という教育内容から卸売・小売業への就職がトップで26.8%、サービス業15.2%、金融・保険業が7.1%と続いている。資本金10億円以上の企業には39.3%、1億円以上には52.7%が就職し、東証一部企業を中心に大規模企業への就職が5割超となった。地域別では関東圏に本社のある企業へは47.3%、函館市・近郊へは16.9%、札幌市が10.8%の割合である。ここ数年の入学者の道内比率が6割超の状況ではあるが、採用意欲の旺盛な首都圏企業への就職が本学の大きな特徴となっている。

こうした状況にあって、1年次からの就職指導を浸透させるため、平成18年度にキャリア開発センターを開設。同時に、就職課をキャリア開発課と改称した。その下で、1・2年次対象のキャリアガイダンスを年4回、3年次対象の就職ガイダンスを年間20回実施し、就職意識の啓発と実践演習を通じた親身で細かな指導が行われている。とりわけ60社超の企業参加が見込める本学主催の業界研究会、企業訪問、人事担当者招聘しての就職面接研修会は就職支援策として高く評価されている。ほかにインターシップ、就職活動宿泊費支援、公務員受験対策講座や教員採用試験対策講座の開講など、就職希望学生の完全就職を目指し鋭意努力している。

これらの努力の結果、平成23年12月『週間ダイヤモンド』「就職に強い大学ランキング」特集号で全国548大学中第98位にランクされ、北海道内では、北海道大学、小樽商科大学に次いで第3位にランクされた。

また、平成26年には読売新聞社調べによる「就職に強い大学2014」学部別就職ランキングの、商学部では、全国第11位にランクされ、全国的にも高い評価を受けている。

平成27年度の求人倍率は1.61倍と、円安・株高など「アベノミクス」による経済政策により、大手製造メーカーを中心に採用意欲は高いレベルにある。

しかし、企業は質を落としてまで数を揃えることはない状況から、大学としても社会人として通用する人材になるための、社会人基礎力やコミュニケーション力アップ講座等により力を入れている。

本学の、就職率は平成25年度96.7%、26年度は96.9%と高く推移しており、卒業者に対する就職率である「実就職率」も86.3%と全国トップレベルにある。

就職環境は改善されてきたとはいえ、「厳選化傾向」はこれからも続くと思われ、今後共学生の幸せを願って適宜、適切で強力なサポートを継続していく。

図書館

平成13年度に増床（2階建751㎡）を行い、保有図書を受入増を大幅に可能にすると共に、専門図書及び他領域（人文・自然科学）の専門書蔵書の構成充実に向けた特定分野専門科目集成、さらにインターネット等による情報の獲得・蓄積・発信・流通に関するトータルな提供を行うことができる学術情報基盤の整備など、ネットワーク時代に対応した図書館の構築を指向するとともに学生や一般の利用者が憩えるような空間をコンセプトとした図書館に生まれ変わった。運営に当たっては、常に利用者の求める探す・調べる・知る・学ぶを視野に入れたサービスの徹底を目指している。

平成18年1月に放送大学と単位互換協定を締結し、本学学生も放送大学の開設科目履修が可能となった。同年6月には本学図書館内に放送大学函館学習室が開設され、これを機に平日夜8時までおよび土・日の開館に踏み切り、本学学生及び放送大学道南の受講者、一般市民の学習・利用環境がさらに充実したが、平成26年度末をもって本学の放送大学学習室は閉室となった。日常的には新刊書案内や大学のイベント動画の放映をするなど情報発信に努めている。

一方、図書館は情報発信基地として、平成7年に広報誌「ぼるとさびえ」（編集委員であった



平成18年度文化講演会 義家弘介氏
500人収容の大教室で立席も出て、
600人を超えた



平成15年10月
函館商業高校と連携協定締結



青森商業・函館商業高校と共同研究

伊藤結城夫教授の発案でラテン語のポルトス・港や門を意味し、サピエンス・智恵や英知を意味する言葉を参考に命名）を創刊し、平成27年度で28号となった。大学案内では触れていない学生の生活や活動、卒業生の活躍など幅広い内容を扱っており、多くの読者を得て「大学案内」の補完的役割を果たしている。さらに河村博旨学長の在職中に大学教員の出版に力を入れるため、野又肇理事長の理解を得て、函館大学出版会を立ち上げ補助を出すこととし、教員の出版意欲に大きく寄与され、現在出版された冊子は11冊を数えるに至った。この他、北海道産業開発研究所の叢書発行の担当も継続しており、その発行数は10巻を数えている

公開講座

著名人による文化講演会、本学教員による英語検定受験対策講座、市民講座など、市内の高校生、一般社会人対象に公開講座を実施してきたが、近年は、本学教員の研究テーマを中心とした講座開催としている。

高大連携協定の締結

「本学が持つ大学としての専門性を、本学教員の高等学校教職員の研修会への参加や高校生

への講義、演習等に活用する」、「本学に対する高校生の興味、関心、期待等を把握する機会を設ける」ことを目的として連携教育推進プラン趣意書を作成し、平成15年10月に北海道函館商業高等学校と高大連携協定を締結した。以降、平成16年11月に北海道函館西高等学校、平成17年1月に北海道知内高等学校、平成17年10月に北海道八雲高等学校、平成18年5月に青森県立青森商業高等学校、さらに平成19年7月に北海道森高等学校、平成23年6月には北海道戸井高等学校と計7校との連携協定締結をし、付属高校2校を含め計9校との間で、出前授業や本学での研修、本学学生と高校生との商品開発ワークショップ、文化祭への合同企画等の連携教育が行われている。平成23年6月には北海道戸井高等学校との協定が締結され、ピア・サポートを題材とした交流が行われた。

提携した高校からの入学生が着実に増えている傾向にあり、高大連携の効果の一面が現れてきている。

地域連携

平成17年7月に「函館大学内産学官連携研究センター」が設置され、研究プロジェクトの推進や「函館のまちづくり・ひとづくりを考えるフォーラム」「函館・精鋭塾」（経営戦略講座）



函館市と相互協力協定締結

の開催を行うなど、地域貢献、社会貢献し得る研究の場として活動してきたが、平成25年4月から「北海道産業開発研究所」「函館大学経営研究所」「函館大学内産学官連携研究センター」の3つを統合し、「地域総合研究所」と名称変更し、若松裕之教授が所長として活動を継続している。さらに平成27年からキャリア開発課に地域連携センターを併設した。

また、全国的にも稀少な活動である函館野外劇への学生の参加も地域における文化活動への特色ある取り組みとして継続されている。

平成16年に市内の8高等教育機関と函館市が連携し、函館圏大学群を形成すべく「大学センター設置会議」が設立された。その後、「函館市高等教育機関連携推進協議会」が設置され、公開講座、広報、就職、FD研修などを合同で実施し、連携を強めてきた。平成20年4月には、「キャンパス・コンソーシアム函館」(CCH)と改称され、単位互換協定を締結するなど市内高等教育機関の連携をより強化する方向で活動している。平成20年8月に北海道教育大学を中心に、公立はこだて未来大学、函館大学等が連携して文部科学省に申請した「戦略的大学連携支援事業(高等教育機関連携による「キャンパス都市函館」構想)」(3年間)が採択された。

一方、平成19年度、文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」に本学の「現

職の学校教員に対する指導力向上のキャリアアッププログラム」(3年間)が採択され、道南を中心に広く道内から小・中・高の現役教員が多数参加して生徒指導の研修が行われた。

平成21年度には「大学教育・学生支援推進事業」就職支援プログラム『正課授業との連携による就職支援』が採択され、正課授業(キャリアプランニング)との連携を強化しながら早期のキャリアデザインの醸成による卒業後の就職確保を目的とし、その学修成果により教員採用試験の合格率アップや英語検定への積極的な受験を啓発することで高位の資格取得を促し、学生個々の資質向上を図るとともに社会が求める人材を育成するための教育内容の改善と教育力向上の達成に成果をあげた。平成22年度には「大学改革推進等補助金」に「ピア・サポートによる学生協同支援」が採択され、「大学版特別支援教育モデル」を構築し、発達障害者、学力不振者、留学生等を包括的に支援するプログラム作成に取り組んだ。平成24年度には私立大学教育研究活性化設備整備事業で「観光地を題材とした大学生と社会人の協同教育、協同作業の場の創出」が採択され、観光地であるベイエリアにサテライト「ココ・カフェ」(旧金森美術館)を開設した。地域の特性である観光のダイナミズムが感じられる現場で、休日活用も想定している。これによりPBLの質的な向上を図り、



1987 柏実記



正面玄関前

商学実習や授業のフィールドワークの拠点として学生の学ぶ意欲や主体性を引き出すべく活用されている。

学長交代

◆第四代学長の和泉雄三教授の後継として

第五代学長に大野和雄教授が就任

(昭和61年12月～平成元年12月)

62年度入学式で新入生へ「学園訓を大学発展の信条に自ら真理を求めよ」と贈る。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『新入生諸君、入学おめでとう。』

長く厳しい冬の寒さも和らぎ、いよいよ春の息吹を感じられる今日の日和に似て、諸君も長く厳しい受験競争に見事勝利を収め、ここに光輝ある函館大学に入学できました事は何よりの喜びと心から諸君の前途を祝福する次第であります。また、本日ご来学賜りましたご父母の皆様方とともに諸君の喜びを分かちあいたいと思います。

さて、諸君は、これまでの小学校、中学校、高等学校の12カ年間の児童・生徒の時代を終え、いよいよ大学生と呼ばれる身分となりました。さて、諸君が入学を許可された大学とは、どんな目的を持ち、どんな所かを、まず、知る必要があると思います。

「大学とは、學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授し、知的、道德的および応用的能力を展開させることを目的とする」と学校教育法に規定されております。また、これを受けて、本学学則第一条にも大学の目的と使命が明記されております。即ち、「函館大学は、北海道道南の學術の中心として広く知識を授けると共に商業および經濟に関する高度の学芸を教授し、北海道開発および産業の興隆並びに文化の發展に役立つ専門的職業教育を施すことを目的とする」としており、かつ、きわめて大切なこととして、「知・情・意の高度にして円満なる人格の持ち主としての職業人を養成することを使命とする」としているところであります。この知・情・意の高度にして円満な人格の養成こそ本学の建学の精神なのであります。即ち、本学の創立者で初代学長であられた故野又貞夫先生は、真の學問を生涯かけて学ばせたいと率先垂範されたのでございます。創立者の言う真の學問とは、「知育偏向に流されず、學問と徳性をバランスよく調和させ、徳性の涵養なくして學問はない」としております。知育・徳育・体育の地・情・意の全人的人間の養成に心血を注いだのであります。その教育哲学を学園訓三力条にあらわし、「報恩感謝」、「常識涵養」、「実践躬行」がそれであります。真の學問を目指す諸君の座右の銘とすべき教訓であります。この精神的



大学祭のワンシーン



ある日の剣道部

バックボーンをしっかりと身につけてもらいたいと思います。

さて、野又先生が作られた野又学園は、創立49年を数え、函館大学をはじめ、函館短期大学、函館有斗高等学校、函館女子商業高等学校、函館保育専門学院、函館短期大学付属幼稚園、函館短期大学付設調理師学校など7つの学校教育施設を持つようになったわけであります。学園全体として専任・兼任の教職員が431名、学生・生徒・園児数が4,000人、同窓生約3万人を超える人脈を有するようになっております。

つぎに、大学生は、いかに学ぶべきかについて話しておきたいと思う。第一に、自ら問い、自ら答え、自ら心理を求めるという自学自修が基本となっております。与えられるばかりのGIVEする教育よりも、直にCATCHする研究に近づける教育と変わらなければなりません。そして、TEACHされる学習からSTUDYすることが求められます。だからこそ、大学生をSTUDENTと呼ばれる意味を味わって貰いたいのであります。具体的に言いますと、大学の単位の認定にはっきり現れております。即ち、1週3時間15週をもって1単位とするもので、これは、1時間の講義に対し、2時間の学修を行い合計3時間ではじめて1単位と認められるものです。したがって、講義時間の倍の時間を教室以外のところで自学自習しなければなりません。

ん。その場所として図書館があり、学生自修室や学生演習室があるわけです。中国の詩人杜甫の言葉に「男児は、すべからく五車の書を読むべし」と言っております。時間を大切に有効にするためにも本学図書館での自修に期待したいと思います。

ともあれ、時代は、成熟化社会、情報化社会、国際化社会、高齢化社会とさまざまな表現でとらえられております。今後ますます複雑多岐、不透明の時代に入ることでありましょう。本学では、こうしたイノベーション時代背景を展望しながら21世紀に対処できる有為な青年男女を教え、かつ、育て、真理と正義を愛し、よき図書文献に出会う大学時代を大切にすごして頂きたいのであります。これからの社会は、知識技能ばかりではなく、思考力、判断力、創造力は勿論のこと、なによりも、豊かな人間性を併せ持った学生を求めています。個々の人間の人間性と個性的・個別的才能などが溶け合い存分に花開くような社会にしたいものと存じます。函館大学も創立23年を迎え新入生諸君とともに国家社会ならびに地域社会の発展に大きく寄与すると共に国際化社会の進展にいささかも遅れることなく対応していきたいものと考えております。本学では、アメリカのハワイ州ホノルル市にありますハワイ・ロア大学と昭和58年に姉妹校提携をしており、それを契機に留学生の交換をはじ



平成6年度入学式



交換教員と談笑

め教授による学術文化の国際交流を展開し注目を集めております。本学に学ぶご縁を大事に育て、いまから国際感覚を身につけ地球思考、すなわち、エクメナの発想で人生を創造してください。宇宙は、大きいのです。人間もっと大きく生きることです。若いからといって、社会に甘えることなく自らの責任において、キャンパス・ライフを存分に楽しんでください。最後に、ドイツにあって、啓蒙思想とともに歩んだ代表的哲学者、イヌマエル・カントのことばを紹介しておこう。「汝等、われより哲学を学ぶべきにあらず、哲学することを学べ」と。新入生諸君のご健闘をお祈りして式辞といたします。』

◆第六代学長として河村博旨教授が就任

(平成元年12月～平成14年12月)

河村学長が卒業生に贈った言葉・平成14年3月「理想は高く、夢は大きく、しかし、現実の実践は感謝の心をもって」と。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『海にも山々にも輝く春の光。この春の佳き日に、2002年―平成14年―第34回目の卒業式を平和の裡に挙行できますことに対し、皆様と共に感謝せざるを得ません。

先ず最初に、卒業生諸君に対して心からお祝いを申し上げます。ご両親、ご家族の方々に対しましても、お慶びを申し上げ、これまでの物心

両面からのご尽力ご苦勞に対して、我々一同は敬意と感謝の意を表したく存じます。

また、ご臨席を賜りましたご来賓各位に対しましても、衷心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

1965年―昭和40年―開学以来満37年の函館大学。1938年の学園創立から満64年。

この間の多くの卒業生と多くの支持者、支援者に対しましても感謝の心を捧げ、この歴史の重みを改めて感じ、その使命と責任の重さをも我々一同は強く感じざるを得ません。

次に、この卒業式のここにおいて、卒業生諸君に対して、我々の期待と希望の一端を申し述べたく思います。

先ず第一に、「報恩感謝」。この感謝と報恩の精神を生涯堅持すること。今、ここに生存できている事実。この実存の事実についての祖先や神の恩恵、父母や祖父母の恩、多くの師や先人先輩友人、後輩やその他社会の多くの人々からの恩や恩恵。これらの恩や恩恵に支えられ、守られて、我々の今、現在があることを常に忘れることはできないものと存じます。

諸君の家族一族においても、父母、祖父母や曾祖父母、高祖父母やその先の祖先の方々の多くの苦心や努力の結果として、諸君の今日の存在があること。この恩や恩恵を日々忘れることなく、父母や祖父母や祖先の方々に感謝の心を



平成4年度 学友会誌創刊号



平成4年度 大学祭「臥竜」より



海外研修旅行 ロンドン・ローマ

日々新たにし、諸君自身、各自の使命と責任についての自らの意識を鮮明にし、報恩の一日一日とすること。これを一日たりとも失念することは許されないものと存じます。

学問や科学や技術の世界においても、先人先達の数多くの失敗や苦心の結果として、現在の水準に到達できているのです。

この分野においても、先人先達への感謝の念と報恩の心を忘れることはできないものと存じます。

日本国という国家社会においても、そして、広く人類社会においても、常に多事多難の状態であり、難問山積という現状とも言えます。

然し、これも紛争、戦争やテロやクーデターや、内乱、そして、人種や民族、宗教の対立や妥協や克服を経て、数限りない貴い命も失われるなど、永い永い歴史の中では多数の多大な犠牲が払われて、ようやく辿りついている現状であります。

不満も不平も批判も可能です。しかし、この分野についても、先人先達の多大な苦心や苦難に想いをめぐらし、これに対しても先ず感謝の心を強くし、生存している限り、我々の果たすべき使命や責任を真摯に考えて、毎日毎日、果たすべきことを誠実に果たさざるを得ません。

これらのこと、すなわち、感謝と報恩の心と使命と責任の自覚とを失念してはならないということを強く希望したい。

諸君各自の家族、家庭にあっても、近隣の地域社会においても、大学や企業、地方自治体や国家、人類社会というような、あらゆる社会においても、あるいは、あらゆる組織体においても感謝と報恩の心は常に必要にして不可欠の精神と断言いたしたく存じます。

理想や夢は大きく高く、しかし、現実には先ず感謝の心をもって着実に堅実に小さな細事から、実践することを強く希望致します。

感謝と報恩の心を忘れては、幸福なる精神生活は求めても実現しないものと存じます。

第二には、「常識涵養」。健全なる判断基準による正邪。善悪の健全なる判断力の涵養と維持強化。諸君の懸命なる判断力を常に健全に維持する努力と、英知の創造への挑戦的な努力の継続・維持に期待せざるを得ません。

自分自身の信ずる信念や信仰のみが正しくて善であり、他人の信じるものは邪であり、悪であり、排除し、誹謗すべきもの、という宗教なども、今現在も現実に地球上の各地に存在し、紛争の大きな要因となっております。

諸君もご承知のとおり、ごく最近までマルクス共産主義と資本主義という如き主義主張を各々固持固執し、政治的軍事的に対立した冷戦時代を経験してきたばかりの我々でもあります。

思想、信仰の自由、表現の自由などの自由が認められる恵まれた社会に生存していること自体



平成17年度卒業式

にも、我々は感謝し、冷静に謙虚に他人の主義主張にも慎重に耳を傾け、冷静に健全なる判断力を駆使して、適時的確なる判断による言動を用いざるを得ません。

今や情報革命により、世界各国からの情報も安易に受信できます。まさに情報氾濫の時代であり、この氾濫する情報に幻惑され、理性を喪失し、日々の判断を誤り、時間を失い、後悔し、貴重な人生を迷わされかねません。

情報の選択と有効なる利用についても、英知を駆使して、的確なる判断を常に下し得る努力、これを常に維持継続堅持されますことを、諸君に特に希望せざるを得ません。

ここにおいては、「生涯学べ」という創立者野又貞夫先生の名言を想起せざるを得ません。

第三には、「実践躬行」。現実の実際の生活においては、空理空論を排除し、現実の制約条件の下での具体的実践を強いられます。

理想の世界、ユートピアの世界は、物語として書物や論文や日記に書くことは許されます。しかし、諸君のこれからの現実の実生活においては、たとえ不足不十分不満であっても妥協して、実践せざるを得ない場合ばかり、かも知れません。

理想を求めながらも、種々様々なる制約条件の中での最善の妥協点を求め、これを実践せざるを得ないのです。迷い悩む事のできる余裕、

議論のできる余裕や選択の余地もあること。これ自体についても感謝して、決断を的確にし、勇気を持って実践することを特に諸君に期待せざるを得ません。

理想は高く、夢は大きく、しかし、現実の実践は感謝の心をもって細事の一步一步からの確に着実に堅実に勇気をもって実践すること。

これを諸君に特に期待し、希望します。感謝と報恩の心で英知を開拓し、勇気をもって細事から、堅実に確実に実践躬行されること。これこそ建学の精神を体得した者にのみ許された幸福なる精神生活への最善の第一歩かと存じます。

誠実、正直に、謙虚に感謝と愛と奉仕の心をもって、そして自己犠牲を惜しまない勇気ある実践生活、こういう日々を送る紳士淑女としての生涯を諸君に期待し、祈願申し上げたく存じます。

最後に卒業生諸君のご幸運を祈り、ご臨席の皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げて、私の式辞と致します。』

◆第七代学長として小笠原愈氏が就任

(平成14年12月～平成19年10月)

平成元年から13年間務めた第六代学長河村博旨に替わり、函館短期大学教授・学長の小笠原愈氏が第七代学長として同短期大学学長を兼務して就任し、平成15年4月から函館大学学長専



平成17年
南開大学滨海学院とDDP締結

任となった。

小笠原学長が平成15年3月「志を立て、その実現に向け歩む」と卒業生に贈る。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『雪どけの水がぬるみ、柳の糸もやや色めき始めたこの佳き日に、ご来賓の方々をはじめご父母のみなさまのご出席をいただき、函館大学第35回卒業式を挙行できますことに心から感謝を申し上げます。

本学が昭和40年、1965年に開学して以来38年間、野又学園創立満65年の歴史の重みと厚さをもとに、今、こうして盛大に儀式的行事を挙行できますことに歓喜と感動の気持ちでいっぱいでございます。

ただいま、卒業証書・学位記を授与しました329名の一人ひとりには、4年間、真摯に人間性と専門性を磨いた力強さと商学士としての自信に満ちた姿がみられ、ほんとうに、うれしく思いますとともに、心から一人ひとりの努力に敬服し、お祝いする気持ちでいっぱいです。

さて、皆さんは、本学の4年間で、創立者故野又貞夫先生が残されました学園訓三カ条「報恩感謝・常識涵養・実践躬行」についてSLやゼミナールの時間をはじめ様々な講義、演習を通じて追究し、時代がどのように変化しても、一人ひとりが社会で健やかに生きていくうえでの不易で高等な人生訓になることを体感し、学修すること

が出来ました。

時代は、たしかに21世紀に入りました。国内では、科学技術が高度に発達し、文明の急速な進展には目を見張るものがあり、国際化、情報化も一段と目立ってきています。併せて、少子高齢化、慢性デフレと政治、経済、財政運営などへの不安と不信、犯罪の大型化、残酷化など世代を超えた社会的事件の続発など様々な面で気の遠くなるような難問が山積みしています。

皆さん一人ひとりが、常識として身につけた品性、社会生活の中での正邪や善悪、価値の高低の基準は、国内に横たわる難局を切り拓く判断力として生きて働くと考えています。

また、学内外の諸活動で培った自ら進んで実践する態度は、国内に散在する難問に率先して挑戦し、正しいと判断することは勇気を出して自ら行う実践力として開花すると考えます。

さらに、教授スタッフなどとのふれ合いを通して育んだ父母などに感謝する心情は、現代社会の複雑な人間関係の中で、静かに頭を下げ、「おかげさまで」「ありがとうございます」などを心の中から表現し、周囲の信頼を得ることにつながるものと考えます。

皆さん一人ひとりが4年間で学修した学園訓三カ条は、たとえ時代や社会が変化し、難題や難問が増しても、常に皆さんの生き方を照らす不易な理念になるものと確信をするものです。



小学校英語指導者育成講座開講式

次に、皆さんは、4年間、本学の独自性である商学を追究し、現代社会の「商」に即した実践的実践的な企業学を学び、生涯にわたって役立つ学問の基本を習得することができました。

言葉を変えると、生産から消費まで、商品やサービスなどが動く際に関連するマーケティング、IT、金融、会計、経営、企業法など、社会に活用応用できる学問を研さんしたと言えます。

したがって、皆さんの本当の評価は、社会に出たからいかに本学での学修を実践、応用できるかであり、必ず、一人ひとりが現実や現場に即し、自分の言葉と文体で表現する生きた実践学を創り出すことができるものと確信しています。

さて、せっかくの機会ですので、本日、本学を巣立って、新しい生活に進まれる皆さんに、次のことを申し述べてはなむけの言葉といたしたいと思います。

まず、自己が偉大な未完成であることを自覚し、「生涯・学べ」ということです。

実は、所詮人間は、永遠に未完成な存在であります。卒業という言葉は、学業を終えると同時に、新たな前進を意味する言葉でもあります。

これは、就職する者にも、進学する者にも、しばらく自分探しをする者にも、ともに停滞することを許さない、新しい、前進を求める言葉とも解することができます。

私が愛読する図書の著者であるロマン・ロラン

は、「一步一步前進しよう。まっすぐに前進することによって、遠くまでいけるのである。」と若い世代に呼びかけております。一人ひとりが自己が未完成であることを自覚し、現状に安ずることなく、常にたゆみなく前進を続けることが大切です。

故野又貞夫先生は、学園訓三カ条とともに、「生涯・学べ」を主唱されました。

先生は、人間は永遠に未完成な存在であることを洞察され、学園で勉学したことがらを基礎にして、生涯にわたって自ら研究と修養に努めるよう教えられました。

皆さん一人ひとりが直面するこれからの人生においては、ときに難局に遭遇し、前進をはばまれることもあると思います。

古来、伏すこと久しきものは、飛ぶこと必ず高し、とも言われております。艱難に耐えて、自らを養う者は、必ずや雄飛のときを迎えることができる確信します。

次に、志を立て、その実現に向け歩むということです。

生涯にわたって、自分を磨き、自ら進んでいくためには、広く大きな見地から志を立て、その実現を目指すことが肝要です。

皆さんには、4年間の大学生活で身につけた商学士としての専門性と学園訓三カ条を座右の銘として培った人間性があります。かつ、一人



放送大学と単位互換協定

ひとりには、4年間で見出したかけがいのない持ち味、よき、向き、可能性があります。これはいわゆるCANやMAYの部分、あるいは肯定的な自己といわれるものであり、社会の中で大いに伸ばし、生かし、広げていくことが期待出来るものです。併せて、一人ひとりには、4年間で気がついた不得意、不向き、短所があり、いわゆるCAN NOTの部分、あるいは、消極的な自己と言われるものがあります。

冷静に一人一人が自分の中にあるこの肯定的な自己と消極的な自己を見つめ、そのうえで志を創ることを願うものです。

さて、わが国の文豪として名高い夏目漱石は、ロンドンに留学中、夫人に宛てた手紙の中で「真の大丈夫とは、自分のことばかり考えないで、人のために働くという大きな志のある人をいう」と述べております。

自分の安寧を願うということは、人間として尊重されなければならないことですが、ここにとどまることなく、現在の日本において、何が急務であるか、わが人生をかけて、何をなすべきか想いを定め、志を掲げ、次に、それに向かって奮い立つ、これこそ青年としてのあるべき姿であろうと思います。

そのためには、志に向けて、近い目標とやや遠い目標を設け、自ら考え、自ら学び、かたつむりのようにこつこつと努力する姿が貴重になりま

す。かたつむりは、のろのろ歩きます。しかし、足跡は、くっきりと長く続いています。これは、しっかり歩いているからです。

志を持たないと、とかく、物事に消極的で受身になったり、問題に直面して解決を必要とするとき、すぐ出来ない理由を考えがちになったり、問題を傍観したり、などに陥りがちになります。

志を創り、近い目標を目指していると、「どうすれば問題が解決できるか」を考えたり、自分ならどうするかというように当事者の意識になり、生産的に考えるようになります。

21世紀の初頭の今、わが国では、国や社会をよりよくするために、企業や会社を一層活性化するために、若い人々のやわらかな感性や前向きの豊かな姿勢から生じる発想や提案を待望しています。

このたびの卒業は、まさに自分の人生の志に向かってのスタートであり、志を目指し、近い目標へ力いっぱい燃焼して、助走を始めて欲しいと願うものであります。

最後に、今日まで限らない深い愛情をもって、皆さんの成長を見守って来られたご家族のお喜びを思うにつけても、皆さんの一人ひとりが、志を立てて学び、未来を築いて行かれることを願わずにはおられません。皆さんの前途に対し、心からの祝福を贈り、私の祝辞と致します。』

◆平成19年10月末小笠原学長が健康を害し無念のご退職となったことに伴い、平成18年12月から副学長、平成19年8月から学長職務代理者に就任していた溝田春夫教授が第八代学長として就任

(平成19年11月～平成27年3月)

平成19年4月溝田学長が入学生に「高く、大きな志と目標を持って」と贈った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『木々の芽吹く季節を迎えたこの佳き日に、函館大学に入学された皆さん、入学おめでとうございます。教職員一同、心からお祝い申し上げます。本日、ここに函館大学第44回入学式を挙行するにあたり、ご来賓の方々をはじめ、ご父母、同窓会の皆様のご臨席を賜り、心より感謝申し上げます。

函館大学は昭和40年に創設され、今年で44年目を迎えます。現在、商学科と英語国際ビジネス学科の2学科を持つ商学部の大学としてこれまでに、8,792名の卒業生を送り出してきました。卒業生の多くは企業に就職し、ビジネス・パーソンとして国内に止まらず、海外でも活躍し、多くの貢献をしています。

さて、ご承知のことと思いますが、学校教育法の改正により、全国で750校近くある全ての国公私立大学は、7年ごとに、国の指定した認証機関が行う評価に合格しなければ、存続できない

ことになりました。

平成19年度、認証機関の一つである日本高等教育評価機構から北海道では3校の私立大学が評価機構の定める大学基準を満たしているとの認定を受けました。皆さんが入学された函館大学は、そのうちの1校であります。

審査は 教育研究環境は勿論のこと、教育内容や教職員組織、社会連携など、11の基準、32の項目で評価が行われ、本学は評価機構が定める基準をすべて満たしているとの判定を受けました。全国の大学の多くがこれから評価を受けようとしている中、道内の私大では先駆けて認定されたものです。

このように本学は、より良い教育研究環境の向上に力を注いでいます。

ここにいる皆さんはこれから始まる大学生活への夢と期待に胸を膨らませていることと思います。未来に向かって一歩踏み出す皆さんが、これから学ぶ「大学」とはどのようなところか、その役割は何かについて話をしてみます。

大学は、学問すなわち知の創造と活用を重んじ、学術文化の継承と発展を通して、人類社会の平和と繁栄に貢献するところです。それと同時に、そのための有為な人材を育成していくことを目的としています。

学問の自由を尊重し、高度の教育と学術研究の中心となっている大学の組織は、社会一般と



ニューカッスル大学表敬訪問①



ニューカッスル大学表敬訪問②

は違い、知的営みを最も重視し、そこに価値を置いています。一人ひとりが自由に発想し、真理を探究、発信するところであり、知を最も大切にし、尊重する組織と言えます。

物事の本質をつかむためには、深く学ぶことが大切です。一つのことを深く学ぶとその分野のことが分かるだけでなく、他の分野を理解する力も増すことになります。それはどの分野の学問にも共通するものがあるからです。学ぶことが、その人の人格を形成する基盤となりますので、学ぶことを通して「考える力」を養ってほしいと思います。ここで言う「学ぶ」とは、決して机上での勉強だけを指すものではありません。フィールドワークや社会連携、ボランティア、課外活動など広い意味を持っています。

さらに、「考える」ということによって、真の知恵を生み出し、考える力、すなわち「知識を獲得するための知識」を身につけることができます。考える力を身につければ、どのような分野に進んでもその力を活用できます。

そこで、皆さんには、深く学び、物事の本質をつかむために、できるだけ多くの本を読んでいただきたいと思います。本は時間と空間を越え、遠い過去の、そして世界の先人の思想、思考、人となり、社会などを知ることができます。

司馬遷は『史記』で、中国・春秋時代の学者であり、思想家でもあった孔子について書いてい

ます。その中には「韋編三たび絶つ」という言葉があります。「韋編」とは、本のとじ紐のこと、「三たび絶つ」とは、三度切れるという意味です。孔子は、とじ紐が三度もすり切れるほど本を繰り返し読んだことで自分を高められたことを述べています。多くの本に触れることにより、様々な人の生き方、考え方を知ることができ、自分の人生のあり方を考える上で大切なことであると思います。

ここで、皆さんが4年間を過ごす函館大学がどのような人材を期待して、育成しているかをお話します。

本学の建学の精神は、学園訓三カ条にあります。「報恩感謝」、「常識涵養」、「実践躬行」の3つを具体的信条として知・情・意を高度に、かつ円満に発達させる真の学問を追求することです。

人が人として生きるための人間の精神活動には知性、感情、意志という3つの側面があります。

「知」とは、真理をみて本質を捉える高い知性を意味します。

知は大学で最も大切にしている部分です。知の発展と積み重ねにより、今日の豊かな社会が築きあげられてきました。

「情」とは、他者を思い他者を感じる豊かな感情を意味します。

社会は多くの人間から成り立ち、一人では生きていくことはできません。相手を知り、自分



ココカフェ授業



アカデミックリンクで研究成果発表

を知ってもらい、お互いを理解することが大切です。大学では、先生や友達と共に学ぶことを通して、また、クラブ活動やボランティア活動、地域との連携を通して、それを高めることができます。そして、そこに他者を思い、他者を感じる豊かな感情が培われてきます。

「意」とは、先頭に立ち実行する勇気を持った強い意志を意味します。

何事にも積極的に取り組み、行動することが大切です。優れた考えは形にして初めて意味をなします。それには有言実行の行動力が必要です。

本学はこの知・情・意、すなわち、高い知性・豊かな感情・強い意志を持ったバランスのとれた人材の育成を目指しています。

そのための具体的信条として、感謝する心を意味する「報恩感謝」、健全なる判断力を意味する「常識涵養」、自ら行う実行力を意味する「実践躬行」を学園訓三カ条として掲げています。この三カ条を皆さんの日常生活の指針として大学生活を送ってください。

皆さんがこれから送る大学生活は、自由な時間がたくさんあり、人生において非常に重要な期間です。また、活力に富む若い皆さんが、失敗を恐れず、あらゆることに挑戦し、様々な経験ができる、可能性に満ち溢れた時です。さらに、本学では、全国各地からくる学生、そして海外から

の留学生たちと交流を深めることができます。異なった地域や環境で生活してきた人たちと交流し、様々な考え方に触れることは、皆さんの人間性の成長に大きく役立つことでしょう。多くの人との触れ合いを通して、真の友人をつくり、大学生活を有意義なものにしていきたいと思います。

また、大学時代は、皆さん一人ひとりの人生の方向性を決める重要な時期でもあります。在学中に様々な経験をし、学ぶことによって、将来どのような道に進むかが明確になってくると思います。勉強、課外活動、社会貢献など時間のある今しかできない多くのことに挑戦し、自分のやりたいことをぜひ見つけてください。現在すでに目標を持っている人はそれに向けてより努力を重ね、夢を実現できるように頑張ってください。大学生活で得た経験は必ずいつか役立つときが来ます。

本日入学された皆さんの中には、遠くは関西、九州から来られている人がおります。縁あって本学で学生生活を送ることになりますが、北海道・函館の地で大学生活を謳歌できることは素晴らしいことです。

函館は、幕末にペリー提督がわが国に来訪したことにより、横浜とともに開港されたところです。また、この時代は、日本の未来のため、近代日本を担った人材が多く輩出されました。本



硬式野球部 道六大学優勝
30年ぶりの全国大会



函館大学弁論大会 15回を数える



F D研究会

学の新しい教育の模範とした山口県萩の「松下村塾」をはじめ、大阪の「適塾」、大分県日田の「^{かんぎえん}咸宜園」など、地方から優れた人材がでています。函館で活躍した高松凌雲、五稜郭を設計した武田^{あやさぶろう}斐三郎らも、ともに大阪の適塾で学んだ仲間でありました。これら近代日本の礎を築いた人たちは、高く、大きな志と目標を持ち、昨日より今日、今日より明日と未来に向かって挑戦し、大きな事業を成し遂げています。皆さんも高く、大きな志と目標を持って、函館大学で学んでほしいと思います。

大学生活は、これからの人生を大きく左右する大切な時間です。

入学生の皆さん一人ひとりが意義ある充実した4年間を送ることができるように、私たち教職員は、あらゆる支援をしていきます。函館大学の4年間が皆さんの人生の大きな基点となるよう、学園訓三カ条を指針として、多くのことを学んでほしいと思います。

最後に、ご臨席を賜りましたご来賓の方々、ご父母、ご家族そして同窓会の皆様に重ねて感謝申し上げ、皆様のご健勝とご多幸を祈念して私の式辞と致します。』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

平成22年6月には野又肇理事長が永年にわたる私学教育への貢献により、旭日中綬章を受章という学園にとって創立者故野又貞夫先生・第

二代学長故村田喜一先生に続く大変名誉な叙勲となり、学園教職員こぞって喜びをわかち合った。

平成26年4月からは大学事務局長を兼務していた野又淳司常務理事が副学長として学長を補佐し、更なる大学改革と発展を目指すこととした。

この年第2回日の日本高等教育評価機構による審査を受審し、平成27年3月10日適格と認定された。

◆副学長の野又淳司常務理事が野又学園理事長となり、第九代函館大学学長に就任

(平成27年4月～)

野又学長就任後初の入学式で「人間生活の目標は「信」を成すことにある」と入学生へ贈る。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『本日ここに62名の新入生、2名の編入生を迎えることができました。入学生の皆さん、入学おめでとうございます。本学の教職員を代表して、皆さんを心から歓迎いたします。』

ご同席いただきましたご父母、保護者の皆様には、ご子息・ご息女の本学へのご入学に対しまして、心からお慶び申し上げます。また、ご来賓の皆様におかれましては、時節柄なにかとご多用中のところ、入学式にご臨席たまわり、心から感謝申し上げます。



平成27年度入学式



ココカフェでの学修

さて、本学での4年間の学修を始めるにあたり、3つのことをお話ししたいと思います。

まず一つ目として、商学をどのように理解して欲しいかをお話します。

現在私たちは「お金」を当たり前のように使用していますが、歴史をひもときますと人間はかつて、集落単位で狩猟と採集によって食料や資源を得ており、次第に集落間での物々交換を行うようになりました。そして羊などの家畜や貝殻などで、それぞれの物の価値を表すことが行われるようになりました。これが私たち現代人が言う「お金」、専門用語を使うと「貨幣」や「通貨」の始まりであります。

そして家畜や貝殻ではなく、硬貨、つまりコインが使われるようになります。コインが広域に使われ普及したのがローマ帝国の時代、今から1800年ほど前と考えられています。当時のコインには希少価値のある金や銀などの金属を用いていたので、コインそのものに価値があります。

しかし現代の私たちが使っている硬貨や紙幣そのものには価値はありません。きれいに成形・加工されていますが、いくらでも印刷してお金を増やすことができます。

お金はそれが何か具体的なモノやサービスに交換できるから価値を持ちます。ただの紙に私たちが価値があると信じているのは、お金を発

行している国家の「信用」があるからなのです。

この「信用」は誰が作っているのでしょうか。政治家、国の中央官僚、銀行など金融機関にも一定の責任があります。しかし、国の信用とは、その国の経済システムそのものであり、それは企業それぞれの信用によって成り立っています。つまり、私たち国民一人ひとりが、日本国の通貨の信用を担っているのです。

わが国の通貨は世界的に見ても非常に強い通貨であるといわれています。それは日本国民が世界から高い信用を得ているからなのです。

日本の企業は、当たり前のことかもしれませんが、仕事の約束を守ります。時間を守り、取り決めた価格を守り、間違いや問題があれば誠意をもって対応します。このような一つ一つの積み重ねが、国としての信用なのです。

商学を学ぶことは、はるか古代の物々交換の時代から、豊かな文明社会の現代までに、人類が試行錯誤の末に築き上げてきた社会の仕組みを学ぶことであり、その主要概念の一つが「信用」なのです。

そして、本学園の基本理念も、信用の「信」の一字に集約されます。

信用される人間になるために、学園訓三カ条「報恩感謝」「常識涵養」「実践躬行」を具体的信条として真摯なる生活を送ることを本学園創立者、野又貞夫先生は説いております。



商学実習 お弁当作り見学



商学実習 ドクターヘリ見学

大学は自由な学問の府であります、学問をする上で礼儀は非常に重要です。礼儀正しさの本質は、相手を尊重し理解しようとする姿勢にあります。相手に礼を尽くすためには、その人と会う前の準備をしっかりとしなければなりません。準備とは、まだ見ぬ相手を理解するための幅広い勉強や、どのような相手にも通用するような本質を理解するための奥の深い勉強なのです。

このような本学園の建学の精神のもと、礼儀正しく規律ある学生生活を送り、勉学に励んでください。

次に、二つ目として、能動的な学修の必要性についてお話しします。

高等学校までの学びは、文部科学省が定めた高等学校指導要領にのっとり、国語、数学などの教科で学ぶ内容が定められていました。学ぶことは教科書に書かれており、皆さんは国語の勉強をするために、学校の外に出る必要はほとんどありませんでしたし、数学を学ぶために先生以外の人と会う必要もなかったでしょう。

これからの大学での学びは高等学校までとは異なり、授業を理解するためには、学校の外に出ていく必要があります。人と会い、現場を見ることで、講義や図書の内容を実感できるようになり、自分の頭で考えるようになります。

学校の外に出て人と会うには、自分で電話を

かけたり、電子メールや手紙を書きます。自分の考えをまとめ、わかりやすく正確に伝えることは、大学で身につく技能の一つです。大学生生活の4年間、「まとめる、要約する、文章を書く」ことについては、繰り返し取り組むことになります。そして、最後の卒業論文がその成果です。ご父母・保護者の皆様におかれましては、4年後に入学生諸君が書き上げた卒業論文をぜひ読んでいただき、大学での学びの成果を確認していただきたいと思います。

能動的学修をさらに進めていくため、本学は昨年度、函館市との包括連携協定を締結いたしました。経済、交通、観光、食、スポーツ、福祉、防災、環境など、様々な市の部局との連携を強化し、学生に様々な地域課題を提示し、能動的学修の題材とすることが、これまで以上にできると期待しております。

また本学は創立50周年の節目を迎えておりますが、このたび、教育改善予算として5年間で総額1億円の予算を確保することを決定しております。この予算には、学生の高度な学びに対する助成も含まれております。

たとえば、学生が企業と共同で商品開発にとりくみ、その試験的販売にかかる費用の助成をすることも考えられます。あるいは、海外進出を考えている企業とともに、外国で調査活動をするための学生の渡航費にかかる助成も考えら



コンテナ利用でアンテナショップ



平成27年度オープンキャンパス

れます。50周年という節目に与えられた、またとないチャンスですので、入学生諸君が地域の高度な課題に向き合うことに期待しております。

そのためには、積極的に本学の教職員を活用してください。本学は昭和40年創立以来、50年間で9,638名の卒業生を輩出しております。本学園には短期大学と専修学校もあり、医療・福祉・食の分野にも精通しています。本学園の高等学校・幼稚園も合わせた卒業生は8万人おり、このネットワークを生かして学べるのが、本学の強みであります。

最後に三つ目として、本学で学ぶ商学の体系的知識についてお話してまいります。

商学部で知識として学ぶこととしては、会計や法律といった商取引のルール。経済や金融といった、市場の仕組みや価格決定のメカニズム。マーケティングや経営といった生産・流通・消費の一連の流れのしくみ。これらをバランスよく身につけていきます。

そして、商学部では幅広い教養も必要です。社会は人と人のネットワークでありますから、人間への理解なしに、社会を理解することはできません。人間にとっての幸せとは何か、人間は何を求めて生活しているのか。こういった本質的な問いを考えられる人は、消費者のニーズを捉えて競争で優位に立つことができるでしょう。

繰り返しになりますが、商学部で学ぶ知識は、信用のもつ重要性をよく理解すること、礼儀や規律を守ること、能動的に学修することがあって初めて意味があります。知識や技能にばかりとらわれるのではなく、考え方・心構え・発言・姿勢といった態度を、これからの大学生活の中で変容させていってください。

結びになりますが、入学生の皆さんが、多くの人と関わり充実した学生生活を送られることを期待するとともに、ご同席いただきましたご父母・保護者の皆様、ご多用の中ご臨席たまわりましたご来賓の皆様の、ご健康とご多幸を祈念いたしまして、式辞といたします。』

IV

教育・研究のあゆみ



カリキュラムのあゆみ

カリキュラムの推移

函館大学のカリキュラムは大きく4つの段階を経て、現在のかたちになっている。①開学～昭和61年、②昭和62年～平成12年、③平成13年～平成21年、④平成22年～現在である。開学当時の大学教育は、1,2年次に教養科目を学び、3,4年次に専門を学ぶのが一般的な考え方であり、それぞれの学問系統ごとに文部科学省(旧文部省)が標準的な科目を示していた。これに対して、平成3年に改正された大学設置基準では、「教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設」することとし、設置する科目の自由度を高め、カリキュラムを大綱化した。これを受けて、多くの大学で1年次から専門科目に取り組むことが一般的となっていった。函館大学のカリキュラムも①と②の時期には、教養・専門のバランスを考慮して配置したものであったのに対し、③の時期には1年次から専門を学ぶことを意識し、4年間の体系的な学修を可能にするものであった。そのために履修コースを多く設置したのであるが、その結果として開設科目が多岐にわたり、これを整理することが必要と考えられるようになった。そこで、商学の基礎科目をしっかり学びながらアクティブラーニングによって実践的学修を取り込むように構成したものが現在のカリキュラム(④)である。

また、開学以来現在まで卒業論文を必修とし、図書館で保管していることが大きな特徴である。これは、大学での学修の成果をかたちにすることで、学士力の到達点を明示することを目的としたものである。

(1) 開学期のカリキュラム

開学から昭和61年までの期間は、時期により変動はあるが、卒業に必要な単位を136単位とし、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、専門科目あわせて90単位程度を必修科目としていた。

1,2年次に一般教育科目を多く学び、3,4年次に専門を学ぶことを基本としたもので、当時の大学教育の標準的なカリキュラムといえることができる。特に一般教育科目として教養ゼミナール(S.L.)を1,2年次に必修とし、学園訓の精神を伝えるとともにディスカッションやカウンセリングにより学生生活を円滑なものとすることに配慮していた。

3,4年次には、演習(ゼミナール)を必修とし、卒業論文も独立の4単位としていた。これは専門の学修成果を残すことを強く意識したことによっている。また、専門科目として原書購読を必修とし、3,4年次にも外国語学修をおこなうことを求めていた。これは、創立者の発案によるものであった。

(2) コース制の導入

昭和62年からのカリキュラムは、創立20周年を期して設置された中長期構想委員会での検討の結果、科目の選択の枠を広げること、3つのコースを設置すること、商学部として標準的な科目体系とすることを目指したものであった。

まず、卒業に必要な単位を124単位とし、必修科目を50単位程度に引き下げた。学生の自主性を尊重し、動機づけを図ることがその目的であった。その一方で、学修が散漫なものにならないようコースに所属させ、学修の方向づけも図っている。設置されたコースは、(1)商学・会計コース、(2)経営情報コース、(3)国際英

文秘書コースである。情報化、国際化という時代の変化に対応するコースを設置し、学生に魅力ある学修を提示するものであった。

(3) 専攻塾制度の導入

平成13年に導入されたカリキュラムは、大綱化の時代にあっても異彩を放つ、函館大学独自の発想によるものであった。それは、当時の野又肇理事長（現学園長）からの提案による専攻塾制度である。4年を通じて固定化したクラス（専攻塾）に所属することで、学生・教員間の人間的接触を深めると同時に、専門的学修を進めることを意図していた。(1) 会計専攻塾、(2) IT専攻塾、(3) ビジネスアスリート専攻塾、(4) 国際英文秘書専攻塾、(5) 情報・商業教職専攻塾の5つの専攻塾が設置された。各専攻塾は3～4名の専任教員が担当し、それぞれ工夫をこらした教育を展開した。

また、専攻塾を選択しない学生のために、(1) マーケティングコース、(2) 経営コース、(3) 金融コース、(4) 企業法コース、(5) マスコミと出版コース、(6) 芸能ビジネスコースの6つのコースを設置した。すなわち、5専攻塾と6コース、あわせて11の選択肢の中から学修を選択する制度としたのである。

また、平成13年に高校の新たな科目「情報」の教職免許を授与するカリキュラムが認可され、平成15年には中学・高校の「英語」の教職免許を授与するカリキュラムも認可された。これまでの商業と合わせ3科目の教員免許の取得が可能になった。

(4) 英語国際ビジネス学科の設置

平成17年に英語国際ビジネス学科を設置し2学科体制となった。

これは、国際英文秘書専攻塾を学科に発展させたもので、英語とビジネスをバランスよく学修することでグローバル化する経済に対応する人材の育成を目指していた。英語を中心に学ぶ英語コースとビジネスを中心に学ぶ国際ビジネスコースを置き、英語教員の育成も視野に入れていた。それぞれのコースは少人数で教育を展開することで成果をあげることを期していた。

また、平成21年には、中学「社会」と高校「公民」の教職免許を授与するカリキュラムが認可された。

(5) アクティブラーニングの時代へ

専攻塾制度は、少人数クラスに教員が固定化して学生との深い人間関係を結ぶことで成果をあげていたが、反面では少人数クラスを多数開設するために大学全体のコストパフォーマンスが低下することとなった。また、英語国際ビジネス学科は教育内容の充実を図っていたが、入学生が少数にとどまっていた。そこで、平成22年、英語国際ビジネス学科を廃止して商学科に吸収、専攻塾も廃止し、新たに3コースに統合することとなった。(1) 企業経営コース、(2) 市場創造コース、(3) 英語国際コースである。

専攻塾の教育では、学生に問題発見・解決を行わせるPBL型の課題への取り組みが推進されていた。そこで、この取り組みを継承発展させることを意図して、1, 2年次に商学実習を必修としたことが現在のカリキュラムの特徴である。この取り組みは、商学の現場を知り、学修を動機づけ、分析手法を身につけ、プレゼンテーション能力を高め、最終的に卒業論文にいたる4年間の学修を構成する能力を養うもので、河合塾の全国調査でも高い評価を受けることになった。

▶教育課程 商学科

基礎教養科目						
系列		必修			科目名	単位
		企業	市場	国際		
一般教養科目	人文学				哲学	4
					倫理学	4
					心理学	4
					歴史	2
					日本史概論	2
					東洋史概論	2
					西洋史概論	2
					日本文学	4
					日本文化論	4
					英文学	2
	社会科学				英語文学	2
					アメリカ文学	2
					英米文学史	2
					英語学	2
					英語音声学	2
					スポーツ史	2
		○	○	○	法学	2
					日本国憲法	2
					地理学	4
					政治学	2
自然科学				社会学	2	
				数学	2	
				統計学	4	
				生物学	2	
				地球環境	2	
				化学	2	
				自然科学概論	2	
	基礎技能科目	情報	○	○	○	情報処理基礎演習Ⅰ
○			○	○	情報処理基礎演習Ⅱ	1
○			○	○	コンピュータ基礎	2
					コンピュータアーキテクチャ	4
					IT戦略論	4
					アルゴリズムとプログラミング	2
外国語科目		○	○	○	英語Ⅰ	2
		○	○	○	英語Ⅱ	2
				○	英語Ⅲ	2
				○	英語Ⅳ	2
					原書講読（経営学）	2
					原書講読（会計学）	2
					原書講読（経済学）	2
					原書講読（経済史）	2
					原書講読（民法）	2
					原書講読（海外事情）	2
				○	英会話Ⅰ	2
				○	英会話Ⅱ	2
総合科目	総合	○	○	○	キャリア・プランニング	2
		○	○	○	教養ゼミナール	2
					教職演習Ⅰ	2
					教職演習Ⅱ	2
	体育				教職演習Ⅲ	2
					異文化理解	1
		○	○	○	体育実技Ⅰ	1
		○	○	○	体育実技Ⅱ	1
					メンタル・アンド・フィジカル・ディベロップメント	4
		○	○	○	体育講義	2

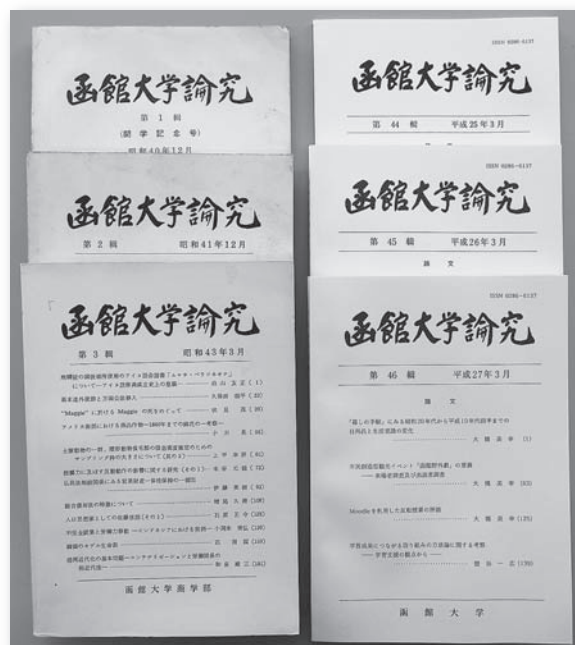
日本語等科目					
系列	必修			科 目 名	単位
	企業	市場	国際		
日本語				日本語Ⅰ	2
				日本語Ⅱ	2
				日本語Ⅲ	2

専門科目

系列	必修			科目名	単位
	企業	市場	国際		
専門基礎科目	企業	○	○	経営学総論	4
		○		経営史	4
		○	○	簿記原理	4
		○		会計学総論	4
		○	○	民法Ⅰ	2
		○	○	民法Ⅱ	2
		○	○	商法Ⅰ	2
		○	○	商法Ⅱ	2
	市場	○	○	経営情報システム論	4
		○	○	マーケティング総論	4
		○	○	商業史	4
		○	○	経済学Ⅰ	2
		○	○	経済学Ⅱ	2
		○	○	社会調査	2
	国際			国際経済学	4
			○	海外事情	4
専門発展科目	企業	○		経営戦略論	2
		○		経営組織論	2
		○		経営分析論	4
			○	企業分析論	4
				民法Ⅲ	4
				商法Ⅲ	4
				高等簿記	4
				財務諸表論	4
				管理会計論	4
				原価計算論	4
				会計学演習Ⅰ	1
				会計学演習Ⅱ	1
				会計学演習Ⅲ	1
				会計監査論	2
				職業指導	4
	市場		○	消費者行動論	2
				広告論	2
			○	流通論	2
				ミクロ経済学	4
				マクロ経済学	4
				金融論	4
				証券論	2
				産業構造論	4
				日本経済史	4
				西洋経済史	4
				日本経済論	2
				社会福祉論	2
				地域経済論	4
				国際マーケティング論	2
				国際経営論	2
	国際			国際法	2
			○	インターナショナル・ビジネス・コミュニケーションⅠ	2
			○	インターナショナル・ビジネス・コミュニケーションⅡ	2
			○	インターナショナル・ビジネス・コミュニケーションⅢ	2
			○	ビジネス・イングリッシュⅠ	2
			○	ビジネス・イングリッシュⅡ	2
			○	イングリッシュ・コンポジションⅠ	2
			○	イングリッシュ・コンポジションⅡ	2
				メディア・イングリッシュ	2
				比較文化論	4
			○	グローバル・カルチャー・スタディーズⅠ	2
			○	グローバル・カルチャー・スタディーズⅡ	2
			○	グローバル・カルチャー・スタディーズⅢ	2
			※	英語特別演習Ⅰ	4
			※	英語特別演習Ⅱ	4
総合				商学特講Ⅰ	2
				商学特講Ⅱ	2

系列	必修			科目名	単位
	企業	市場	国際		
演習科目	実習	○	○	商学実習Ⅰ	2
		○	○	商学実習Ⅱ	2
	演習科目		※	専門ゼミナールⅠ（経営学）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（会計学）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（経済学）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（経済史）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（民法）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（情報）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（マーケティング）	4
			※	専門ゼミナールⅠ（地域学）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（経営学）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（会計学）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（経済学）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（経済史）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（民法）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（情報）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（マーケティング）	4
			※	専門ゼミナールⅡ（地域学）	4

函館大学論究のあゆみ



第1輯 開学記念号 (昭和40年12月)

- 発刊の辞 野又 貞夫
- 論文
- 思惟と範疇－ヘーゲル論理学の考察－ 伊藤結城夫
物権変動における意思主義の妥当性
－有因主義と登記主義の結合体と比較して－ 伊藤 英樹
- 経営管理組織における内部監査の地位 中村 稔
- 後進国における労働力の移動要因に関する一考察
－後進国特有の移動要因について－ 小苺米清弘
- 近代経済学とマルサス
－経済理論と人口との関連に寄せて－ 石 南国
- 史料
- 飛騨屋武川久兵衛年表 白山 友正

第2輯 (昭和41年12月)

- 論文
- イギリスに於けるStephen Crane
－Joseph Conradとの関係に於いて－ 伏見 茂
- 1844年より1859年における外国宣教会宣教師の琉球・日本渡航 久保田恭平
- 土壤動物の一群、環形動物貧毛類の棲息密度推定のためのサンプリングの枠の大きさについて(其の一) 上平 幸好

仏民法夫婦財産制におけるfonds de commerceについて

伊藤 英樹

現代マーケティングの基本理念

大野 和雄

企業会計上の低価主義に関する一考察

増尾 久徳

第三次産業・雑範疇としての問題点

小苺米清弘

李朝末期以降1925年に至る朝鮮人口の推計について

石 南国

研究ノート

Mark Twainの作品にもちいられているa-vingについて

小川 晃

アメリカ会計原則の発展

成瀬 継男

史料

武田斐三郎が五稜郭・弁天砲台築造に用いた蘭書

付 拙著「武田信広」引用文献目録 白山 友正

第3輯 (昭和43年3月)

論文

- 飛騨屋の国後場所使用のアイヌ語会話書「ムロチ・ベラツネキナ」について－アイヌ語辞典成立史上の意義－ 白山 友正
- 幕末遣外使節と万国公法移入 久保田恭平
- "Maggie"に於けるMaggieの死をめぐって 伏見 茂
- アメリカ南部における商品作物
－1860年までの綿花の一考察－ 小川 晃
- 土壤動物の一群、環形動物貧毛類の棲息密度推定のためのサンプリング枠の大きさについて(其の二) 上平 幸好
- 投擲力に及ぼす反動動作の影響に関する研究(その一) 米谷 元捷
- 仏民法相続関係にみる営業財産一体性保持の一側面 伊藤 英樹
- 総合償却法の特徴について 増尾 久徳
- 人口思想家としての佐藤信淵(その一) 石原 正令
- 不完全就業と労働力移動－インドネシアにおける実例－ 小苺米清弘
- 韓国のモデル生命表 石 南国
- 港湾近代化の基本問題
－コンテナリゼーションと労働関係の前近代性－ 和泉 雄三

第4輯 (昭和44年3月)

論文

函館市外戸井町板碑の研究

－中世北海道政治史・文化史に触れて－ 白山 友正
 アメリカ船の日本訪問開始とアメリカにおける日本智識
 久保田恭平

陸棲貧毛類の生態学的研究、個体数・現存量の月別変動と空間的分布構造について 上平 幸好
 イメージ練習の効果に関する研究

－特に敏捷性について－ 米谷 元捷
 営業財産における無体的構成要素

－賃借権とその更新権等の場合－ 伊藤 英樹
 観光マーケティング論序説 大野 和雄
 繰延資産に関する近代会計と商法規定との接点 黒坂 正次

西ヨーロッパ諸国の金選好

－1968年3月、アメリカの金流出を例として－
 竹下 幸男

二重経済と労働力移動－フィリピンについての考察－
 小苺米清弘
 韓国における戦前の出生数推計－1906年～1944年－
 石 南国

労働経済学論争とアメリカ労働経済学の性格
 －隅谷三喜男教授の所説を中心として－ 和泉 雄三

書評・紹介

スティグラ『サービス産業の雇用動向』、オファー
 『発展途上経済におけるサービス産業－イスラエルについての実証分析－』両書にみられるサービス産業の雇用決定要因に関して 小苺米清弘
 コール＝デミニ『地域別モデル生命表と安定人口』
 －モデル安定人口の利用方法について－ 石 南国

第5輯 野又貞夫先生古稀記念号 (昭和45年3月)

野又学長先生をお祝いして 白山 友正

論文

西郷隆盛の経済思想と敬天愛人の教育 白山 友正
 庾信その晩年の文学 沼口 勝
 明治二年の樺太経営とパークス 久保田恭平
 There is 構文の発生

－‘It’の出る非人称構文と対照して－ 鈴木保太郎
 国定公園大沼における無脊椎大形土壌生物の生態学的予備調査 上平 幸好

営業財産におけるachalandageの法的保護の指向

－イタリーに関するロトンディ教授のレポートに

依拠して－

伊藤 英樹

企業会計法に関する一考察－特に繰延資産について－

河村 博旨

レジャーと観光マーケットの研究－その一－ 大野 和雄
 経営における現代的課題

－システム思考とマーケティング環境への適応－

及川 良治

経営情報の概念について

佐藤 裕

本多利明人口思想の根拠

石原 正令

公的サービス部門集中型産業構造の諸特徴

小苺米清弘

韓国人口の将来推計－1960から1980－

石 南国

書評

V.R.フュックス『サービス経済』 小苺米清弘
 野又貞夫先生略歴

第6輯より「函館大学論究」(一般教育編)と「函大商学論究」(商・経編)に分冊となる。

第6輯 (山口英二博士追悼号) (昭和46年3月)

故山口英二先生を悼む 野又 貞夫
 理学博士故山口英二先生を悼む 白山 友正

論文

“There is 構文”－用法の種々相－ 鈴木保太郎
 庾信その晩年の文学(続稿) 沼口 勝
 ポートマン・小笠原江戸横浜間鉄道敷設契約と局外中立

久保田恭平

フトミミズの三種の生長について 上平 幸好
 故山口英二先生略歴

第7輯 (昭和47年12月)

論文

ヘーゲル哲学に於ける知覚と思惟

－思惟の発展的抽象と具体性－

伊藤結城夫

All's Wellにおけるヒロインの性格変化について

宮崎 正孝

日本開港場におけるイギリス新聞

久保田恭平

日本陸棲貧毛類フトミミズ属(*Genus pheretima*)種の
 検索表 上平 幸好

書評

F.R.ダレス著『ヤンキーとサムライ1791～1900年の近代日本の発展に於けるアメリカの役割』を読んで

久保田恭平

第8輯（昭和48年9月）

論文

- ヘーゲルに関する論理の基礎境域に関する考察
伊藤結城夫
- 李賀と新題の楽府－特に古楽府との関連において－
高木 重俊
- アウグスティヌスとスコラ学における平和論
久保田恭平

書評

- C.ドーソン著『中世に関する諸論文』 久保田恭平

第9輯（昭和49年3月）

論文

- 詩人と象徴P. B. Shelley 鈴木保太郎
- 尾崎放哉－その寂寥の表現と構造－ 高木 重俊
- 理神論とカントの平和理念とマルクスにおけるメシアニズム
久保田恭平
- アルフレッド・ウェーバーの工場立地論について
亀谷 栄
- 日本産、陸棲貧毛類の奇形固体について 上平 幸好

書評

- 八杉龍一著『進化論の歴史』 久保田恭平

第10輯 10周年記念号（昭和50年3月）

- 創立10周年記念に寄せて 野又 貞夫

論文

- アリストテレスの範疇論について 伊藤結城夫
- 杜甫と庾信 高木 重俊
- HAMLET THE MAN 宮崎 正孝
- フランス的表現と日本の表現
－「する」型と「なる」型の対比－ 吉岡 正敏
- 渡島半島海岸段丘の対比とそのC(14)年代
瀬川 秀良
- 砂浜の潮間帯に生息する端脚類の呼吸量測定のための基礎研究
上平 幸好

第11輯（昭和51年12月）

論文

- 英語慣用句および慣用表現への一考察 高月 晋
- 駱賓王「螢火賦」について 高木 重俊
- ワーズワースの詩における静寂の意味 宮崎 正孝
- 英国英語に対するアメリカの影響の諸相
クリストファー・ジョン・ベイリー

- 資本集中と株式会社法－株金全額払込制度－

河村 博旨

- ヨコエビ端脚類の進化様式について

- －バーナードの見解の紹介－

上平 幸好

第12輯 野又貞夫先生追悼記念号（昭和53年3月）

- 故野又貞夫先生の偉業を偲んで 村田 喜一

論文

- 異常性の諸問題 近藤 元
- 駱賓王の文学（二） 高木 重俊
- イギリスにおけるインフレーション会計の最近の動向
井口 伸

- 砂中棲息性端脚類*Haustorioides Japonicus*

- (Dogielinotidae : Amphipoda) の生活史 上平 幸好

事例研究

- 貿易通信文の実地研究と貿易経営 高月 晋

対談

- 文化の架橋 クリストファー・J・ベイリー
宮崎 正孝

第13輯（昭和55年3月）

論文

- 実験的芸術論－三島由紀夫『鏡子の家』をめぐって－
宮崎 正孝

- 柳宗元の文学－詩と山水記をめぐって－

松本 肇

- 函館市東方における“銭亀沢火山灰層”中の泥炭質堆積物について
瀬川 秀良

対談

- 文化の架橋(承前) クリストファー・J・ベイリー
宮崎 正孝

第14輯（昭和56年3月）

論文

- ポール・ズィマーの世界－『死の胸骨』をめぐって－
宮崎 正孝

- 韋応物の生涯と文学 松本 肇

- 国際契約－英文合併会社契約書に関する一考察－

高月 晋

- 北海道渡島半島南部の海岸段丘堆積物について

瀬川 秀良

対談

- 文化の架橋(承前) クリストファー・J・ベイリー
宮崎 正孝

第15輯（昭和57年3月）

論文

- 三島由紀夫の詩的イメージ－海－ 宮崎 正孝
「三言」の分析－出世物語に関して－ 荒木 猛

翻訳

- ポール・ズイマー詩集『かまびすしき共和国』
訳者 宮崎 正孝

第16輯（昭和58年3月）

論文

- リスニング ブーム－外国語教育に於ける理解力の役割－ フレッド・アンダーソン
「西遊補」における戯作性について 荒木 猛
話本中の「常套句」について 荒木 猛

第17輯（昭和59年3月）

- 函館大学との姉妹校提携記念講演
コンピューターと教育－第三の波に関する哲学的考察－
フィリップ・J・ボサート博士
ボサート博士論文要旨翻訳 高月 晋

論文

- ヘーゲル哲学に於ける反省と存在構造
－ヘーゲル論理学の考察－ 伊藤結城夫
日本産ナミノリソコエビの分類上の地位と関連諸属の
類縁関係 上平 幸好

研究資料

- 金瓶梅詞話登場人物表 荒木 猛

第18輯（昭和60年3月）

論文

- 正確投と投距離との関係－ソフトボールとハンドボ
ールの場合－ 三浦 俊和
意識の経験と存在－ヘーゲル存在論の基礎的構造とそ
の方法－ 伊藤結城夫
「金瓶梅」における諷刺－西門慶の官職から見た－
荒木 猛

第19輯 開学20周年記念号（昭和61年3月）

- 巻頭言 学長 和泉 雄三

論文

- ニューズペーパーイングリッシュ考察
－文法的アプローチ－ 高月 晋

「金瓶梅」素材の研究（Ⅰ）

- －特に俗曲・「宝剣記」・「宣和遺事」について－

荒木 猛

Survey Knowledgeに関する基礎的研究

- －距離及び位置情報の外在化に関わる諸問題－

加藤 健二

ナミノリソコエビ科端脚類の地理的分布に関する一考察

上平 幸好

北海道汐泊川・温川における河床堆積物の研究

瀬川 秀良

中川 俊也

研究ノート

- 英仏のことわざ・押韻の対照 吉岡 正敏
砲丸投げの基礎技術について 三浦 俊和

第20輯（昭和63年3月）

論文

- 空間的知識の外在化過程に関する探索的検討
－locating課題における先行アイテムの後続判断に
及ぼす影響について－ 加藤 健二
元稹「夢井」詩試論 坂野 学
意識の経験と存在－ヘーゲル存在論の基礎的構造とそ
の方法－ 伊藤結城夫
Model－Based Reading for Writing Revision:
An Integration of Skills Barbara J.Booth
台風12号が函館地方の植物に与えた塩風害について
上平 幸好

第21輯 野又学園創立50周年記念号（平成元年3月）

- データ解析A I 開発のための予備的試み 宇田川拓雄
Çaを主語とする表現

- －口語フランス語における無生物主語表現の一実態－

吉岡 正敏

Establishing Goals and Objectives:

- An Opportunity for Exchange Barbara J.Booth
意識の経験と存在（承前）－ヘーゲル存在論の基礎的
構造とそ

伊藤結城夫

- 函館の砂質海岸に生息する端脚類、ナミノリソコエビ
の生産量 上平 幸好

- 回転リングーディスク電極を用いた銅－ニッケル合金
の電気化学的溶解反応の機構に関する研究－

溝田 春夫

S.Bruckenstein

研究ノート

元稹「三遣悲懷」覚書 坂野 学

第22輯（平成2年3月）

論文

対人不安心性に関する予備的考察 本間恵美子
韓愈「記夢」小攷 坂野 学
意識の経験と存在（承前）－ヘーゲル存在論の基礎的構造とその方法－ 伊藤結城夫
砂中生活型ナミノリソコエビ科端脚類の食性に 上平 幸好
砂中生活型端脚類の世代交代の速度と、これに影響する要因 上平 幸好

第23輯（平成3年6月）

論文

対人不安と社会的課題の評価
－友人関係に関する諸経験をめぐって－ 本間恵美子
函館とその周辺における雨水の性状の予備観測
－1990年6月より12月までの記録－ 上平 幸好
定電流二重パルス法による芳香族化水素の電極反応速度の測定 溝田 春夫

研究ノート

「鶯鶯伝」ノート（上） 坂野 学

第24輯（平成4年12月）

論文

韓非子と春秋（一） 大島 隆
シャーマニズムに内在する「癒し」の諸相
－沖縄の知見と所説レビュー－ 本間恵美子
カナダ英語の特性に関する一考察－東沿岸を中心に－ 金谷 茂
英語口語表現に関する考察 高月 晋

第25輯（平成6年3月）

論文

韓非子と春秋（二）宗襄の仁 大島 隆
対人不安的自己意識と自己概念 本間恵美子
民事訴訟法学から見た製造物責任“製造物責任訴訟” 清水 紘史
砂質海岸の生物相とその生態学研究の現状 上平 幸好

第26輯（平成7年3月）

論文

韓非子の君臣論 大島 隆
王建歌詩小攷 坂野 学
産出メカニズムに基づくハ行子音の音声学的解釈 田中 弘樹
テス ギャラハーと生成
第2部－転落と再生：生成の実在性 クリスタベル・パトラー
請求権の競合 清水 紘史
経営組織におけるホロン(Holon) 藤嶋 暁
函館における雨水の性状の観測
I. 1991年1月から3月までの雪の水素イオン濃度 上平 幸好

研究ノート

RIGHTの訳語＜権利＞の成立に関する考証
－名村五八郎の＜理＞がルーツ－ 井上 能孝

第27輯 30周年記念号（平成8年3月）

論文

産出メカニズムに基づく英語無声化子音の分類 田中 弘樹
オーウェル試論 山田 康夫
E.E.ライス米国領事公文書の再評価
－箱館英学史の視点から－ 井上 能孝
懲罰的損害賠償の本質 清水 紘史
商店街の空間構造－函館の事例－ 渡辺 英郎
陸棲貧毛類、Pheretima phaselus Hataiの変種に関する再検討 上平 幸好

書評

劉 国瑛 著『メンタリティと詩歌創作』 坂野 学

第28輯（平成9年3月）

論文

ロビンソン・クルーソー研究 山田 康夫
Pilot Study of Glottal Opening in the Production of Japanese Voiceless Fricatives Hiroki Tanaka
Structural and Cultural Analysis of Japanese Brian R. Duff
証明責任（訴訟審理における証明責任の役割） 清水 紘史
函館における雨水の性状の観察
II. 1993年9月から1996年12月までの水素イオン濃度の記録 上平 幸好

翻訳

- P.M.キタール著「フランスことわざ研究」(第1章)
吉岡 正敏

第29輯 (平成10年3月)

論文

- 中国におけるナショナリズム的傾向について
最近のマスコミ・文学の文章を問題として
坂野 学
ガリバーの憂鬱
山田 康夫
箱館英学史<Ⅰ> - 箱館英学の原点とその終焉 -
[Ⅰ]序説
井上 能孝
Photoglottographic Study of Glottal Opening in the
Production of Japanese Voiceless Fricatives
Hiroki Tanaka
なかなか/とても/全然+否定形にみる話者の主観
青木 恵子
Discrimination Against Minority Groups in Japan
Brian R. Duff
損害賠償法
清水 紘史
異常気象が浅海域に生息する端脚類の繁殖に与えた影響
上平 幸好

翻訳

- P.M.キタール著「フランスことわざ研究」(第2章)
吉岡 正敏

資料

- 函館見晴公園の樹木の目録
上平 幸好

第30輯 (平成11年3月)

論文

- ヴォネガットの作品における時間の研究
山田 康夫
箱館英学史<Ⅱ> - 津軽海峡から北方の英学ライン創
まる - [Ⅱ]本論
井上 能孝
Glottal Opening of Japanese Voiceless Consonants
Hiroki TANAKA
特殊の不法行為責任
清水 紘史
函館における市街地の拡大
渡辺 英郎
北太平洋産ナミノリソコエビ科端脚類の種間の類縁関係
上平 幸好
対馬におけるナミノリソコエビ科端脚類の分布に関す
る一考察
上平 幸好

翻訳

- P.M.キタール著「フランスことわざ研究」(第3章)
吉岡 正敏

第31輯 (平成12年3月)

論文

- 王建「宮詞」小攷 - その諷諭性をめぐって -
坂野 学
安世高訳經典と「莊子」
佐藤 義博
箱館英学史<Ⅲ> - Rightの訳語<権>、<理>の源
流を探究 - 本論 (続)
井上 能孝
錯誤
清水 紘史
数字で見たロシア極東地域と北東アジア諸国との経済
交流
Trekhsviatskyi ANATOLI
北太平洋西岸におけるナミノリソコエビ科端脚類の地
理的分布
上平 幸好
Breeding Ecology and Life Cycle of Haustorioides
Japonicas (Amphipoda ; Dogielinotidae) at Kunda
Beach, Wakasa Bay, Central Japan
Yukiyoshi KAMIHIRA

翻訳

- P.M.キタール著「フランスことわざ研究」(第4章)
吉岡 正敏

研究ノート

- 環形動物貧毛類、フトミミズ科*Pheretima*属の染色体
観察
上平 幸好
大学における英語授業改善のための実践研究
天野 宣敬

第32輯 (平成13年3月)

論文

- 安世高訳經典について
佐藤 義博
箱館英学史<Ⅳ> - 箱館英学に寄与した英米人の系譜
- 本論 (続)
井上 能孝
Glottal Conditions in Japanese Consonant Production
Hiroki Tanaka
Drama as a Tool for Japanese Students to Learn and
enjoy English More Effectively
Scott Hardy
言語修得における年齢と環境についての検証
- 函館弁調査アンケートを用いて -
太田 晶子
東北地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅰ
- 青森県で採集された種類と分布 -
上平 幸好
関東地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅰ
- 群馬県で採集された種類と分布 -
上平 幸好
ハンドボール競技における試合の流れを客観的に捉え
る研究
- 試合の流れから見た函館大学ハンドボール部の課題 -
松 喜美夫

清水 宣雄、吉田 久士、田村 修治、岡本 大
翻訳

P.M.キタール著「フランスことわざ研究」(第5章)
吉岡 正敏

書評

沈立行著『上海特工戦』 坂野 学

第33輯 (平成14年3月)

論文

箱館英学史<V>(完)ー箱館英学ルーツに起因する
ペリー提督の英学的足跡ー 井上 能孝

東北地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅱ

ー秋田県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

東北地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅲ

ー岩手県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

Occurrence of *Pheretima aspergillum* (Oligochaeta :
Megascolecidae) In Iriomote Island, Japan

Yukiyoshi KAMIHIRA, Sadao KAWAGUCHI
ハンドボールにおけるポストプレイのステップに関する
考察

松 喜美夫、清水 宣雄、吉田 久士、田村 修治

研究ノート

日本語と諸外国語における擬声語・擬態語の特徴と指導法

ー日本語・英語・ドイツ語・フランス語・スペイン
語の場合ー 太田 晶子

研究資料

北海道南茅部町「内藤家文書」 渡辺 英郎

第34輯 (平成15年3月)

Libertyの翻訳後<自由>の成立過程を探る

ー箱館英学に発掘された足跡ー 井上 能孝

学校教育相談における「援助的コミュニケーション」

ーブリーフセラピーの視点からー 会沢 信彦

An overview of attitudes towards Aboriginal land
rights In Australia, past and present.

Peter CUMMINS and Scott HARDY
東北地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅳ

ー山形県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

東北地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅴ

ー宮城県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

東北地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅵ

ー福島県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

研究ノート

言語修得と年齢・環境についての考察

ー函館弁での検証、セント・メリーズ大学での調査
結果との比較、函館大学留学生の状況からー

太田 晶子

研究資料

1950年代における南茅部町の水産加工業の調査報告

渡辺 英郎

陸棲貧毛類の生殖巣に寄生する胞子虫の観察

上平 幸好

第35輯 (平成16年3月)

論文

日本語訳仏典のテキスト・データベース化への試み

佐藤 義博

外国人への日本語教育

ー母語への影響と短期習得方法についてー

太田 晶子

イギリス英語における母音の前硬音短縮の現状

田中 弘樹

ペリー提督直筆の公文書第50号と開港場箱館の原点

ーペリー箱館来航150周年の足跡甦るー 井上 能孝

函館市におけるアパート分布

渡辺 英郎

中部地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅰ

ー岐阜県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

九州地方における陸棲貧毛類の調査報告Ⅱ

ー宮崎県で採集された種類と分布ー 上平 幸好

ハンドボールにおける基本プレイアルゴリズムの構築
に関する研究

ーダブル・ポスト攻撃システムについてー

松 喜美夫

第36輯 (平成17年3月)

論文

開港場箱館の英学校変遷&函館学の考察

ー箱館開港(狭義の開港)150周年に学ぶー

井上 能孝

外国人への日本語教育ー作文とスピーチの指導ー

田中 慶子

The Exegetics of Fast Food, Sexist Language

And the Women's Movement

Peter CUMMINS, Marc REAVIS, and Scott HARDY

第37輯（平成18年3月）

論文

- 日本語訳仏典をめぐる諸問題
 - コンピュータ処理を通して - 佐藤 義博
 開港場・箱館に開花した洋学（蘭・英）の起源
 - 諸術調所の開所150周年に憶う - 井上 能孝
 アメリカ英語における母音の前硬音短縮
 田中 弘樹
 オーストラリア英語における母音の前硬音短縮
 田中 弘樹
 外国人への日本語教育
 - 国語文法と日本語文法の相違点 - 田中 慶子

第38輯（平成19年3月）

論文

- 「函館文庫」を創設した通詞・堀達之助 - 「貌利太泥
 諸芸韻類」第8版の印影とは何か? - 井上 能孝
 イングランド英語における母音の硬音前短縮の現状
 田中 弘樹
 函館市の比較的若い世代の女性の母音の実験音声学的
 研究 田中弘樹、矢萩悦啓、下村五三夫
 外国人への日本語教育 - 自動詞・他動詞・受身・使役
 の相互関係 - 田中 慶子
 中学生の攻撃性を規定する諸要因の検討
 - 学級雰囲気測定尺度との関連 - 金山 健一
 情報工学教授法改善の試み 小島 栄樹
 北海道高校陸上の大会成績 - 全道大会における道南選
 手の競技成績 - 三浦 俊和
 1954年における函館朝市に関する記録
 渡辺 英郎

第39輯（平成20年3月）

論文

- 中学生の攻撃性を生起する学校ストレス要因の検討
 金山 健一
 ADHDの中学生への家族支援の検討 - ブリーフセラ
 ピー型コンサルテーションのモデルから -
 金山 健一
 五稜郭(亀田御役所土塁)築造と函館観光の原点
 - 函館開港ブレ150周年に憶う - 井上 能孝
 高等学校における情報教育のための教材 敦賀 健一
 函館市の比較的若い世代の男性の母音の実験音声学的
 研究 田中弘樹、矢萩悦啓、下村五三夫

外国人への日本語教育 - 文語と口語の関係 -

田中 慶子

北海道高校陸上の大会成績 - 全道陸上競技大会におけ
 る道南女子選手の競技成績について - 三浦 俊和
 肖克凡「賭者」の虚構をめぐる - 坂野 学

第40輯（平成21年3月）

論文

- 比較的若い世代の母音「ウ」について
 田中弘樹、矢萩悦啓
 ウダーナヴァルガとダンマパダの比較対照
 - 梵語のパーリ語化への試み - 佐藤 義博
 兄弟で不登校になった家族へのアプローチ - 家族シス
 テムの変化を促す訪問面接の在り方 - 金山 健一
 開港場箱館 - 柳田藤吉の貿易事始め - 函館開港150周
 年に憶う - 井上 能孝
 外国人への日本語教育 - 漢字を捉えなおす -
 田中 慶子
 オホーツクのホタテ漁業 渡辺 英郎
 情報の授業方法改善のための一つの試み 敦賀 健一
 情報工学教授法改善の試み（続報） 小島 栄樹

第41輯（平成22年3月）

論文

- 鹿児島市の教養ある比較的若い世代の母音「ウ」につ
 いて 田中弘樹、矢萩悦啓
 『南伝大蔵経』のデータベース化 佐藤 義博
 中学生の携帯電話依存を規定する諸要因の検討 - 携帯
 電話依存がライフスタイル、ストレス反応に与える影
 響 - 竹内和雄、金山健一
 C言語学習支援の一方策 小島 栄樹
 外国人への日本語教育 - 助動詞「た」をめぐる -

田中 慶子

遣米使節団の渡米150周年 - 箱館奉行・村垣&首席通
 詞・名村の足跡を辿る - 井上 能孝

第42輯（平成23年3月）

論文

- 超高齢社会における「不安」の構造 - 認知症意識調査
 より - 大橋 美幸
 成瀬『浮雲』小考 - 回想シーンをめぐって -
 坂野 学
 外国人への日本語教育 - 改訂常用漢字をめぐる -
 田中 慶子

第43輯（平成24年3月）

論文

- 超高齢社会における不安の構造 第2報
 - サービス付きの高齢者住宅と近隣の助け合い意識
 調査より - 大橋 美幸
 外国人への日本語教育 - 形容詞と形容動詞（イ形容詞
 とナ形容詞） - 田中 慶子
 微型小説「請站著認錯」について 坂野 学

資料

- 地域学としての「函館学」の成果と可能性 - キャンパ
 ス・コンソーシアム函館主催合同公開講座「函館学」
 の記録 - 田中 浩司

第44輯（平成25年3月）

論文

- 超高齢社会における不安の構造 第3報
 - 認知症家族介護者に対するインタビュー調査等 -
 大橋 美幸
 英語リメディアル教育の現状と今後の課題
 壁谷 一広

第45輯（平成26年3月）

論文

- 超高齢社会における「不安」の構造 第4報
 - 自助・互助・共助・公助に関する意識調査 -
 大橋 美幸
 空港における商業施設の運営
 - 空港改革による地方活性化に関する一考察 -
 大橋 美幸
 高等教育に求められる学習成果についての考察
 - 教育改善の取組に焦点を当てて -
 壁谷 一広
 曹禺『王昭君』小考 - 創作エピソードをめぐって -
 坂野 学
 中世後期の寺院と「檀那」の関係について
 田中 浩司
 「インディアン・キャンプ」小論 山田 康夫

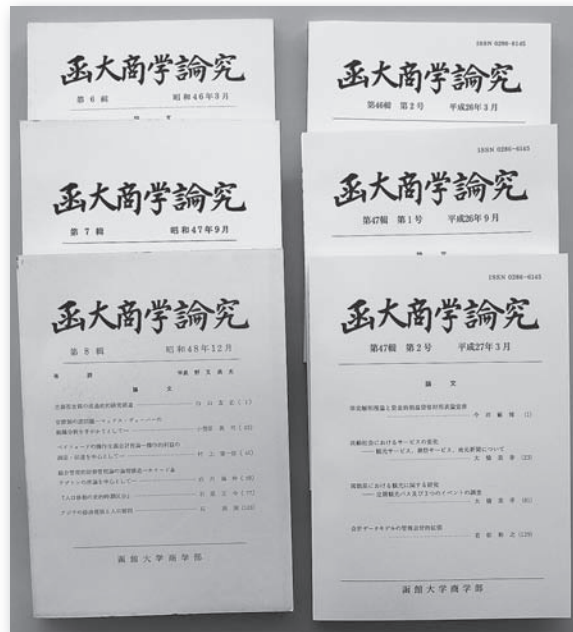
第46輯（平成27年3月）

論文

- 「暮らしの手帖」にみる昭和20年代から平成10年代前半
 までの日用品と生活意識の変化 大橋 美幸
 市民創造型観光イベント「函館野外劇」の意義
 - 来場者調査及び出演者調査 - 大橋 美幸
 Moodleを利用した反転授業の評価 大橋 美幸
 学習成果につながる取り組みの方法論に関する考察
 - 学習支援の観点から - 壁谷 一広

函大商学論究のあゆみ

(『函館大学論究』第六輯より商・経編を分離)



第6輯 (昭和46年3月)

論文

- 無償取引の固定資産の評価について 増尾 久徳
引当金に関する近代会計と商法規定との接点 黒坂 正次
アメリカにみられる消費者主義の高揚とマーケティング政策の諸問題 (I) 及川 良治
レジャーと観光マーケットの研究—その2— 大野 和雄
債権担保にまつわるいくつかの検討
—取り切り型の上限緩和をねらいとして— 伊藤 英樹
サービス産業の生産性と労働の質
—生産性上昇の相対的遅れに関連して— 小薊米清弘
アメリカ労働経済学成立の基盤 和泉 雄三
開拓史時代の北海道の人口 石原 正令
北海道アイヌ人口史Ⅲ 白山 友正
韓国の人口統計の評価について
—1966年センサスを中心として— 石 南国
研究ノート
判例研究・譲渡担保権者に第三者異議の訴を認容した例 伊藤 英樹

第7輯 (昭和47年9月)

論文

- 企業財務論の基礎契機の分析 白川 満伸
日本前産業社会の人口様式 石原 正令
限界地方都市圏の人口と経済分析
—函館圏を中心として— 石 南国
中世北海道流通史考
—応永板碑と関連して— 白山 友正

第8輯 (鈴木達先生追悼号) (昭和48年12月)

弔辞

野又 貞夫

論文

- 志海若古銭の流通史的研究補遺 白山 友正
官僚制の諸問題
—マックス・ヴェーバーの組織分析を手がかりとして— 小笠原英司
ベドフォードの操作主義会計理論
—操作的利益の測定・伝達を中心として— 村上憲一郎

- 総合管理的財務管理論の論理構造—ホワード&アプトンの所論を中心として— 白川 満伸
人口移動の史的時期区分 石原 正令
アジアの経済発展と人口要因 石 南国

第9輯 (昭和49年3月)

論文

- 支配会社株主持分の変更について 桑原 常明
無償取得による固定資産の評価と取得原価主義会計について 野村 清市
前産業社会における日本人口の趨勢 石原 正令
観光みやげ品とその購買行動の研究 大野 和雄

書評

- 大野和雄・長谷政弘共著『現代小売マーケティング』 伊藤森右衛門

第10輯 開学10周年記念号 (昭和50年3月)

- 創立10周年記念によせて 野又 貞夫

論文

- 古代・中世における商品の拡大 白山 友正
明治初年北海道の人口政策 石原 正令
商法の改正に関する疑問 河村 博旨
仏英両国にみられる観光レジャーをめぐる一考察 大野 和雄

地域開発と住民意識－函館圏を中心として－

石 南国

港湾における生産力と生産関係

和泉 雄三

第11輯（村上憲一郎先生追悼号）（昭和51年3月）

村上憲一郎先生を悼む

野又 貞夫

論文

資金計算書に関する一考察

新谷 典彦

重要性の原則について

増尾 久徳

精神的衝撃による損害に対する救済の限界

－Nervous Shockの法理を中心として－ 蘇田三千穂

商法本質論と企業概念

－企業法説上の商法概念抽出に至るまで－

河村 博旨

都市再開発とソーシャル・マーケティング

－函館地域商業近代化計画に関連して－

大野 和雄

あん類製造業の近代化

永野弥三雄

北前船と函館

白山 友正

Population Policies in Various Socialist Countries

Yoshikuni ISHI

研究ノート

無額面株式の問題点－制度導入とその後－

河村 博旨

第12輯（野又貞夫先生追悼号）（昭和52年3月）

故野又貞夫先生の偉業を偲んで

村田 喜一

論文

自己資本充実と不況抵抗力

－自己資本充実論の視点(1)－

白川 満伸

日本的経営に関する一私論－序説的展開－

三根 誠

額面・無額面株式間の相互変更と一律変更

－特に商法213条2項について－

河村 博旨

マーケティング・コンセプトに関する一考察

大野 和雄

経営シミュレーションの定義と検証

佐藤 裕

あん類製造業の近代化（Ⅱ）

－愛知製あん組合の事例－

永野弥三雄

研究ノート

英米不法行為法および日本法における自動車無償（好意）同乗者の地位

蘇田三千穂

紹介

アジア経済研究所編

『世界各国人口年齢構造図集、1950～1970年』

『世界各国人口経済活動図集、1950～1970年』

石 南国

第13輯（昭和53年3月）

論文

人口移動のアメニティ分析

石 南国

贈与剰余金に関する一考察

増尾 久徳

自己資本充実と企業の自主性

－自己資本充実論の視点(2)－

白川 満伸

Vatter資金理論の研究(1)

新谷 典彦

イギリス古典荘園時代の農業構造

石井 晋良

「経営における人間」の研究（その一）

太刀川直孝

翻訳

インフレーション期におけるスチュワードシップ会計

井口 伸

第14輯（昭和54年3月）

論文

日本交通史通論（1）

和泉 雄三

人口Uターンの理論と方法

石 南国

法定地上権の成立範囲について（民法388条と399条の一体性）

蘇田三千穂

17、18世紀のイギリス農業構造の変化とその経済的効果について

石井 晋良

第15輯 第1・2号合併号（昭和55年3月）

論文

価値論とその放逐－マルクスと限界効用学派－

和泉 雄三

函館港湾の緑地計画と景観演出について

大野 和雄

組織のContingency Theoryに関する一考察

－L&Lの所論を中心にして－

三根 誠

企業形態の内的動因－企業形態の基礎的分析(1)－

白川 満伸

銀行行動と融資循環の二重性

外山 茂樹

ケインズ経済学の再解釈と貨幣の二つの機能

外山 茂樹

第16輯 第1号（昭和55年10月）

論文

律令制の成立と陸上交通－日本交通史通論(2)－

和泉 雄三

資本利用に対する報酬と企業観について

- －ストーリーバス学説研究(1)－ 桑原 常明
不均衡動学分析と金融部門 外山 茂樹
- 研究ノート
旅（寺社詣）と土産品の史的研究 大野 和雄

第16輯 第2号（昭和56年3月）

- 論文
組織変革に関する一つの方向 三根 誠
企業形態に関する二つの接近
－企業形態の基礎的分析(2)－ 白川 満伸
相互持株に関する一考察（Ⅱ）
－子会社所有の親会社株式会社を中心として－ 桑原 常明
- 過失法の機能的諸相（一）
－カナダ過失法に関するLinden教授の所論を中心として－ 蘇田三千穂

第17輯 第1号（昭和56年10月）

- 論文
律令制の成立と海上交通－日本交通史通論(3)－ 和泉 雄三
- 過失法の機能的諸相（二）
－カナダ過失法に関するLinden教授の所論を中心として－ 蘇田三千穂
- 研究ノート
ミンスキーのケインズ解釈について 外山 茂樹

第17輯 第2号（昭和57年3月）

- 論文
幕末における松前藩の大坂蔵屋敷をめぐる諸問題
－幕府の蝦夷地再直轄と松前藩の財政経済政策との関わりを中心に－ 榎森 進
- 研究ノート
経済学、常識入門－(その1)－ 荒木 秀弥

第18輯 第1号（昭和57年10月）

- 論文
資金会計理論と財務諸表 新谷 典彦
観光レジャー・マーケティング論
－マーケティング・ミックスの研究－ 大野 和雄
- INTRODUCTION TO THE “LINEAR PROGRAMING”
－OUTLINE OF THE “SIMPLEX METHOD” OF THE “LINEAR PROGRAMING”－ Hideya ARAKI

- 研究ノート
経済学、常識入門－(その2)－ 荒木 秀弥

第18輯 第2号（昭和58年3月）

- 論文
英米不法行為法における救助者の地位 蘇田三千穂
青函トンネルと青函連絡船 和泉 雄三
- 研究ノート
経済学、常識入門－(その3)－ 荒木 秀弥

第19輯 第1号（昭和58年10月）

- 論文
バックスター・インフレーション会計論の一考察 井口 伸
Zepeda v. Zepeda事件の教訓－「英米不法行為法における私生子」・再論－ 蘇田三千穂
資金計算書の諸類型 新谷 典彦
INTRODUCTION TO THE “LINEAR PROGRAMING”
－OUTLINE OF THE “SIMPLEX METHOD” OF THE “LINEAR PROGRAMING”－Part II Hideya ARAKI

- 研究ノート
経済学、常識入門－(その4)－ 荒木 秀弥

第19輯 第2号（昭和59年3月）

- 論文
イギリス純粋荘園の成立と農村社会の再編成 石井 晋良
自己金融の歴史過程 白川 満伸

第20輯 第1号 開学20周年記念号(昭和60年10月)

- 論文
新国際経済秩序の樹立へ向けての域内統合の再編成 案浦 崇
観光レジャー商品のマーチャンダイジング 大野 和雄
- 西欧中世前期の商業と都市
－H.ピレンヌの所論をめぐって－ 石井 晋良
国連貿易開発会議（UNCTAD）の経過と国際金融問題(4) 案浦 崇
人間関係論と行動科学の紹介
－人間主義への試論を中心として－ 太刀川直孝
- 研究ノート
社会福祉と経済(1) 案浦 崇

第20輯 第2号 (昭和61年3月)

論文

- ヨーロッパ中世前期の基本構造－農村と都市－
石井 晋良
- 日本と東アジア、東南アジア、南アジアとの比較優位
構造の変化
案浦 崇

研究ノート

- 社会福祉と経済(2)
案浦 崇

特別寄稿

- どうなる日本の教育
天谷 直弘

第21輯 第1号 (昭和61年10月)

論文

- アーギリスの経営管理思想(1)；P-O理論から行為の
理論へ
小澤 伸光
- The Historic Roots of American Radio : A Case Study
in Political Economy
Ken SCHOOLAND
- The Crisis Caused by Innovation and the Manpower
Policy
Takashi ANNOURA
Hiroshi MOTOYAMA

研究ノート

- The History of Human Investment Theory
Takashi ANNOURA

第21輯 第2号 (昭和62年3月)

論文

- 取替原価会計の解釈可能性について
今井 敏博
- 鎌倉時代の陸上交通－日本交通史通論(4)－
和泉 雄三

第22輯 第1号 (昭和63年10月)

論文

- 「業際マーケティング」への試論と展開について
－「ヘルス・ケア」市場におけるマーケティングの
一側面－
伊島 光男
- 第4世代言語と経営情報教育
桜井 勝朗
- 高齢化社会をめぐるソーシャル・マーケティング
－ソーシャル・マーケティングに関する一試論－
伊島 光男

第22輯 第2号 (平成元年3月)

論文

- 敷金返還請求権と同時履行
永盛 恒男
- 会計情報の多元化の方法とその意義
若松 裕之
- 戦略的情報システムにおける組織的課題
桜井 勝朗

第23輯 第1号 (平成元年10月)

論文

- 資金収支表について
新谷 典彦
- Edwards = Bell(1961)における「実現利益」の算出過程
－簿記記録面からのアプローチ試論－
片山 郁雄
- シンガポールにおける労働移動と人的資源開発政策
案浦 崇

- 人事情報システム：戦略的課題と留意点
小澤 伸光

研究ノート

- 日本とシンガポールとの経済関係の進展
案浦 崇

第23輯 第2号 (平成2年3月)

論文

- THE CASH MANAGEMENT MODEL WITH A
DEGENERATED SIMPLE POLICY AND ITS
APPROXIMATE OPTIMAL POLICY
TETSURO FUCHIE
- EDGARと会計データベースの可能性
若松 裕之
- 函館市・地域経済構造の概観と将来の展望
西村 淳

- わが国のリゾート産業の類型に関する若干の考察
高橋 真

第24輯 第1・2号 (平成3年3月)

論文

- 企業内ネットワークの進展と組織的課題
桜井 勝朗
- 管理行為の一考察
－情報処理と解釈をめぐって－
小澤 伸光
- 資本維持概念について
－期間損益計算上の概念か全体損益計算上の概念か－
今井 敏博
- ベイジアン・ポートフォリオ選択モデルの開発
淵江 哲郎
- 企業文化の分析および評価手法
－その戦略的課題－
高橋 真

第25輯 第1号 (平成3年10月)

論文

- 青函トンネル開通・開業に伴う社会的・経済的波及効果の研究 Part I 大野 和雄
 監督職登用期にある社員層の役割行動分析
 - A社におけるセグメント別実証研究 - 大江田清志
 人口の最適配分と最適との乖離を表す指標について 西村 淳

第25輯 第2号 (平成4年3月)

論文

- 中世の海上交通 - 日本交通史通論(5) - 和泉 雄三
 青函トンネル開通・開業に伴う社会的・経済的波及効果の研究 Part II 大野 和雄
 ヨーロッパ中世都市の形成過程
 - 「北欧型」都市と「南欧型」都市 - 石井 晋良
 50年間の生活時間の変化 - 時間価値の研究(3) - 赤松 潤
 人口の最適配分と財政調整制度 西村 淳
 イギリス絶対王政前期の農民一揆 石井 晋良

第26輯 第1号 (平成4年10月)

論文

- 企業合併の際の企業文化の変容について 高橋 真
 Extended Economic Zones and Economic Self
 - sufficiency in Kiribati Randall Cummings
 A preferred Future for the State of Hawaii ; the Role
 of Agriculture Randall Cummings

第26輯 第2号 (平成5年3月)

論文

- 辺境論 和泉 雄三
 わが国の労働時間に関する一考察 大江田清志
 個別購買力による資本概念について 今井 敏博
 計量経済学的手法の古代尺復元への適用 西村 淳

第27輯 第1号 (平成6年9月)

論文

- 欠陥商品 (製造物責任法) 清水 紘史
 主要5ヵ国における労働時間の比較 大江田清志
 高度成長期塩化ビニール工業の原料転換と産業政策 寺田 隆至

第27輯 第2号 (平成7年3月)

論文

- 不法行為 清水 紘史
 ジェントリーの形成とその経済活動に関する一考察 石井 晋良
 広告表現に関する研究 - 1 - 『意味』の表現とその解釈について 赤松 潤
 函館地区企業の労働時間に関する実証研究 大江田清志
 本支店間の未達取引処理 ; 「帳簿記録追記法」の特徴と問題点 片山 郁雄
 個別資本循環と資本維持概念 今井 敏博

第28輯 第1号 (平成7年9月)

論文

- 近世の陸上交通 - 日本交通史通論(6) - 和泉 雄三
 戦後50年・われわれの消費生活の変化を見る
 - 「家計調査」資料からみた「お金」の遣い方 - 赤松 潤

第28輯 第2号 開学30周年記念号 (平成8年3月)

論文

- 近世の河川・運河 - 日本交通史通論(7) - 和泉 雄三
 樺太経営漁業発達史 (その1) 永野弥三雄
 北檜山町の「むらおこし」事業 (1)
 - 観光マーケティングからの提言 - 大野 和雄
 現金収支計算書と現金創出能力 新谷 典彦
 懲罰的損害賠償論 清水 紘史
 「サービス」についての研究
 - 情報社会への移行と商品・サービス - 赤松 潤
 目標管理と人的資源管理 大江田清志
 預金者の認定に関する一考察 永盛 恒男
 本支店間の未達取引 : 処理の説明方法とその錯綜原因
 - 帳簿記録と財務諸表の両次元からの分析 - 片山 郁雄
 経営事務管理とファシリティ・マネジメント 高橋 真
 人口の移動と地域間分布 - 歴史的な変遷 - 西村 淳
 「オートポイエーシスと会計」試論序説 今井 敏博
 情報化の視点での地方都市(函館市)振興に関する考察 津金 孝行
 ナフサ型総合石油化学工業の成立 寺田 隆至

製品、企業名、生産国に対する知覚マップの必要性について－従来の知覚マップの限界に対する解決策－

世良 耕一

An Overview of the Patent System in Japan

Brian R. Duff, J. D.

第29輯 第1号 (平成8年9月)

論文

北檜山町の「むらおこし」事業 (2)

－観光マーケティングからの提言－ 大野 和雄

近世の海上交通－日本交通史通論(8)－ 和泉 雄三

Introduction to Japan's Legal System

Brian R. Duff, J. D.

第29輯 第2号 (平成9年3月)

論文

JAPAN'S RISE AS A WORLD ECONOMIC POWER

Brian R. Duff, J. D.

内部利益「直接控除法」の再検討 片山 郁雄

伝統的な日本的経営観に関する一考察 大江田清志

第30輯 第1号 (平成9年9月)

論文

『“ブランド・イメージ”の確立』(1) 赤松 潤

海外現地法人における人的資源管理の実態

大江田清志

生物の形態形成方法を基にした分散処理システム

津金 孝行

ポートポイエーシスと会計言語 今井 敏博

U.S.-Japan Alliance in post Cold War Japan

Brian R. Duff, J. D.

Japanese - Style Management in Japan's Modern Economy

Brian R. Duff, J. D.

ロシアと日本：遠くて近い隣国

トリョフビヤツキ A.V

広告論－科学としての逆理のPerspective－

伊島 光男

第30輯 第2号 (平成10年3月)

論文

本支店「合併精算表」の様式に見られる近似性

－異同点の整理・試案－ 片山 郁雄

組織準則とリーダーシップ

－C.I.バーナードの組織理論の側面－ 高橋 真

トップマネジメントの国際比較

－コーポレートガバナンスとの関連において－

高橋 真

前近代日本交通史通論 (総括)

和泉 雄三

第31輯 第1号 (平成10年9月)

論文

商学部におけるプログラミング言語教育に関する考察

津金 孝行

『“ブランド・イメージ”の確立』(2) 赤松 潤

コース・リレイテッド・マーケティングの概念と日本における必要性

－フィランソロピーと併存する「社会貢献を行う際の選択肢」として－ 世良 耕一

伝統的な日本的経営論について 大江田清志

リーダーシップの状況変革機能 高橋 真

取得時効と登記 永盛 恒男

使用者責任における求償権 永盛 恒男

経営の国際化(1) 藤島 暁

第31輯 第2号 (平成11年3月)

論文

経営の国際化(2) 藤島 暁

パッケージング (包装) に関する一考察

－マーケティング・ミックス4P分類成立要件の阻害

要因としての側面からアプローチ－ 世良 耕一

ユーロと欧州同盟の将来像

－通貨統合にかんする制度化と調整の分析(1)－

田部井英夫

研究ノート

Edwards-Bell(1961)における実現利益と実現利益a/c

－勘定設定の有無をめぐる考察・覚書－

片山 郁雄

第32輯 第1号 (平成11年9月)

論文

信託財産と財産管理問題

清水 紘史

マウス操作に関する研究

－操作時間測定ツールの開発と評価－ 津金 孝行

慰藉料請求権の相続について 永盛 恒男

捨てるべきか日本の経営? 藤島 暁

戦略的リーダーシップについての概念的考察(1)

高橋 真

ユーロと欧州同盟の将来像

－通貨統合にかんする制度化と調整の分析(2)－

田部井英夫

研究ノート

内部利益「間接控除法」の意味内容

－説明方法の次元的分析・覚書－

片山 郁雄

経済と社会の調和・多元的経済に向かって 田部井英夫

第32輯 第2号 (平成12年3月)

論文

民法と信義誠実の原則(1)

清水 紘史

契約締結上の過失

清水 紘史

会計の対象についての一考察

今井 敏博

重化学工業化の開始と石油政策の転換

寺田 隆至

1950年代後半の石油政策

寺田 隆至

精神のルネッサンス(1)

－「気概」と「同感」の経営を目指して－

藤島 暁

研究ノート

本支店における帳簿記録と財務諸表作成

－両過程の関係・覚書－

片山 郁雄

第33輯 第1号 (平成12年9月)

論文

民法と信義誠実の原則(2)

清水 紘史

コーズ・リレイテッド・マーケティングに対する新しい視点

世良 耕一

貿易自由化前夜の石油産業と重化学工業

－「相互補完的構造」の動揺－

寺田 隆至

精神のルネッサンス(2)

－「気概」と「同感」の経営を目指して－

藤島 暁

第33輯 第2号 (平成13年3月)

論文

廃棄物と有価物－EC廃棄物指令とドイツ－

清水 紘史

貿易自由化の開始と石油新政策の形成

－石油産業と重化学工業の構造調整政策－

寺田 隆至

手数料完全自由化後のインターネット証券取引の実態

－松井証券のネットストック－

佐藤 元治

欧州統合化と労働市場の調整(1)

－イギリスとフランスの労働市場分析－ 田部井英夫

第34輯 第1号 (平成13年9月)

論文

「ヒト」の採食・道具使用の実態－家計調査年報から－

赤松 潤

コーズ・リレイテッド・マーケティングを通じたブランド構築に関する一考察

－社会貢献による「ブランド拡張」と「ブランドの製品属性の補完」の可能性について－

世良 耕一

リーダーシップ類型の因子構造

－三隅のPM理論を中心に－

高橋 真

経営意思決定とリーダーシップに関する一考察

高橋 真

Le milieu, les métamorphoses et la méthodologie de l'étude du Japon

田部井英夫

第34輯 第2号 (平成14年3月)

論文

バリアフリー社会をめざして

渡辺 英郎

コーズ・リレイテッド・マーケティングを通じた消費者とのマーケティング・コミュニケーションに関する一考察

世良 耕一

日本のビジネスと社会における英語の必要性

Brian R. Duff, J. D.

Contexte et continuité historiques

田部井英夫

“MITI and the Japanese Miracle”

田部井英夫

第35輯 第1号 (平成14年9月)

論文

90年代フランスのマクロ経済政策と雇用・失業問題

田部井英夫

キャッシュ・フロー計算書の作成方法とその構造

新谷 典彦

第35輯 第2号 (平成15年3月)

論文

石油業法と産業組織の変化

寺田 隆至

共同不法行為の成立に関する一考察

永盛 恒男

キャッシュ・フロー計算書の原型(1)

新谷 典彦

第36輯 第1・2合併号 (平成16年3月)

論文

証券アナリスト情報の有用性の阻害要因とその解決

佐藤 元治

キャッシュ・フロー計算書とスケルトン勘定

新谷 典彦

書評

関 周一『中世日朝海域史の研究』

田中 浩司

第37輯 第1号 (平成16年9月)

論文

国際労働力移動に関する理論的省察

－世界システム論アプローチと新古典学派アプローチ－

田部井英夫

国際観光都市のリージョン・マーケティング

－「第2回函館塩ラーメンサミット」における実証分析を中心として－

日野 隆生

フランス移民政策の歴史的展開(1):

同化から排除、そして同化から統合へ

－19世紀前半から第一次オイルショックまで－

田部井英夫

第37輯 第2号 (平成17年3月)

論文

フランス移民政策の歴史的展開(2):移民受け入れ停止から統合化へ－1947年から1993年まで－

田部井英夫

フランス移民政策の歴史的展開(3):社会的統合化から社会的同化へ－1993年から2001年まで－

田部井英夫

標準原価計算の基礎

新谷 典彦

第38輯 第1・2合併号 (平成18年3月)

論文

カテゴリー創造のマーケティング戦略

韓 文熙

バリュー投資vs行動ファイナンス

－投資家の合理性と心理－

佐藤 元治

総人口縮小化における地域経済序論

－函館市を例として－

西村 淳

規制緩和時代と産業政策の再編

寺田 隆至

フランスの若年失業問題と若年雇用政策

－就学人口の動態と入職経路からの考察－

田部井英夫

第39輯 第1・2合併号 (平成19年3月)

論文

公正開示規則の運用と解釈に関する覚書

－レギュレーションFDに係る事例研究を中心にして－

高間佐知子

先発優位性の概念フレームワークと検討課題

韓 文熙

投資家心理と株式市場変動

佐藤 元治

地球環境と世界経済(1)

－経済学的アプローチの限界と可能性－

田部井英夫

資料

Ignacy Sachs著『新たな開発戦略をもとめて－社会開発サミットの焦点－』西川 潤 監訳／田部井英夫訳

第40輯 第1・2合併号 (平成20年3月)

論文

フランスにおける高齢労働者雇用政策の展開

－1950年代半ばから1990年代半ばにかけて－

田部井英夫

日本におけるディスクロージャー研究の動向に関する一考察

佐藤 元治

甘いウーロン茶の市場予測

－ノイズとしての「内なる消費者の声」－

松下 元則

第41輯 第1号 (平成20年9月)

論文

フランスにおける高齢者雇用政策と年金制度改革

－2003年の年金改革を中心として－

田部井英夫

市場参入のタイミングと消費者の認知

－先発優位と後発優位のメカニズム－

韓 文熙

第41輯 第2号 (平成21年3月)

論文

グローバル化と国民経済への対応

－「経済の世界化」へのアプローチ－

田部井英夫

企業価値評価－パナソニックによる三洋電機買収－

佐藤 元治

上海の日式咖喱の誕生

－ハウス食品による潜在需要の発見と事業化－

松下 元則

第42輯 第1号 (平成21年9月)

論文

2009年上半期の日本企業に対するMBO

佐藤 元治

インターネットを通じた消費者グループの形成と流通システムの変化

－ブランド・コミュニティの形成を中心として－

隅田 孝

第42輯 第2号 (平成22年3月)

論文

- フランスの雇用と失業－構造変化と社会的帰結－
田部井英夫
- 模擬育種法を用いた発想支援システムの開発
－対話型による料理名の進化的生成システムに関する基礎的検討－
津金 孝行
- レックス・ホールディングスのMBOにおける諸問題
佐藤 元治
- クチコミが生み出す新たなマーケティング
隅田 孝

第43輯 第1号 (平成22年9月)

論文

- 2008年の日本企業へのMBO
佐藤 元治
- 消費者購買意思決定に関する研究方法の理論的枠組み
－消費者行動研究の基礎理論の再考を中心として－
隅田 孝

第43輯 第2号 (平成23年3月)

論文

- サービス経済化と経済循環・再生産論(上) 寺田 隆至
- 消費者エンパワメントに関する考察
－日本におけるキャロットモブの可能性－
大橋 美幸

中国ビール産業の解説

- －《数量シェア－金額シェア・マトリックス》の適用－
松下 元則
- 日本企業における企業ブランドの機能と役割に関する研究
隅田 孝

第44輯 第1号 (平成23年9月)

論文

- サービス経済化と経済循環・再生産論(中)
寺田 隆至
- ファンドレイジングと寄付文化に関する考察
大橋 美幸
- 日本のMBO研究のサーベイ
－定義、動機、意義、問題点－
佐藤 元治

第44輯 第2号 (平成24年3月)

論文

- サービス経済化と経済循環・再生産論(下)
寺田 隆至
- 実習を通じたNPOマネジメントの学習
大橋 美幸
- 福島第一原発事故前後の函館市における大間原発建設
反対運動－ベックのリスク社会論から－
大橋 美幸
- 在宅医療の情報化に関する考察
津金 孝行

第45輯 第1号 (平成24年9月)

論文

- 「サービス経済化と経済循環・再生産論」(上)(中)(下)
への追補
寺田 隆至
- アクセシブルな観光－介護家族が認知症の人と共に旅行する意味－
大橋 美幸
- グループホーム及び高齢者施設における「高齢者虐待」
に関する調査
－グループホームでの虐待公表を受けて－
大橋 美幸

- 地域ブランド構築と地域ブランド・マーケティングに
関する研究
隅田 孝
- 商圈の違いによる商店街の観光地化ライフサイクルの
相違－大阪市天神橋筋商店街と京都市竜馬通り商店街
を事例に－
中井 郷之

第45輯 第2号 (平成25年3月)

論文

- 資金的損益貸借対照表と会計の職能
今井 敏博
- 再生産論と「貯蓄＝投資」論
寺田 隆至
- アクセシブルな観光 第2報
－「介護家族が認知症の人と共に旅行をする」
支援プログラム－
大橋 美幸
- 若年者雇用及びセーフティネットに関する行政職等の
意識調査
大橋 美幸
- 日本語を履修する中国人学生の道南誘致に関する基礎
調査
－中国江蘇省常州市・常州大学の学生を対象に－
中井 郷之
- 中山間村地域におけるフードツーリズムと地域コミュ
ニティ
－京都市右京区水尾地区を事例に－
中井 郷之

第46輯 第1号（平成25年9月）

論文

- 北海道新幹線及び函館観光に関する市民と観光客の意識調査 大橋 美幸
- 函館観光周遊に関する調査 大橋 美幸
- サービス付き高齢者向け住宅の情報環境の分析 津金 孝行

第46輯 第2号（平成26年3月）

論文

- アクセシブルな観光 第3報
－地元の認知症介護関係者による観光地調査－ 大橋 美幸
- 函館の観光交通に関する調査
－観光ループバス、函館山ロープウェイ及び中国語圏観光客の移動－ 大橋 美幸
- 函館都心商店街の盛衰と商業者の意識調査 中井 郷之

第47輯 第1号（平成26年9月）

論文

- 北海道新幹線開業前の現況、函館市民及び来街者の意識調査 大橋 美幸
- 函館の路面電車に関する調査
－市民及び観光客の利用状況及び評価－ 大橋 美幸
- 消費者意思決定様式(C S I)を用いた消費者購買行動に関する実証的研究
－わが国の大学生消費者の購買行動を通じた事例研究－ 隅田 孝

第47輯 第2号（平成27年3月）

論文

- 事実解明理論と資金的損益貸借対照表論覚書 今井 敏博
- 高齢社会におけるサービスの変化
－観光サービス、葬祭サービス、地元新聞について－ 大橋 美幸
- 閑散期における観光に関する研究
－定期観光バス及び3つのイベントの調査－ 大橋 美幸
- 会計データモデルの管理会計的拡張 若松 裕之

研究所のあゆみ

函館大学では、昭和40年の開学と同時に北海道産業開発研究所が開設された。同研究所は、地域社会と密着した調査研究活動を行っていたが、昭和45年4月に商学および経営学の担当教員の自主的研究組織であった日本経営学会北海道部会函館大学分科会を母胎として経営研究所が新たに設置された。両研究所の所員は重複することも多かったようであるが、2研究所体制が続いていた。しかし、教員の異動が続き、研究所に所属する教員が少なくなっていったこともあって、その活動は、次第に不活発なものとなっていった。そこで、これを活性化するために両研究所を統合し、全教員が所属する函館大学地域総合研究所が平成25年に設置されることとなった。各研究所の主なあゆみは以下のとおりである。

(1) 北海道産業開発研究所

開学時の学則第81条には、「本学附設北海道産業開発研究所は経済商業に関する学術の進歩

を図るためその調査研究を行うと同時に、北海道の産業の振興に必要な実証的研究をなすことを目的とする」とある。研究所の構成員は、時期により規程が変動してはいるが、基本的に希望する専任教員であった。

現在入手可能な資料から明らかな同研究所の主な成果は、下記のものである。この他に講演会、シンポジウム等も開催し、研究会も行っていた。この研究所の成果で特筆すべきものは、研究叢書の発刊であり、後掲のように昭和58年1月の第1巻から第10巻まで発刊された。

研究会が活発に開催された時期もあったが、平成16年以降は開催されていない。上述のように研究所員が希望制であったこと、専任教員の異動が続いたこと、研究所員の関心が一致せずテーマが共有できなかったこと、委託研究についても研究所員の専門性が適合しなかったことなどが活動が停滞していった原因である。

①紀要 昭和42年と昭和45年に紀要が発刊されている。

創刊号（昭和42年3月）

特集 函館市の経済発展と産業構造 —特に第3次産業を中心として—

前篇 史的概観と人口問題

発刊の辞

野又 貞夫

序文

白山 友正

後幕領時代箱館奉行の箱館を中心とした開拓政策

白山 友正

函館市における人口の史的概観

石原 正令

函館市の人口構造と労働人口

石 南国

函館市の労働力の就業構造

小荊米清弘

第2・3号（昭和45年3月）

特集 函館市の経済発展と産業構造

後編 函館市における中小企業の諸問題

戦後函館市における中小企業の趨勢

函館市における人口移勢と中小企業労働者の就業構造

函館市における下請中小企業の諸問題

函館市における中小企業の意識行動

中井竹山の蝦夷開業論

白山 友正

石 南国

小苅米清弘

佐藤 裕

久保田恭平

②委託研究

- ・ 函館商工会議所より委託（昭和44年10月）

広域経済圏のもつ経済的社会的効果

—函館市と亀田町との合併問題を中心として—

- ・ 函館市より委託（昭和47年11月）

函館市と亀田町との合併問題に関する市民意識

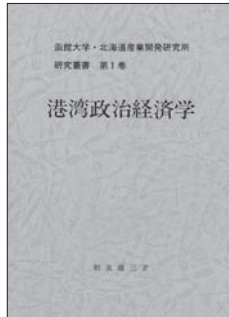
- ・ 函館市より委託（昭和49年7月）

函館圏総合開発計画についての住民意識調査に関する報告書

- ・ 函館圏行政連絡協議会より委託（昭和50年9月）

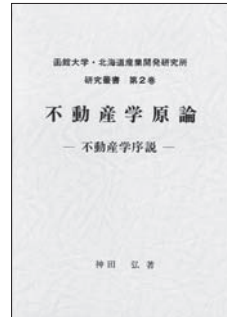
「新函館圏総合計画」についての世論調査

函館大学・北海道産業開発研究所が発行した第1巻から第10巻までの研究叢書を以下に記す。
これらの書籍は大学図書館で所蔵している。



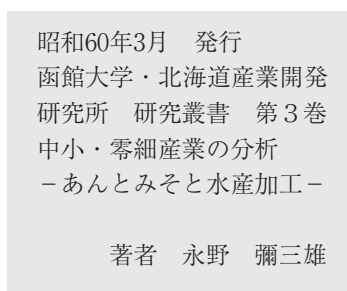
昭和58年1月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第1巻
港湾政治経済学

著者 和泉 雄三



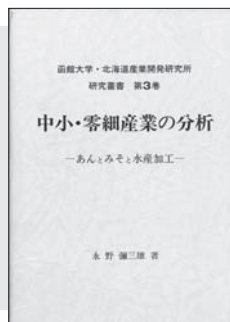
昭和59年3月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第2巻
不動産学原論
－不動産学序説－

著者 神田 弘



昭和60年3月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第3巻
中小・零細産業の分析
－あんとみそと水産加工－

著者 永野 彌三雄



昭和61年3月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第4巻
現代観光マーケティング論

著者 大野 和雄

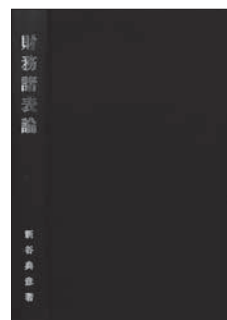


大野 和雄 著



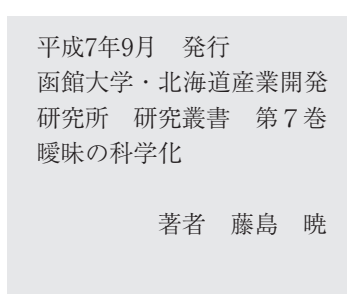
平成元年9月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第5巻
商法と株主総会無用論

著者 河村 博旨



平成4年12月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第6巻
財務諸表論

著者 新谷 典彦



平成7年9月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第7巻
曖昧の科学化

著者 藤島 暁



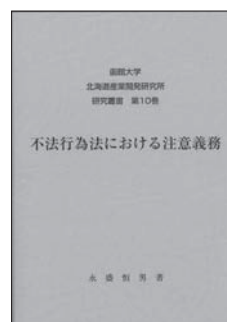
平成9年3月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第8巻
日本交通史通論

著者 和泉 雄三



平成11年3月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第9巻
日本の経営の進化と国際化

著者 大江田 清志



平成11年10月 発行
函館大学・北海道産業開発
研究所 研究叢書 第10巻
不法行為法における注意義務

著者 永盛 恒男

(2) 経営研究所

経営研究所の目的は、その規程の第2条に「企業経営に関する科学研究を促進し、その研究成果を総合して、学術および産業社会の発展に貢献すること」とされていた。その研究員は、この「目的に賛同する本学専任教員」であった。

この研究所は、昭和53年から昭和59年まで研究紀要を発刊しており、昭和50年代までは研究報告会を頻繁に開催していた。また、この研究所が中心となって学会を開催していた。しかし、専任教員の異動、2つの研究所の研究員を兼務することの負担などから研究員の退会が続き、この研究所も活動が停滞していった。

① 紀 要

第1輯（昭和53年3月）

発行の辞	佐藤 裕
論文	
経営シミュレーションにおける時系列データの統計的検定について	佐藤 裕
中小・零細製造業の工場共同化事業について	永野弥三雄
大規模小売店舗の地方進出と地方商業との調整に関する一考察	大野 和雄
「日本的経営」の編成原理の探求－その一－	三根 誠
機関投資家と支配的権力の集中について	白川 満伸
英文広告と英語	高月 晋
企業法説に関する疑問	河村 博旨
リニヤ・プログラミングと価格政策についての一考察	黒坂 正次
相互持株に関する一考察（1）－子会社所有の親会社株式を中心として－	桑原 常明
イギリスにおけるインフレーション会計の制度化	井口 伸
減債基金会計	新谷 典彦
イギリスの小土地所有者の消滅について－A.H.ジョンソン氏の見解を中心に－	石井 晋良

第2輯（昭和54年3月）

論文	
経営シミュレーションにおける行動変数について（1）	佐藤 裕
函館の水産食料品製造業	永野弥三雄
北海道における観光事業に関する研究	大野 和雄

第3輯（昭和55年12月）

論文

- 社会福祉法人と複式簿記－特に純財産・固定資産に関する記帳を中心として－
黒坂 正次
- 大正末期における函館の都市像と将来計画
永野弥三雄
- ヘブライ大学教授モルデハイ・アビール博士の講演「中東の石油とソ連」
高月 晋
- 石油輸出国機構（OPEC）の原油値上げの推移および世界の動向
高月 晋

第4・5合併輯（昭和58年2月）

論文

- 地場産業の振興に関する一考察－新しい地域経済確立へのアプローチ－
大野 和雄
- 函館の製造業（その一）－中核的企業の経営実態－
永野弥三雄
- 財政状態変動表－Loyd. C. Heathの所論を中心として－
新谷 典彦
- 地域社会と郵便貯金
外山 茂樹

第6輯（昭和59年7月）

佐藤裕教授・神田弘教授退職記念号

退職記念号によせて
永野弥三雄

論文

- フランチャイズ・ビジネスの性格と問題点－ホテル・チェーン・ビジネスの研究－
大野 和雄
- 函館の製造業（その二）
永野弥三雄
- 臨調答申と郵便貯金
外山 茂樹

特別寄稿

- 成熟社会における企業成長のディレクション
村田 昭治
- 低成長時代・成熟社会にみられる消費者行動
田内 幸一

書評

- 函館大学教授大野和雄著新刊書
「新しい都市づくりの知恵－好きです函館－」を読み終えて
志村 弘雄

(3) 函館大学地域総合研究所

北海道産業開発研究所、経営研究所の活動の停滞を打開するべく、平成25年に函館大学地域総合研究所が設置されることとなった。その運営規程によれば、この研究所の目的は、「函館大

学の科学研究を促進し、その研究成果を総合して、学術および産業社会の発展に貢献すること」とされ、本学専任教員が自動的に研究員となることとされた。

現在の活動は、以下のとおりである。

①研究プロジェクト**I 新幹線と函館観光部会**

科研費基盤研究（C）に採択された。

テーマは「北海道新幹線開業前後の沿線自治体及び事業者の動向－新幹線効果の事例分析－」である。

II 地域経営部会

前年度からの成果を北海道都市地域学会へ投稿した共同論文が刊行された。

共同論文の題名は、「函館における商業統計と潜在意識に関する調査研究－他地域での就労歴の有無の違いを中心に－」である。

III モラルサイエンスと経済学研究部会**②委託研究**

平成26年に「函館アリーナに関する市民アンケート」について函館市体育館を管理運営する財団法人函館市文化・スポーツ振興財団から委託を受け、報告書を作成した。

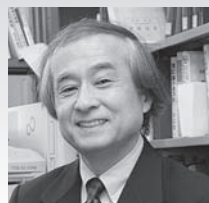
③連続講演会

商学実習と連動しながら連続講座「北海道新幹線を知ろう！」を開催した。

▶ 歴代研究所所長一覧

	北海道 産業開発 研究所	経営研究所	函館大学 地域総合 研究所		北海道 産業開発 研究所	経営研究所	函館大学 地域総合 研究所
昭和40	野又 貞夫	—	—	平成3	河村 博旨	外山 茂樹	—
41	野又 貞夫	—	—	4	河村 博旨	委嘱せず	—
42	白山 友正	—	—	5	河村 博旨	大野 和雄	—
43	白山 友正	—	—	6	河村 博旨	大野 和雄	—
44	白山 友正	—	—	7	河村 博旨	大野 和雄	—
45	白山 友正	神田 弘	—	8	河村 博旨	大野 和雄	—
46	石 南国	神田 弘	—	9	河村 博旨	大野 和雄	—
47	石 南国	佐藤 裕	—	10	石井 晋良	委嘱せず	—
48	石 南国	佐藤 裕	—	11	石井 晋良	委嘱せず	—
49	石 南国	佐藤 裕	—	12	石井 晋良	委嘱せず	—
50	石 南国	佐藤 裕	—	13	石井 晋良	委嘱せず	—
51	石 南国	佐藤 裕	—	14	河村 博旨	河村 博旨	—
52	石 南国	佐藤 裕	—	15	河村 博旨	河村 博旨	—
53	大野 和雄	佐藤 裕	—	16	新谷 典彦	委嘱せず	—
54	大野 和雄	佐藤 裕	—	17	委嘱せず	委嘱せず	—
55	和泉 雄三	佐藤 裕	—	18	委嘱せず	委嘱せず	—
56	和泉 雄三	黒坂 正次	—	19	新谷 典彦	溝田 春夫	—
57	和泉 雄三	永野彌三雄	—	20	委嘱せず	委嘱せず	—
58	和泉 雄三	永野彌三雄	—	21	委嘱せず	委嘱せず	—
59	河村 博旨	永野彌三雄	—	22	委嘱せず	委嘱せず	—
60	河村 博旨	永野彌三雄	—	23	委嘱せず	委嘱せず	—
61	河村 博旨	永野彌三雄	—	24	委嘱せず	委嘱せず	—
62	河村 博旨	外山 茂樹	—	25	—	—	若松 裕之
63	河村 博旨	外山 茂樹	—	26	—	—	若松 裕之
平成元	河村 博旨	外山 茂樹	—	27	—	—	若松 裕之
2	河村 博旨	外山 茂樹	—				

教員の研究活動



教授 片山 郁夫

1. 研究テーマとその概要

大学水準の簿記テキストにみられる説明方法の理論的問題点の検討およびその改善策の提案:とくに焦点を合わせているのは、「本支店独立会計制度」における簿記処理である。具体的には、わが国のテキストの説明方法を時系列的に考察・検討するとともに、外国文献のそれらと比較する手法を採用している。

2. 研究成果等

- (1)「内部利益控除の説明方法－「分析枠組」に基づく検討－」.『産業経理』第68巻・第4号(2009年1月). pp.42-51.
- (2)「本支店会計(簿記 個別問題計算演習)」.『税経セミナー』Vol.53/No.2/792(2008年1月臨時増刊. 税務経理協会). pp.246-266.
- (3)「本店仕入a/cの処理とその説明方法－本支店独立簿記・会計の観点から－」.『産業経理』第66巻・第2号(2006年7月). pp.37-44.
- (4)「本支店財務諸表合併過程の説明方法－帳簿記録との関係を中心にして－」.『産業経理』第60巻・第3号(2000年10月). pp.21-31.
- (5)「簿記テキストにおける本支店会計の説明方法－説明対象と説明手段－」.『会計』第154巻・第5号(1998年11月). pp.49-61.

3. 所属学会

日本会計研究学会、日本簿記学会、日本会計史学会



教授 若松 裕之

1. 研究テーマとその概要

会計情報システムの構造に関する研究

アドホックな利用にも耐えうる情報システムとなるよう会計を定式化することを目標として、データ収集から利用までを検討する。

2. 研究成果等

「EDGARと会計データベースの可能性」『函大商学論究』第23輯2号(1990).
「情報処理環境の変化と会計情報システム」中央大学経済研究所編『環境の変化と会計情報』中央大学出版部(1994).
「情報の多元化と会計アルゴリズム」原田富士雄先生還暦記念論文集刊行委員会編『動的社会と会計学』中央経済社(1995).
「会計理論の公理的展開と会計システム」合崎堅二監修『黒澤会計学研究』中央経済社(1999).
「ネットワーク会計の規格化」中央大学経済学研究会『経済学論纂』第42巻5号(2002).

3. 所属学会

日本会計研究学会



教授 永 盛 恒 男

1. 研究テーマとその概要

「共同不法行為の成立要件について」
 複数人の加害者が共同して責任を負わされる、
 一般的には客観的共同で足りるとされているが、
 所管の共同が必要ではないかとの考察。

2. 研究成果等

共同不法行為の成立に関する一考察（函大商
 学論究 第35輯第2号）

慰謝料請求権の相続について（函大商学論究
 第32輯第1号）

3. 所属学会

私法学会、法文化学会



教授 今 井 敏 博

1. 研究テーマとその概要

損益計算論、資本概念論

2. 研究成果等

『評価基準選択のための規準としての数値の
 同質性を巡って』

中央大学大学院研究年報 第14号Ⅱ経済学・
 商学研究科編

『対象としての会計』 税経通信 55巻6号

『資金的損益貸借対照表への一步』 商学論纂
 第54巻第6号

3. 所属学会

日本会計研究学会、日本簿記学会



教授 田 中 浩 司

1. 研究テーマとその概要

A.日本中世の貨幣・金融史の研究。B.室町・
 戦国時代の幕府・寺社などの領主財政史。C.儀
 礼・贈答・祈祷を通じてみた幕府と寺社・公家
 との関係史。

2. 研究成果等

Aの観点からの業績としては、①「十六世紀
 前期の京都真珠庵の帳簿史料からみた金の流通
 と機能」（峰岸純夫編『日本中世史の再発見』所
 収〈吉川弘文館、2003年5月〉303～323ページ）、
 ②「一六世紀後期の大徳寺の帳簿史料からみた
 金・銀・米・銭の流通と機能」（『国立歴史民俗
 博物館研究報告』第113集〈国立歴史民俗博物館、
 2004年3月〉193～210ページ）、③「十六世紀の
 京都大徳寺をめぐる貨幣について」（竹貫元勝博
 士還暦記念論文集刊行会編『禅とその周辺学の
 研究』所収〈永田文昌堂、2005年1月〉663～678
 ページ）、④「貨幣流通からみた一六世紀の京
 都」（鈴木公雄編『貨幣の地域史』所収〈岩波書
 店、2007年11月〉83～124ページ）、⑤「中世後
 期の「財産」とたからもの」（小野正敏ほか編
 『中世人のたからもの』所収〈高志書院、2011年
 7月〉55～78ページ）、⑥「中世後期の貸借・質
 物と富」（井原今朝男編『生活と文化の歴史学3
 富裕と貧困』所収〈竹林舎、2013年5月〉245

～272ページ）がある。

Bの観点からの業績としては、⑦「戦国期寺院領主経済の一齣－天龍寺の「納下帳」の分析を中心に－」（中央大学大学院論究編集委員会『中央大学大学院論究 文学研究科篇』第22号〈1990年3月〉1～18ページ）、⑧「室町後期五山禅僧の経済活動について」（中央史学会『中央史学』第15号〈1992年3月〉47～64ページ）、⑨「年中行事からみた室町幕府の経済について－十五世紀後半以降を中心に－」（中央史学会『中央史学』第21号〈1998年3月〉72～94ページ）などがある。

Cの観点からの業績としては、⑩「中世後期における「礼銭」「礼物」の授受について－室町幕府・別奉行・東寺五方などをめぐって－」（中央大学経済学研究会『経済学論纂』第35巻4号〈1994年12月〉107～132ページ）、⑪「寺社と室町初期政権の関係について－祈祷(命令)を中心に、北朝との関連を視野にいれつつ－」（今谷明・高埜利彦編『中近世の宗教と国家』所収〈岩田書院、1998年6月〉29～84ページ）、⑫「儀礼からみた中世後期の領主経済の構造と消費」（桜井英治編『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集〈国立歴史民俗博物館、2002年2月〉59～86ページ）などがある。

3. 所属学会

史学会、日本史研究会、歴史学会、社会経済史学会、日本古文書学会、大阪歴史学会、戦国史研究会、中央史学会など



教授 寺田 隆 至

1. 研究テーマとその概要

「産業構造と経済産業政策の課題に関する理論的・歴史的研究」

グローバル化の中での産業構造と経済産業政策の課題について、「サービス経済化」、地域間の経済的格差、地域産業振興策などの問題を中心に、理論的・歴史的な研究を行っている。

2. 研究成果等

『経済循環と「サービス経済」の理論－批判的国民所得論の展開－』（八朔社）

「ポーターの産業クラスター政策と経済産業省の「産業クラスター計画」」（『経営研究』第59巻第4号）

「「規制緩和論」と産業政策史研究」（『行財政研究』第29号）

3. 所属学会

政治経済学・経済史学会、経済理論学会、産業学会、経営史学会など



教授 高 月 晋

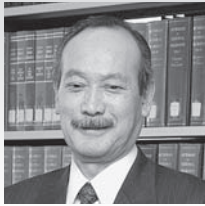
1. 研究テーマとその概要

「口語表現の研究」

「公的英語試験レベル毎の難易度研究」

2. 研究成果等

既刊「英検辞典」の改訂・補充に取り組む



教授 石井 晋良

1. 研究テーマとその概要

ヨーロッパの中世都市の比較研究

仏・独・英・その他の国々の中世都市の特色
と機能の究明

2. 研究成果等

西欧中世前期の商業と都市 H.ピレンヌの所論
をめぐって（函大商学論究 第20輯第1号）
ヨーロッパ中世都市の形成過程 —「北欧
型」都市と「南欧型」都市—
（函大商学論究 第25輯第2号）

3. 所属学会

史学会



教授 田部井 英夫

1. 研究テーマとその概要

グローバル化の下での国内労働市場の変容に
ついて —フランスの事例を中心に—

「グローバル化」と人口構成の変化にともなう
欧州諸国における社会的フレームの変容につい
て、とりわけ労働市場の変容に関する研究に従
事。具体的には、フランスにおける高齢者雇用

及び若年者雇用の問題の最新動向分析を当面の
課題としている。並行して、「グローバル化」に
ともなう移民問題等に関しても取り組んでいる。

2. 研究成果等

- ・「戦後フランスの雇用政策」、『日仏経営学会
誌』第18号、日仏経営学会、59-84頁、2001
年5月
- ・「フランスにおける高齢労働者雇用政策の展
開—1950年代半ばから1990年代半ばにかけて
—」、『函大商学論究』第40輯第1号、函館大学
商学部、1-42頁、2008年3月
- ・「フランスにおける若年雇用と若年失業の最
新動向—1995年以降の動向—」、『経済学論
叢』（中央大学）、第51巻第1・2合併号、中央
大学経済学研究会、105-126頁、2011年3月

3. 所属学会

日仏経営学会、日仏経済学会、北海道経済学会



教授 小林 裕幸

1. 研究テーマとその概要

「人間関係におけるコミュニケーション」

時代のリーダー、地域のリーダー、組織の中
のリーダーシップはいかにあるべきかを考察。

また、地域振興におけるリーダーシップやコ
ミュニケーションの必要性の考察。

2. 研究成果等

「函館をめぐる人物史・19世紀人の光と影」

2002.9 函館大学出版会



教授 藤 川 隆

1. 研究テーマとその概要

「学校教育における言語力の育成に関する研究」
 学校教育において育成すべき言語力を明らかにするとともに、言語力を高めるための指導法の在り方について研究している。



准教授 松 喜美夫

1. 研究テーマとその概要

2. 研究成果等

- ・ 2014.10
 第2回U-22東アジア選手権大会（香港）
 監督 第2位
- ・ 2015.5
 北海道学生1部リーグ優勝57期連続優勝
 監督 通算67回 283連勝
- ・ 2015.7
 ユニバーシアード光州大会ハンドボール男子
 チームリーダー

3. 所属学会等

日本体育学会
 (公)日本ハンドボール協会評議員
 北海道学生ハンドボール連盟理事長
 北海道ハンドボール協会副理事長



准教授 三 浦 俊 和

1. 研究テーマとその概要

- ・ 陸上競技における投運動に関する研究
- ・ 陸上競技の投擲選手における投擲技術、記録に關しての調査研究
- ・ 投擲選手の試合中の投擲意識について

2. 研究成果等

- ・ 正確投と投距離との関係
 – ソフトボールとハンドボールの場合 –
 (函館大学論究 第18輯 (共著))
- ・ 砲丸投げの基礎技術について
 (函館大学論究 第19輯)
- ・ 北海道高校陸上の大会成績
 – 全道大会における道南選手の競技成績 –
 (函館大学論究 第38輯)
- ・ 北海道高校陸上の大会成績
 – 全道陸上競技大会における道南女子選手の競技成績について –
 (函館大学論究 第39輯)

3. 所属学会

日本体育学会、北海道体育学会



准教授 西村 淳

1. 研究テーマとその概要

1. 最適都市規模
2. 古墳の築造規格と使用尺度

2. 研究成果等

- ・人口の最適配分と最適との乖離を表す指標について

函大商学論究 25(1) 1991年

- ・人口の最適配分と財政調整制度

函大商学論究 25(2) 1992年

- ・総人口縮小化による地域経済序論－函館市を例として－

函大商学論究 38(1&2) 2006年

- ・畿内大型前方後円墳の築造企画と尺度

考古学雑誌 73(1) 1987年

- ・古墳の築造規格と使用尺度について

考古学ジャーナル 644 2013年7月

3. 所属学会

理論・計量経済学会、日本計量史学会、日本情報考古学会



准教授 坂野 学

1. 研究テーマとその概要

中国の社会と文化を文学を通して分析することをテーマとしている。とくに、伝統文化が近

代化・現代化のなかでどのように維持されるのか、あるいはどのように変容していくのかということを考察の主眼としている。

2. 研究成果等

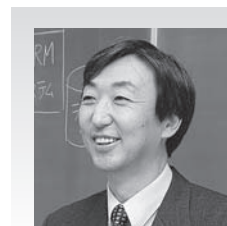
「曹禺『王昭君』小考－創作エピソードをめぐって」（函大論究第45輯）

「微型小説『請站著認錯』について」（同第43輯）

「肖克凡『賭者』の虚構をめぐって」（同第41輯）など

3. 所属学会

日本中国学会、東方学会、東北中国学会



准教授 津金 孝行

1. 研究テーマとその概要

①「遠方監視制御システムの一般家庭への適用に関する研究」

従来企業向けとして導入されていた遠方監視制御システムの技術は、コンピュータやネットワークの高性能化と低価格化が進み、一般家庭でも利用可能となり普及しつつある。本研究では同システム技術の普及が社会に与える影響について研究を進めている。

②「北海道新幹線開業前後の沿線自治体及び事業者の動向－新幹線効果の事例分析」（JPSP科研費26360072）（共同研究）

主に、沿線自治体の動向分析を担当。

③「観光のモデル化による観光設計に関する研究」

観光を情報システムと捉えたモデル化を行い、そのモデルを基にした観光サービスの設計方法の開発を行う。

2. 研究成果等

論文

「在宅医療の情報化に関する考察」函大商学論究 第44輯第2号, pp.155-180 (2012).

「サービス付き高齢者向け住宅の情報環境の分析」函大商学論究 第46輯第1号, pp.67-100 (2013).
著書

『文科系のための情報科学入門』高文堂出版 (1997).

3. 所属学会

経営情報学会、日本生体医工学会、ライフサポート学会、計測自動制御学会



准教授 山田 康夫

1. 研究テーマとその概要

主に文学と社会の関係について研究しているが、同時に作家論、作品論も行っている。

2. 研究成果等

- ・ Tristram Shandy: Quest for Eternity 青山学院大学文学部紀要 第三十二号 1991/1
- ・ Animal Farm: イデオロギーの限界 武蔵野女子大学紀要 Vol.28 1993/3
- ・ ガリバーの憂鬱 函館大学論究29号 1998/3

3. 所属学会

日本英文学会



准教授 大橋 美幸

1. 研究テーマとその概要

道南で社会調査に基づいて市民参加のまちづくりに取り組んでいる。現在は北海道新幹線開業や福祉コミュニティエリア構想に関する調査等を行っている。

2. 研究成果等

「超高齢社会における地方都市の街づくり」(老年社会科学36-6)、「消費者市民社会に関する研究ー持続可能な消費に向けて」(函館大学出版会)、「函館学ブックレット 超高齢社会における商店街ー中島れんばい調査から」(キャンパス・コンソーシアム函館)

3. 所属学会

日本建築学会、日本社会福祉学会



准教授 佐藤 元治

1. 研究テーマとその概要

M&A、MBO (management buy-out) の研究。日本のM&Aの歴史、特徴、問題点などを研究する。この研究は、企業の効率経営や資本市場の活性化にも貢献すると考えられる。

2. 研究成果等

「日本におけるディスクロージャー研究の動向に関する一考察」函大商学論究第40輯第1号。

「日本のMBO研究のサーベイー定義、動機、意義、問題点ー」函大商学論究第44輯第1号など。

3. 所属学会

日本経営分析学会、日本ファイナンス学会、
日本ディスクロージャー研究学会



准教授 壁谷 一 広

1. 研究テーマとその概要

- ・EFL環境における効果的な英語教育および英語学習法
- ・高等教育における成果につながる学習支援の在り方

2. 研究成果等

- ・『学士力を支える学習支援の方法論』共著、2012年12月、ナカニシヤ出版
谷川裕稔、長尾佳代子、壁谷一広、中園篤典、堤裕之
第4章の編集、日本の学習支援関連学会に関するコラム（P61-P63）の執筆、および用語集（P291-P330）の分担執筆を担当した。
- ・「短期大学における初年次教育の現状と課題（英語系学科の取り組みを中心に）」単著、2013年3月リメディアル教育研究 第8巻第1号 P162-P171、日本リメディアル教育学会。
- ・『ピアチューター・トレーニング 学生による学生の支援へ』共著、2014年3月、ナカニシヤ出版
谷川裕稔、石毛弓、津嘉山淳子、山里絹子、長尾佳代子、下坂剛、壁谷一広

日本の大学においてピアチューターの養成に必要なトレーニング方法を17章でまとめたものである。その内のスタディスキルに関する9章および10章（P57-P78）を執筆した。

3. 所属学会

大学英語教育学会
全国英語教育学会（平成22年～25年：査読員）
東北英語教育学会（平成13年～現在：福島支部理事・査読員）
日本児童英語教育学会
日本リメディアル教育学会（平成18年～23年：理事・東北支部長、平成18年～現在：査読員）
短期大学英語教育研究会（平成17年～現在：運営委員）



専任講師 井上 祐 輔

1. 研究テーマとその概要

・「新制度派組織論に基づく制度の創造と普及の研究」

従来の新制度派組織論においては、行為者が実践の中で読み解く実存的な虚構であるはずの「制度」を観察者の側から実体視し、行為者の実践から独立した制度を分析してきた。しかし、観察者が制度を実体視することで、制度の外部が仮構され、その結果、制度の内在的变化を説明困難にしてきた。この問題を解決するために、実践の中で行為者が読み解く「制度」を実存的虚構と捉え、行為者が実践の中で「制度のキャリアー（概念・モノ・行為）」を用いながら制度

を読み解くプロセスとして、制度の創造と普及を分析することを試みている

2. 研究成果等

- ・「制度化された新制度派組織論」『日本情報経営学会誌』第31巻3号、81-93頁、(単著).
- ・「テキストマイニングに関する方法論的検討-クチコミ情報に基づくイノベーションの普及分析」『日本情報経営学会誌』第35巻1号、59-71頁、(共著).
- ・「テキストマイニングを用いたイノベーションの普及分析」『日本情報経営学会誌』第35巻1号、72-86頁 (共著).

3. 所属学会

組織学会、日本情報経営学会、企業家研究フォーラム、文化経済学会<日本>



専任講師 角 田 美知江

1. 研究テーマとその概要

- ・健康行動と消費者行動
(特定保健用食品市場での分析)
健康行動を「ライフスタイルと価値観」という立場から捉え、ライフスタイルの違いによって消費者を分類した結果、特定保健用食品に関する消費者購買行動の違いがあるか等について考察した。
- ・消費者購買行動とマーケティング戦略
(市場参入順位を事例にした考察)
消費者行動をベースに、市場参入の時間的順位による優位性と消費者に知覚された先発ブ

ンドの優位性との差異について考察した。

- ・類似性とカテゴリー化

(消費者購買意思決定への応用)

消費者は、既存品との類似性に新しい属性を付加したことにより、新しいカテゴリーを創造する可能性がある。そこに、売り手側が設定した製品カテゴリーとの差異が生まれる可能性もある。これが、イノベーションとして新たな市場を創造する可能性があることを仮定し考察した。

2. 研究成果等

「消費者行動から見た先発ブランド優位性についての研究」2011年9月

生活経済学研究 第34巻

「市場参入におけるマーケティング戦略の一考察」2010年3月

北海学園大学経営論集 第7巻 第4号

「特定保健用食品の消費者購買行動(分析)」

2009年3月

北海学園大学大学院経営学研究科研究論集 第7号

3. 所属学会

日本商業学会、日本経営学会、日本生活経済学会、日本経営システム学会、日本情報経営学会

国際交流のあゆみ



1. 姉妹校提携のあゆみ

〔アメリカ〕

本学の海外大学との姉妹校提携は昭和58年、ハワイ・ロア大学との契約から始まったが、その経緯と意義については『函館大学創立二十周年記念誌』に詳しく記載されている。

創立20周年を迎えた昭和60年から、本学からの初の交換留学生が派遣され、その後も順調に交流が続いた。平成4年、ハワイ・ロア大学がハワイ・パシフィック大学と合併したため、本学はロア大学との提携協約をパシフィック大学との間で継続していくことになった。

〔オーストラリア〕

平成6年、函館市とオーストラリアの姉妹都市レークマコーリー市との間で行われているスポーツ交流のために来函した剣道チームが、本学宮崎正孝教授に指導を受け、大変感激するということがあった。その時、同行したニューカッスル大学の2名の評議員と河村博旨学長との間に懇談がもたれ、姉妹校の話が提起された。それを受けて、同年12月に行われたオーストラリアでの海外研修旅行に委員長高橋真助教授、田中弘樹コーディネーター、大山総務課長の3名が同行し、同大学を表敬訪問するとともに、契約実現に向けての話し合いがなされた。翌7年7月にはニューカッスル大学側から本学に対して姉妹校提携書類が届いた。本学側は12月に河村学長、藤嶋暁国際交流委員長、田中弘樹コーディネーター、石崎福邦事務局長の4名が表敬訪問し、学長のホームズ氏、副学長のグラ

ハム氏、交換留学生コーディネーター、日本語講師、ジョン・ペシャー理事などの歓迎を受けた。具体的プログラム等の話し合いは継続され、平成8年2月に姉妹校提携が結ばれた。これを機に同国バララット大学（現フェデレーション大学）との提携の話も寄せられ、平成9年5月に同校と姉妹校提携がまとまり、本学学生の留学先が広がっていった。

〔イギリス〕

オーストラリアの2校との提携が、先方からの求めを契機としていたのに対して、平成13年に結ぶことになる英国の3校との間の提携は、むしろ本学側が積極的に行動したという違いがある。本学側としては同年4月から専攻塾制度がはじまり、国際英文秘書専攻塾が設けられることになっていた。そのため、英語の母国である英国の大学との提携の必要性が高まっていた。平成12年10月、新規姉妹校提携先を開拓するために、高橋真国際交流委員長と田中弘樹コーディネーターの2名が英国に赴いた。姉妹校提携の可能性を打診するため、チ・チェスター大学（平成13年11月26日締結）、ウォルバー・ハンプトン大学（平成13年11月22日締結）、バース・スパ大学（平成13年11月27日締結）の3校を訪れたが、3校みな賛意を表し、11月には3校ともに提携を結ぶこととなった。

〔中国〕

中国の大学との提携については、英語圏の各大学との経緯とはかなり異なった事情が契機となった。そもそも本学は英語教育には力を注いでいたが、ドイツ語、フランス語、中国語の授

業は第二外国語科目として4単位しか設けられていなかった。中国語圏の学校と提携して教学を強化しようという発想は希薄であったといっている。

提携構想は、函館市が函館―天津間の国際定期航空路実現のため、天津市との交流を深めていくなかで出てきたものである。チャーター便の往復によって実績をあげるために、様々な分野での交流活動が進められていたが、両市が姉妹都市提携を結ぶ段階になって、航空路実現促進組織から本学に南開大学と交流をもたないかとの誘いがあった。促進組織は当初、南開大学との交流の相手校としては国公立大学を想定していたようだが、国公立大学は外国の大学と提携するのが容易ではなかったため、私立である本学に話が向けられたようである。本学は、市の交流活動に協力するために、平成13年6月に実施された函館市の天津訪問団に高橋真国際交流委員長と坂野学コーディネーターが同行し、南開大学を訪れて、王文俊副学長と交流について懇談をもった。懇談の席で、副学長から姉妹校提携による学術と学生の交流という話が出された。学術交流は可能だが、留学生の交換は難しいと応答したところ、それでは3年制専科の卒業生を函館大学に派遣するので、不足分の単位を修得させて、4年制大学の卒業生として学士を授与してもらえないか、との提案があった。この提案を持ち帰り、急遽本学で編入による受け入れの具体的問題解決の検討が行われることになった。同年10月18日、チャーター便による函館・天津両市訪問団の相互交流が実施された際に、河村博旨学長と坂野学コーディネーターが同行して天津に赴き、18日に両市が「友好交

流都市」提携を結んだ後、19日南開大学において「教員および学生交流協定書」が締結された。なお、編入学生として受け入れるに際して生じる諸問題については、別に同年12月に「付属覚書書」を交わし、翌14年12月に南開大学職業技術学院の卒業生2名を編入学生として受け入れた。

その後、平成16年、南開大学職業技術学院は中国国内で促進された大学組織の改編の中で、3年制専科が切り離されて、国立南開大学学長が理事長を担う4年制の総合大学私立南開大学浜海学院として新たに創設されることになった。同年秋の市訪問団に坂野学コーディネーターが同行して、新設の南開大学浜海学院を訪問。初代院長に就任した王文俊先生に両校の間に深い交流を築くことを提案し、強い賛同を得た。翌17年3月、小笠原愈学長と坂野学コーディネーターが南開大学浜海学院を表敬訪問し、両校間に姉妹校交流提携が結ばれた。その5月には王文俊院長を主とする3名の学院関係者が本学を訪問し、教員交流の実施を強く要望した。それを受けて11月には「教員交換に関する覚書」を締結し、互いに半年の期限で教員を交流させることになった。そして翌18年4月には浜海学院から石秀梅先生が本学に派遣され、その9月には本学から坂野准教授が浜海学院に派遣された。19年9月にさらに宋京津先生が派遣されたが、この年の夏から浜海学院の夏季研修団を受け入れるなど、両校自身がかかえる事情により交流の力点は教員から学生に移された。平成20年9月、「函館大学と南開大学浜海学院の「本科生共同育成プログラム合意書（DDP）」が締結され、翌21年4月に第1回の5名が3年次への編入生として入学し、現在に継続されている。

▶ 海外提携校と単位互換

国 名	学 校 名	主たる学部	提携年 (西暦)	派 遣 期 間	単位互換 の有無	受入	派遣
アメリカ合衆国	ハワイ・パシフィック大学	海 洋 学 部	1983	1年間・6カ月	有	有	有
オーストラリア	ニューカッスル大学	工 学 部	1996	1年間・6カ月・1カ月	有	有	有
オーストラリア	バララット大学 (現フェデレーション大学)	工 学 部	1997	1年間	有	有	有
イ ギ リ ス	ウォルバーハンプトン大学	工 学 部	2001	1年間・6カ月・1カ月	有	無	有
イ ギ リ ス	バース・スパ大学	環 境 学 部	2001	1年間・6カ月	有	無	有
イ ギ リ ス	チ・チェスター大学	教 育 学 部	2001	1年間	有	無	無
中華人民共和国	南開大学	文 学 部	2001	1年間	有	有	無
大 韓 民 国	中部大学校	人文社会学部	2002	1年間	有	無	無
中華人民共和国	南開大学浜海学院	日 本 語 学 科	2005	2年間DDP	有	有	無



〔本学から姉妹各校への学生派遣〕

ここでは、派遣学生の各年の総数と各校別の人数を紹介したい。長期短期それぞれの期間の人数については附表を参照していただきたい。

昭和60年に始まったロア大学と本学の留学生の交換制度による留学生の派遣事業は、昭和62年の「国際英文秘書コース」の開設に伴い、6名を派遣し、翌63年には7名が派遣された。その人気の高さがうかがわれるが、等数交換という規則からすれば高すぎる数字であった。平成元年には4名と落ち着きを見せ、その後平成3年からは1から2名の派遣となり、ハワイ・パシフィック大学へと継承されている。

オーストラリアの大学との姉妹校提携は、留学生の交換の上でも大きな影響があった。平成8年のニューカッスル大学、翌9年のバララット大学（現フェデレーション大学）との提携により、学生の派遣先が広がり、ハワイとオーストラリアに分散されることになった。

さらに、「専攻塾」が開設された平成13年に、英国のバース・スパ大学、ウォルバーハンプトン大学との間に結んだ姉妹校提携は、留学希望学生の目を英国に向けさせることになった。ハワイ、オーストラリアとともに当初はバース・スパ大学に複数の留学生が派遣された。平成16年に「英語国際ビジネス学科」が新設され、派遣留学生に対する支援策がとられたことも相まって、ウォルバーハンプトン大学には3カ年でそれぞれ6名、8名、4名と人気が集まった。

残念なことに、交換学生数の超過問題や受け入れ条件の変更等により、平成18年のウォルバーハンプトン大学への派遣が、英国への派遣の最後になってしまった。

その後は、ハワイ・パシフィック大学とオーストラリアのニューカッスル大学の2校に毎年数名を派遣している。なかでもニューカッスル大学の1ヶ月語学研修が人気を集めている。

〔姉妹各校からの派遣学生の受け入れ〕

昭和60年にハワイ・ロア大学からの交換留学生を受け入れたのを始めとして、提携各校と交換制度により、1から2名の派遣留学生を受け入れてきた。

そのうち、ハワイ・ロア＝ハワイ・パシフィック大学からは現在まで受け入れが続いている。

オーストラリアからの受け入れは平成9年にバラッド大学から3名を受け入れたのを始めとして、翌10年にはニューカッスル大学からも2名を受け入れた。その後、数年間両校からの派遣が続いたが、平成14年の1名を最後にバラッド大学からの派遣は途絶え、ニューカッスル大学からの派遣が継続されているところである。

英国ではバース・スパ大学から平成14年と15年にそれぞれ2名、4名の派遣があり、受け入れたが、その2年間だけで途絶えてしまった。

英語圏の学校との契約とは異なり、中国の学校とは留学生の交換ではなく、編入学生として受け入れるという契約が結ばれた。このため、中国の学校への本学からの派遣はない。

平成14年後期、南開大学職業技術学院から2

名の卒業生を本学の編入学生として受け入れた。最初の半年は日本語の特別授業を受講し、翌年春から2年間で卒業および商学士取得必要単位を修得するという方法がとられた。翌15年後期には、同じく2名を同様の措置で受け入れた。この4名は優秀な成績をもって本学を卒業し、帰国したが、派遣側の職業技術学院が閉校するという事態に至り、受け入れは自然消滅してしまった。

その後、南開大学職業技術学院は、私立の南開大学浜海学院として新たに編成創立されることになった。本学はいち早く新設の浜海学院と姉妹校提携を結び、のちにDDP制度による留学生の受け入れ協定を結んだ。南開大学浜海学院の日本語ビジネス学科で2年以上学んだ学生を3年次編入学生として受け入れて本学で商学の教育を行い、卒業の際には本学が「商学士」を浜海学院側が「文学士」を授与するという制度である。

平成21年に5名を受け入れたのを始めとして、22年にも5名、23年3名、24年2名、25年2名と受け入れが続いている。



3. 海外研修旅行のあゆみ

本学の国際交流活動の基礎をつくった「海外研修旅行」プロジェクトは、姉妹校提携の拡大やそれにもなう交換留学制度の発展と大きな成果を生み出していった。そうした結実を受けて、「海外研修旅行」プロジェクト自体は学生に国際体験を積ませることを主な目的とする企画旅行といった観を強く帯びるようになった。

▶ 派遣留学生数

	バララッド大学		ニューカッスル大学			ハワイパシフィック大学		バーススバ大学		ウォルバーハンプトン大学	
	1年間	6ヶ月	1年間	6ヶ月	1ヶ月	1年間	6ヶ月	1年間	6ヶ月	1年間	6ヶ月
昭和62年度						6 (1)					
昭和63年度						7 (1)					
平成元年度						4					
平成2年度											
平成3年度						1					
平成4年度						4					
平成5年度						2 (1)					
平成6年度						1 (1)					
平成7年度						2					
平成8年度						1					
平成9年度		3 (2)	1 (1)								
平成10年度	2 (1)		2			2 (1)					
平成11年度	1 (1)					2 (2)					
平成12年度						2 (2)					
平成13年度	2		2			2		2 (1)			
平成14年度	1		1 (1)			1 (1)		4 (2)	1		
平成15年度			2			2		1	1		
平成16年度										6 (4)	
平成17年度											8 (4)
平成18年度			3 (3)			4 (2)					4 (2)
平成19年度			2 (1)		5 (5)	1 (1)					
平成20年度					8 (5)						
平成21年度			4 (2)		5 (2)	4 (2)					
平成22年度			1 (1)		3 (3)	1 (1)					
平成23年度					6 (3)						
平成24年度			1	1	6 (5)						
平成25年度			3 (2)			1					

注 () 内は女子学生数を示す。

旅行先は、当初ハワイを中心とし、平成5年からアメリカ西海岸に足を延ばすことになったが、平成6年からロンドンを中心とする西ヨーロッパ旅行が企画されると、人気はこちらに移り、その後10年近くは西ヨーロッパ旅行が中心となった。その後は、ハワイとオーストラリアへの旅行が企画実施された。

21世紀に入った頃から、世界情勢の緊迫によって中止せざるをえなくなったり、応募学生が減少したため、中止になるなど、企画が頓挫

することが多くなり、平成19年にハワイへの研修旅行が実施されたのを最後に、以降は、実施されてこなかったが、平成27年には夏期のシンガポール旅行という形で復活した。

従来は、冬季休業に入るとすぐに出発、クリスマスを旅中に過ごして年の暮れに帰国という日程がほぼ定番であった。教員と事務職員の中から引率者が選ばれて、旅行中の責任を担ったわけだが、その気苦労は想像に難くない。

▶受入留学生数

	バララッド大学	ニューカッスル大学	ハワイパシフィック大学	バーススバ大学	南開大学・浜海学院
	1年間	1年間	1年間	1年間	2年間
昭和62年度			2		
昭和63年度			1		
平成元年度			3 (1)		
平成2年度			3		
平成3年度			1		
平成4年度			1		
平成5年度			1		
平成6年度			1 (1)		
平成7年度					
平成8年度					
平成9年度	3 (2)		2		
平成10年度	2 (1)	2 (1)			
平成11年度	1	2 (2)	1 (1)		
平成12年度		2 (2)	1 (1)		
平成13年度	2	2	2		
平成14年度	1	1 (1)	1	2 (1)	2 (1)
平成15年度		2	1	4 (2)	2 (1)
平成16年度		1			
平成17年度		1 (1)	1		
平成18年度					
平成19年度		1	1		
平成20年度					
平成21年度					5 (5)
平成22年度		1	2 (2)		5 (4)
平成23年度			2		3 (1)
平成24年度			3		2 (1)
平成25年度					3 (2)

注 () 内は女子学生数を示す。

▶海外研修旅行 行き先一覧

1983年 ～ 1992年	アメリカ・ハワイ	2000年	ラスベガス・ロサンゼルス、ロンドン・ウィーン
		2001年	ロンドン・ミュンヘン（爆弾テロ頻出のため中止）
		2002年	ロンドン・ミュンヘン
1993年	ハワイ・ロサンゼルス・サンフランシスコ	2003年	ロンドン・リスボン（中止）
1994年	ハワイ・オーランド（中止）ロンドン・パリ	2004年	ハワイ（パシフィック大）
1995年	ハワイ・ロサンゼルス・ラスベガス・オーストラリア	2005年	オーストラリア
1996年	ロンドン・ローマ	2007年	ハワイ
1997年	ロンドン・パリ	2009年	韓国（中止）
1998年	ロンドン・ローマ	この間なし	
1999年	ヨーロッパ（ロンドン・マドリード）、オーストラリア（エアーズロック・シドニー・ケアンズ／中止）	2015年	シンガポール

国際交流史

1973年（昭和48年）

- 貿易論ゼミナールによる短期海外研修がスタート。

1981年（昭和56年）

- ハワイ大 J・ムネオ・ヨシカワ博士を学術講演に招聘。
- 姉妹校提携委員長によるハワイ現地視察。

1983年（昭和58年）

- ハワイ・ロア大（以下ロ大）と姉妹校提携。
- ロ大学長フィリップ・J・ボサート博士、本学を表敬訪問。
- 和泉雄三学長、ロ大を表敬訪問。
- 第1回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

1984年（昭和59年）

- ロ大から交換教員K・スクーランド助教授着任。
- ロ大から交換留学生受入。
- 函館市姉妹都市カナダ・ハリファックス市から留学生受入。
- 第2回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

1985年（昭和60年）

- 本学からロ大へ交換留学生派遣を開始。
- 第3回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

1986年（昭和61年）

- ロ大から交換教員B・ブース講師着任。
- ロ大学長マービン・J・アンダーソン博士一行、本学を表敬訪問。

1987年（昭和62年）

- 第4回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

- ロ大からT・ダムキ講師着任。

1988年（昭和63年）

- 第5回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

1989年（平成元年）

- 第6回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

- ロ大からR・カミングス講師着任。

1990年（平成2年）

- 第7回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

1991年（平成3年）

- 第8回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

1992年（平成4年）

- 第9回海外研修旅行団をハワイへ派遣
（ロ大を中心に）。

- ロ大からB・ダッフ講師着任。

1993年（平成5年）

- ロシア極東総合国立大学から留学生受入。
- 第10回海外研修旅行団をハワイ、ロサンゼルス、サンフランシスコへ派遣。
- ハワイ・パシフィック大学ジョン・R・レックス副学長、本学を表敬訪問。

1994年（平成6年）

- 第11回海外研修旅行団をロンドン・パリへ派遣。

1995年（平成7年）

- 第12回海外研修旅行団をオーストラリアへ派遣。

1996年（平成8年）

- オーストラリア・ニューカッスル大学と姉妹校提携。
- ニューカッスル大学からS・ハーディ講師着任。

- オーストラリア・バララット大学と姉妹校提携。
- 第13回海外研修旅行団をロンドン・ローマへ派遣。

1997年（平成 9年）

- バララット大学から交換留学生受入を開始。
- ニューカッスル大学への交換留学生派遣を開始。
- バララット大学への交換留学生派遣を開始。
- 南開大学（中華人民共和国・天津市）との姉妹校提携。
- 第14回海外研修旅行団をロンドン・パリへ派遣。

1998年（平成10年）

- 第15回海外研修旅行団をロンドン・ローマへ派遣。

1999年（平成11年）

- 第16回海外研修旅行団をロンドン・マドリッドへ派遣。

2000年（平成12年）

- 第17回海外研修旅行団をラスベガス・ロサンゼルスへ派遣。

2001年（平成13年）

- ウォルバーハンプトン大学(イギリス)との姉妹校提携。
- チ・チェスター大学(イギリス)との姉妹校提携。
- バース・スパ大学(イギリス)との姉妹校提携。
- 中部大学校（韓国）との姉妹校提携。
- 第18回海外研修旅行団、対米テロのため中止。

2002年（平成14年）

- 南開大学からの交換留学生を受入を開始。
- 第19回海外研修旅行団をロンドン・ミュンヘンへ派遣。

2003年（平成15年）

- バース・スパ大学へ交換留学生を派遣。
- ウォルバーハンプトン大学へ短期留学生派遣。

- 第20回海外研修旅行中止。

2004年（平成16年）

- 南開大学浜海学院（中華人民共和国・天津市）との姉妹校提携。
- 南開大学浜海学院から石秀梅先生が交換教員として来学。
- 小笠原愈学長一行2名、南開大学浜海学院を表敬訪問。
- 第21回海外研修旅行団ハワイ・パシフィック大学へ派遣。

2005年（平成17年）

- 南開大学浜海学院王文俊院長一行3名来学。
- 第22回海外研修旅行団オーストラリア・ニューカッスル大学へ派遣。

2006年（平成18年）

- 南開大学浜海学院へ坂野学助教授を交換教員として派遣。
- 南開大学浜海学院から宋京津先生が交換教員として来学。
- 南開大学浜海学院王文俊院長一行3名来学。

2007年（平成19年）

- 南開大学浜海学院から短期研修団来学。
- 海外研修旅行団ハワイ・パシフィック大学へ派遣。

2008年（平成20年）

- 南開大学浜海学院から短期研修団来学。

2009年（平成21年）

- 小笠原愈学長一行3名、南開大学浜海学院を表敬訪問。
- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生5名受入。
- 南開大学浜海学院楊清海院長一行10名来学。

2010年（平成22年）

- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生 5 名受入。

2011年（平成23年）

- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生 3 名受入。

2012年（平成24年）

- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生 2 名受入。

2013年（平成25年）

- 溝田春夫学長一行 4 名、ニューカッスル大学を表敬訪問。

- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生 2 名受入。

2014年（平成26年）

- 南開大学浜海学院長張東升院長一行 5 名来学。
- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生 3 名受入。

2015年（平成27年）

- 南開大学浜海学院から短期研修団来学。
- 南開大学浜海学院とのDDP協定締結による編入学生 1 名受入。
- 長栄大学（台湾・台南市）との姉妹校提携。

南開大学浜海学院交流史**2001年（平成13年10月19日）**

- 南開大学との教員および学生交流協定書締結

2001年（平成13年12月22日）

- 教員および学生交流協定書締結付属覚書書同意

2002年（平成14年12月）

- 交換留学生として 2 名の学生来学

2005年（平成17年5月9日～10日）

- 王文俊院長一行 3 名来学

2005年（平成17年3月9日～13日）

- 南開大学浜海学院を表敬訪問（小笠原愈学長・坂野学助教授）

2005年（平成17年3月11日）

- 南開大学浜海学院との姉妹校交流提携締結

2005年（平成17年5月20日～21日）

- 王文俊院長一行 3 名来学

2005年（平成17年11月28日）

- 教員交換に関する覚書締結

2006年（平成18年4月）

- 教員交換協定により石秀梅先生来学（半年間）

2006年（平成18年6月8日）

- 教員交換協定により坂野学助教授半年間南開大学浜海学院へ

2007年（平成19年1月）

- 学園で集めた図書800冊南開大学浜海学院へ寄贈

2007年（平成19年4月18日）

- 王文俊院長一行 3 名来学

2007年（平成19年7月）

- 短期研修団22名来学（2 週間うち函館 1 週間）

2007年（平成19年9月）

- 教員交換協定により宋京津先生来学（半年間）

2008年（平成20年7月）

- 短期研修団20名来学（2 週間うち函館 1 週間）

2008年（平成20年9月22日）

- 本科生共同育成プロジェクト合意書締結（DDP）

2009年（平成21年4月）

- DDPによる第1回受け入れ5名編入学

2009年（平成21年11月18日～21日）

- 浜海学院を表敬訪問（溝田春夫学長・野又淳司事務局長・坂野学准教授）

2009年（平成21年12月9日）

- 楊清海院長一行10名来学

2010年（平成22年7月）

- DDPによる第2回受け入れ5名編入学
- 短期研修団11名来学（2週間うち函館1週間）

2011年（平成23年4月）

- DDPによる第3回受け入れ3名編入学

2012年（平成24年4月）

- DDPによる第4回受け入れ2名編入学

2013年（平成25年4月）

- DDPによる第5回受け入れ2名編入学

2014年（平成26年4月）

- DDPによる第6回受け入れ3名編入学

2014年（平成26年4月9日～10日）

- 張東升院長一行5名来学

2015年（平成27年4月）

- DDPによる第7回受け入れ1名編入学
- 短期研修団来函

2015年（平成27年9月）

- 浜海学院を表敬訪問（野又淳司学長・若松裕之学部長・坂野学准教授・長沼孝征職員）

V

図書館のあゆみ



函館大学創立に際して、まず高丘町の森と畑地の中に出現した校舎は、四階建ての鉄筋コンクリート建築の一部であった。それは事務局と図書館と教室と講堂と玄関であった。それに木造の教室や食堂が隣接して加えられていた。図書館が真っ先に用意されたわけである。図書館は玄関の階上二階に位置していて、書庫に接して閲覧室そして事務コーナーと図書検索コーナーから成り立っていた。函館大学開学と共に図書館規程が審議され、制定された。その規程は付則で昭和45年5月7日施行となっているが、その第一条には目的が述べられている。「函館大学の使命達成並びに広く北海道開発の発展に寄与するために必要な図書及び資料を収集、整理保管して、調査、研究並びに教養に資することを目的とする。」この条文は今日に於いても変更されていない。図書館は学術研究と人材育成、北海道開発の発展に貢献すべく設立されたのである。

当初この図書館の蔵書はおよそ12,000冊程であった。それが昭和50年5月28日時点の調査表によれば次の如くである。

(1) 一般教育関係図書	15,489冊
(2) 専門図書（和書）	20,236冊
(3) 専門図書（洋書）	5,911冊
合計	41,636冊

上のような蔵書構成数に至る過程においては、各方面の多大な御支援があったのである。函館大学創立に当たって、日魯漁業株式会社、高村善太郎氏、小熊信一郎氏、伊部政次氏、田中裕治氏より高額寄附金や図書が寄贈されている。

それから昭和43年以降函館市当局より図書館に助成費が寄せられている。これによって毎年

一般教育関係図書や専門図書、それに学術雑誌が購入されたのである。なお国庫助成による一揃いの学術雑誌購入や北海道庁よりの助成になる蔵書充実も達成されて来た。学内に於いて故野又学長先生の御寄贈や故林重信先生の御寄贈になる図書も図書館の発展に貢献している。そして各学科の研究費による購入図書が学術分野各方面の蔵書充実に大きな寄与をなしている。

開学当初、学生諸君は大学生活に期待と希望を抱いていたようである。函館大学は道南に只一つしかない私立大学であったので、入学生諸君はここで何かを探求し、自らの未知の世界に探索の眼差しを向けようとしていた様子が思い起こされる。従って図書館の閲覧室は学生諸君の馴染みの場所となっていた。

しかし新校舎の図書館は昭和43年5月16日の十勝沖地震で壊れてしまったのである。それから図書館の移動が始められた。臨時の図書館は東側の校舎の一階の二つの教室が割り当てられた。この移動には教員、職員、学生諸君も参加して、大きな尽力を惜しまなかった。地震では図書館の蔵書は殆んどいたんでいなかったようである。それにしても教職員や学生諸君の心の衝撃は大きかった。話題も地震のことに終始していたようである。その興奮も次第に終息して、図書館で学生諸君が落ち着いて参考書をひもとくようになった。そのことが狭い校舎とはいえども学内を大学らしい雰囲気にはしていたのである。

昭和44年に現在の校舎が竣工した。そこでまた、図書館は現在のピアサポートセンターに移転したのである。その新図書館は地下室とともに二層の書庫と事務室と閲覧室、図書検索コー

ナーから成っていて、開学当初の図書館よりかなり広がっていた。この図書館はおよそ7万冊程度の蔵書収容可能容積であった。

蔵書の増加状況を概略的に省みると、昭和51年度当初 43,531冊、昭和55年度では 55,035冊、昭和57年度 62,765冊、昭和59年度では年度末で 70,882冊に達している。図書館ではこの時点で蔵書を収容する余裕が僅かになった。

そこで函館大学では本学開学二十周年を記念して、図書館を新築することとなった。

なお昭和60年4月1日時点での分類別図書冊数によると、当図書館の蔵書構成は次の如くである。

	(和 書)	(洋 書)	合 計
専門図書数	27,431冊	7,808冊	35,239冊
自然科学系	4,295冊	395冊	4,690冊
人文科学系	14,676冊	2,821冊	17,497冊
社会科学系	6,584冊	881冊	7,465冊
語学関係	3,712冊	1,243冊	4,955冊
体育館系	917冊	19冊	936冊

学術雑誌	(和 書)	89種
〃	(洋 書)	54種

上記の外、定期刊行物（和書）21種、新聞（和文13種、英文1種）、官報一通が適時保管されている。

図書館では卒業生等学外者に対する図書利用の便宜が図られているが、当初は学外者の図書館利用は比較的少なかったので図書館長が認めた場合は学外者にも図書を有効に利用してもらう運営をしていた。新しい図書館は旧来より更

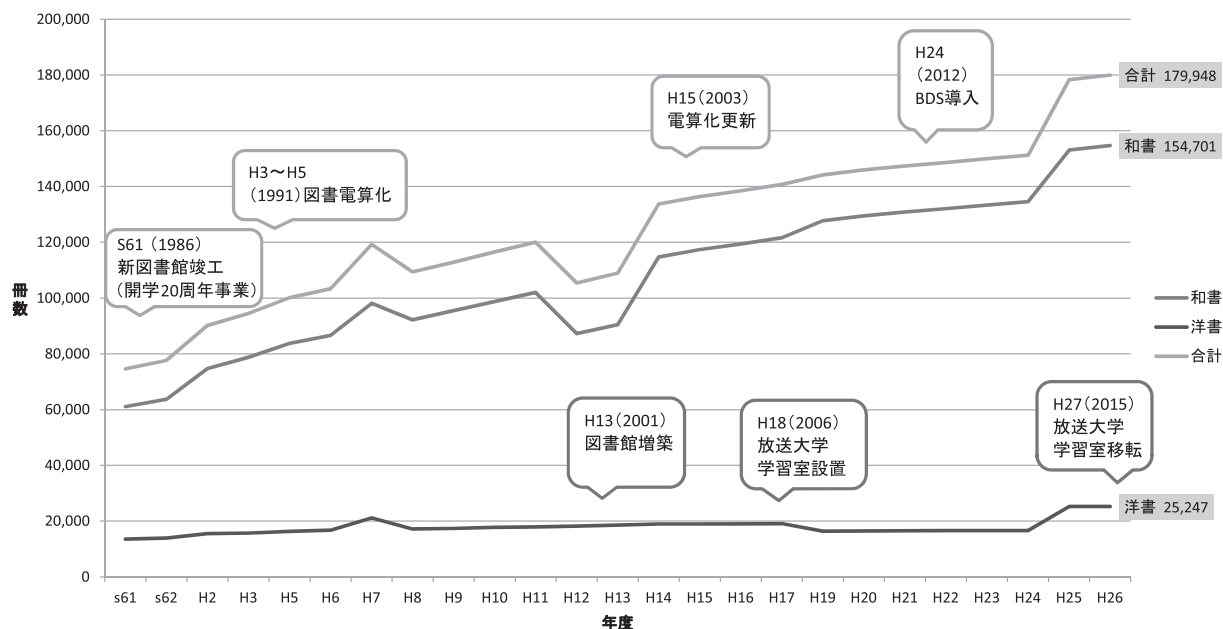
に広がったし、蔵書数も相当数豊富になった。そのため学外者の図書閲覧は以前に増して増え、当館も地域文化に貢献するところ少なくないであろうと推測されたため卒業生等の学外者の利用も可能とした。

平成に入り蔵書数は毎年1,000～3,000冊増加し、平成26年度には約18万冊となった。平成3年から平成5年にかけて図書館の大幅な電算化が行われ、手書き台帳から蔵書管理、貸出返却、蔵書検索までコンピュータを利用できるようになり、大いに利用者の利便性が向上した。また平成13年度には専攻塾棟の増築とともに、再び手狭になってきた図書館が増築され、ゆったりと閲覧できるスペースが増え、益々快適に利用できる図書館となった。その後、平成18年には放送大学函館学習室が図書館内に開設され、放送大学授業との単位互換制度の活用も図られた（放送大学学習室は平成27年度に函館市の都合により、函館大学図書館から函館市青年センターに移設された）。

平成24年度には、さらなる図書館の利用向上のためにカバン等をもって入館できる様にBDS（BookDetectionSystem）が導入された。

現在、図書館の開館は平日が午前9時より午後8時までとなっており、土曜日は午前9時より午後1時までである。休館日は日曜日、国民の休日、学園創立記念日、その他館長の認めた日となっている。館内借覧は一時に5冊までであるが、開架参考図書、事典類、国語、漢和、英米語、ドイツ語、フランス語、中国語の辞典類や文系、理系の各種学術辞典等が揃っているので、研究や教養のためには大いに益するであろうと考えられるのである。

▶ 函館大学図書館蔵書数変化（昭和61年～平成26年）



▶ 分類別図書蔵書冊数（平成27年3月31日現在）

分類別	和書	洋書	合計
総記	19,779冊	1,045冊	20,824冊
哲学	6,398冊	862冊	7,260冊
歴史	10,612冊	716冊	11,328冊
社会科学	53,076冊	7,402冊	60,478冊
自然科学	6,226冊	429冊	6,655冊
技術	3,864冊	208冊	4,072冊
産業	9,331冊	923冊	10,254冊
芸術	4,241冊	267冊	4,508冊
言語	6,554冊	2,209冊	8,763冊
文学	11,134冊	2,579冊	13,713冊
製本雑誌	23,486冊	8,607冊	32,093冊
合計	154,701冊	25,247冊	179,948冊

▶ 所蔵雑誌種数・受入新聞種数（平成27年3月31日現在）

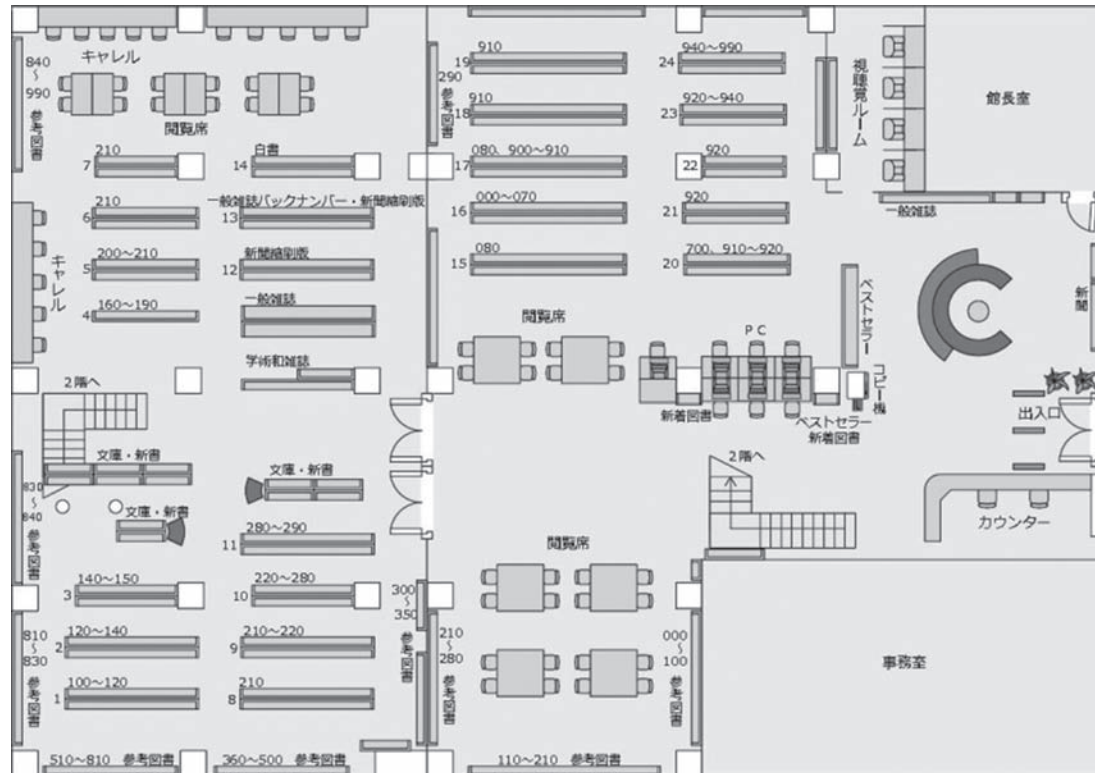
所蔵雑誌種数

和雑誌	洋雑誌	合計
2,806種	374種	3,180種

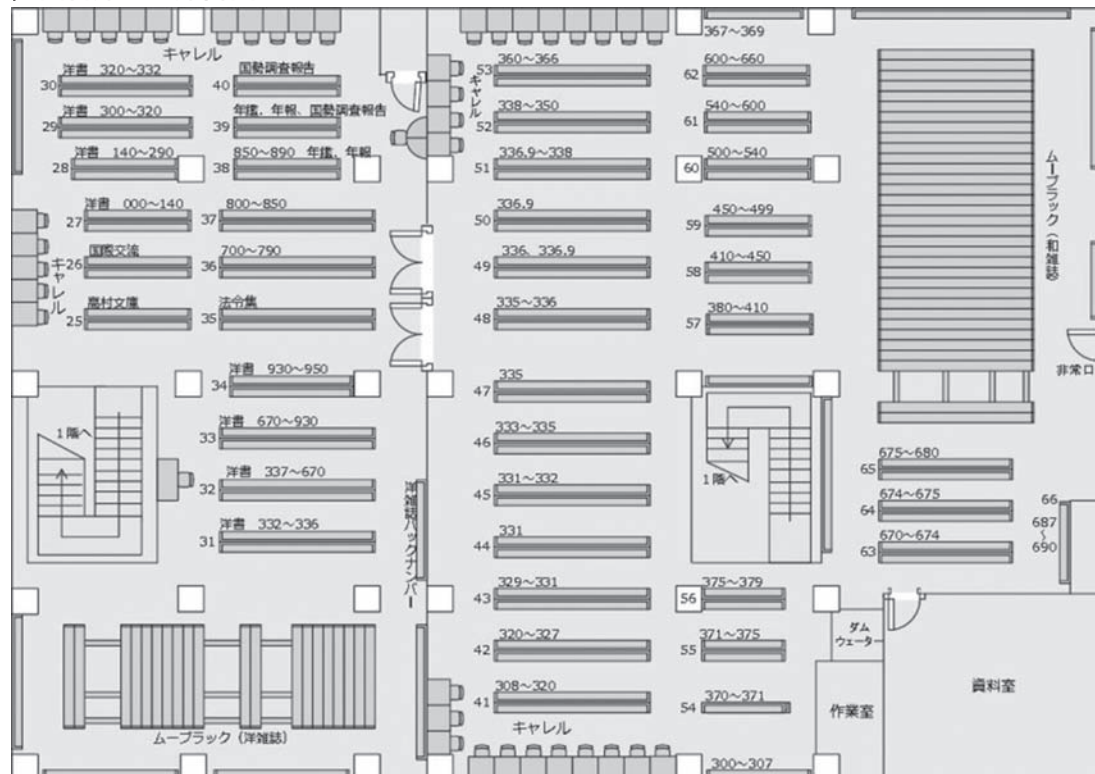
年間受入新聞種数

和文	英文	合計
16種	1種	17種

▶ 図書館 1F 館内図



▶ 図書館 2F 館内図



▶ 図書館館長・職員名簿

年 度	役 職 名	氏 名	年 度	役 職 名	氏 名
昭和40年度 ゝ 昭和41年度	図 書 館 長	野 又 貞 夫	昭和54年度	図 書 館 長	伊 藤 結城夫
	次 長	小 畑 信 愛		係 長	飯 田 石 勝
		吉 岡 富美子			九 嶋 弘 子
昭和42年度 ゝ 昭和44年度	図 書 館 長	小 畑 信 愛	昭和55年度 ゝ 昭和56年度		大 橋 彩 子
		吉 岡 富美子		図 書 館 長	伊 藤 結城夫
		福 村 楨 子		係 長	飯 田 石 勝
昭和45年度	図 書 館 長	小 畑 信 愛	昭和57年度 ゝ 昭和59年度		九 嶋 弘 子
		福 村 楨 子			村 上 いずみ
		西 俣 千寿子		図 書 館 長	伊 藤 結城夫
昭和46年度		斉 藤 泰 子	昭和60年度 ゝ 昭和61年度	係 長	飯 田 石 勝
	図 書 館 長	村 田 喜 一			九 嶋 弘 子
		福 村 楨 子			木 村 美 佐
昭和47年度		斉 藤 泰 子	昭和62年度	図 書 館 長	伊 藤 結城夫
	図 書 館 長	村 田 喜 一		課 長（兼任）	阿 部 元 樹 (昭60・11・1付)
		福 村 楨 子		係 長	飯 田 石 勝
昭和48年度		二 木 陵 子	昭和63年度 ゝ 平成元年度		九 嶋 弘 子 (昭60・7・31退職)
	図 書 館 長	村 田 喜 一			木 村 美 佐
	課 長	中 西 十四雄			坂 本 依 子
昭和49年度		飯 田 石 勝	昭和63年度 ゝ 平成元年度		五十嵐 泉
		二 木 陵 子		図 書 館 長	高 月 晋
	図 書 館 長	村 田 喜 一		課 長（兼任）	阿 部 元 樹
昭和50年度 ゝ 昭和51年度	課 長	中 西 十四雄	昭和63年度 ゝ 平成元年度	係 長	飯 田 石 勝
	係 長	飯 田 研 勝			木 村 美 佐
		二 木 陵 子			坂 本 依 子
昭和52年度	図 書 館 長	村 田 喜 一	昭和63年度 ゝ 平成元年度	臨 時 職 員	吉 田 楨 子
	課 長	中 西 十四雄			榎 森 進
	係 長	飯 田 石 勝		課 長（兼任）	阿 部 元 樹
昭和53年度		松 岡 ひでの	平成2年度 ゝ 平成4年度	係 長	飯 田 石 勝
	図書館長事務取扱	村 田 喜 一			木 村 美 佐
	課 長	中 西 十四雄			坂 本 依 子
	係 長	飯 田 石 勝	平成2年度 ゝ 平成4年度	臨 時 職 員	吉 田 楨 子 (昭和63年度まで)
		松 岡 ひでの		〃	矢 本 多美子
	図 書 館 長	石 南 国		図 書 館 長	上 平 幸 好
	課 長	中 西 十四雄		課 長	阿 部 元 樹
	係 長	飯 田 石 勝		係 長	飯 田 石 勝
		九 嶋 弘 子			木 村 美 佐

年 度	役 職 名	氏 名	年 度	役 職 名	氏 名
平成2年度 ～ 平成4年度		矢 本 多美子	平成18年度 ～ 平成22年度	図 書 館 長	永 盛 恒 男
		野 崎 美 華 (平成2年度まで)		課 長	小 澤 勲
		小 本 真由美		係 長	遠 藤 啓 暁 (平成20年度まで)
平成5年度	図 書 館 長	石 井 晋 良			小 本 真由美
	課 長	阿 部 元 樹			一 戸 あゆみ (平成18年度まで)
	係 長	遠 藤 啓 暁		臨 時 職 員	石 垣 朋 子
		木 村 美 佐		放送大学臨時職員	田 畑 洋 治 (平成21年度まで)
		矢 本 多美子		〃	谷 本 護 (平成21年度まで)
		小 本 真由美		〃	石名坂 克 明
平成6年度 ～ 平成7年度	図 書 館 長	新 谷 典 彦		〃	佐 藤 槇 雄
	課 長	川 島 孝 夫	平成23年度 ～ 平成24年度	図 書 館 長	今 井 敏 博
	係 長	遠 藤 啓 暁		課 長 補 佐	竹 山 久 芳
		木 村 美 佐 (平成6年度まで)		主 任	小 本 真由美
		矢 本 多美子		臨 時 職 員	石 垣 朋 子
		小 本 真由美		〃	吉 田 可 奈
平成8年度 ～ 平成11年度		一 戸 あゆみ		〃	干 場 美 佳
	図 書 館 長	赤 松 潤	平成25年度 ～ 平成26年度	放送大学臨時職員	石名坂 克 明
	課 長	川 島 孝 夫		〃	佐 藤 槇 雄
	係 長	遠 藤 啓 暁		図 書 館 長	坂 野 学
		矢 本 多美子		課 長 補 佐	竹 山 久 芳
		小 本 真由美		主 任	小 本 真由美
平成12年度 ～ 平成15年度		一 戸 あゆみ		臨 時 職 員	石 垣 朋 子
	図 書 館 長	高 月 晋	平成27年度	〃	吉 田 可 奈
	課 長	小 澤 勲		〃	矢 本 多美子
	係 長	遠 藤 啓 暁		放送大学臨時職員	石名坂 克 明 (平成25年度まで)
		矢 本 多美子		〃	佐 藤 槇 雄 (平成25年度まで)
		小 本 真由美		図 書 館 長	寺 田 隆 至
平成16年度 ～ 平成17年度		一 戸 あゆみ		図 書 委 員 長	西 村 淳
	図 書 館 長	溝 田 春 夫		課 長 補 佐	竹 山 久 芳
	課 長	小 澤 勲		主 任	小 本 真由美
	係 長	遠 藤 啓 暁		臨 時 職 員	石 垣 朋 子
		矢 本 多美子 (平成16年度まで)		〃	吉 田 可 奈
		小 本 真由美		〃	矢 本 多美子
		一 戸 あゆみ			
	臨 時 職 員	石 垣 朋 子			

大学広報誌「ぼるとさびえ」が1995年から発刊され現在に至る。

「ぼるとさびえ」とはラテン語のポルトス：港や門を意味し、サピエンス：知恵や英知を意味することばを参考にし命名された。以下に現在までのあゆみを記す。



創刊号 1995年1月発刊

- ・特集!! THE就職
【就職活動奮戦記】
- ・[VISION]
大学改革
- ・[研究]
教員論究紹介
- ・[国際化]
留学生・交換教員座談会



Vol. 2 1995年6月発刊

- ・特集Ⅰ THE入試
「ワタシの合格体験記」
「函館大学入試概況」
- ・特集Ⅱ THE就職
「平成7年度就職戦線展望」
- ・理事長・学長対談
「建学の精神」



Vol. 3 1996年3月発刊

- ・特集Ⅰ 創立30周年特集
「各界からのお祝いの言葉」
- ・特集Ⅱ The就職
座談会「就職戦線奮闘記」
就職ガイダンスレポート
私の決意表明
'96就職戦線に向けて
- ・特集Ⅲ The入試
函館「アラカルト方式」「スポーツ・カテゴリー」



Vol. 4 1996年12月発刊

- ・特集 理事長VS学長対談
「函館大学の未来ビジョン」
- ・座談会
南半球の真夏をビッグに楽しみました
私たちのオーストラリア研修
- ・The入試
函館大学の入学試験・チャネル別合格談インタビュー



Vol. 5 1997年7月発刊

- ・特集 理事長VS学長対談
「野又学園のめざす教育」
- ・ロンドン・ローマ研修座談会
「私たちが見た、感じたヨーロッパ」
- ・The入試
チャネル別合格インタビュー
「アラカルト方式」「特別奨学生」「推薦入学試験」



Vol. 6 1998年1月発刊

- ・特集
今、函館大学に求められるもの
- ・座談会／交換教員＋受入・派遣留学生
私たちの異文化体験
- ・就職特集
就職ガイダンスレポート



Vol. 7 1998年7月発刊

- ・特集
学園訓の理念に、今こそ立ち返って
- ・留学体験
希望を胸に函館大学へ
- ・就職
平成10年度就職戦線の展望と9年度の実績



Vol. 8 1999年1月発刊

- ・特集
人間教育－知・徳を説く
- ・第二特集
平成10年度就職戦線総括
- ・国際交流
留学生・帰国学生インタビュー



Vol. 9 1999年7月 発行

- ・特集
21世紀社会を担う 諸君に期待する
- ・国際交流
オーストラリア・バララット大学
デービッド・ジェームズ学長が来校
- ・平成11年度入試概況
- ・平成11年度就職概況・展望



Vol.10 1999年12月 発行

- ・特集
二十一世紀への道標
函館大学はかく変わる
- ・就職概況
平成11年度就職概況と新年度の展望
就職内定者座談会「就職戦線、私はこう勝ち抜いた」
- ・国際交流
留学生・帰国学生インタビュー



Vol.11 2000年7月 発行

- ・特集 21世紀への道標Ⅱ
函館大学の新しい表情
自己改革からはじまる大学改革
特別寄稿 若人よ 夢を語ろう
- ・第18回海外研修旅行
ロンドン・マドリッド二都物語を体験して
- ・入試最前線「選択」から「相互理解」へーAO入試導入
- ・就職概況
「就職に強い函大」ブランドの維持・強化



Vol.12 2001年1月 発行

- ・特集 21世紀への挑戦
- VENTURE UNIVERSITY のめざす方向 -
生きた授業、生きる授業をめざして
座談会「学長に聞く これからの函館大学像」
特別寄稿「今、君達に期待する」
- ・FROM THE WORLD
第19回海外研修旅行
アメリカ体験の旅
- ・平成12年度就職戦線の傾向
「就職に強い函大」は今年も堅調!



Vol.13 2001年7月 発行

- ・特集 函館大学の挑戦と改革
対談「人間同士のふれあいが教育の原点」
ついにスタートした専攻塾制度
- ・平成13年度入学状況
今年も全国から意欲ある学生たちが入学
- ・FROM THE WORLD
第20回海外研修旅行
ロンドン&ウィーンの旅



Vol.14 2002年2月 発行

- ・特集 21世紀の戦略
大学教育の「質」と「実」を求めて
専攻塾 スタートからほぼ1年が経過して
国内大学ではユニークな6つのコース
- ・平成13年度就職戦線をふり返って
厳しい就職環境の中でも前向きな選択を
- ・FROM THE WORLD
広がる国際交流の輪



Vol.15 2002年7月 発行

- ・特集 現代ビジネスに対応した人材育成
実学を重んじた6つのコース
専攻塾-1年間の成果とこれから-
- ・平成14年度入学状況
目的意識をしっかりとった学生が増加
- ・平成13年度就職状況
厳しい就職状況の中で内定率91%を確保



Vol.16 2003年6月 発行

- ・特集 教職への挑戦
商学部教育の上に専門性の高い教員養成
・教員採用試験合格体験記
・教員として活躍する卒業生たち
・新学長にインタビュー
社会そして学生から「あつく」信頼される大学
- ・平成14年度就職状況
厳しい就職環境の中、内定率88.1%を確保
- ・平成16年度入試に向けて
AO入試・特別奨学生入試をさらに充実



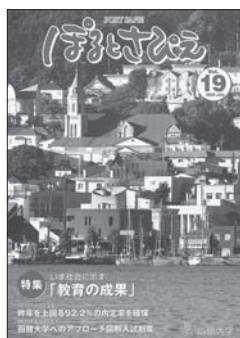
Vol.17 2004年6月発刊

- ・特集
動き出した「高大連携教育」
地域社会における函館大学の
新たな挑戦
- ・今年度からスタートした新しい
二つの教育システム
「教職教育センター」と「小
学校英語指導者育成」
- ・平成15年度就職実績
全国大学平均を約10%上回る
91.2%の内定率を確保
- ・平成17年度入試における新教育
システム
「英語国際ビジネス学科」を新
設し2学科に
「商学科」の専攻塾を5つに再編



Vol.18 2005年7月発刊

- ・特集
いま時代に示す「函館大学の
理念」
- ・平成16年度就職実績
昨年を上回る91.7%の内定率
を確保
- ・平成18年度入試制度
函館大学へのアプローチ図解
入試制度
- ・函館歴史散歩
商都・函館の面影をめぐる建
物ウォッチング



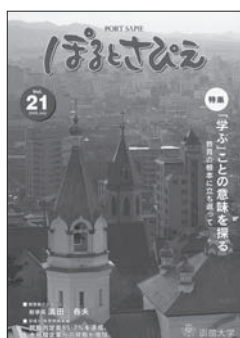
Vol.19 2006年7月発刊

- ・特集
いま社会に示す「教育の成果」
- ・平成17年度就職実績
昨年を上回る92.2%の内定率
を確保
- ・平成19年度入試制度
函館大学へのアプローチ図解
入試制度



Vol.20 2007年7月発刊

- ・特集
「地域」と「大学」函館大学
が示す社会貢献の姿
- ・平成18年度就職実績
就職内定率97.6%の高実績を
確保
前年比5.4ポイントの大幅増
- ・平成20年度入試制度
函館大学へのアプローチ図解
入試制度



Vol.21 2008年7月発刊

- ・特集
「学ぶ」ことの意味を探る
－教育の根本に立ち返って
- ・新学長インタビュー
新学長 溝田 春夫
- ・平成19年度就職実績
就職内定率95.7%を達成
大規模企業への就職が増加



Vol.22 2009年7月発刊

- ・特集
函館大学の新しい設計図
「商学」を追求し、教育の「質」
を追求する。
- ・学長インタビュー
学長 溝田 春夫
- ・平成20年度就職実績
急激な就職環境悪化のなかで
も90%以上の内定率を確保



Vol.23 2010年7月発刊

- ・特集
設計図展開・新たな函館大
学の始動
新たなニーズに応える新カリ
キュラム「商学実習」が始まる
- ・学長インタビュー
学長 溝田 春夫
- ・平成21年度就職実績
就職氷河期といわれるなか、
高い就職内定率を示す



Vol.24 2011年8月発刊

- ・特集
実践に踏み出した函館大学の
人材育成
新たなニーズに対応した商学
部 求められる人材を育てる
「商学実習」
- ・学長インタビュー
学長 溝田 春夫
- ・平成22年度就職実績
充実した就職支援・指導によ
り、学生たちの就職を応援



Vol.25 2012年8月発刊

- ・特集
産学連携・企業パートナーシップ・商学実習
適応力のある人材を育成する函館大学
- ・学長インタビュー
学長 溝田 春夫
- ・平成23年度就職実績
充実した就職支援・指導により、学生たちの就職をサポート



Vol.26 2013年8月発刊

- ・特集
地域や社会人と連携した共同教育・共同作業
教育力を高め、実践的教育を推進
- ・学長インタビュー
学長 溝田 春夫
- ・平成24年度就職実績
充実した就職支援・指導により、前年度を上回る実績



Vol.27 2014年8月発刊

- ・特集
函館を動かす我が校OB
座談会『地域振興・再生に必要なこと』
- ・学長インタビュー
学長 溝田 春夫
- ・平成25年度就職実績
就職に向けた様々な事業を展開し、高い就職実績を実現



Vol.28 2015年8月発刊

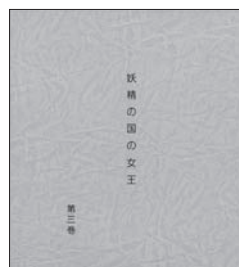
- ・特集
開学50周年
新体制での新たな挑戦！
- ・学長インタビュー
学長 野又 淳司
- ・平成26年度就職実績
前年を上回る高い就職率を実現した、各種の就職支援



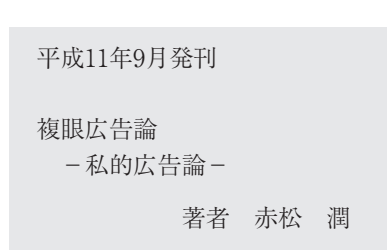
函館大学出版会が発行した書籍12冊を以下に記す。
これらの書籍は大学図書館で所蔵している。



平成9年6月 発行
香雪園の四季と樹木
- 函館見晴公園探訪 -
著者 上平 幸好



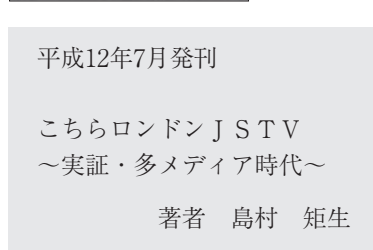
平成10年8月 発行
エドモンド・スペンサー作
妖精の国の女王 第三巻
翻訳 宮崎 正孝



平成11年9月 発行

複眼広告論
- 私的広告論 -

著者 赤松 潤



平成12年7月 発行

こちらロンドン JSTV
~実証・多メディア時代~

著者 島村 矩生



平成13年6月 発行

(上級) 英和語彙・熟語・
語法・用法辞典

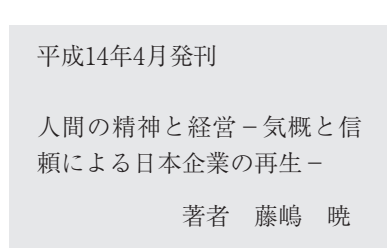
著者 高月 晋



平成13年8月 発行

ヨーロッパ文化散歩

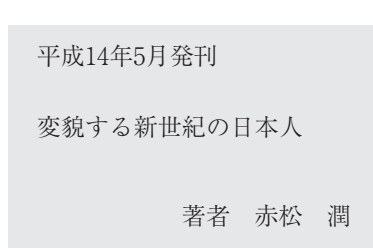
著者 島村 矩生



平成14年4月 発行

人間の精神と経営 - 気概と信
頼による日本企業の再生 -

著者 藤嶋 暁



平成14年5月 発行

変貌する新世紀の日本人

著者 赤松 潤



平成14年9月 発行

サイゴン陥落のレクイエム
~インドシナ有事の生と死~

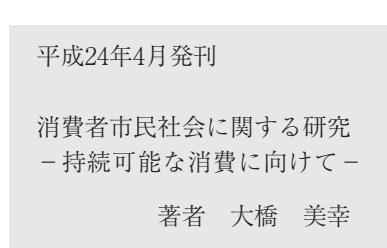
著者 島村 矩生



平成14年9月 発行

箱館をめぐる人物史
- 19世紀人の光と影 -

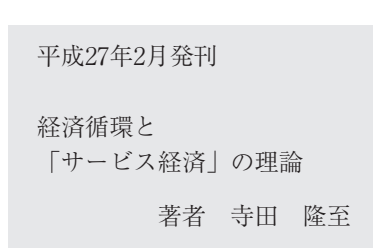
著者 小林 裕幸



平成24年4月 発行

消費者市民社会に関する研究
- 持続可能な消費に向けて -

著者 大橋 美幸



平成27年2月 発行

経済循環と
「サービス経済」の理論

著者 寺田 隆至



VI

学友会・大学祭・
同窓会・協学会のあゆみ



学友会 のあゆみ

▶ 歴代学友会役員（判明分）

年 度	役 職 名	氏 名	年 度	役 職 名	氏 名
昭和63年 (1988年)	総務局局長	今 野 博 一	平成12年 (2000年)	総務局局長	岩 崎 剛 也
	体育局局長	伊 藤 隆 一		体育局局長	岩 崎 剛 也
	文化局局長	八 木 健 児		文化局局長	佐 藤 怜 希
平成元年 (1989年)	総務局局長	岸 本 大 典		監査部会計監査	松 平 佳 憲
	体育局局長	村 山 智 幸	平成13年 (2001年)	総務局局長	森 弘 剛
	文化局局長	白 鳥 裕 巳		体育局局長	川 井 学
平成4年 (1992年)	総務局局長	今 野 正		文化局局長	斉 藤 悠 太
	体育局局長	小 松 英 樹		監査部会計監査	岩 崎 剛 也
	文化局局長	新 関 克 彦		監査部業務監査	岩 崎 剛 也
平成5年 (1993年)	総務局局長	新 関 克 彦	平成14年 (2002年)	総務局局長	佐 藤 梢
	体育局局長	古 本 真 也		体育局局長	佐 藤 洋 樹
	文化局局長	永 井 澄 生		文化局局長	熊 木 公 哉
平成6年 (1994年)	総務局局長	奥 村 健		監査部会計監査	森 弘 剛
	体育局局長	磯 崎 浩 司		監査部業務監査	斉 藤 悠 太
	文化局局長	岩 田 慎 一	平成15年 (2003年)	総務局局長	橋 本 真 弘
平成7年 (1995年)	総務局局長	佐 藤 芳 久		体育局局長	酒 井 健
	体育局局長	佐々木 貴 宏		文化局局長	佐 藤 公 亮
	文化局局長	才 野 智 伸		監査部会計監査	金 子 真 介
平成8年 (1996年)	総務局局長	松 本 洋		監査部業務監査	佐 藤 梢
	体育局局長	佐 藤 知 和	平成16年 (2004年)	総務局局長	鎌 田 浩 也
	文化局局長	才 野 智 伸		体育局局長	大久保 雄 介
平成9年 (1997年)	総務局局長	八木沼 亮		文化局局長	齋 木 敏 春
	体育局局長	佐 藤 知 和	平成17年 (2005年)	総務局局長	鎌 田 浩 也
	文化局局長	松 本 洋		体育局局長	佐 藤 幹 弘
平成10年 (1998年)	総務局局長	今 野 博 一		文化局局長	野邊地 優
	体育局局長	伊 藤 隆 一	平成18年 (2006年)	総務局局長	重 山 喜 重
	文化局局長	八 木 健 児		体育局局長	佐 藤 幹 弘
	監査部会計監査	八木沼 亮		文化局局長	野邊地 優
	監査部業務監査	佐 藤 知 和	平成19年 (2007年)	事務局 局長	浅 野 逸 美
平成11年 (1999年)	総務局局長	八 木 健 児		事務局次長(総務)	平 田 淳 一
	体育局局長	伊 藤 隆 一		〃 (会計)	裕 田 麻 扶
	文化局局長	海 端 慶 子		〃 (クラブ)	富 崎 幸 二
	監査部会計監査	今 野 博 一		〃 (イベント)	清 水 律 志
	監査部業務監査	堀 野 尚 久			

年 度	役 職 名	氏 名	年 度	役 職 名	氏 名
平成20年 (2008年)	事 務 局 長	清 水 律 志	平成24年 (2012年)	事 務 局 長	辻 彩 樹
	事務局次長(総 務)	杓 田 麻 扶		事務局次長(総 務)	佐々木 紀 之
	〃 (クラブ)	富 崎 幸 二		〃 (会 計)	木 村 正 俊
	〃 (イベント)	小 林 由 美		〃 (クラブ)	菊 地 祐 平
平成21年 (2009年)	事 務 局 長	近 藤 育 美		〃 (イベント)	佐 藤 杏 介
	事務局次長(総 務)	藤 原 由 美	平成25年 (2013年)	事 務 局 長	佐々木 紀 之
	〃 (イベント)	小田島 貴 俊		事務局次長(会 計)	木 村 正 俊
平成22年 (2010年)	事 務 局 長	松 岡 敬 介		〃 (クラブ)	佐 藤 知 樹
	事務局次長(総 務)	小田島 貴 俊		〃 (イベント)	佐 藤 杏 介
	〃 (クラブ)	安 田 亮	平成26年 (2014年) 〃 平成27年 (2015年)	事 務 局 長	田 川 菜 奈
	〃 (イベント)	本 田 翔 平		事務局次長(総 務)	鈴 木 恵 理
平成23年 (2011年)	事 務 局 長	小田島 貴 俊		〃 (会 計)	手 塚 美 穂
	事務局次長(総 務)	辻 彩 樹		〃 (クラブ)	菅 又 めぐみ
	〃 (クラブ)	渡 辺 詠 子			
	〃 (イベント)	松 岡 敬 介			

大学祭のあゆみ

回数	開催年度	テ　　ー　　マ	期　　間	委員長
1	昭和40年 (1965年)	学生の生くべき姿	10月30日 ～ 11月1日	高崎 勝博
2	昭和41年 (1966年)	「和」和とは人間の絆である。そこには友情がある。友情とは相互の理解を深める愛情であり愛情とは良き生活の最大の基礎である。それ故、『和』は人間社会の最大の基礎である。	10月28日 ～ 10月30日	内糸 和治
3	昭和42年 (1967年)	「決集より躍進へ」 若人の生命の息吹きをここに決集させ共に語り、共に学び、共に分ち合い真理探究し躍進しよう	11月2日 ～ 11月5日	西川 明
4	昭和43年 (1968年)	若い力で創造の火を燃やそう	11月1日 ～ 11月3日	花海 吉夫
5	昭和44年 (1969年)	大学祭を自らの手で作りあげよう そして、それが意義あるものにしよう	10月30日 ～ 11月3日	可香谷 彰
6	昭和45年 (1970年)	クリエイティブに、しかも効果的に取り組もう	11月12日 ～ 11月16日	菊地 均
7	昭和46年 (1971年)	高度の知性と人間性を求めて	10月21日 ～ 10月24日	井上 貢
8	昭和47年 (1972年)	精神的起爆剤の若人の祭典を	10月12日 ～ 10月15日	田中 誠司
9	昭和48年 (1973年)	我々の高き理想と団結を持って若い力を発揮しよう	10月11日 ～ 10月14日	本郷 敏春
10	昭和49年 (1974年)	かち取ろう われらが手で 皆さん 私たちの学園に学問・文化・スポーツの花を咲かせよう	6月14日 ～ 6月16日	川井 宏道
11	昭和50年 (1975年)	他校の友・市民との交流を深めようー他校との交流・外国人との交流を通じて函大祭を盛り上げよう	6月20日 ～ 6月23日	垣野 利明
12	昭和51年 (1976年)	展換ー集合（全員参加）・アピール（30万人）・サービス	10月21日 ～ 10月24日	下芋坪千雄
13	昭和52年 (1977年)	胎動ー新しい創造への息吹ー	10月14日 ～ 10月17日	笹尾 文裕
14	昭和53年 (1978年)	ホワイトー無からの出発ー	10月7日 ～ 10月10日	松坂 吉通

回数	開催年度	テ　　ー　　マ	期　　間	委員長
15	昭和54年 (1979年)	協奏—おお友よ これらの音ではなく もっと快いものに声を合 わせようもっと喜ばしいものに—	6月20日 ～ 6月24日	後藤 亮
16	昭和55年 (1980年)	叫び—聞け 内なる叫びを今 あなたに	6月19日 ～ 6月22日	堺栄 光記
17	昭和56年 (1981年)	燃焼—燃え続ける 若者よ—	6月17日 ～ 6月21日	湊 義章
18	昭和57年 (1982年)	超越—苦しみをのりこえて—	6月16日 ～ 6月20日	越後 政宏
19	昭和58年 (1983年)	再建—NOT SECOND TIME	6月16日 ～ 6月19日	林 達文
20	昭和59年 (1984年)	「鳳」 深層よりはばたけ	6月21日 ～ 6月24日	横田 裕幸
21	昭和60年 (1985年)	創造—すべての生命は海から創造された	6月20日 ～ 6月23日	荒川 直樹
	昭和61年 (1986年)	中止		
22	昭和62年 (1987年)	「復活」 THE REVIVAL OF OUR SPIRITS	10月9日 ～ 10月12日	川前 千景
23	昭和63年 (1988年)	ARE YOU READY ? だって大学なんだもん	10月21日 ～ 10月24日	沢畑 泰之
24	平成元年 (1989年)	「維新」 RESTRATION	10月27日 ～ 10月30日	宮原 康成
25	平成2年 (1990年)	夜景のようにまばゆく輝け	10月19日 ～ 10月22日	白鳥 裕己
26	平成3年 (1991年)	IDENTITY 禅 自我同一性の確立 青年期に自我に目ざめ 自 分について考える	10月18日 ～ 10月21日	丸谷 剛士
27	平成4年 (1992年)	MOVE ON	10月22日 ～ 10月25日	山内 貴

回数	開催年度	テ　　ー　　マ	期　　間	委員長
28	平成5年 (1993年)	EMOTIONALISM ～多感主義～	10月15日 ～ 10月18日	山内　　貴
29	平成6年 (1994年)	あっ　閃き　驚き　発見　大学祭で見つけて下さい	10月14日 ～ 10月17日	古本　真也
30	平成7年 (1995年)	「三十路道楽」 ～かわらなきや三十祭～	10月20日 ～ 10月23日	澤田　有亮
31	平成8年 (1996年)	READY GO・・・限りない未来へ	10月18日 ～ 10月21日	山本　幸男
32	平成9年 (1997年)	STEP BY STEP	10月17日 ～ 10月20日	植田　英治
33	平成10年 (1998年)	MAIN THEME OF　かけ橋　人類と自然との共存それは我々の永遠のテーマである。過去から現在　そして未来へと絶望か希望のかけ橋。この大学祭もまさにその時を迎えている。	10月16日 ～ 10月19日	田口盛一郎
34	平成11年 (1999年)	「火」	10月15日 ～ 10月18日	松浦　久人
35	平成12年 (2000年)	「水」	10月13日 ～ 10月16日	山崎　貴史
36	平成13年 (2001年)	「風」・・・皆さんとともに　新しい様々な風をいっしょに起こしましょう	10月19日 ～ 10月20日	岩崎　剛也
37	平成14年 (2002年)	「翼」	10月19日 ～ 10月20日	松本めぐみ
38	平成15年 (2003年)	「CREATIVE POWER」・・・零からの創造	10月18日 ～ 10月19日	金子　真介
39	平成16年 (2004年)	「虹」～ONE FOR ALL、ALL FOR ONE～	10月16日 ～ 10月17日	大久保雄介
40	平成17年 (2005年)	「楽」～楽しくなければ祭じゃない～	10月15日 ～ 10月16日	重山　喜重
41	平成18年 (2006年)	「笑」～最近いつ笑いましたか～	10月14日 ～ 10月15日	橘　　高広

回数	開催年度	テ ー マ	期 間	委員長
42	平成19年 (2007年)	「POWER」	10月13日 ～ 10月14日	浅野 逸美
43	平成20年 (2008年)	「輪」	10月11日 ～ 10月12日	清水 律志
44	平成21年 (2009年)	「希」	10月17日 ～ 10月18日	近藤 育美
45	平成22年 (2010年)	「育」	10月16日 ～ 10月17日	松岡 敬介
46	平成23年 (2011年)	「楽しくなければ祭じゃないじゃん」	10月2日	小田島貴俊
47	平成24年 (2012年)	テーマなし	10月21日	辻 彩樹
48	平成25年 (2013年)	「繋」～函大で結ぶ人と人との輪～	10月13日	佐々木紀之
49	平成26年 (2014年)	「集」きずな～集うことに意味がある～	10月19日	田川 菜奈

同窓会のあゆみ

昭和44年3月13日、卒業式終了後に同窓会の発会式が行われ、会長に飯田石勝氏、副会長に宮腰泰直、酒井和博両氏を、また、幹事長に佐藤弘之氏を選出、共に門出を祝った。結成当初は大学行事への参加や卒業生への記念品贈呈などの活動をしていたが、第二代会長大山紀明氏（2回生）の時代の昭和53年に、硬式野球部が悲願であった道内優勝を果たし、全国大会へ駒を進めることとなり、同窓会も大学への資金協力を結束して当たったことが同窓会飛躍のきっかけになった。

これらを受けて、第三代会長松倉清治氏（1回生）は組織作りを本格化し、「同窓会旗」および「同窓会ネクタイピン」を製作し、次いで種々苦勞の末作成した第1号名簿をさらに充実すべく第2号を発行し、20周年に合わせ第3号を発行するなど精力的に活動された。その後平成11年に第4号、平成16年に第5号が作成されたがそれ以降「個人情報保護法」の制定により、同窓会としての対応を決めかねて発行されていない。この間大学の入学者も増加していき、同窓会会計は収入が増えて行った。これにより支部の設立や在学生への援助も十分に行われるようになった。

歴代会長は前述第三代以降、第四代会長三上武氏（1回生）、第五代会長高橋勝美氏（1回生）、第六代会長松尾正寿氏（1回生）、と1・2回生を中心として活動してきたが、平成20年7月から9回生の木村一雄氏にバトンタッチをし、幹部の若返りをはかり、フェイス・ブックやホームページの整備、全国大会出場者への援助金制度創設など、より活発な同窓会活動へと歩を進めている。

この間、平成13年10月には校舎増築記念事業に合わせ、野又学園連合同窓会が主体となり、創立者野又貞夫先生の胸像を校舎正面の前庭に建立した。

現在、会員数は9,500名を超え、関東支部、青森支部、札幌支部の3支部があり、本部、支部各々が主催する懇親交流会の開催、後輩学生に対する遠征費の補助等経済支援や就職支援など活発な活動を行っている。また、野又学園連合同窓会と連携した周年事業などの活動も行っている。学生数の急激な減少の影響を受け、同窓会費の年間収入も激減しており、今後の同窓会活動に赤信号が灯る日も遠くないことが予想されることから、活動の見直しを図り、財政を圧縮しながらも、同窓生の繋がりを深め、大学の発展を目途とするため、大学の両輪として同窓会活動を継続している。

なお、平成27年7月の総会後の懇親会において、木村会長より野又学長へ創立50周年にあたり同窓会から100万円の寄付が贈呈された。

同窓会より開学▶
50周年にあたり、
100万円を寄付



▲平成27年7月 同窓会懇親会

協学会のあゆみ

よい教育の実践には、父兄も側面援助をし、大学・父母一体の形をとらなければならない。そのためにまず昭和43年5月、仮称父兄会設立準備委員会がもたれた。

準備委員は次の通り

村田教授、伊藤（結）助教授、大野専任講師、森事務長

この会は、準備委員会によって、協学会と名付けられ、7月2日、協学会設立世話人打合会がもたれた後、7月8日、商工会議所で第1回総会が開催された。

設立の目的は、「家庭と大学との関係を緊密にし、父母と教授とが互に理解をもって、学生および教職員の福祉を増進する為に努力する」ことである。会員は、函館大学に在籍する学生の父母またはこれに代わる人、並びに本学教職員および賛同する有志である。経費は会費および寄附金をもって支弁するとした。

初代会長は菊田小太郎氏が就任し、同副会長に岩平正吉、吉川梅雄、田中友勝、3氏が就任された。

設立時（昭和43年度）の予算は右記の通りである。

当初の地区懇談会は札幌・釧路・網走・旭川・青森・盛岡・函館と7都市での開催であった。

その後、18歳人口の増加時期とあいまって本州からの入学生が増えたこともあり、仙台、東京、大阪、新潟と開催地を増やしていき、10～11都市での開催となっていった。特に急増期の東京会場では1日での開催が不可能なほどの参加者となり、2日間開催が続いた。その後入学者の急減期となり、特に道内では道東の入学者が減少し、釧路・網走・帯広では開催ができな

いほど入学者が減少し、現在は旭川も開催することなく、札幌・函館の2都市での開催となっている。本州では関東・関西からの入学生が激減し、次いで仙台会場も閉鎖し、現在は青森・秋田・盛岡・熊本・新潟・札幌・函館の7都市での開催となっている。

協学会予算も設立当初の収入1,584,000円から学生数がピークの平成8年度決算収入は13,613,000円と大幅な増加を見た中で、体育館のトレーニング機器の整備や学生の全国大会出場にも多大な援助をすることが可能となった。

第二代会長の田中友勝氏は15年、第三代川越耕吉氏も10年の永きにわたり会長を務められ多大なる貢献をしていただいた。第四代山村幸生氏の在任中の平成13年10月12日には、協学会から校舎増築記念事業として日展会員加藤為男作

I. 一般会計（昭和43年度）

項 目		S43 予算	S43 決算
収 入	会 費	1,584,000	1,339,800
	計	1,584,000	1,339,800
支 出	研 究 援 助 費	150,000	86,390
	奨学(学生)援助費	150,000	0
	学生厚生補導費	50,000	5,000
	地 区 懇 談 会 費	140,000	111,454
	図 書 費	400,000	0
	就 職 開 拓 費	400,000	0
	校 舎 備 品 費	100,000	0
	通 信 費	60,000	15,420
	印 刷 費	50,000	31,500
	会 議 費	40,000	13,409
	慶 弔 費	30,000	0
	予 備 費	14,000	3,200
	次 期 繰 越	0	1,073,427
	計	1,584,000	1,339,800

『十五歳の秋』と題したブロンズ像および環境整備費として500万円が贈呈された。第五代大桃泰行氏、第六代宮川照平氏を経て、現在は第七代会長として吉川達也氏が就任している。

学生数ピーク時の平成8年度の予算は下記の通りである。

I. 一般会計（平成8年度）

項 目		H8 予算	H8 決算
収 入	会 費	12,480,000	12,570,000
	雑 収 入	10,000	10,971
	前 期 繰 越 金	1,032,182	1,032,182
	計	13,522,182	13,613,153
支 出	研 究 援 助 費	1,800,000	1,703,905
	奨学(学生)援助費	4,700,000	4,700,000
	学生厚生補導費	0	0
	地 区 懇 談 会 費	3,600,000	3,565,570
	図 書 費	0	0
	就 職 開 拓 費	0	0
	校 舎 備 品 費	0	0
	記 念 事 業 積 立 金	834,647	837,527
	施 設 充 実 援 助 金	400,000	400,000
	通 信 費	730,000	577,650
	印 刷 費	360,000	290,736
	会 議 費	830,000	607,733
	慶 弔 費	140,000	96,050
	予 備 費	127,535	10,922
	次 期 繰 越	0	823,060
	計	13,522,182	13,613,153

II. 記念事業会計（平成8年度）

項 目		H8 予算	H8 決算
収 入	創立30周年記念事業金	4,135,353	4,135,353
	当 年 度 積 立 金	834,647	837,527
	雑 収 入	30,000	27,120
	計	5,000,000	5,000,000
支 出	記 念 事 業	5,000,000	0
	次 期 繰 越 金	0	5,000,000
	計	5,000,000	5,000,000

平成25年度の予算は下記の通りである。

最近の主な活動としては道内2ヵ所、本州6ヵ所の計8ヵ所で行う地区懇談会（保護者との懇談会）および教職員・学生の教育研究（ゼミナール研修・商学実習）補助等、課外活動に対する経済支援（全国大会遠征費補助）である。

I. 一般会計（平成25年度）

項 目		H25 予算	H25 決算
収 入	会 費	3,240,000	3,240,000
	雑 収 入	500	517
	前 期 繰 越 金	1,316,176	1,315,176
	計	4,555,676	4,555,693
支 出	研 究 援 助 費	1,000,000	148,025
	奨学(学生)援助費	1,400,000	946,000
	地 区 懇 談 会 費	1,000,000	586,193
	通 信 費	100,000	60,457
	印 刷 費	150,000	127,228
	会 議 費	10,000	7,500
	慶 弔 費	70,000	99,474
	雑 費	10,000	1,281
	予 備 費	815,676	100,922
	次 期 繰 越	0	2,579,535
	計	4,555,676	4,555,693

VII

母校に寄す





「創立50周年に寄せて」

〔1期生〕 松 尾 正 寿

函館大学創立50周年を心からお祝い申し上げます。学園訓の報恩感謝・常識涵養・実践躬行のもと、高度な専門性・豊かな人間性・健全な社会性の養成を目指し、実践性を養い、多様な個性を発展させ、広く、主体的に活躍できる人材を育成するとともに、地域社会に貢献する事を理念とし、函館圏はもとより全国に多くの優秀な人材を輩出し活躍している姿に自分の事のようにうれしく思います。

ふりかえって見ますと、昭和43年5月に起きた十勝沖地震で大きな被害を受け、本校が存続の危機に見舞われ、学園関係者や学生も不安の中、不屈の精神のもと、いまは亡き野又貞夫先生を筆頭に、函館市、経済界、そして多くの市民の御支援により昭和44年8月に校舎を復興。新たな大学のスタートとして出発し、現在は立派に新築され、また新たに図書館の設置、幅広い地域住民との協調そして市民とのコミュニティの場として多くの市民に開放され、生涯教育の役割を果たすコミュニティ・センターとして地域社会に多大な貢献をされておりますことに心から感謝申し上げます。

私は第1回生の卒業生として、学園長であります野又肇先生のゼミナールの学生として、まさに兄弟のように接していただき、地域社会に貢献する人間としての教育を学び、一方では硬式野球部に在席し選手として、思えば新設の大学ですから大学の名前を全道・全国に知らしめようと学生ながらに一生懸命頑張った事が思い

出されます。

また、2年前には野又学園そして卒業生の皆様の御支援のもと、第44代函館市議会議員として活躍の場をあたえていただき、函館市の発展に微力ではありますが仕事をさせていただき、現在は一議員として学園三訓を座右の銘とし、今日まで私を育ててくれた野又学園、そして函館大学に感謝し、市民生活の向上と心豊かに市民だれもが安心して住んでいて良かったと言われる街作りの為努力してまいる所存です。

さて、平成28年3月函館市民そして北海道民が待ち望んでいた北海道新幹線がいよいよ開業致します。この事により、この地域も大きく変わろうとしており、青函圏はもとより、東北地方や北関東地域との交流の拡大が見込まれ、人・物・経済・食文化の交流が活発化し、我が街・函館の更なる発展が大きく期待される所であり、母校・函館大学も更に幅広い人材の確保・育成に期待が高まり、地域社会に開かれた大学としての役割が一層望まれる事と思います。

今後ともより一層の発展と学園の建学の精神を堅持し新しい時代の先駆者として、一層充実発展され、すぐれた人材を育て地域社会の発展に更なる大きな役割を果たされ、函館市の発展にもご貢献いただきます事を念願し、函館大学が地域社会の発展はもとより国際社会にも大きく貢献する人材の育成に御尽力・御活躍されます事を祈念し、お祝いの言葉と致します。

私の好きな言葉です。

はまなす
 玫瑰や いまも沖には 未来あり

「創立50周年に寄せて」

〔3期生〕 渡 邊 兼 一

函館大学が創立50周年を迎えることが出来、卒業生として、衷心より祝意を表します。これもひとえに創立当初より献身的に教育に対して情熱を燃やされ、ご指導にあたってこられた野又貞夫理事長はじめ教授・職員皆様の並々なご努力の賜物と深く敬意を表します。

ここ函館の長い歴史の中で、近年、大きな転機を迎えております。先の東日本大震災では、函館も大きな津波被害を受けております。想定以上の自然災害には人間の無力を感じ、この教訓を基に、函館大学と函館市では相互協力協定を結ばれ、防災に関する地域との連携が行われると伺っております。

また、近年の急激な国際化は欧米のみならず、台湾・中国・韓国・アセアン諸国と往来する国々は多様化し、観光客にも国際化という大きな変化が見られました。ホスピタリティ充実の為に、語学力を含めた外国人と積極的な交流ができる国際感覚を持ち合わせた人材が求められております。グローバル化が進み、幅広い知識と柔軟な思考力に応じた人材育成に、本学の果たす役割が益々高まるものと期待しております。

そして、長らく人口減少と経済が停滞していた函館にやっと一筋の光が差し込んで参りました。来る2016年3月には、悲願の北海道新幹線開業を迎えます。関東圏・東北圏との往来増は、観光業界、経済界全体にとって千載一遇のチャンスと捉え、道南全域の飛躍に向けて大きな期待を寄せているところです。平成25年には、観

光を題材に大学生と社会人の共同教育の拠点として、函館大学バイエリアサテライトが開設されました。観光現場で学生が得る生の経験を活かす時代がやってきたのです。北海道新幹線時代を迎える地域経済を担う人材として、正に本学の卒業生が多面で今後益々活躍することになるでしょう。

本学は「報恩感謝」「常識涵養」「実践躬行」を信条に、心身を積極的に練磨し、正しい判断力と自立的な生活態度によって、何事にも主体的に実践し、敬愛に基づく人間関係を深め、社会の創造、発展に貢献できる人間育成、時代の流れを先取りする優秀な人材育成に努めて来られました。道南をはじめとする地域の期待は益々大きくなり、本学の果たすべき役割は今後、尚一層重要になるものと考えます。

創立50周年という節目に、過去から現在を見つめそして未来を展望する機会とされ、建学の精神を心にしっかりと添えて、更に豊かな歴史を繋いでいかれることを祈念し、お祝いの言葉と致します。

「創立50周年に寄せて」

同窓会札幌支部長

〔2期生〕 西 谷 憲 一

昭和41年4月に2回生として入学いたしました。有斗高校からの先輩や多くの仲間がおりましたので楽しい学生生活が始まりました。一年間柏木町の寮で各地より入学してきた仲間との寮生活でした。すぐさま応援団に誘われ、4年間後輩の皆様に学園歌、校歌の指導をさせていただきました。体育館に集まってもらい一部強制的



な指導もあったように思い、申し訳なかった気もしております。

2年後でした。楽しい学生生活だったのですが十勝沖地震で校舎が全壊してしまいました。地震の恐ろしさを体験いたしました。

しかし、すぐに部活の部室や体育館にて講義が続けられました。狭い暑苦しい授業でした。教授と学生と一緒に頑張っている様に見え、ゼミの時間が一番楽しいと感じた時でした。4年間無事に過ごして現在の佐藤印刷(株)に就職して今日に至っております。

同窓会札幌支部長として多くの仲間と親交を深めています。年に一度函館での総会出席も皆様と一緒にゴルフや飲み会が楽しみの一つになっております。

札幌支部でも毎年8月最終土曜日に支部懇親会を行っております。学長はじめ、同窓会長、幹事長様方のご出席をいただき、支部を応援してもらい感謝しております。

在学中はあまり感じませんでしたが、就職してから学園訓が素晴らしい言葉だと思うようになりました。「報恩感謝」「常識涵養」「実践躬行」この言葉を忘れぬよう今でも手帳に貼り付けて時々読んでおります。今後も大切にしたい学園訓です。

創立50周年、この意義ある年に寄稿させていただきます感謝いたします。

「創立50周年に寄せて」

同窓会関東支部長
〔15期生〕 川 原 敏 裕

函館大学創立50周年おめでとうございます。

私は昭和54年入学、58年卒業、15期の川原敏裕です。函館大学に入学する事に当たっては、私が高校生の頃から北海道が好きで、初めは蒸気機関車や列車の写真を撮り歩き、そして大自然をカニ族として旅行をしていました。その様な事がきっかけで大学に行くのなら北海道の大学にしたいという思いから函館大学に入学する事となりました。

そして学生時代はまだまだ昭和の色濃く残る時でした。私が入学をした15回生位から私を含め東京や地方出身者の学生が多く入学し、学生数も年々増えた時代でした。私事ですが大学生生活4年を賄い付の下宿で過ごし、同下宿の卒業生の先輩から何らかのクラブ活動を行った方が良いと進められ、写真部にてコミュニケーション作りをしました。当時も運動部は大変活躍をしていましたが、私は写真部にて、ポートレートや大自然の風景を多く撮影していました。部活では縦の繋がりコミュニケーションは少し出来ましたが、15期生は横の繋がりがとても強く、今も良く連絡を取り合っております。

私は今、函館大学同窓会の関東支部の支部長を行っております。函館大学の卒業生が9,560名おります。その内、関東一都七県に約2,000名以上の卒業生が点在しております。私が同窓会に出席を始めたのはちょうど卒業して10年が経った頃からで、同期の貴重な女子からの誘いがきっかけでした。当時は大きな会場を借りて出席者もとても多く約200名近くの参加者がありました。大学側からも学長を初め数名の教授の参加がありました。参加の多くは運動部が中心で学生時代の昔話に盛り上がっておりました。同窓会は数年間続いていましたが転勤、転職、

結婚などで数年間同窓会に参加をしていなかったのですが、再び40代後半に参加をした時には数十名まで減り、今現在も参加人数が少ないです。理由と思われるのは同窓会はとても堅苦しいイメージが有る事や各クラブ活動の懇親会が頻繁に有る事、同期同士の横の繋がりが少ない事が考えられます。懇親会や同期会を是非同窓会に合わせ、同窓会を皆さんの力で盛り上げて下さい。

来年の春には東京から新函館北斗まで新幹線も繋がります。函館も東京も再開発で街並みも変わりつつありますが、これからの函館大学及び函館の発展を願っております。

創立50年おめでとうございます。

「創立50周年に寄せて」

〔19期生〕 古久根 靖

創立50周年！誠におめでとうございます。私は昭和62年卒業の第19回生ですので、函館大学を卒業して、早いもので丸28年が過ぎたことになります。私は愛知県生まれで、函大卒業後は地元に戻り、家業の鋳造会社を継いでいますが、函館大学4年間のことは、本当に甘酸っぱくも、美しい思い出として、今も心に深く刻まれています。それは、函館の美しい街並みや夜景、美味しい食べ物や、歴史的背景もさることながら、一番はやはり、4年間を共に過ごした仲間と、恩師の存在があったからに他なりません。

思えば、高校を卒業して間もない二十歳前後の若者で、まだまだ未熟で本当に青かったと思います。五十歳を過ぎた今でも、気持ちはあの

頃のまま！と思いつつ、経験値は桁違いとなりました。性格や心根などは、「三つ子の魂百まで」と言われる様に、子供の頃から函大時代も、今も、大差ない様に思います。ただ当たり前ですが、学生に社会人としての経験も自覚もある訳もなく、やはり「未熟」そのものなのです。ただ青いだけで、気持ちも心根も今とさほど変わっていない！でも、気持ちや心根が清く正しくとも、社会人として立派にやっけて行けるかどうかは分からない。まるで、暗中模索な青春時代でした。

つまり、私にとって函館大学の4年間は、葛藤の日々であり、社会に出るまでの準備の日々だったと思います。そのとても微妙で、ともすると危うい時を共に過ごし、支えてくれたのが、かけがえのない友であり、それを見守ってくださったのが、恩師（溝田教授）でした。思い起こせば、青くてとてもドラマチックな函館時代でした。

日本には人生の喜怒哀楽の様な四季があり、とりわけ北海道函館には、異国情緒も手伝いよりドラマチックな春夏秋冬がめぐります。そして函館には、明治維新で殉死したラストサムライも眠る、正に「温故知新」な教えがあります。土方歳三も登ったであろう函館山に何度登ったことか。その函館山から一望できる日本一美しい夜景の中で、どれだけの時を過ごしたことか。あの時があったからこそ、今の自分があります。

函館、そこで50年の歴史を刻む函館大学には、人生をドラマチックにする為のレシピがあります。今も目を閉じて函館を想えば、瞼の中に美しい夜景が広がります。

函館大学の灯火が永久に輝き続けます様！



「創立50周年を記念して」

〔28期生〕 高 橋 和 将

函館大学創立50周年おめでとうございます。
大学創立50周年の節目となる記念誌に寄稿させて頂きます事を、大変嬉しく、又、栄誉な事と痛感しております。

私が平成7年に函館大学を卒業してからというもの、早、20年が経過致しました。現在はキャラクタービジネスを行う自営業の他に地域連携コーディネーターとして函館大学に勤務をさせて頂いております。

今も大学におりますと、当時の思い出が鮮明に思い出されます。恥ずかしながら、4年間で卒業せず1年多く、5年をかけて卒業をしましたが、函館の地で、一人で生活をし、色々な事を考え、行動し、仲間たちと大いに楽しみ、悩み、そして自分自身が大きく成長した大変貴重な時間でした。又、現在の職業や人生に大いに影響を及ぼしたと思っています。当時、お世話になった先生方は現在も多く大学に勤務されていらっしゃると思います。大学時代、在籍をしていましたスキー部の顧問である若松先生を始め、今も変わらず先生方から、ご指導を頂いております。在学当時、私達の生まれた時代は第二次ベビーブーム世代で、1学年で、300名～400名の学生が在籍しておりました。学生が入りきらない位の講義の教室や食堂、大学の周辺には全国から来た学生達が生活をしており、大学を取り巻く環境は大変活気に満ち溢れていました。

時は変わり、現在では少子化高齢化の流れが進み、学生数の減少が進みつつあります。日本

全国の大学、特に地方都市の大学は大きな転換期を迎えています。景気においても北海道は大都市と比べまだまだ温度差があり、まだ景気の上向きを大きく実感する事は中々ありません。

とはいえ、函館を中心とした道南地区には今後の活性化に繋がる様々な要素（キーワード）が多数あります。【国際観光都市】、【北海道新幹線開業】、【アジア圏からの定期就航便】、【地方創生】、多少意味合いが重なりますが【インバウンド（外国人観光客）の飛躍的増加】等。これらを受けて函館の街も少しずつ動き始めてきているように感じます。大きく飛躍するこのタイミングを函館で体感できるのは非常に楽しみであり、大変期待をしています。このような環境の下で勉強ができる函館大学の学生においては是非、他の地域とのアドバンテージを感じながら勉学に励んで頂きたいと思います。ただ知識を身につけるだけでなく、総合的な人間力、国際的な思考・実行力を身につけることもこれからの社会生活において重要な要素になってきます。その様な人材を多く輩出されることを祈ってやみません。今までに函館大学を卒業された諸先輩の方々は全国にて活躍をされています。特に函館においては、様々な要職に就かれている方が多くいらっしゃいます。

この50年を区切りに、新たな未来に向かって、函館大学並びに函館がますます発展していくことを心より祈念いたします。

「創立50周年に寄せて」

〔31期生〕 増 田 博 巳

創立50周年まことにめでとうございます。

企業が長期に亘り経営を継続していく事は本当に大変な事です。私の勤務している会社も本年度65周年を迎えております。長い人生苦悩し、試行錯誤の繰り返しにて、この激動のグローバル時代に多くの方々へ感謝し、貢献できることを日々思いながら、楽しい人生を送っております。この激化する時代の中柔軟に対応できる人格形成が可能になったのも第2の故郷ともいえる「函館」だと思います。4年間の学生生活にて学業・スポーツ（軟庭部）、また多くの方との交流の中で継続力・忍耐力・想像力・創作力等々多様な事を多く吸収することが出来、現在のビジネスパーソンとして生きる事が出来ています。多くを学び、多く遊び、多様な経験をさせて頂いた両親に今となって大感謝です。

また、人々の良き触れ合い・自然との触れ合いを吸収させてくれたのも、この「函館」だと思います。間違いなく、大切な4年間を過ごした事で現在の私があると思います。今の時代柔軟な判断決断が求められ、自己の存在価値を伝達し、臨機応変に対応が出来る人こそ日本国内のみならず海外でも活躍できる人だと思います。

企業は大小ではなく、継続・継承をしている事と夢と希望をもてる事が企業の発展に繋がり、そのような企業に入ること、有意義な社会生活を送ることが出来るのだと思います。現在、私自身の職業も夢と希望を持ちながら、工作機械の専門商社として多くのサプライヤー様と夢

のあるお付き合いをさせて頂いております。皆様方が日々使われている自動車・携帯電話・家電品などの生産工程の中で微力ながら貢献させて頂き、日々精進しております。その経験からベースとなる多くの事を学ぶことができる学生時代を有効に、そして、有意義に過ごす事が、多様化する国際社会また一流のビジネスパーソンとして本当の成功に繋がると心から思います。継続するという事の厳しさ、継承する事の大変さを痛感しながら、我が母校函館大学が今まで以上に発展し、多くの方々に支持される事をお祈りし、寄稿とさせていただきます。

「創立50周年に寄せて」

〔32期生〕 山 縣 優

函館大学設立50周年を迎えるにあたり、卒業生の1人として御祝いを申し上げます。

2000年に卒業して、早いもので15年の月日が過ぎました。

いま改めて、当時のことを振り返ってみると、入学したばかりの頃の私は、一浪したのにも関わらず、第1志望だった教育大学に不合格だったショックがあまりにも大きかったためか、2次募集で合格した函館大学に入学することになっても、正直いえば“やる気がない”学生でした。

『このままずっとこんな気持ちで4年間を過ごすのだろうか…』と、極端な話、人生を捨てていた…といっても過言ではない状態でした。

そのような状態の私に真っ先に気づき、上向きに変えてってくれたのが永盛先生でした。



先生との出会いで、全く未知であった『民法』という学問に徐々に興味を持ち、授業が楽しくなり、さらに講義中に話される雑談は、私を変えてくれて、またその後の人生においてとても役立ちました。

いまでも、鮮明に覚えているのが、『通る道に無駄なことは一つもない』『縁は大切に…』というお話をされたことでした。

はじめは、何を言っているのか、その意味を理解できずにいましたが、のちに理解するようになりました。

私は、いまプロレスラーの道を歩いています。

【教師】と【プロレスラー】の道、どちらに進むかを悩み続けていたとき、永盛先生が『今しかできないのなら今やるべき』だと、背中を押してくれ、私はプロレスラーの道を選びました。

あの時、永盛先生に出会わなければ、大学進学目的であった教師になって、今頃“つまらない教師”になっていただろうと思います。それどころか、大学を中退して、今頃何をしていたのか想像もできません。

プロレスラーのキャリアは14年になり、プロレス業界ではベテランの領域に入ります。華やかに見える世界ですが、その中を生き抜くことは色々な意味で大変な世界です。

しかし、14年も続けてこられているのも永盛先生との出会いのお陰です。

最後になりますが、いま現在、函館大学に在学中である学生に、もしかしたら、私みたいな気持ちを抱き続けている学生が存在するかもしれません。しかし、私の経験上、これだけは言い切れます。たとえ、自身の志望する大学でなくても、『何かの縁でここに来ることになった』、

そして『いま通っている道で学んでいることは、いずれ何らかの形になる』ということです。

そのことを少しでも頭の片隅に置いていただき、一度しかない学生生活の“いま”を大いに楽しんでもいただきたいと思います。

「創立50周年に寄せて」

〔41期生〕 坂 田 遼

函館大学の創立50周年に心からお祝い申し上げます。これまで函館大学の発展にお力を尽くされてきた全ての方々に改めて、感謝と敬意の気持ちを表したいと思います。加えて私に、このような機会を与えて頂いたことにも深く感謝いたします。

私は、以前まで開講されていたビジネスアスリートコースに所属しておりました。素晴らしい指導者である阪内監督と中山助監督のご指導のもと、志の高い仲間たちに囲まれ、恵まれた環境の中、野球に明け暮れた4年間を過ごすことができました。高校生の時とは違い、監督方の見ていないところでも、自分に厳しく、辛いメニューをこなす先輩方に、衝撃と感銘を受けた瞬間が、私の中で大人としての自覚が育ち始めた第一歩でした。このような素晴らしい野球部のメンバーで監督方を全国大会に連れていきたい！これが、私が函館大学に入学して初めて抱いた夢でした。しかし、現実はその甘くはなく、3年生が終わっても全国大会に行くことはできませんでした。それでも諦めることなく、監督方の熱いご指導のもと、練習に練習を重ね、ついに迎えた春のリーグ戦、みんなで一致団結

して、優勝を勝ち取ることができました。全国大会に行くという最大の夢を最高のメンバーで叶えることができた！全員で熱い涙を流しました。私は運よく、プロ野球選手になる、という二つ目の夢を叶えることが出来ましたが、今でも、野球に行き詰まり、あんなに好きだった野球が嫌いになってしまいそうな時は、いつもこの瞬間を思い出し自分自身を奮い立たせています。函館大学の野球部に所属し、一生の糧となる多くのことを学ばせていただきました。

私は、卒業して7年経つ今でも年に一度、大学に顔を出させて頂いております。溝田前学長をはじめとし、監督方、先生方、事務の方々、野球部の後輩たちなど、皆さんが温かく、おかえり！と出迎えてくださいます。成績の良い時も悪い時もいつも変わらぬ笑顔で私の体調を気遣ってくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。今後も自分に厳しく、真摯に野球と向き合い、たくさんの恩返しができるように、大活躍して皆さんを笑顔にしたいと思います。

最後になりましたが、改めまして開学50周年おめでとうございます。今後の益々のご発展を祈念いたします。

VIII

クラブ活動記録



硬式野球部

年度	記 録
昭和40	第17回全道大学野球選手権大会 2回戦敗退
昭和41	第18回全道大学野球選手権大会 2回戦敗退 全道大学野球秋季新人戦（坂本杯） 初戦敗退
昭和42	北海道大学野球選手権 3位
昭和43	北海道地区大学体育大会 優勝
昭和44	全道大学野球選手権大会道南ブロック予選 優勝 函館地区三大学リーグ戦 優勝 北海道地区大学体育大会 3位 北海道地区大学新人戦 優勝
昭和45	全道学生野球道南予選 優勝 全道大学体育大会 3位
昭和46	北海道大学野球選手権 準優勝 北海道地区大学体育大会 準優勝
昭和47	明治神宮野球大会全道予選 準優勝
昭和48	明治神宮野球大会全道予選 準優勝
昭和49	全道大学野球選手権道南ブロック 優勝
昭和50	函館地区三大学リーグ 優勝
昭和51	北海道六大学野球一部校決定戦 1部リーグ決定 北海道六大学秋季リーグ 5位
昭和52	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 4位
昭和53	北海道六大学春季リーグ 優勝 第27回全日本大学野球選手権出場（神宮） 北海道六大学秋季リーグ 準優勝
昭和54	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 準優勝
昭和55	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 3位
昭和56	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 3位
昭和57	北海道六大学春季リーグ 5位 北海道六大学秋季リーグ 準優勝
昭和58	北海道六大学春季リーグ 5位 北海道六大学秋季リーグ 4位
昭和59	北海道六大学春季リーグ 5位 北海道六大学秋季リーグ 準優勝
昭和60	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 2部降格
昭和61	北海道六大学春季リーグ 2部 優勝 入替戦敗退 北海道六大学秋季リーグ 2部 準優勝
昭和62	北海道六大学春季リーグ 2部 準優勝

年度	記 録
昭和63	北海道六大学秋季リーグ 2部 準優勝 北海道六大学春季リーグ 2部 優勝 入替戦 1部昇格 北海道六大学秋季リーグ 優勝 明治神宮野球大会代表決定戦 優勝 明治神宮野球大会 中止
平成元	北海道六大学春季リーグ 4位 北海道六大学秋季リーグ 5位
平成2	北海道六大学春季リーグ 準優勝 北海道六大学秋季リーグ 準優勝
平成3	北海道六大学春季リーグ 準優勝 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成4	北海道六大学春季リーグ 優勝 全日本大学野球選手権代表決定戦 敗退 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成5	北海道六大学春季リーグ 準優勝 北海道六大学秋季リーグ 3位
平成6	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 準優勝
平成7	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 4位
平成8	北海道六大学春季リーグ 4位 北海道六大学秋季リーグ 4位
平成9	北海道六大学春季リーグ 4位 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成10	北海道六大学春季リーグ 6位 北海道六大学秋季リーグ 5位
平成11	北海道六大学春季リーグ 5位 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成12	北海道六大学春季リーグ 6位 入替戦 1部残留 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留



年度	記 録
平成13	北海道六大学春季リーグ 6位 入替戦 1部残留 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成14	北海道六大学春季リーグ 6位 入替戦 1部残留 北海道六大学秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成15	北海道六大学春季リーグ 6位 入替戦 1部残留 北海道学生野球1部秋季リーグ 6位 入替戦 1部残留
平成16	北海道六大学春季リーグ 5位 北海道六大学秋季リーグ 4位
平成17	北海道六大学春季リーグ 2位 北海道六大学秋季リーグ 4位
平成18	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 4位
平成19	北海道六大学春季リーグ 5位 北海道六大学秋季リーグ 3位
平成20	北海道六大学春季リーグ 優勝 第57回全日本大学野球選手権大会出場 2回戦敗退 第3回北海道地区大学野球王座決定戦 初優勝 北海道ベースボールチャンピオンシップ大会 準優勝 北海道六大学秋季リーグ 優勝 明治神宮大会出場 坂田遼ドラフト4位で埼玉西武ライオンズへ入団
平成21	北海道六大学春季リーグ 4位 北海道六大学秋季リーグ 優勝

年度	記 録
	第40回記念明治神宮野球大会道代表決定戦 優勝 第40回記念明治神宮野球大会出場
平成22	北海道六大学春季リーグ 優勝 第59回全日本大学野球選手権大会出場 2回戦敗退 北海道六大学秋季リーグ 3位
平成23	北海道六大学春季リーグ 2位 北海道六大学秋季リーグ 優勝 第42回明治神宮野球大会代表決定戦 優勝 第42回明治神宮野球大会出場
平成24	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 3位
平成25	北海道六大学春季リーグ 3位 北海道六大学秋季リーグ 2位
平成26	北海道六大学春季リーグ 2位 北海道六大学秋季リーグ 2位
平成27	北海道六大学春季リーグ 2位



軟式庭球部

年度	記 録
昭和43	北海道地区大学体育大会 大山紀明・藤村幸久組 優勝
	北海道学生室内シングルス 大山紀明 優勝
昭和44	北海道学生春季 団体二部 優勝 一部昇格 北海道地区大学体育大会 大山紀明・藤村幸久組 優勝 北海道学生秋季選手権 大山紀明・藤村幸久組 優勝 団体戦 3位

年度	記 録
昭和45	北海道学生春季 団体一部 5位 全日本地区学連対抗戦出場 北海道選抜（黒澤幹生・日下和彦） 北海道学生夏季選手権 日下和彦・黒澤幹生組 3位 東日本学生選手権 出場 北海道学生秋季 団体一部 3位 小笠原康夫・藤村幸久組 優勝 選抜インドア 選手権大会 3位

軟式庭球部

年度	記 録
昭和46	北海道学生春季 団体一部 3位 北海道学生夏季 日下和彦・黒澤幹生組 3位 東日本学生選手権 出場 北海道学生選抜インドア 日下和彦・黒澤幹生組 3位
昭和47	北海道学生春季 団体一部 準優勝 日下和彦・黒澤幹生組 優勝 全日本地区学連対抗戦出場 北海道選抜（黒澤幹生） 準優勝 東日本学生選手権 出場 北海道学生秋季 団体一部 準優勝 北海道学生インドア 日下和彦・黒澤幹生組 準優勝
昭和48	北海道学生春季 団体一部 準優勝 北海道学生春季選手権 日下和彦・黒澤幹生組 準優勝 北海道学生秋季 団体一部 3位 全日本地区学連対抗戦出場 日下・黒澤組 東日本学生選手権出場 北海道学生新人戦 本条宏通・窪出好孝組 準優勝 北海道学生選抜インドア 日下和彦・黒澤幹生組優勝 北海道学生ランキング一位 日下和彦・黒澤幹生組
昭和49	北海道学生春季選手権 本条宏通・窪出好孝組 準優勝 本条・窪出ペア全道学生ランキング1位 北海道学生秋季選手権 本条宏通・窪出好孝組 優勝 北海道学生インドア 本条宏通・窪出好孝組 優勝 北海道学生選抜インドア 本条宏通・窪出好孝組 優勝 北海道学生ランキング一位 本条宏通・窪出好孝組
昭和50	北海道春季選手権 本条宏通・窪出好孝組 3位 北海道秋季選手権 本条宏通・窪出好孝組 3位 北海道学生インドア 本条宏通・窪出好孝組 3位 北海道学生選抜インドア 本条宏通・窪出好孝組 3位
昭和51	全日本地区学連対抗戦出場 本条宏通・窪出好孝組
昭和52	北海道秋季 二部降格
昭和53	北海道春季 三部降格

年度	記 録
昭和61	北海道秋季 四部降格 北海道学生秋季 三部昇格 北海道学生新人 団体 準優勝
昭和62	北海道学生春季 二部昇格 北海道学生秋季選手権 川村淳也・福島卓治組 3位
昭和63	北海道学生春季選手権 川村淳也・小原理朗組 3位 東日本学生選手権出場 北海道学生秋季選手権 川村淳也・小原理朗組 3位
平成元	北海道学生春季 団体二部 優勝 一部昇格 北海道学生春季選手権 河野 剛・本庄康夫組 準優勝 東日本学生選手権出場 北海道学生秋季選手権 川村淳也・小原理朗組 3位 北海道学生インドア 河野剛・本庄康夫組 3位
平成2	北海道学生春季 男子団体 二部降格 北海道学生春季選手権 河野剛・小原理朗組 3位 東日本学生選手権出場 北海道学生秋季 河野剛・小原理朗組 3位
平成5	北海道学生夏季選手権 中田和之・清水健志組 3位 全日本学生選手権出場 北海道学生選抜インドア 中田和之・清水健志組 準優勝
平成6	北海道学生春季 団体一部昇格 全日本学生選手権出場 北海道学生秋季 男子団体一部 準優勝



年度	記 録	年度	記 録
平成 7	北海道学生秋季選手権 中田和之・三本木崇組 準優勝	平成 10	東日本選手権大会出場 全日本学生選手権出場 北海道学生秋季 一部 準優勝 金森 淳・矢作竜一組 3 位 北海道学生新人戦団体 Aチーム 優勝 沼沢 徹・大野心平組 阿部清彦・向後圭介組 吉澤和彦・九根木誠組 ベスト8 北海道学生インドア 吉澤和彦・久根木誠組 ベスト4 阿部清彦・向後圭介組 ベスト8
	北海道学生総季選手権 上井俊彦・福見教一郎組 3 位		北海道学生春季 団体一部 優勝 澤田圭祐・安杖竜馬組 3 位 全日本王座決定戦出場男子 北海道学生夏季選手権 澤田圭祐・岡宇知勇組 優勝
	北海道学生春季 団体一部 準優勝		全日本学生選手権出場 北海道学生秋季 団体一部 準優勝 阿部清彦・向後圭介組 準優勝 澤田圭祐・安杖竜馬組 吉澤和彦・九根木誠組 ベスト8
	北海道学生夏季 男子団体 準優勝		北海道学生新人戦団体 Aチーム 優勝 Bチーム ベスト8 菊地克仁・大野心平組 ベスト4 吉田 誠・安杖竜馬組 向後圭介・九根木誠組 ベスト8
	北海道学生夏季選手権 中田和之・三本木崇組 準優勝		北海道学生インドア 澤田圭祐・岡宇知勇組 優勝 北海道学生選抜インドア 澤田圭祐・岡宇知勇組 優勝
	全日本学生選手権出場		平成 11 北海道学生春季 男子団体一部 準優勝 北海道学生春季選手権 阿部清彦・岡宇知勇組 3 位 全日本学生選手権出場 北海道学生秋季選手権 長谷川雄喜・安杖竜馬組 3 位
	北海道学生秋季 団体一部 準優勝		北海道学生新人戦 団体 優勝 西本 潤・水島則雄組 準優勝 竹林明彦・浦豪希組 3 位
	中田和之・三本木崇組 優勝		北海道学生インドア 宮本耕至・岡宇知勇組 3 位
	北海道学生新人戦 団体 準優勝		平成 12 北海道学生春季 団体一部 優勝 全日本王座決定戦出場 男子 全日本学生選手権出場 北海道学生夏季選手権 石川寛之・大野心平組 3 位
	北海道学生新人選手権 澤田圭祐・三本木崇組 優勝 金森 淳・矢作竜一組 準優勝 廣瀧大輔・鶴岡組 3 位		
平成 8	北海道学生春季 団体一部 準優勝 金森 淳・矢作竜一組 準優勝 中田和之・三本木崇組 3 位		
	北海道学生ソフトテニス選手権大会 団体 3 位 吉澤和彦・鶴岡直忠組 3 位		
	全日本学生選手権出場 中田和之・山口直樹・三本木崇・澤田圭祐・増田博巳・寒河江智彦		
	北海道学生秋季全道 一部 準優勝 女子 三部 準優勝		
	北海道学生新人戦団体 Aチーム 優勝 Bチーム 3 位 吉澤和彦・鶴岡直忠組 準優勝 澤田圭祐・増田博巳組 3 位 金森 淳・木村陽一組 3 位		
	北海道学生選抜インドア 金森 淳・矢作竜一組 3 位		
	平成 9 北海道学生春季 団体一部 準優勝 澤田圭祐・三本木崇組 準優勝 沼沢 徹・鶴岡直忠組 3 位 吉澤和彦・久根木誠組 3 位		
	北海道学生夏季 金森 淳・向後圭介組 3 位 澤田圭祐・大野心平組 3 位		
	全道学生ソフトテニス選手権大会 団体 A・B・Cチーム ベスト8 矢作竜一・金森 淳組 3 位 澤田圭祐・大野心平組 ベスト8		

軟式庭球部

年度	記 録	年度	記 録
平成13	北海道学生秋季男子 団体一部 優勝	平成17	シングルス 佐々木紋佳 準優勝
	北海道学生インドア 宮本耕至・浦豪希組 3位		全日本学生選手権出場
	北海道学生春季		北海道学生秋季 団体一部 準優勝
	男子団体一部 3位 女子二部優勝、一部昇格		女子団体一部 4位 佐藤雄太・坂本裕次郎組
	北海道学生夏季選手権		優勝 佐々木悠治・日下部和幸組 3位
平成14	宮本耕至・岡宇知勇組 3位	北海道学生新人戦 小松薫・佐々木紋佳組 3位	
	全日本学生選手権出場	北海道学生春季 男子団体一部 準優勝	
	北海道学生秋季 団体一部 準優勝	女子団体一部 4位 千葉洋也・日下部和幸組	
	北海道学生秋季選手権	優勝 小松 薫・佐々木紋佳組 3位	
	宮本耕至・岡宇知勇組 3位	北海道学生夏季選手権	
平成15	北海道学生春季	千葉洋也・日下部和幸組 3位 小松 薫・佐々木紋佳組 3位	
	男子団体一部 3位 女子団体一部 3位	全日本学生選手権出場	
	鹿内美由紀・清藤優美組 3位	北海道学生秋季 団体一部 準優勝	
	北海道学生夏季 団体 3位 女子団体 3位	女子団体一部 6位 二部降格 千葉洋也・日下部和幸組 準優勝 沼澤孝之・川口拓也組 3位 小松 薫・佐々木紋佳組 3位	
	シングルス 坂本裕次郎 3位	北海道学生新人戦 団体男子 3位	
平成16	全日本学生選手権出場	佐藤雄太・日下部和幸組 3位 小松 薫・佐々木紋佳組 3位	
	北海道学生秋季 団体一部 優勝 女子一部 5位	北海道学生インドア 小松薫・佐々木紋佳組 3位	
	北海道学生新人戦 団体 3位	北海道学生選抜インドア	
	飯塚克明・坂本裕次郎組 2位	千葉洋也・日下部和幸組 優勝	
	北海道学生インドア	平成18	北海道学生春季
平成17	飯塚克明・坂本裕次郎組 3位	男子団体一部 準優勝 女子団体二部 優勝	
	北海道学生春季	佐藤雄太・日下部和幸組 準優勝	
	男子団体一部 3位 女子団体 4位	北海道学生夏季 男子団体 3位	
	北海道学生夏季 団体 準優勝 団体女子 3位	千葉洋也・日下部和幸組 3位	
	北海道学生夏季選手権	全日本学生選手権出場	
平成18	シングルス 佐藤雄太 ベスト8 全国出場	北海道学生秋季	
	佐藤雄太・坂本裕次郎組 優勝 小松 薫・佐々木紋佳組 3位	男子団体一部 3位 女子二部 5位	
	全日本学生選手権出場	北海道学生新人戦 団体 準優勝	
	北海道学生秋季	浅水隆大・根井智章組 優勝 関下昌功・竹岡賢一組 準優勝	
	男子団体一部 3位 女子団体一部 6位 二部降格 佐藤雄太・坂本裕次郎組 3位 小松 薫・佐々木紋佳組 準優勝	北海道学生インドア 浅水隆大・根井智章組 3位	
平成19	天皇杯全日本選手権	北海道学生春季 男子団体 準優勝	
	佐藤雄太・坂本裕次郎組 出場	北海道学生夏季	
	北海道学生インドア	男子団体 準優勝 女子団体 準優勝 山崎竜也・斉藤徳道組 準優勝 浅水隆大・根井智章組 3位 岩澤 歩・佐藤 香組 3位	
	佐藤雄太・坂本裕次郎組 優勝	全日本学生選手権出場	
	北海道学生春季 準優勝 男子団体一部 4位		
平成20	女子団体二部優勝 一部昇格 小松 薫・佐々木紋佳組 3位		
	北海道学生夏季 佐藤雄太・坂本裕次郎組 3位		

年度	記 録	年度	記 録
平成20	北海道学生秋季 男子団体一部 優勝 橋場 渉・岸田真史組 優勝 山崎竜也・斉藤 徳道組 3位 岩澤 歩・佐藤 香組 3位	平成22	北海道学生インドア 山崎竜也・根井智章組 3位 岩澤 歩・佐藤 香組 3位
	北海道学生新人戦 団体 準優勝 橋場 渉・岸田真史組 3位 山崎竜也・小鹿 仁組 3位		北海道学生選抜インドア 岩澤 歩・佐藤 香組 3位
	北海道学生選抜インドア 千葉洋也・竹岡賢一組 3位 岩澤 歩・中川 真美組 準優勝		北海道学生総季 橋場 渉・岸田真史組 3位
	北海道学生春季 男子団体 優勝 女子団体一部 3位		北海道学生春季 男子団体 準優勝 女子団体一部 優勝 全日 本学生王座決定戦出場女子 清水凜太郎・福井 悟組 3位 小倉 涼・藤森彩乃組 準優勝
	全日本学生王座決定戦出場 男子 浅水隆大・根井智章組 準優勝 橋場 渉・岸田真史組 3位 岩澤 歩・佐藤 香組 準優勝		岩澤 歩・高橋遥奈組 3位 岩澤 尚 3位
	北海道学生夏季選手権 山崎竜也・川口拓也組 3位 岩澤 歩・佐藤 香組 3位		北海道学生夏季 男子団体 準優勝 女子団体 優勝 岩澤歩・ 高橋遥奈組 優勝 岩澤 尚・安ヶ平明日翔組 3位 シングルス 岩澤 歩 優勝 高橋遥奈 2位 岩澤 尚 3位
	全日本学生選手権出場		全日本学生選手権出場
	北海道学生秋季 男子団体 準優勝 女子一部 3位 山崎竜 也・川口拓也組 準優勝		北海道学生秋季 男子団体一部 優勝 女子団体一部 準優勝 岩澤 歩・高橋遥奈組 優勝 岩澤 尚・安ヶ 平明日翔組 準優勝
	北海道学生新人戦 団体 優勝 女子団体 3位 岩澤 歩・佐藤 香組 優勝		北海道学生新人戦団体 女子団体 3位 木村洋平・伊藤奨平組 3位 岩澤 尚・安ヶ平明日香組 優勝
	北海道学生インドア 岩澤 歩・佐藤 香組 優勝		北海道学生インドア 岩澤 歩・高橋遥奈組 準優勝
	北海道学生選抜インドア 岩澤 歩・佐藤 香組 優勝 岩澤 歩・佐藤 香組ランキング1位		北海道学生選抜インドア 福井 悟・伊藤奨平組 準優勝 橋場 渉・小 鹿仁組 3位 岩澤 歩・高橋遥奈組 準優勝
	北海道学生総季 斎藤 篤・竹岡賢一組 3位		北海道学生総季 岩澤 尚・安ヶ平明日翔組 3位 佐々木佑梨・ 高橋遥奈組 3位 岩澤 歩・高橋遥奈組ラン キング1位
	北海道学生春季 男子団体 優勝 女子団体一部 3位		北海道学生春季 男子団体 準優勝 女子団体一部 3位 佐々 木佑梨・高橋遥奈組 優勝 岩澤 尚・安ヶ平 明日翔組 準優勝 佐藤 茜・小倉 涼組3位
	全日本学生王座決定戦出場（男子） 山崎竜也・根井智章組 準優勝 岩澤 歩・佐 藤 香組 優勝 シングルス 岩澤 歩 優勝		北海道学生夏季 女子団体 準優勝 シングルス 佐々木祐哉 3位 高橋遥奈 優勝 岩澤 尚 ベスト8
平成21	北海道学生夏季 男子団体 優勝 女子団体 優勝 山崎竜也・ 根井智章組 準優勝 岩澤 歩・佐藤 香組 3位	平成23	全日本学生選手権出場
	全日本学生選手権出場 北海道学生新人戦 男子団体 3位 女子団体 優勝		全日本学生選手権出場

軟式庭球部

年度	記 録	年度	記 録
平成24	北海道学生秋季 団体 準優勝 女子団体一部 準優勝 佐藤 茜・小倉 涼組 準優勝	平成26	古屋はるか・村上穂乃花組 3位 北海道学生インドア 岸田洋明・西舘圭介組 3位 佐々木佑梨・村上穂乃花組 優勝 岩澤 尚・古屋はるか組 3位
	北海道学生新人戦 団体 3位 本間后哉・佐々木瑞生組 3位		北海道学生選抜インドア 岩澤 尚・古屋はるか組優勝
	北海道学生インドア 木村洋平・伊藤奨平組 準優勝 佐々木佑梨・高橋遥奈組 準優勝 佐藤 茜・小倉 涼組 ベスト8		北海道学生春季 男子団体 3位 女子団体一部6位入れ替え戦にて二部降格
	北海道学生選抜インドア 準優勝 佐々木佑梨・高橋遥奈組ランキング1位		北海道学生春季選手権 岸田洋明・小形真人組 3位
	北海道学生春季 団体 準優勝 女子団体一部 準優勝		北海道学生夏季選手権 岸田洋明・小形真人組 3位
	北海道学生春季選手権 佐々木佑梨・岩沢 尚組 準優勝 佐藤 茜・小倉 涼組 3位 辻本華恵・安ヶ平明日翔組 3位 女子団体 準優勝		北海道学生秋季 団体一部 準優勝 女子団体一部 北海道学生インドア 岸田洋明・小形真人組 3位 北海道学生選抜インドア 岸田洋明・小形真人組 3位
	北海道学生夏季選手権 佐藤 茜・小倉 涼組 優勝 シングルス 福井 悟 3位 岩澤 尚 優勝		北海道学生春季 男子団体 3位 女子団体三部 優勝入替戦にて二部昇格
	全日本学生選手権出場（男子）		北海道学生春季選手権 小川 遼・小形真人組 3位 古屋はるか・村上穂乃花 3位
	北海道学生秋季 団体 準優勝 女子団体一部 優勝 本間后哉・西舘圭介組 3位 福井 悟・佐々木瑞生組 3位 佐藤 茜・小倉 涼組 3位		北海道学生夏季選手権 小川 遼・小形真人組 3位 古屋はるか・村上穂乃花 3位
	北海道学生新人戦 岸田洋明・西舘圭介組 準優勝 北海道学生インドア 木村洋平・伊藤奨平組 3位 北海道学生選抜インドア 佐藤 茜・小倉 涼組 優勝 佐藤 茜・小倉 涼組ランキング1位	平成27	全日本学生選手権出場（男子） 北海道学生秋季 団体一部 5位 女子団体二部優勝 入替戦にて一部昇格
平成25	北海道学生春季 団体男子 準優勝 女子団体一部 優勝 全日本学生王座決定戦出場女子		
	北海道学生夏季大会 女子団体一部 準優勝 北海道学生夏季選手権 岩澤 尚・古屋はるか組 優勝		
	全日本学生選手権出場（男女） 北海道学生秋季 団体一部 準優勝 女子団体一部 準優勝 掘切川春樹・佐々木瑞生組 3位 岩澤 尚・古屋はるか組 3位		
	北海道学生新人戦		



陸 上 部

年度	記 録	年度	記 録
昭和43	北海道学生新人選手権 砲丸投げ 菅原堅固 準優勝	昭和58	北海道学生選手権 磯崎 康 走り幅跳 3位
	道南選手権 砲丸投げ 若山哲哉 優勝	昭和60	日本学生選手権出場 200m・400m 深沢 光
昭和45	全道大学体育大会 5,000m 篠原秀男 優勝		国民体育大会出場 200m・400m 深沢 光
	北海道学生対抗選手権	平成 9	北海道学生選手権
	1,500m 篠原秀男 3位 5,000m 篠原秀男 3位 砲丸投げ 菅原堅固 5位		走り高跳び 後藤 大 4位
昭和46	北海道学生対抗選手権		走り幅跳び 土門貴之 11位 三段跳び 9位
	1,500m 篠原秀男 準優勝	平成11	北海道学生選手権
	800m 篠原秀男 3位		走り高跳び 堂守信行 3位
	北海道陸上大会 走り幅跳 3位	平成12	北海道学生選手権 走り幅跳 堂守信行 6位
	能登半島一周駅伝選考会		国体道予選 走り幅跳 堂守信行 3位
	10マイルロードレース 篠原秀男 優勝	平成15	北海道学生選手権
昭和49	全国学生駅伝北海道代表 田村正明		砲丸投げ 五十嵐精一 2位
昭和51	全日本学生陸上競技選手権出場		円盤投げ 五十嵐精一 6位
	能登半島駅伝大会出場		

ス キ ー 部

年度	記 録	年度	記 録
昭和43	北海道学生スキー選手権 大回転 佐藤宏六 優勝	平成 8	富山県スキー技術選手権大会
	道南スキー選手権		米丘友明 1位
	ノルディック10km 高橋誠行 優勝		

卓 球 部

年度	記 録
昭和44	函館地区大会（春） 団体戦 ブロック2位決勝トーナメント3位 シングルス 梅沢雅治 準決勝 ダブルス 前田豊・池田和夫組 準決勝 函館地区大会（秋） 団体戦 ブロック2位・3位シングルス 前田豊・池田和夫 準決勝 池田和夫・柳谷庫司 準優勝



卓 球 部

年度	記 録	年度	記 録
昭和45	函館地区大学 団体 3位 ダブルス 小田桐竹則・吉田享一 3位		北海道学生選手権（秋季） 団体一部 3位 シングルス 関口幸治 2位 田中良太 5位 山岸久記 6位 菱沼賢一 8位 ダブルス 田中良太・関口幸治組 4位 玉手一成・菱沼 賢一組 7位
平成 5	全日本学生卓球選手権 出場 北村 太・松尾 純組 北村 太・花谷直史組		北海道学生新人戦 【新人戦】ダブルス 田部晴彦・助台伸亮組 3 位 玉手一成・菱沼賢一組 4位 【納会】シン グルス 山岸久記 6位 中泉 仁 7位 ダ ブルス 佐藤哲郎・山岸久記組 5位
平成 6	全日本学生卓球選手権 出場 花谷直史・篠宮幸司組		全日本大学対抗出場
平成 8	北海道学生選手権（春季） 団体二部 3位 北海道学生選手権（秋季） 団体二部 3位		平成12 北海道学生選手権（春季） 団体一部 準優勝 シングルス 中泉 仁 準優勝 ダブルス 佐 藤哲郎・小林直幸組 ベスト8
平成 9	北海道学生選手権（春季） 団体二部 準優勝 ダブルス 石岡達也・林原正人組 ベスト16 全日本大学対抗北海道予選 団体 準優勝 シングルス 中泉 仁 ベスト16 ダブルス 山岸久記・佐藤哲郎組 田中良太・中泉 仁組 ベスト8		全日本大学対抗北海道予選 団体一部 優勝 シングルス 玉手一成 3位 中泉 仁 5位 ダブルス 玉手一成・菱沼賢一組 3位 関口 幸治・小迫世亮二組 4位
	北海道学生選手権（秋季） 団体二部 優勝 （一部昇格）シングルス 中泉 仁 8位 田中 良太山岸久記 ベスト16 ダブルス 中泉 仁・田中良太組 準優勝 山岸久記・佐藤哲郎 組 3位		全日本学生卓球選手権北海道予選 シングルス 関口幸治 優勝 山岸久記 準優 勝 田中良太 3位 玉手一成 8位 ダブル ス 田中良太・中泉仁組 準優勝 佐藤哲郎・ 山岸久記組 8位
平成10	北海道学生選手権（春季） 団体一部 3位 ダブルス 田中良太・中泉 仁組 3位 全日本大学対抗北海道予選 団体一部 優勝 （初優勝）シングルス 田中良太 3位 佐藤 哲郎 ベスト8 ダブルス 田中良太・中泉 仁組 3位 佐藤哲郎・山岸久記組 ベスト8 全日本学生卓球選手権大会 出場 北海道学生選手権（秋季） 団体一部 4位 シングルス 関口幸治 6位 田中良太 7位 ダブルス 田中良太・中泉 仁組 3位 佐藤 哲郎・山岸久記組 ベスト8		全日本硬式卓球大会函館予選 シングルス 中泉 仁 8位 ダブルス 玉手 一成・菱沼賢一組 優勝 関口幸治・小迫世亮 二 8位
	北海道学生新人戦 【新人戦】シングルス 玉手一成 優勝 佐藤哲 郎 準優勝 関口幸治 3位 山岸久記 3位 ダブルス 玉手一成・関口幸治組 3位 【納会 試合】シングルス 田中良太 ベスト8 ダブ ルス 田中良太・中泉 仁組 3位 佐藤哲郎・ 山岸久記組 ベスト8		全日本選手権出場 北海道学生選手権（秋季） 団体一部 準優勝 シングルス 中泉 仁 準優勝 関口幸治 3 位 ダブルス 関口幸治・小迫世亮二組 準優 勝 玉手一成・菱沼賢一組 ベスト8
平成11	北海道学生選手権（春季） 団体一部 3位 シングルス 田中良太 2位 関口幸治 3位 玉手一成 7位 ダブルス 佐藤哲郎・山岸久 記組 3位 玉手一成・菱沼賢一組 5位		北海道学生新人戦 【新人戦】シングルス 小迫世亮二 優勝 小林 直幸 準優勝 田部晴彦 ベスト8 ダブルス 小林直幸・川村昭仁組 ベスト8 【納会試合】 シングルス 中泉 仁 3位 ダブルス 佐藤 哲郎・山岸久記組 田中良太・中泉仁組 関口 幸治・小迫世亮二組 ベスト8
		平成13 北海道学生選手権（春季） 一部 2位 シングルス 島畑和則 林 大輔 ベスト4	

年度	記 録	年度	記 録
平成14	菱沼賢一 上山拓郎 ベスト8 小林直幸 ベスト16 ダブルス 島畑和則・林 大輔組 2位 小林直幸・上山拓郎組 ベスト8 菱沼賢一・小道世亮二組 ベスト16 全日本大学対抗道予選 団体一部 準優勝 全日本大学対抗 出場 全日本学生選手権北海道予選 シングルス 菱沼賢一 ベスト8 関口幸治 小林直幸 小道世亮二 島畑和則 林 大輔 石川基政 ベスト16 ダブルス 菱沼賢一・島畑和則組 ベスト4 関口幸治・玉手一成組 小林直幸・上山拓郎組 ベスト8 硬式卓球大会函館予選 シングルス 島畑和則 ベスト8 田部晴彦 ベスト16 ダブルス 小道世亮二・石川基政組 ベスト4 全日本学生選手権 出場 北海道学生選手権(秋季) 団体一部 準優勝 シングルス 島畑和則 ベスト7 小道世亮二 ベスト8 ダブルス 菱沼賢一・関口幸治組 準優勝 小林直幸・上山拓郎組 3位 田部晴彦・池田正組 4位 小道世亮二・林 大輔組 ベスト8 新人戦 島畑和則 準優勝 林 大輔 3位 北海道学生新人戦 シングルス 石川基政 上山拓郎 ベスト8 北海道学生選手権(春季) 団体一部 優勝 シングルス 島畑和則 ベスト4 上山拓郎 林 大輔 ベスト8 ダブルス 島畑和則・林 大輔組 ベスト4 小林直幸・上山拓郎組 杉本 真・上枝繁樹組 ベスト8 全日本大学対抗北海道予選 団体一部リーグ 準優勝 シングルス 島畑和則 上山拓郎 ベスト8 ダブルス 島畑和則・林 大輔組 小林直幸・上山拓郎組 杉本 真・上枝繁樹組 石川基政・池田 正組 ベスト8 全日本学生卓球選手権大会北海道予選 シングルス 島畑和則 優勝 上山拓郎 ベスト8 ダブルス 石川基政・池田 正組 3位 北海道学生選手権(秋季) 団体一部 3位	平成15	シングルス 石川基政 上山拓郎 林 大輔 進藤丈人 ベスト16 ダブルス 石川基政・池田 正組 ベスト8 杉本 真・上枝繁樹組 ベスト16 北海道学生新人戦 【団体】 3位 【新人戦】シングルス 進藤丈人 杉本 真 ベスト8 ダブルス 進藤丈人・池野俊輔組 杉本 真・上枝繁樹組 ベスト4 【納会】シングルス 島畑和則 準優勝 ダブルス 島畑和則・林 大輔組 優勝 北海道学生選手権(春季) 団体一部 3位 シングルス 石川基政 3位 林 大輔 ベスト8 杉本 真 ベスト16 ダブルス 石川基政・池田 正組 ベスト8 全日本大学対抗北海道予選 団体一部 3位 シングルス 池田 正 上山拓郎 ベスト8 林 大輔 石川基政 ベスト16 ダブルス 杉本 真・上枝繁樹組 林 大輔・上山拓郎組 ベスト16 全日本学生選手権北海道予選 シングルス 石川基政 3位 上山拓郎 ベスト8 林 大輔 9位 池田 正 杉本 真 ベスト16 ダブルス 杉本 真・上枝繁樹組 林 大輔・上山 拓郎組 池田 正・林 大輔組 進藤丈人・佐々木肇組 ベスト16 全日本学生選手権 出場 北海道学生選手権(秋季) 団体一部 3位 シングルス 林 大輔 ベスト8 池田 正 石川基政 杉本 真 上山拓郎 ベスト16 ダブルス 石川基政・池田 正組 進藤丈人・佐々木肇組 ベスト16 北海道学生新人戦 【団体】 3位 【新人戦】シングルス 上枝繁樹 ベスト8 進藤丈人 ベスト16 【納会】シングルス 林 大輔 ベスト16 ダブルス 石川基政・林 大輔組 ベスト8 池田 正・上山拓郎組 杉本 真・上枝繁樹組 ベスト16 北海道学生選手権(春季) 団体一部 3位 シングルス 杉原 哲 2位 三浦 峰 3位 杉本 真 林 大輔 ベスト8 ダブルス 三浦 峰・佐藤勇輔組 ベスト8 進藤丈人・杉
平成16			

卓 球 部

年度	記 録	年度	記 録
	原 哲組 ベスト16 全日本大学対抗北海道予選 団体 3位 全国大会出場 全日本学生卓球選手権大会 出場 北海道卓球選手権兼全日本予選会 ダブルス 杉本 真・杉原 哲組 ベスト16 北海道学生選手権（秋季） シングルス 杉原 哲 ベスト16 ダブルス 杉原 哲・三浦 峰組 優勝 杉本 真・佐々木 肇組 ベスト8 北海道学生新人戦 【新人戦】シングルス 杉原 哲 優勝 三浦 峰 3位 佐々木 肇 ベスト16 ダブルス 杉原 哲・三浦 峰組 2位 佐々木 肇・佐藤 勇輔組 ベスト8 【納会】シングルス 林 大輔 杉本 真 ベスト8 ダブルス 上山 拓郎・林大輔組 ベスト8		ト8 ダブルス 杉原 哲・宮島知也組 準優勝 佐藤 勇輔・田畑 謙組 ベスト8 平成19 北海道学生選手権（秋季） 団体一部 2位 シングルス 宮島知也 ベスト8 杉原 哲 3位 ダブルス 杉原 哲・宮島知也組 3位 平成20 北海道学生選手権（春季） 団体一部 5位 シングルス 宮島知也 ベスト4 今野翔太郎 ベスト16 ダブルス 宮島知也・今野翔太郎組 ベスト8 全日本大学対抗北海道予選 シングルス 宮島知也 3位 ダブルス 宮島知也・今野翔太郎組 ベスト8 全日本学生出場 北海道学生選手権（春季） 団体一部 5位 シングルス 宮島知也 ベスト8 ダブルス 宮島知也・今野翔太郎組 ベスト8 平成21 北海道学生選手権（春季） 団体一部 4位 シングルス 佐藤 琢磨 ベスト16 ダブルス 宮島知也・石山広紀組 ベスト8 全日本大学対抗北海道予選 シングルス 石山広紀 3位 ダブルス 宮島知也・石山広紀組 3位 北海道選手権（秋季） 団体一部 3位 シングルス 今野翔太郎 ベスト16 ダブルス 宮島知也・石山広紀組 2位 平成22 北海道学生（春季） シングルス 佐藤 琢磨 ベスト16 ダブルス 宮島知也・石山広紀組 3位 全日本大学対抗北海道予選 ダブルス 神尾翔太・佐藤 琢磨組 ベスト16
平成17	北海道学生選手権（春季） 団体一部 3位 シングルス 杉原 哲 3位 全日本大学対抗北海道予選 団体一部 3位 シングルス 杉原 哲 ベスト8 ダブルス 杉原 哲・佐藤 勇輔組 ベスト16 全国大会出場		
平成18	全日本大学対抗北海道予選兼会長杯争奪卓球選手権大会 団体一部 3位 ダブルス 杉原 哲・三浦 峰組 ベスト8 全日本学生卓球選手権大会北海道予選 シングルス 杉原 哲 ベスト8 ダブルス 杉原 哲・三浦 峰組 3位（全国出場） 佐藤 勇輔・田畑 謙組 ベスト8 全国大会出場 北海道学生選手権（秋季） 団体一部 3位 シングルス 杉原 哲 ベスト8 ダブルス 杉原 哲・三浦 峰組 ベスト4 佐藤 勇輔・田畑 謙組 ベスト8		
平成19	全日本大学対抗北海道予選 団体一部 2位 シングルス 杉原 哲 3位 宮島知也 3位 ダブルス 杉原 哲・三浦 峰組 3位 宮島知也・今野翔太郎組 ベスト8 全日本学生卓球選手権大会 シングルス 杉原 哲 3位 宮島知也 ベス		

排 球 部

年度	記 録	年度	記 録
昭和44	全道大学学生バレーボールリーグ戦 2部2位 函館地区三大学リーグ戦（春・秋） 優勝 北海道地区総合選手権大会函館地区予選 優勝 北海道地区大学体育大会 2位	平成8	第29回大滝杯北海道大学男女リーグ春季大会 4部4位 第24回原崎杯北海道大学男女リーグ秋季大会 4部4位 第5回師走トーナメント 準優勝
昭和45	北海道春季リーグ戦 2部2位 全道大学選手権大会 3位 全国大会出場	平成9	北海道大学男女バレーボールリーグ春季大会 4部リーグ 準優勝 道南リーグ秋季大会 Aチーム 4部リーグ 優勝 原崎杯北海道大学男女バレーボールリーグ秋季大会 4部リーグ 準優勝
昭和46	春季大会 1部4位 インカレ予選 ベスト8 函館総合選手権 優勝		
昭和47	全国学生選手権 出場		
昭和48	全国学生選手権 出場 北海道学生選手権 3位 北海道地区大学選手権 優勝 北海道地区大学体育大会 優勝		
昭和49	全道一部 残留		

剣 道 部

年度	記 録	年度	記 録
昭和44	第5回函館地区学生剣道大会 団体戦 3位 斉藤裕一 優勝		大森 朋 植根永晃 東西対抗戦優秀選手賞 田中敬三
昭和45	函館学生剣道大会 団体 3位 個人戦 斉藤裕一 優勝 古川敏夫 2位 深井 恵 3位	平成9	第43回北海道学生剣道選手権大会 高橋政則 優勝 木村真之 準優勝 立花知之 3位 植根永晃 9位 倉沢功二 13位 北海道地区大学体育大会 団体 3位 第35回北海道学生剣道新人戦大会 団体 優勝 斉藤賢二 ベスト8 石井秀幸 ベスト16
平成5	第41回全日本学生剣道優勝大会出場 第41回全日本学生剣道選手権大会 高田 悟 浜田雅夫 岩谷礼智 全日本学生剣道東西対抗試合出場 高田 悟	平成10	第44回北海道学生剣道選手権大会 立花知之 優勝 古平浩二 ベスト4 木村真 之 ベスト8 全国大会出場獲得 全北海道団体優勝大会 団体 Aチーム ベスト8 第46回全日本学生剣道優勝大会 団体 ベスト32 第36回北海道学生剣道新人戦大会 団体 3位 立花知之 準優勝 堀井加奈子 3位 石津 豪 工藤勇人 ベスト8
平成6	第42回全日本学生剣道選手権大会出場 団体 個人 田中敬三・高田 悟・岩谷礼智		
平成7	第43回全日本学生剣道選手権大会出場 越水雅文		
平成8	全日本学生剣道選手権北海道大会 田中敬三 優勝 八代 誠 3位 第44回全日本学生剣道選手権大会出場 八代 誠 ベスト16 田中敬三 鈴木信吾		

剣 道 部

年度	記 録	年度	記 録
平成11	第45回北海道学生剣道選手権大会・第26回北海道女子剣道選手権大会 奥山訓史 準優勝 立花知之 樋渡貴志 田村友鏡 3位 平成11年度全北海道団体優勝大会 Aチーム Bチーム ベスト16 第47回全日本学生剣道選手権大会・第46回全日本学生剣道東西対抗試合 出場 第47回北海道学生剣道優勝大会 団体 準優勝 第47回全日本学生剣道優勝大会 団体 出場	平成15	第50回北海道地区大学体育大会 団体 3位 第51回北海道学生剣道優勝大会 団体 準優勝 第51回全日本学生剣道優勝大会 団体 2回戦敗退
平成12	第46回北海道学生剣道選手権大会・第27回北海道女子剣道選手権大会 立花知之 優勝 樋渡貴志 準優勝 多児郁男 3位 木村真之 8位 斉藤亨輔 13位 第47回全日本学生剣道選手権大会 出場 第49回北海道団体優勝大会 Aチーム ベスト8 第47回北海道地区大学体育大会 団体 優勝 第48回北海道学生剣道優勝大会 団体 準優勝 第38回北海道学生剣道新人戦大会 団体 優勝 田村友鏡 優勝 斉藤亨輔 ベスト8	平成16	第50回北海道学生剣道選手権大会 栄花元春 準優勝 栄花友彦 ベスト9 第51回北海道地区大学体育大会 団体 準優勝 第52回全日本学生剣道選手権大会・第51回全日本学生剣道東西対抗戦 栄花元春 2回戦敗退 栄花友彦 1回戦敗退 第52回北海道学生剣道優勝大会 団体 優勝 第53回全日本学生剣道優勝大会 団体 1回戦敗退
平成13	第47回北海道学生剣道選手権大会 樋渡貴志 田村友鏡 ベスト16 第49回全日本学生剣道選手権大会 樋渡貴志 3回戦負け 田村友鏡 1回戦負け 第48回北海道地区大学体育大会 団体 優勝 (4連覇) 第49回北海道学生剣道優勝大会 団体 準優勝 第49回全日本学生剣道選手権大会 1回戦敗退 第39回北海道学生剣道新人戦大会 団体 優勝	平成17	第53回北海道学生剣道選手権大会 大西俊晃 準優勝 栄花友彦 山下周平 3位 鈴木雄大 安藤 圭 ベスト8 栄花元春 中村雄太 9位 本間直樹 ベスト13 第50回西日本学生剣道大会 1回戦敗退 第52回北海道地区大学体育大会 団体 優勝 第53回全日本学生剣道選手権大会・第52回全日本学生東西対抗試合 個人8名出場 1～3回戦敗退 第53回北海道学生剣道優勝大会 団体 優勝 第43回北海道学生剣道新人大会 団体 3位 栄花元春 3位
平成14	第48回北海道学生剣道選手権大会 成澤隆司 3位 田村友鏡 斉藤亨輔 山口善正 栄花友彦 大西俊晃 ベスト13 第49回北海道地区大学体育大会 団体 準優勝 第50回北海道学生剣道優勝大会 団体 準優勝 第40回北海道学生剣道新人戦大会 栄花友彦 成澤隆司 ベスト8 第50回全日本学生剣道選手権大会 団体ベスト16	平成18	第52回北海道学生剣道選手権大会 安藤 圭 準優勝 若杉 龍 3位 山下周平 4位 本間直樹 ベスト8 栄花元春 小野寺亮祐 ベスト16 第54回全日本学生剣道選手権大会第53回全日本学生東西対抗試合 個人8名出場 1～2回戦敗退 第54回北海道学生剣道優勝大会 団体 3位 第54回全日本学生剣道優勝大会 団体 出場 第44回北海道学生剣道新人大会 団体 2位 山下周平 3位 三橋滉大 ベスト8
平成15	第49回北海道学生剣道選手権大会 成澤隆司 ベスト13 第51回全日本学生剣道選手権大会 成澤隆司 出場	平成19	第53回北海道学生剣道選手権大会 栄花元春 優勝 守谷信彬 3位 小野寺亮祐 ベスト8 第55回北海道学生剣道優勝大会 団体 2位 第55回全日本学生剣道優勝大会 団体 初戦敗退

年度	記 録
平成20	第45回北海道学生剣道新人戦大会 団体 初戦敗退
	第54回北海道学生剣道選手権大会 河島大紀 4回戦敗退
	第55回地区大学剣道体育大会 予選リーグ敗退
	第56回北海道学生剣道優勝大会 団体 3位
	第56回全日本学生剣道優勝大会 団体 一回戦敗退
平成21	第46回北海道学生剣道新人戦大会 団体 3位
	第55回北海道学生剣道選手権大会 川崎昂介 準優勝
	第56回地区大学剣道体育大会 団体 準優勝
	第57回北海道学生剣道優勝大会 団体 3位
	第57回全日本学生剣道優勝大会 団体 一回戦敗退
	第47回北海道学生剣道新人戦大会 新型インフルエンザのため出場停止

年度	記 録
平成22	第56回北海道学生剣道選手権大会 川崎昂介 水沼 譲 8位
	第58回全日本学生剣道優勝大会 川崎昂介 1回戦敗退 水沼 譲 2回戦敗退



空 手 部

年度	記 録
昭和45	学生空手道選手権大会
	団体戦 4位 個人戦 4位

山 岳 部

年度	記 録
昭和43	大千軒岳避難小屋建設
昭和53	インド・ヒマラヤ遠征



サッカー部

年度	記 録
昭和46	地区体育大会 4位
昭和47	全国大学蹴球選手権大会道予選 準々決勝へ
平成 8	第15回北海道学生サッカーリーグ 2部リーグ 3位
平成 9	全日本大学サッカートーナメント北海道ブロック予選 4校中 2位 第16回北海道学生サッカーリーグ 2部リーグ 8位
平成10	第17回北海道学生サッカーリーグ 3部リーグ 優勝
平成11	第18回北海道学生サッカーリーグ 5位 第46回北海道地区大学体育大会 ベスト8
平成12	第19回北海道学生サッカーリーグ 3部リーグ Aチーム 2位

年度	記 録
平成24	第31回北海道学生サッカーリーグ 3部リーグ 5位
平成25	第32回北海道学生サッカーリーグ 3部リーグ 6位
平成26	第33回北海道学生サッカーリーグ 3部リーグ 8位



ハンドボール部

年度	記 録
昭和54	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 2部 優勝 一部昇格 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和55	北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 準優勝 北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和56	北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第23回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和57	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第24回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和58	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第25回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場

年度	記 録
昭和58	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 3位 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 準優勝
昭和59	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和60	北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 準優勝 北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和61	北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第28回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
昭和62	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 準優勝 北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第30回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場

年度	記 録	年度	記 録
昭和62	中国上海選抜と交流試合	平成 8	北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 20連覇30度目の優勝（昭和62年～平成8年ま で100連勝） 第39回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場 全日本ジュニア選手 奥野 誠 全日本男子選抜選手 片岡 達也 北海道学生選抜ヨーロッパ遠征チーム 石川浩之・片岡達也・佐々木直人・高野義治・ 大野善久・進藤裕一・磯谷洋介・宮下裕・奥野 誠・宇津文人・宇美公晴
昭和63	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト8 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第31回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場 中国上海選抜と交流試合 創部10周年記念祝賀会開催	平成 9	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 フェスティバルカップ '97熊本全日本選抜ハンド ボール大会 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第40回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16
平成元	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第32回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場	平成10	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第41回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16
平成 2	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第33回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場	平成11	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 （125連勝） 東日本学生ハンドボール選手権 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 （130連勝） 第42回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16
平成 3	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第34回全日本学生ハンドボール選手権大会（函館 開催） 出場	平成12	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第43回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16
平成 4	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第35回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場	平成13	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権 ベスト8 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第44回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
平成 5	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト8 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第36回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16	平成14	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 （155連勝）
平成 6	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト8 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第37回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16		
平成 7	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト8 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第38回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場		
平成 8	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場		

ハンドボール部

年度	記 録	年度	記 録
平成14	東日本学生ハンドボール選手権 ベスト8 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 (159連勝) 第45回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場	平成20	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第51回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場 創部30周年記念祝賀会開催
平成15	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 (164連勝) 東日本学生ハンドボール選手権 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 (34季連続44回目 169連勝) 第46回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場	平成21	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第52回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
平成16	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 (35季連続45回目 174連勝) 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 (36季連続46回目 179連勝) 第47回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場	平成22	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 リーグ1位 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第53回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16
平成17	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 (37季連続47回目 184連勝) 東日本学生ハンドボール選手権大会 Aブロック 優勝 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 (38季連続48回目 189連勝) 第48回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16	平成23	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 リーグ1位 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第54回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
平成18	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 (39季連続49回目 194連勝) 東日本学生ハンドボール選手権大会 Aブロック 優勝 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 (40季連続50回目 199連勝) 第49回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16	平成24	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 リーグ1位 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第55回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
平成19	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 (41季連続51回目 204連勝) 東日本学生ハンドボール選手権大会 Aブロック 優勝 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 (42季連続52回目 209連勝) 第50回全日本学生ハンドボール選手権大会 ベスト16	平成25	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第56回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
		平成26	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝 東日本学生ハンドボール選手権大会 出場 北海道学生ハンドボール秋季リーグ戦 1部 優勝 第57回全日本学生ハンドボール選手権大会 出場
		平成27	北海道学生ハンドボール春季リーグ戦 1部 優勝



少林寺拳法部

年度	記 録	年度	記 録
昭和44	第1回演武会 団体戦総合 優勝 一般有段者乱取 松下知彦 3位		東 菜美 最優秀賞 櫻庭絵美 優良賞（自由組演武）男子二段以上の部 南雲大輔・大旗大悟 最優秀賞 和久井亮輔・渡邊加代 優良賞（団体）最優秀賞
昭和45	全道学生少林寺拳法大会 団体演武 4位		
昭和46	東北対抗試合 道代表 松下知彦・奥脇一夫 全日本学生大会 道代表 松下知彦・奥脇一夫	平成14	北海道少林寺拳法学生大会 団体演武の部（女子二段以上の部・自由組演武） 渡邊加代・村山明日美 1位 渡邊江里子・松井芙美子 2位（男子二段以上の部・自由組演武）和久井亮輔・吉田照幸 3位（男子三段以上の部） 和久井亮輔 3位（二段の部）南雲大輔 優勝 吉田照幸 3位（女子二段以上の部）渡邊加代 1位 松井芙美子 2位 渡邊江里子 3位
昭和57	北海道学生新人戦 優勝規定組演武賞 谷川直樹・石原康弘		北海道少林寺拳法大会兼全国大会予選会 （三段・自由組演武）渡邊加代・村山明日美 1位（二段・自由組演武）渡邊江里子・松井芙美子 1位（三段・自由組演武）和久井亮輔・吉田照幸 2位（二段・自由組演武）後藤拓也・伊藤浩志 5位（自由組演武）上野辰徳・野呂絵美子 6位
平成 7	少林寺拳法全国大会 一般四段以上の部 出場 石川太一		少林寺拳法大会全日本学生大会 （単独演武）渡邊加代 優良賞
平成 8	北海道学生少林寺拳法大会 級拳士の部 関根倫也・成田幸久 優良賞(3位)		少林寺拳法北海道学生新人大会 男子（有段の部）吉田照幸 最優秀賞 女子（有段の部）松井芙美子 最優秀賞 村山明日美 優秀賞 男子（二段以上・自由組演武の部）和久井亮輔・吉田照幸・後藤拓也組 最優秀賞 佐藤雅大・松本徹雄 優秀賞 女子（有段の部）渡邊江里子・松井芙美子 最優秀賞（団体演武の部）最優秀賞
平成 9	北海道学生少林寺拳法大会 級拳士の部 川村啓太・成田幸久 予選通過 少林寺拳法北海道学生新人大会 有段の部 景山一幸 本戦出場		少林寺拳法全国大会 女子（二段の部・自由組演武）渡邊江里子・松井芙美子 最優秀賞
平成11	少林寺拳法北海道大会兼全国大会・北海道予選 初段の部 大柳俊晴 準優勝 2段の部 小野寺正典・目黒勝美 4位 少林寺拳法全国大会 大柳俊晴 出場	平成15	少林寺拳法北海道学生大会 （自由組演武・女子有段の部）渡邊加代・渡邊江里子・松井芙美子組 最優秀賞 東 菜美・村山明日美組 優秀賞（自由単独演武・二段以上の部）渡邊加代 最優秀賞 松井芙美子 優秀賞（自由単独演武・二段の部）吉田照幸 最優秀賞 伊藤祐樹 優秀賞（自由単独演武・三段以上の部）和久井亮輔 優秀賞 団体演武の部 最優秀賞
平成12	少林寺拳法北海道学生大会 （単演）男子有段の部 南雲大輔 優良賞 女子有段の部 渡邊加代 最優秀賞 女子級拳士 野呂絵美子 最優秀賞（組演）女子有段の部 山崎明香・渡邊加代 最優秀賞 少林寺拳法北海道学生新人大会 （単演）男子有段の部 南雲大輔 最優秀賞 女子段外の部 野呂絵美子 優秀賞 女子有段の部 渡邊加代 最優秀賞（組演）女子有段の部 山崎明香・渡邊加代 最優秀賞		
平成13	北海道学生少林寺拳法大会 （自由組演武男子二・三段の部）吉田正人・渡邊加代 優良賞(3位)（自由組演武男子初段・一級の部）上野辰徳・野呂絵美子 最優秀賞(1位)（単独規定演武）男子有段の部 南雲大輔 優秀賞(2位) 女子有段の部 渡邊加代 最優秀賞(1位) 女子級拳士の部 野呂絵美子 最優秀賞(1位) 見習の部 櫻庭絵美 優良賞(2位) 少林寺拳法北海道学生新人大会 男子有段の部 南雲大輔 最優秀賞 女子有段の部 渡邊加代 最優秀賞 女子三級見習の部		

少林寺拳法部

年度	記 録	年度	記 録
平成16	少林寺拳法北海道大会兼全国大会北海道予選会 (二段の部) 渡邊江里子・村山明日美組 最優秀賞 (三段以上の部) 渡邊加代・松井芙美子組 最優秀賞 (三段の部) 和久井亮輔・伊藤祐樹組 最優秀賞 (規定単独初・二段の部) 東 菜美 優良賞 全日本学生少林寺拳法大会 (男子三段以上の部) 和久井亮輔・吉田照幸組 敢闘賞 (女子二段以上の部) 渡邊加代・松井芙美子組 優良賞 (女子二段以上の部) 渡邊江里子・村山明日美組 ベスト12 (男子二段の部) 伊藤祐樹・川添晴之組 敢闘賞 (単独演武) 渡邊加代 敢闘賞 少林寺拳法全国大会 (一般女子三段以上の部) 渡邊加代・松井芙美子組 最優秀賞 (一般女子二段の部) 渡邊江里子・村山明日美組 優秀賞	平成17	治・大宅和彦組 優秀賞 石川将成・川名広陸組 敢闘賞 (団体演武の部) 最優秀賞 全日本学生少林寺拳法大会 (男子三段以上の部) 吉田照幸・川名広陸組 敢闘賞 (女子二段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 敢闘賞 渡邊江里子・小田紗耶香 ベスト12 (女子有段の部) 松井芙美子 優良賞 (男子有段の部) 伊藤祐樹 ベスト12 (団体の部) 敢闘賞 少林寺拳法全国大会 (一般女子三段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 最優秀賞 (一般二段の部) 工藤裕治・大宅和彦組 最優秀賞 (一般団体の部) 優秀賞 少林寺拳法北海道学生大会 (自由組演武男子二段以上の部) 伊藤祐樹・川名広陸・大宅和彦組 優秀賞 武山竜也・山口拓也組 優良賞 本間鉄矢・佐藤祐樹組 ベスト8 (自由組演武女子二段以上の部) 松井芙美子・佐藤智恵組 最優秀賞 上山清美・七戸 梢組 優秀賞 (自由単独演武男子三段の部) 伊藤祐樹 優秀賞 川名広陸 優良賞 吉田照幸 川添晴之 ベスト8 (自由単独演武男子二段の部) 本間鉄矢 優秀賞 山口拓也 優良賞 佐藤祐樹 ベスト8 (自由組演武女子二段以上の部) 松井芙美子 最優秀賞 上山清美 優秀賞 村山明日美 渡邊江里子 佐藤智恵 ベスト8 (規定単独演武女子見習の部) 新野曜加 優秀賞 (団体の部) 女子 最優秀賞 男子 優秀賞 少林寺拳法北海道大会 (男子四段以上の部) 吉田照幸 最優秀賞 (男子三段以上の部) 川名広陸・大宅和彦組 優秀賞 後藤拓也・伊藤祐樹組 優良賞 (男子二段以上の部) 本間鉄矢・佐藤祐樹組 最優秀賞 (女子三段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 最優秀賞 村山明日美・渡邊江里子組 優秀賞 (女子二段以上の部) 佐藤智恵・七戸 梢組 最優秀賞 (一般男子級拳士の部) 三上将生・辻口 歩・波多智章組 4位 少林寺拳法国際大会 in Fukui (国際大会 女子三段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 優勝 (全国大会 女子三段以上
	北海道学生少林寺拳法大会 (自由組演武男子二段以上の部) 吉田照幸・大宅和彦・川名広陸組 最優秀賞 (自由組演武女子二段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 最優秀賞 村山明日美・小田紗耶香組 優秀賞 (規定組演武男子見習の部) 辻口 歩・三上将生組 敢闘賞 (自由単独演武男子二段の部) 川名広陸 最優秀賞 工藤裕治 敢闘賞 (自由単独演武男子三段の部) 伊藤祐樹 最優秀賞 和久井亮輔 優良賞 吉田照幸 敢闘賞 (規定単独演武男子見習の部) 三上将生 最優秀賞 (規定単独演武女子見習の部) 池田詩織 敢闘賞 (自由単独演武女子二段以上の部) 松井芙美子 最優秀賞 上山清美 優秀賞 村山明日美 敢闘賞 (運用法の部) 後藤拓也・武山竜也組 最優秀賞 (団体演武の部) 最優秀賞 北海道学生新人大会 (規定単独演武男子見習3級) 三上将生 最優秀賞 (自由単独演武男子二段以上) 伊藤祐樹 最優秀賞 川名広陸 敢闘賞 (自由単独演武女子二段以上) 上山清美 最優秀賞 (自由組演武女子有段の部) 上山清美・小田紗耶香組 最優秀賞 (自由組演武男子二段以上の部) 伊藤祐樹・川添晴之・武山竜也組 最優秀賞 工藤裕		

年度	記 録	年度	記 録
	<p>の部) 松井芙美子・上山清美組 優勝 村山明日美・渡邊江里子組 5位 (全国大会 女子二段以上の部) 佐藤智恵・七戸 梢組 優勝 (男子二段以上の部) 本間鉄矢・佐藤佑樹 6位</p> <p>全日本学生少林寺拳法大会</p> <p>(団体の部) 女子 最優秀賞 男子 敢闘賞</p> <p>(女子有段の部) 松井芙美子 最優秀賞 (男子有段の部) 伊藤祐樹 敢闘賞 (女子三段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 優秀賞 村山明日美・渡邊江里子組 敢闘賞 (男子三段以上の部) 吉田照幸・工藤裕治・大宅和彦・川名広陸組 ベスト12 (女子二段の部) 佐藤智恵・七戸 梢組 敢闘賞 (男子三人掛けの部) 川添晴之・武山竜也・山口拓也組 敢闘賞 後藤拓也・坂口勇太・石川将成組 ベスト12 (男女初段の部) 三上将生・山田麻未組 ベスト12</p> <p>全日本学生少林寺拳法大会</p> <p>(男子三段以上の部) 吉田照幸・工藤裕治・大宅和彦・川名広陸組 ベスト12 (男子三人掛けの部) 添 晴之・武山竜也・山口拓也組 6位 後藤拓也・坂口勇太・石川将成組 ベスト12 (男子単独演武三段以上の部) 伊藤祐樹 ベスト12 (男女初段の部) 三上将生・山田麻未組 ベスト12 (女子三段以上の部) 松井芙美子・上山清美組 2位 村山明日美・渡邊江里子組 5位 (女子二段以上の部) 佐藤智恵・七戸 梢組 4位 (女子単独演武三段以上の部) 松井芙美子 優勝 (団体の部) 男子 5位 女子 優勝</p> <p>北海道少林寺拳法新人大会</p> <p>(団体演武) 最優秀賞 (自由組演武男子二段以上の部) 川名広陸・山口拓也組 最優秀賞 工藤裕治・武山竜也・本間鉄矢組 優秀賞 大宅和彦・佐藤祐樹組 優良賞 (女子二段以上の部) 上山清美・佐藤智恵・神田亜希組 最優秀賞 七戸 梢・山田麻未組 優秀賞 (男子初段の部) 三上将生・辻口 歩・波多智章組 ベスト8 (自由単独演武男子二段以上の部) 佐藤祐樹 最優秀賞 川名広陸 優秀賞 工藤裕治 優良賞 武山竜也 大宅和彦 山口拓也 本間鉄矢 ベスト8 (女子二段以上の部) 上山清美 最優秀賞 七戸 梢 優秀賞 佐藤智恵 優良賞</p>	平成18	<p>(男子初段の部) 三上将生 優秀賞 辻口 歩 ベスト8</p> <p>北海道少林寺拳法大会兼全国大会予選</p> <p>(一般男子三段の部) 川添晴之・工藤裕治・山口拓也組 優良賞 山田麻未・伊藤祐樹組 敢闘賞 (一般男子二段の部) 川越麻伊・川浪千重美組 最優秀賞 本間鉄矢・三上将生組 6位 (一般女子三段以上の部) 上山清美・佐藤智恵組 最優秀賞 (一般女子二段の部) 七戸 梢・神田亜希組 最優秀賞</p> <p>少林寺拳法北海道学生大会</p> <p>(自由組演武男子二段以上の部) 川添晴之・大宅和彦 優秀賞 (自由組演武女子二段以上の部) 上山清美・七戸 梢組 優秀賞 (自由単独演武男子三段以上の部) 伊藤祐樹 優秀賞 (女子三段以上の部) 上山清美 最優秀賞 佐藤智恵 優良賞</p> <p>全国少林寺拳法大会 in 北海道</p> <p>(国際大会 女子三段以上の部) 上山清美・佐藤智恵組 優勝 (男子三段の部) 川添晴之・工藤裕治・山口拓也組 5位</p> <p>全日本学生少林寺拳法大会</p> <p>(男子三人掛けの部) 本間鉄矢・佐藤祐樹・山口拓也組 4位 (男女二段以上の部) 伊藤祐樹・上山清美組 3位 (女子三段以上の部) 七戸 梢・佐藤智恵組 3位 (女子単独有段者の部) 上山清美 最優秀賞 (団体の部) 男子 3位 女子 2位</p> <p>少林寺拳法北海道新人大会</p> <p>(団体演武) 最優秀賞 (自由単独演武女子式段以上の部) 佐藤智恵 最優秀賞 川浪千重美 優秀賞 七戸 梢 優良賞 (自由単独演武男子式段以上の部) 本間鉄矢 最優秀賞 川崎和則 優良賞 (自由単独演武女子段外の部) 新野曜加 優秀賞 (自由組演武男子式段以上の部) 本間鉄矢・川越麻伊・川崎和則組 最優秀賞 山口拓也・山田麻未組 優秀賞 (自由組演武女子有段の部) 神田亜希・佐藤智恵組 最優秀賞 七戸 梢・川浪千重美組 優秀賞</p>
		平成19	<p>北海道少林寺拳法大会兼全国大会予選</p> <p>(一般男子三段の部) 川名広陸・鈴木健斗組 最</p>

少林寺拳法部

年度	記 録	年度	記 録
	<p>優秀賞 (一般女子三段以上の部) 上山清美・佐藤智恵組 最優秀賞 七戸 梢・神田亜希・川浪千重美組 優秀賞 (一般女子二段の部) 三上将生・山田麻未組 ベスト8</p> <p>少林寺拳法北海道学生新人大会</p> <p>(自由組演武男子二段以上の部) 本間鉄矢・佐藤佑樹・山口拓也組 最優秀賞 川名広陸・鈴木健斗組 武山竜也・川越麻伊組 優良賞 (自由組演武女子有段の部) 上山清美・佐藤智恵組 最優秀賞 七戸 梢・神田亜希・川浪千重美組 優秀賞 新野曜加・石井紗織組 優良賞 (自由単独演武男子三段以上の部) 鈴木健斗 最優秀賞 佐藤佑樹 優良賞 (女子三段以上の部) 佐藤智恵 最優秀賞 上山清美 優秀賞 川浪千重美 優良賞 (団体演武の部) 最優秀賞</p> <p>全国少林寺拳法大会</p> <p>(男子一般三段以上の部) 川名広陸・鈴木健斗組 最優秀賞 (女子三段以上の部) 七戸 梢・神田亜希・川浪千重美組 最優秀賞 上山清美・佐藤智恵組 優秀賞</p> <p>全日本学生少林寺拳法大会</p> <p>(男子三人掛けの部) 工藤裕治・武山竜也・山口拓也組 敢闘賞 (男子単独演武の部) 鈴木健斗 最優秀賞 (男子三段以上の部) 川名広陸・川越麻伊組 敢闘賞 (男女有段の部) 大宅和彦・七戸 梢組 最優秀賞 (女子三人掛けの部) 上山清美・山田麻未・川浪千重美組 最優秀賞 神田亜希・新野曜加・佐藤智恵組 敢闘賞 (女子単独演武の部) 石井紗織 最優秀賞 (団体の部) 男子 敢闘賞 女子 最優秀賞</p> <p>少林寺拳法北海道新人大会</p> <p>(団体演武) 優秀賞 (自由単独演武女子式段以上の部) 石井紗織 優秀賞 川浪千重美 優良賞 (自由単独演武男子式段以上の部) 鈴木健斗 最優秀賞 (自由組演武男子段外の部) 別府祐規・卯城和也組 優秀賞 (自由組演武男子式段以上の部) 鈴木健斗・川崎和則組 最優秀賞 川越麻伊・目黒正志組 優秀賞 (自由組演武女子有段の部) 石井紗織・川浪千重美組 最優秀賞</p> <p>平成20 北海道学生少林寺拳法大会</p> <p>(自由組演武男子二段以上の部) 山口拓也・佐藤</p>		<p>智恵・鈴木健斗組 優勝 本間鉄矢・川越麻伊組 2位 川崎和則・鈴木亜衣組 3位 (自由組演武女子有段の部) 石井紗織・本望恵梨組 優勝 山田麻未・神田亜希・川浪千重美組 2位 (自由単独演武男子三段以上の部) 鈴木健斗 優勝 川崎和則 2位 本間鉄矢 3位 (女子三段以上の部) 鈴木亜衣 優勝 石井紗織 3位 (団体演武の部) 函館大学B 優勝 函館大学A 準優勝</p> <p>北海道少林寺拳法大会兼全国大会予選</p> <p>(自由組演武一般男子三段の部) 本間鉄矢・鈴木健斗組 2位 (自由組演武一般女子三段以上の部) 川浪千重美・鈴木亜衣組 優勝 山田麻未・小山雅世組 2位 (自由組演武一般二段の部) 蒔苗祐弥・加藤剛士組 2位 (自由組演武一般男女有段の部) 山口拓也・石井紗織組 優勝 佐藤祐斬・神田亜希組 3位</p> <p>少林寺拳法全日本学生大会</p> <p>(女子三人掛けの部) 神田亜希・山田麻未・佐藤智恵組 優勝 (女子二段の部) 石井紗織・本望恵梨組 優勝 (女子三段以上) 川浪千重美・鈴木亜衣組 4位 (団体の部) 男子 6位 女子 2位</p> <p>少林寺拳法全国大会 in おかやま</p> <p>(一般男子三段の部) 本間鉄矢・鈴木健斗組 4位 (一般女子三段以上の部) 山田麻未・小山雅世組 2位 川浪千重美・鈴木亜衣組 3位</p> <p>少林寺拳法北海道新人大会</p> <p>(団体演武) 優勝 (自由単独演武女子式段以上の部) 石井紗織 優勝 鈴木亜衣 2位 小山雅世 3位 (自由単独演武男子式段以上の部) 鈴木健斗 優勝 (自由単独演武男子初段の部) 本間鉄矢 優勝 (自由単独演武男子式段以上の部) 鈴木健斗・本望恵梨組 優勝 鈴木亜衣・蒔苗祐弥組 2位 (自由組演武女子有段の部) 石井紗織・小山雅世組 優勝</p> <p>平成21 北海道学生少林寺拳法大会</p> <p>(自由組演武女子有段の部) 川浪千重美・石井紗織・鈴木亜衣組 優勝 (自由単独演武男子二段の部) 小川和弥 2位 (自由単独演武男子三段以上の部) 鈴木健斗 優勝 (自由単独演武女子</p>

年度	記 録	年度	記 録
	<p>二段以上の部)鈴木亜衣 優勝 石井紗織 3位 (団体演武の部) 優勝 (運用法男子有段の部) 加藤剛士 優勝 (運用法女子有段の部) 小山雅世 優勝</p> <p>北海道少林寺拳法大会兼全国大会予選 (規定単独演武一般初段二段の部) 小川和弥 優勝 (自由組演武一般男子三段の部) 鈴木健斗・蒔苗祐弥組 優勝 目黒正志・加藤剛士組 2位 (自由組演武一般女子三段以上の部) 川浪千重美・鈴木亜衣組 優勝 石井紗織・小山雅世組 2位</p> <p>少林寺拳法全国大会 in 青森 (一般女子三段以上の部) 川浪千重美・鈴木亜衣組 2位 石井紗織・小山雅世組 4位</p> <p>少林寺拳法北海道新人大会 (総合) 優勝 (団体の部) 優勝 (男子単独演武式段以上の部) 蒔苗祐弥 2位 (女子単独演武有段の部) 鈴木亜衣 優勝 小山雅世 2位 (自由組演武男子式段以上の部) 蒔苗祐弥・加藤剛士組 優勝 嵐村翔太・小川和弥組 2位 (自由組演武女子有段の部) 鈴木亜衣・小山雅世組 優勝</p> <p>少林寺拳法全日本学生大会 (男女二段以上の部) 鈴木健斗・鈴木亜衣組 優勝 (女子三人掛けの部) 石井紗織・小山雅世組 3位 (男子三人掛けの部) 嵐村翔太・加藤剛士・小川和弥組 ベスト8 (男子三段以上の部) 川越麻伊・蒔苗祐弥組 ベスト8 (団体の部) 男子 3位</p>	<p>平成23 北海道学生少林寺拳法大会 (男子二段以上の部) 蒔苗祐弥・加藤剛士組 準優勝 (女子有段の部) 小山雅世・鈴木亜衣組 優勝</p> <p>少林寺拳法全日本学生大会] (男子三段以上の部) 蒔苗祐弥・加藤剛士・東坂(北大)組 7位 (女子三段以上の部) 小山雅世・鈴木亜衣組 3位</p> <p>平成24 北海道学生大会 吉田奈央 最優秀賞 北海道学生大会 単独女子の部 最優秀賞 組演男子の部 最優秀賞 北海道学生新人大会 最優秀賞</p>	
平成22	<p>北海道学生少林寺拳法大会 (男子単独有段の部) 鈴木健斗 優勝 (女子単独有段の部) 鈴木亜衣 優勝 石井紗織 2位 (男女三段以上の部) 鈴木健斗・鈴木亜衣組 1位 蒔苗祐弥・石井紗織・小川和弥組 2位 (団体演武の部) 優勝</p> <p>北海道少林寺拳法大会兼全国大会予選 (男子有段自由組演武の部) 鈴木健斗・小川和弥組 1位 加藤剛士・鈴木亜衣組 2位</p> <p>少林寺拳法全日本学生大会 (女子三人掛けの部) 石井紗織・小山雅世・鈴木亜衣組 3位</p>		

バスケットボール部

年度	記 録
昭和44	函館地区四大学定期戦 2位
平成11	北海道学生バスケットボール春季選手権大会 ベスト8
平成16	北海道学生バスケットボール選手権大会 2部 5位 女子バスケットボール同好会 北海道バスケットボール春季選手権大会 女子出場16チーム 3位 北海道学生バスケットボール選手権大会 3部リーグ 優勝（2部昇格）
平成17	女子バスケットボール同好会 北海道バスケットボール春季選手権大会 3位 優秀選手賞 稲辺祐希 北海道学生バスケットボール選手権大会 2部 優勝（1部昇格）最優秀選手賞 三浦里奈
平成18	女子バスケットボール部 北海道バスケットボール春季選手権大会 1部 準優勝 優秀選手賞 敢闘賞 三浦里奈 優秀賞 鳴海 麻由 北海道学生バスケットボール選手権大会 1部 2位（インカレ出場権獲得） 優秀選手賞 鳴海麻由 敢闘賞 三浦里奈 全日本学生バスケットボール選手権大会 1回戦敗退
平成19	北海道バスケットボール春季選手権大会 3位 優秀選手賞 優秀賞 三浦里奈 北海道学生バスケットボール選手権大会 1部 初優勝（インカレ出場） 優秀選手賞 鳴海麻由 敢闘賞 三浦里奈 優秀選手賞 優秀賞 三浦里奈 北海道バスケットボール総合選手権大会 3位 優秀選手賞 優秀賞 三浦里奈 全日本学生バスケットボール選手権大会 1回戦敗退
平成20	北海道バスケットボール春季選手権大会 優勝 最優秀選手賞 坂 妃香梨 新人王 菅原裕美子 北海道バスケットボール選手権大会 1部 優勝 最優秀選手賞 坂 妃香梨 優秀選手賞 山崎 舞奈 リバウンド王 坂 妃香梨 全日本総合バスケットボール選手権大会北海道大会 優勝 最優秀選手賞 菊池亜寿沙 優秀選手賞 坂 妃香梨

年度	記 録
平成21	全日本学生バスケットボール選手権記念大会 1回戦敗退 全日本総合バスケットボール選手権大会 1回戦敗退 北海道バスケットボール春季選手権大会 優勝 最優秀選手賞 山崎舞奈 優秀選手賞 菅原裕 美子 新人王 谷口璃菜 国民体育大会北海道予選会 準優勝 北海道学生バスケットボール選手権大会 3位 優秀選手賞 谷口璃菜 得点王 谷口璃菜 アシスト王 小見山奈那美



柔 道 部

年度	記 録
昭和46	渡島青少年柔道大会 優勝
平成 5	全日本学生柔道優勝大会出場
平成 8	北海道地区大学体育大会 団体 準優勝 北海道学生柔道体重別選手権大会 95kg級 田栗昌弘 3位
平成 9	北海道学生柔道体重別選手権大会 65kg級 佐藤康博 3位 北海道学生柔道新人大会 団体 ベスト16 北海道学生柔道選手権大会 無差別級 鈴木正人 ベスト8 北海道学生女子柔道選手権大会 無差別級 澤田裕美 ベスト8
平成11	全日本柔道大会北海道予選 澤田裕美 ベスト8 国民体育大会北海道予選 無差別級 澤田裕美 3位 北海道学生女子柔道体重別選手権大会 78kg級 澤田裕美 優勝 全日本学生女子柔道体重別選手権大会 78kg級 澤田裕美 ベスト8

年度	記 録
平成12	南北海道段別柔道大会 無差別級 澤田裕美 準優勝 北海道学生柔道体重別選手権大会・北海道学生女子柔道体重別選手権大会 78kg級 澤田裕美 準優勝
平成13	北海道学生柔道体重別選手権大会・北海道学生女子柔道体重別選手権大会 70kg級 澤田裕美 3位 増田光司 ベスト16



洋 弓 部

年度	記 録
昭和44	北海道地区洋弓大会 三浦敬子 準優勝
昭和45	道新杯 三浦敬子 優勝 青函対抗 三浦敬子 優勝 青森県大会 三浦敬子 優勝 全道弓道大会 三浦敬子 優勝 全国都道府県大会 三浦敬子 出場

羽 根 球 部

年度	記 録	年度	記 録
平成 5	全日本学生バドミントン選手権大会出場 ダブルス 栗山敏雄・林 雄次	平成10	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 4戦全勝（団体）1部リーグ 優勝 北海道学生バドミントン選手権 シングルス 百瀬隆幸 4位 菅原彰通 ベスト8 ダブルス 菅原彰通・阿保安彦組 3位 三上直也・松本譲組 4位 東日本学生バドミントン選手権 出場 北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 4戦全勝（団体）1部リーグ 優勝 北海道学生バドミントン選手権大会 団体 ベスト16 ダブルス 松本 譲・三上直也組 ベスト16 北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会 シングルス 三上直也 3位 百瀬隆幸 菅原彰通 ベスト8 ダブルス 松本 譲・三上直也組 菅原彰通・阿保安彦組 ベスト8
平成 6	全日本学生バドミントン選手権大会出場 ダブルス 栗山敏雄・林 雄次 シングルス 栗山敏雄・国府田哲弘	平成11	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 団体 1部リーグ 準優勝 第23回函館地区春季一般バドミントン大会 シングルス 百瀬隆幸 優勝 阿保安彦 準優勝 ダブルス 阿保安彦・阿久津秀徳組 優勝 百瀬隆幸・田中健太組 4位 北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 団体 1部リーグ 準優勝 全日本学生バドミントン選手権大会 出場 第46回北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会 シングルス 百瀬隆幸 ベスト8 ダブルス 阿保安彦・川端将史組 3位 田中健太・水上将志組 4位 三上直也・佐藤大輔組 ベスト8
平成 7	東日本学生バドミントン選手権大会出場 全日本学生バドミントン選手権大会出場 ダブルス 栗山敏雄・林 雄次組	平成12	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 1部リーグ 3位 北海道学生バドミントン選手権大会 団体 1部リーグ 準優勝 北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 三上直也 3位 ダブルス 西川和成・宮本清治組 優勝 菅原彰通・小石組 準優勝 北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 三上直也 3位 志賀陽成 4位 ダブルス 松本 譲・三上直也組 優勝 西川和成・宮本清治組 準優勝 北海道学生バドミントン新人戦大会 団体 Aチーム 優勝 Bチーム 準優勝 シングルス 百瀬隆幸 優勝 中地直樹 4位 ダブルス 松本 譲・三上直也組 石井伸行・岡本新一組 菅原彰通・佐藤大輔組 ベスト8
平成 8	北海道学生バドミントン春季リーグ大会（団体） 男子1部リーグ 準優勝 北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 三上直也 優勝 ダブルス 西川和成・宮本清治 準優勝 北海道学生バドミントン秋季リーグ戦（団体） 男子1部リーグ 3位 第39回東日本学生バドミントン選手権大会出場 シングルス 志賀陽成・横山 惣 ダブルス 高橋昌之・横山 惣 石井伸行・百瀬隆幸	平成13	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 団体 3位 北海道学生バドミントン選手権大会 ダブルス 工藤啓史・森川真義組 ベスト16
平成 9	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 4戦全勝 1部リーグ 優勝 函館地区春季一般バドミントン大会 シングルス 中地直樹 優勝 宮本清治 準優勝 ダブルス 西川和成・宮本清治組 優勝 菅原彰通・小石組 準優勝 北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 三上直也 3位 ダブルス 西川和成・宮本清治組 優勝 東日本学生バドミントン選手権大会 北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 4戦全勝（団体）1部リーグ 優勝 全日本学生バドミントン選手権大会出場 北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会 シングルス 三上直也 3位 志賀陽成 4位 ダブルス 松本 譲・三上直也組 優勝 西川和成・宮本清治組 準優勝 北海道学生バドミントン新人戦大会 団体 Aチーム 優勝 Bチーム 準優勝 シングルス 百瀬隆幸 優勝 中地直樹 4位 ダブルス 松本 譲・三上直也組 石井伸行・岡本新一組 菅原彰通・佐藤大輔組 ベスト8		

年度	記 録	年度	記 録
平成14	東日本学生バドミントン選手権 出場	平成18	北海道学生バドミントン春季リーグ戦 団体 1部リーグ 4位
	北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 団体 4位		北海道学生バドミントン秋季リーグ戦 団体 1部リーグ 5位 2部降格
	北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会 ダブルス 榊田旬平・相原慎太郎組 ベスト16	平成19	北海道学生バドミントン春季リーグ戦 団体 2部リーグ 5位 3部降格
	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 団体 5位	平成20	北海道学生バドミントン春季リーグ戦 団体 北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 内藤徳亮 4回戦敗退 荻野将虎 2回戦敗退
	北海道学生バドミントン春季リーグ戦入替え戦 団体 2部降格		北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 内藤徳亮 3回戦敗退 ダブルス 内藤徳亮・荻野将虎組 2回戦敗退
平成15	北海道学生バドミントン選手権大会 個人 榊田旬平 相原慎太郎 ベスト16	平成21	北海道学生バドミントン選手権大会 ダブルス 内藤徳亮・荻野将虎組 ベスト16
	北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 団体 2部リーグ 3位		
	北海道学生バドミントン春季リーグ戦大会 団体 2部リーグ 4位		
	北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 団体 2部リーグ 4位		
	北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会 シングルス 六本木勇人 ベスト16 ダブルス 芳賀圭太・宮田崇宏組 ベスト16		
平成16	北海道学生バドミントン春季リーグ戦 団体 2部リーグ 2位		
	北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 六本木勇人 3位 インカレ出場		
	北海道学生バドミントン秋季リーグ戦大会 団体 2部リーグ 1位		
	全日本学生バドミントン選手権大会 シングルス 六本木勇人 2回戦敗退		
	北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会 シングルス 六本木勇人 ベスト4 柳川健太 ベスト16 ダブルス 木口真徳・六本木歩組 ベスト16		
平成17	北海道学生バドミントン新人戦大会 シングルス 六本木 歩 ベスト16 ダブルス 木口真徳・六本木歩組 ベスト4		
	北海道学生バドミントン春季リーグ戦 団体 2部リーグ 4位		
	北海道学生バドミントン選手権大会 シングルス 六本木勇人 ベスト8		
	北海道学生バドミントン秋季リーグ戦 団体 優勝 1部昇格		



ボウリング部

年度	記 録	年度	記 録
昭和48	北海道学生選手権新人戦 個人 準優勝 北海道選手権 団体 優勝 個人 優勝 東日本選手権出場 全日本個人選手権大会出場 東日本選手権出場 北海道学生選手権大会（新人戦） 個人 準優勝	平成14	東日本学生ボウリング個人選手権 小倉 崇 2位 全日本大学ボウリング選手権大会 団体 準優勝 北海道東北学生ボウリング連盟北地区4月度月例会 個人 梅澤雅史 優勝 東北学生春季リーグ戦 団体 優勝 東北学生春季リーグ戦 団体 優勝 東北総合体育大会 団体 和田京美 優勝 個人戦（ユースの部）和田京美 3位 東北学生ボウリング選手権大会 5人チーム戦 優勝 2人チーム戦 2位 東日本ボウリング選手権大会 団体 女子 2位 男子 5位 東北学生秋季リーグ戦 団体 優勝 東日本学生ボウリング個人選手権大会 小倉 崇 優勝 福島宏友 準優勝 全日本大学ボウリング選手権大会 団体 3位 東北学生春季リーグ戦 団体 1位 秋田県民体育大会 個人 今村博史 4人チーム戦 8位 2人チーム戦 15位 東北総合体育大会ボウリング競技会 国民体育大会東北ブロック大会 （秋田）個人 今村博史 4位 団体 4位 （青森）個人 和田京美 4位 団体 3位 （宮城）個人 鈴木大介 1位 団体 2位 東北学生ダブルス選手権大会 Aチーム 3位 Dチーム 5位 Bチーム 6位 Cチーム 7位 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 男子 優勝 女子 優勝 東北学生秋季リーグ戦 団体 31勝5敗 優勝 東北ボウリング選手権大会 2チーム戦 鈴木大介・松尾弘幸 5位 マスターズ戦 松尾弘幸 12位 東北学生個人選手権大会 和田京美 優勝 梅澤雅史 7位 藤井研作 9位 水本裕介 11位 福島宏友 12位 石塚友明 13位 全日本学生ボウリング選手権大会 団体 男子 優勝 女子 3位
平成6	全日本学生個人選抜ボウリング選手権大会出場 関東 勲、時田高茂		
平成8	東北学生ボウリング選手権大会 5人チーム戦 A 3位 2人チーム戦 B 優勝 東日本学生ボウリング選手権大会 17位		
平成9	東日本学生ボウリング選手権大会 5人チーム戦 5位入賞 東北学生ボウリング秋季リーグ戦大会 優勝 東北学生ボウリング新人選手権大会 小橋 宏 準優勝 平田和宏 4位 全日本大学ボウリング選手権大会 9位		
平成10	東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 3大会連続 優勝 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 20チーム中 準優勝 北海道東北学生新人選手権大会及び個人選手権大会 小倉 崇 優勝 平田和宏 準優勝 東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 優勝 全日本学生選手権大会出場	平成15	
平成11	東北学生春季リーグ戦 優勝 東日本学生ボウリング選手権大会 優勝 全日本大学ボウリング選手権大会 4位		
平成12	東北学生春季リーグ選手権大会 10戦全勝 優勝 東北学生秋季リーグ選手権大会 10戦全勝 優勝 全日本大学ボウリング選手権大会 42チーム中 準優勝		
平成13	東北学生春季リーグ選手権大会 団体 優勝 東日本ボウリング選手権大会 2名出場 予選落ち 東北学生春季リーグ戦 29勝1敗 優勝 東日本ボウリング選手権大会 3位 東北学生ボウリング選手権大会 5人チーム戦 優勝 2人チーム戦 優勝 マスターズ戦 本田知浩 3位 小倉 崇 5位 佐々木 健 6位 東北学生ボウリング秋季リーグ戦 2位		

年度	記 録	年度	記 録		
平成16	東北学生春季リーグ戦 団体 Aチーム 1位 Bチーム 2位 東日本ボウリング選手権大会 4人チーム学連A 団体 7位 北海道・東北学生ボウリング個人選手権大会 個人 菊池 愛 優勝 佐藤まさみ 2位 石塚知明 4位 梅澤雅史 5位 和田京美 7位 古堅葉月 8位 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 男子 優勝 女子 優勝 北海道・東北学生ボウリング選手権大会 団体 2人チーム戦 1.2.3.4.5.位 5人チーム戦 1.2.3.5位 個人 5名出場 2.3.4.5.6位 東北ボウリング選手権大会 (団体)男子2人チーム戦 6位 女子2人チーム戦 1位 (個人)佐藤まさみ 1位 菊池 愛 3位 北海道・東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 団体 26勝4敗 優勝 東日本学生個人選手権大会 和田京美 9位 全日本大学ボウリング選手権大会 団体 男子5人チーム 3位 女子3人チーム 準優勝	平成18	大学対抗ボウリング大会 花岡尚也 3位 安田一大 5位 東北ボウリング選手権大会 4人チーム戦 男子 優勝 女子 優勝 2人チーム戦 男子 2位 女子 3位 マスターズ 3位 全日本大学ボウリング選手権大会 男子 優勝 女子 4位 東北選抜ボウリング選手権大会 鈴木大介 4位 全日本選抜ボウリング選手権大会 宮川裕充 7位 北海道東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 団体 全勝 優勝 北海道東北学生ダブルス選手権大会 団体 Cチーム 優勝 Dチーム 準優勝 Bチーム 3位 北海道シングル選手権大会 菊池 愛 準優勝 北海道・東北学生ボウリング個人選手権大会 千葉達也 優勝 菊池 愛 準優勝 庄司貴一 3位 H/G鈴木亮平 H/S千葉達也 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 男子 優勝 女子 準優勝 東北ボウリング選手権大会 Aチーム 優勝 小野崇宏 1位 菅原孔明 4位 全日本新人選手権大会 田中裕子 5位 北海道・東北学生ボウリング連盟秋季リーグ前半戦 団体 15勝0敗 東北ボウリング選手権大会 2人チーム戦 女子学連A 6位 4人チーム戦 男子学連A 2位 女子学連A 8位 学校対抗ボウリング選手権大会 小野崇宏 優勝 北海道東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 団体 26勝1敗 優勝 全日本大学ボウリング選手権大会 団体 男子 2位 女子 3位 全日本個人ボウリング選手権大会 鈴木大介 優勝		
	平成17		東北選抜ボウリング選手権大会 佐藤まさみ 6位 和田京美 7位 全日本選抜ボウリング選手権大会 鈴木亮平 4位 北海道東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 団体 Aチーム 20勝1敗 優勝 花岡尚也 ハイゲーム 鈴木亮平 ハイアベレージ Aチーム チームハイゲーム、チームハイシリーズ 北海道東北学生ダブルス選手権大会 梅澤雅史・石塚知明組 優勝 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 男子 準優勝 女子 準優勝 北海道・東北学生ボウリング個人選手権大会 鈴木大介 1位 和田京美 2位 古堅葉月 3位 花岡尚也 4位 菊池 愛 5位 千葉達也 6位 立和田充志 7位 北海道・東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 団体 優勝 石塚知明 1位 梅澤雅史 2位 鈴木大介 3位 水本裕介 4位	平成19	全日本選抜ボウリング選手権大会 小濱和音 4位 手島大地 4位 古堅葉月 4位 北海道東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 前半戦14勝1敗 後半戦12勝0敗 優勝 北海道・東北学生ダブルス選手権大会 団体 Aチーム 優勝 Bチーム 2位

ボウリング部

年度	記 録	年度	記 録
平成19	Cチーム 5位 Dチーム 6位 北海道・東北学生ボウリング選手権大会 (個人) 鈴木亮平 優勝 小濱和音 準優勝 (ダブルス) 小野崇宏・手島大地組 優勝 (団体) 優勝 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 準優勝 北海道・東北学生個人ボウリング選手権大会 小濱和音 優勝 安田一大 3位 東北ボウリング選手権大会 マスターズ 鈴木亮平 8位 北海道ボウリング選手権大会 小濱和音 2位 北海道4人チームボウリング選手権大会 男子Aチーム 4位 北海道東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 団体 22勝2敗 優勝 全日本大学ボウリング選手権大会 団体 男子 3位 女子 2位	平成21	(マスターズ戦) 手島大地 3位 東北選抜ボウリング選手権大会 手島大地 6位 田邊 学 7位 全日本選抜選手権大会 田邊 学 準優勝 山中 涼 4位 北海道東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 団体 前半戦12勝0敗 後半戦10勝2敗 優勝 北海道東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 団体 前半戦14勝1敗 後半戦13勝2敗 優勝 東北ボウリング選手権大会 手島大地 5位 北海道ボウリング選手権大会 小濱和音 5位 全日本大学ボウリング選手権大会 男子5人チーム戦 3位
平成20	北海道東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 団体 Aチーム 前半戦15勝0敗 後半戦15勝 0敗 優勝 Bチーム 前半戦9勝6敗 後半戦 9勝6敗 3位 北海道・東北学生ダブルス選手権大会 Bチーム 優勝 Cチーム 3位 Aチーム 4 位 Eチーム 5位 Dチーム 6位 北海道・東北学生ボウリング選手権大会 (2人チーム戦) 手島大地・小濱和音組 優勝 舘田美歩・大塚裕二組 準優勝 (4人チーム 戦) 原田 実・重松潤也・小濱和音・手島大地 優勝 田邊 学・田中裕子・花岡尚也・鈴木亮 平 準優勝 (マスターズ) 花岡尚也 優勝 山 中 涼 準優勝 東日本学生ボウリング選手権大会 団体 Aチーム 優勝 Bチーム 4位 全日本ボウリング選手権大会 山中 涼 優勝 東北ボウリング選手権大会 (マスターズ) 大塚裕二 6位 鈴木亮平 7位 (4人チーム戦) 4位 (ダブルス) 5位 北海道ボウリング選手権大会 (ダブルス戦) 手島大地・千葉達也組 優勝 山 中 涼・小濱和音組 2位 (4人チーム戦) 手 島大地・千葉達也・山中 涼・小濱和音 3位	平成22	北海道東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 団体 前半戦11勝1敗 後半戦9勝2敗 優勝 北海道東北学連ダブルス選手権大会 Eチーム (小鹿・藤原) 優勝 Bチーム (山中・ 小濱) 3位 Dチーム (大塚・手島) 4位 C チーム (田邊・田原) 5位 Aチーム (太田・ 篠原) 6位 北海道プロ・アマオープンボウリングトーナメント 手島大地 優勝 (アマチュア1位) 小濱和音 6位 (アマチュア2位) 東日本学生ボウリング選手権大会 男子 Aチーム 優勝 Bチーム 準優勝 女子 準優勝 東北学生個人選手権 小濱和音 2位 藤原弘貴 3位 東北ボウリング選手権大会 4人チーム 2位 個人 藤原弘貴 優勝 小濱和音 5位 ABS JAPAN Open ボウリング選手権 マスターズ戦 手島大地 8位 北海道・東北秋季ダブルス選手権大会 男子 Aチーム (小濱・手島) 優勝 Bチーム (重松・山中) 準優勝 Dチーム (小鹿・大塚) 3位 Cチーム (小松・藤原) 4位 Eチーム (田邊・篠原) 5位 Fチーム (田原・太田) 6位 女子 (舘田・後藤) 準優勝 全日本大学ボウリング選手権大会 男子 Aチーム (手島・小濱・山中・重松・小

年度	記 録
平成23	<p>鹿、藤原) 準優勝 Bチーム(田邊、篠原、田原、太田、小松、大塚) 7位 女子 北海道・東北選抜(舘田・後藤、佐々木(東北学院大)) 5位</p> <p>北海道・東北学生ボウリング連盟春季個人戦 藤原弘貴 5位 小鹿大樹 7位</p> <p>東日本学生ボウリング選手権大会 男子 優勝</p> <p>北海道・東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 優勝</p> <p>東北ボウリング選手権大会 女子 ダブルス 4位 4人チーム 5位</p> <p>全日本大学ボウリング選手権大会 男子 優勝 大塚裕二・小鹿大樹・小松 忍・田邊 学・篠原大明・藤原弘貴・山中 涼</p>
平成24	<p>東北選抜ボウリング大会 藤原弘貴 予選敗退</p> <p>北海道・東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 優勝</p> <p>全日本選抜ボウリング選手権大会 藤原弘貴 予選敗退</p> <p>北海道東北学生ダブルス選手権大会 Aチーム、Bチーム、Cチーム決勝進出 Aチーム 5位 Bチーム 6位</p> <p>東日本ボウリング選手権大会 男子 4位</p> <p>北海道・東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 優勝</p> <p>全日本大学ボウリング選手権大会 男子 決勝進出 7位 藤原弘貴・太田拓実・石井 葵・杉田 航・永井将人</p>

年度	記 録
平成25	<p>北海道・東北学生ボウリング連盟春季リーグ戦 2位</p> <p>北海道・東北学生ダブルス選手権大会 Aチーム 3位 Bチーム 5位</p> <p>北海道・東北学生ボウリング選手権大会 2位</p> <p>全日本大学ボウリング王座決定戦 北海道・東北学連選抜Aチームにて石井 葵出場 個人ハイゲーム賞受賞</p> <p>北海道・東北学生個人選手権大会 永井将人・太田拓実 予選敗退</p> <p>北海道・東北学生ボウリング連盟秋季リーグ戦 前半戦・後半戦 1位</p> <p>全日本大学ボウリング選手権大会 5位</p>



準硬式野球部

年度	記 録
平成 6	全日本大学準硬式野球9ブロック大会出場
平成 8	<p>北海道選抜 青木葉幹貴 湯浅英樹 春田勝也</p> <p>北海道地区大学準硬式野球3部リーグ選手権大会 優勝</p> <p>北海道地区大学準硬式リーグ入れ替え戦 2部昇格</p> <p>北海道地区大学準硬式野球秋季大会 ベスト8</p>

年度	記 録
平成 9	全日本大学9ブロック対抗大会出場
平成 13	<p>北海道選抜 坂口功人 今村 勇</p> <p>北海道大学準硬式野球2部リーグ選手権大会 2勝3敗 4位</p> <p>北海道地区大学準硬式野球2部リーグ選手権大会 2部リーグ 6位</p>

硬式庭球部

年度	記 録	年度	記 録
平成 8	全日本大学対抗テニス王座決定戦北海道予選 3部優勝（入替戦へ） 全日本大学対抗テニス王座決定戦（入替戦） 2部昇格		全日本学生テニス選手権大会 古川雄亮 尾村 哲 出場 北海道学生テニス選手権 ダブルス 古川雄亮・尾村哲組 ベスト8
平成 9	全日本大学テニス王座決定試合 団体 2部リーグ 4位 全日本大学テニス王座決定試合（入替戦） 団体 2部リーグ 残留 北海道学生テニス選手権大会：本戦 シングル 古川雄亮 尾村 哲 ベスト16 ダブルス 古川雄亮・尾村 哲組 準優勝	平成 11	全日本大学選手権北海道予選 シングル 鈴木晋太郎 準優勝 全日本学生テニス選手権大会 鈴木晋太郎 出場
平成 10	全日本大学テニス選手権大会北海道本戦 シングル 古川雄亮 尾村 哲 ベスト8 ダブルス 古川雄亮・尾村 哲組 準優勝 全日本大学対抗テニス王座決定試合 団体 2部リーグ 優勝→入替戦 勝利 1部昇格	平成 14	全日本大学対抗テニス王座決定試合北海道地区予選 団体 3部 2位
		平成 15	全日本大学対抗テニス王座決定試合北海道予選 団体 3部リーグ 4位 入替戦へ

ゴルフ部

年度	記 録	年度	記 録
平成 9	北海道学生ゴルフ選手権予選 榊田智雄 12位（予選通過） 北海道大学ゴルフ対抗戦 Bブロック 3位		北海道大学ゴルフ対抗戦 Aブロック 4位 第1回定例会 遠藤漢侍 10位 早坂宗隆 12位
平成 10	北海道大学ゴルフ対抗戦 Bブロック 準優勝 北海道大学生ゴルフマッチプレー選手権 （北海道学生ゴルフ選手権）屋代慎一郎 4位 全国大会出場権獲得（北海道大学ゴルフ対抗戦）上位4人スコア 2位（第2回定例会）屋代慎一郎 3位（新人戦）阿部博之 4位 吉野谷豊史 5位	平成 14	
平成 12	北海道ゴルフ対抗戦Bブロック 優勝 北海道学生ゴルフA-Bブロック入替戦 Aブロック昇格	平成 15	北海道学生ゴルフ選手権予選 遠藤漢侍 43名中2位 北海道学生ゴルフ選手権 遠藤漢侍 41名中10位
平成 13	第1回男子定例会 36名中20位 第2回定例会 3名予選通過 新人戦 遠藤漢侍 10位 河野泰志 16位		

ボクシング同好会

年度	記 録
昭和59	北海道アマボクシング総合選手権 ライトミドル級 優勝 花田哲哉 全日本アマ選手権権ロス五輪 最終選考会出場

トランポリン同好会

年度	記 録
平成 5	全日本学生大会・全日本選手権大会出場 稗田道也
平成 6	全日本学生トランポリン競技選手権大会出場 稗田道也・岡崎正明・村上憲一郎
平成 7	全日本トランポリン大会出場 稗田道也 Aクラス個人 6位

ラグビー部

年度	記 録
平成 8	北海道地区大学ラグビーフットボール選手権大会 1部リーグ 3位
平成 9	北海道ラグビーフットボール選手権大会 Eブロック 優勝 Dブロック昇格
平成10	北海道ラグビーフットボール選手権大会 Dブロック 優勝 Cブロック昇格 北海道地区ラグビーフットボール選手権大会 ベスト4 函館市秋季会長杯 2位
平成11	北海道選手権大会 Cブロック 優勝

アルティメット部

年度	記 録
平成 7	全日本学生アルティメット選手権大会出場 8位
平成 8	横浜アルティメットクラシック東西対抗学生オールスター戦 選抜出場 井上裕司

杖道同好会

年度	記 録
平成20	全日本杖道選手権 檜田真人 三段の部 出場 北海道団体優勝居合道大会 檜田真人 奨励賞
平成21	全日本杖道大会 檜田真人 三段の部 出場
平成25	北海道杖道大会 船木紗夜子 優勝

美 術 部

年度	記 録
昭和43	全道展 入選 1名 赤光社アンデバンダン展受賞 学生全道展 入選 3名
昭和48	校外展示会・画廊喫茶「英」

茶 道 部

年度	記 録
昭和43	茶会（香雪園）
昭和53	新入生歓迎茶会・卒業生送別茶会 表千家函館支部主催茶会に参加

吹奏楽部

年度	記 録
昭和43	函館短期大学祭 賛助出演

マーケティング研究会

年度	記 録
昭和43	北海道観光開発基本計画に関する研究並びに中間報告 機関紙「流通確信」第1号発刊
昭和44	機関紙「流通確信」第2号発刊
昭和45	機関紙「流通確信」第3号発刊
昭和46	機関紙「流通確信」第4号発刊
昭和47	機関紙「流通確信」第5号発刊



経済学研究会

年度	記 録
昭和43	碧門経済第1号発刊
昭和47	函館経済へのアプローチを統一テーマとして研究報告を行う

モダン・ジャズ研究会

年度	記 録
昭和45	第1回レコード・コンサート開催機関紙「即興」発刊
昭和47	月例コンサート開催
昭和58	学外コンサート開催



会計学研究会

年度	記 録
昭和45	函館市内珠算協議会開催 日商簿記検定受験指導実施

写 真 部

年度	記 録
昭和47	第二回写真展開催
昭和52	入学式・新入生のスナップ撮影 硬式野球部優勝壮行会・神宮大会撮影、構内パネ ル展開催
昭和54	学外写真展漁火展開催
昭和55	学外写真展漁火展開催
昭和56	学外写真展漁火展開催
昭和57	学外写真展漁火展開催
昭和58	学外写真展漁火展開催



ローターアクト部

年度	記 録
昭和50	全国学生交通遺児育英募金活動
昭和51	全国学生交通遺児育英募金活動、歳末助け合い募 金活動実施
昭和54	5大学交流会に参加
昭和55	青年リーダー初級講座に参加
昭和56	5大学交流会に参加 フィリピン研修旅行に参加
昭和57	韓国研修旅行に参加
昭和58	5大学交流会に参加
昭和59	5大学交流会に参加 フィリピン研修旅行に参加 東ロータリー定期例会に参加



フォークソング部

年度	記 録
昭和53	マイナーコンサート開催 NHK・FM「タベのひととき」に出演、定期コンサート開催
昭和55	定期コンサート開催
昭和56	卒業生追出しコンサート開催
昭和58	学外コンサート開催

アニメサークル

年度	記 録
昭和57	函館漫画大会参加 学外イラスト展開催 会誌「湯川温泉電停前」1号発刊
昭和58	会誌「湯川温泉電停前」2号発刊
昭和59	函館漫画大会に参加

連絡船を守る会

年度	記 録
昭和58	連絡船フェスティバルに参加

将棋同好会

年度	記 録
平成 5	全日本学生将棋連盟十傑戦 高橋拓美 出場

弁 論 部

年度	記 録
平成12	第1回弁論大会
平成13	第2回弁論大会
平成14	第3回弁論大会
	全国青年弁論大会 渡邊裕美 優秀賞
平成15	第4回弁論大会
	全国青年弁論大会 渡邊裕美 優秀賞
平成16	第5回弁論大会
	全国青年弁論大会 渡邊裕美 優良賞
平成17	第6回弁論大会
	全国青年弁論大会 渡邊裕美 優良賞
平成18	第7回弁論大会
平成19	第8回弁論大会
平成20	第9回弁論大会
平成21	第10回弁論大会

年度	記 録
平成22	第11回弁論大会
平成23	第12回弁論大会
平成24	第13回弁論大会
平成25	第14回弁論大会
平成26	第15回弁論大会



応 援 団

年度	記 録
昭和57	団誌「黎魂の集」発行



ボディビル同好会

年度	記 録
平成 7	全日本パワーリフティング選手権大会出場 藤原勇治

IX

創立者年譜



創 立 者 年 譜

明治34.12.23	0歳	旭川市において野又長兵衛の長男として出生
明治41. 4	7歳	亀田郡立日浦小学校入学
明治42. 4	8歳	函館区住吉小学校第3学年に受験、合格し飛び級す
大正 2. 4	12歳	年齢不足のため函館弥生尋常高等小学校高等科第1学年に入学
大正 3. 4	13歳	北海道庁立函館中学校に入学
大正 8. 3	18歳	同校卒業
大正 8. 4	18歳	函館税関監吏に任ずる（同9年3月まで）
大正 9. 4	19歳	官立小樽高等商業学校に入学
大正12. 3	22歳	同校卒業
大正12. 4	22歳	函館水電株式会社に入社（同13年3月退社）
大正13. 4	23歳	函館大谷高等女学校教諭に任ずる（昭和14年3月退職・在任15年）
昭和 8. 3	32歳	「女子実業読本」を発刊
昭和12. 3	36歳	「新式簡易家計簿」を発刊
昭和14. 4	38歳	函館計理学校（現函館大学付属有斗高等学校）創立 学校長に就任（同48年3月まで・在任34年）
昭和16. 4	40歳	財団法人道南学院（同26年1月学校法人野又学園）に組織変更し、 理事長に就任（同51年10月まで）
昭和21. 4	45歳	函館簿記学校（各種学校）創立 学校長に就任（同28年3月同校廃止まで在任7年）
昭和22. 5	46歳	函館市議会議員（同26年4月まで）
昭和25. 4	49歳	函館理容専門学校創立 学校長に就任（同29年12月同校移管まで在任4年・現道南理美容学校）

昭和26. 7	50歳	函館自動車学校創立 学校長に就任（同27年 7 月同校移管まで在任 1 年・現函館自動車学校）
昭和26. 8	50歳	多年にわたり本市子弟の実業教育に専念し、その間市議会議員として当選するなど、市政に尽くした功績により表彰状を授与される（函館市長）
昭和28. 4	52歳	函館商科短期大学創立（現函館短期大学）
昭和29.12	53歳	道南高等理美容学校名誉校長、顧問（同51年10月まで）
昭和30. 4	54歳	函館栄養専門学校創立 学校長に就任（同38年 4 月同校函館短期大学食物栄養科として昇格まで在任 8 年）
昭和30. 4	54歳	函館保育専門学院創立 学院長に就任（同49年 3 月まで在任 8 年）
昭和34. 4	58歳	函館女子商業高等学校（現函館大学付属柏稜高等学校）創立 学校長に就任（同48年 3 月まで在任14年）
昭和34. 4	58歳	北海道学校法人理事長会理事（同45年 5 月まで）
昭和34.11	58歳	産業教育の振興に尽力し、その功績顕著として表彰状を授与さる （産業教育振興中央会長）
昭和34.12	58歳	勤続30年間にわたり、私学振興に寄与した功績により感謝状を授与さる （私学法制定10周年記念北海道私学大会長）
昭和36. 6	60歳	「あまかい」前編を発刊
昭和37. 4	61歳	社会福祉法人共同宿泊所監事（同51年10月まで）
昭和37. 7	61歳	北海道私学厚生協会理事（同47年 7 月まで）
昭和38. 4	62歳	函館短期大学長に就任（同51年10月まで）
昭和40. 4	64歳	函館大学創立 学長に就任（同51年10月まで）
昭和40. 4	64歳	財団法人函館自動車学園理事（同49年10月より理事長・同51年10月まで）
昭和41. 4	65歳	函館短期大学付属幼稚園創立 園長に就任（同51年10月まで）
昭和41. 4	65歳	医療法人高橋病院評議員（同50年 6 月より理事・同51年10月まで）

昭和41.11	65歳	「あまかい」後編を発刊
昭和42. 1	66歳	函館私学振興協議会会長（同51年10月まで）
昭和42.12	66歳	一貫して私学教育に専念し、本道私学の振興に貢献した功績により表彰状を授与さる（北海道知事）
昭和43. 4	67歳	函館短期大学付設調理師学校（現函館短期大学付設調理製菓専門学校）創立学校長に就任（同47年10月まで・在任5年）
昭和43. 5	67歳	社団法人全国栄養士養成施設協議会理事（同51年10月まで）
昭和43. 6	67歳	多年子弟の育成に努め、教育の振興に寄与した功績により藍綬褒章を授与さる（内閣総理大臣）
昭和44. 5	68歳	日本私立短期大学協会理事、北海道支部副支部長（同48年5月まで）
昭和45. 9	69歳	「解道自楽」を発刊
昭和45.10	69歳	勤続47年間にわたり、私学振興に寄与した功績により感謝状を授与さる（北海道私学協会会長）
昭和47. 4	71歳	社会福祉法人貞信福祉会上湯川保育園創立理事長に就任（同51年10月まで）
昭和47. 7	71歳	役員として尽力し、私学教職員の福祉の向上に寄与した功績により感謝状を授与さる（社団法人北海道私学厚生協会理事長）
昭和47. 8	71歳	福祉の増進と地域発展に尽力し、郷土建設に貢献した功績により感謝状を授与さる（函館市長）
昭和48.11	72歳	多年子弟の育成に努め、私学教育の振興に寄与した功績により、勲三等に叙せられ瑞宝章を授与さる
昭和50.10	74歳	「清流を求めて」を発刊
昭和50.11	74歳	50年あまりに亘る私学教育、特に37年間に亘る私学経営を通して、函館市道南の教育・文化・産業の振興発達に寄与した功績により函館市文化賞を受賞す
昭和51.10	75歳	「私の読むスケッチ」を発刊
昭和51.10. 5	75歳	午後4時55分、函館市元町の高橋病院において急性肺炎のため逝去 同日、特旨をもって正五位に叙せられる

X

沿革年譜



沿革年譜

昭和13. 9. 19	函館計理学校（各種学校1年制）設置認可
15. 1. 12	函館高等計理学校（乙種2年制実業学校）に昇格
23. 3. 31	学制改革により函館有斗高等学校と改称
23. 6. 8	財団法人野又学園と改称
26. 1. 17	学校法人野又学園に組織変更認可
28. 1. 31	函館商科短期大学設置認可
28. 4. 1	函館商科短期大学開学
40. 1. 25	函館大学商学部設置認可
40. 4. 1	函館大学開学、初代学長に学園創立者野又貞夫就任 付設函館大学北海道産業開発研究所開設
41. 3. 5	教職課程（中学校・職業、高校・商業）認定
43. 5. 16	校舎本館（4,115平方メートル）十勝沖地震により全壊
44. 8. 20	震災復興校舎落成、商品学実験室設置
44. 9. 7	野又学園創立30周年記念並びに本学震災復興校舎落成記念式典挙行
45. 5. 11	函館大学経営研究所開設
45. 12. 20	電子計算室設置
46. 10. 18	L.L.施設開設
48. 11. 3	創立者（初代学長）野又貞夫勲三等瑞宝章を授与
50. 12. 7	創立10周年記念式典挙行、増築校舎落成、談話室開設
51. 10. 5	創立者・学園長・学長野又貞夫逝去
51. 10. 16	第二代学園長に野又シン就任
51. 10. 16	第二代理事長に野又肇就任
51. 10. 16	第二代学長に村田喜一就任
55. 12. 10	第三代学長に佐藤裕就任
58. 4. 17	ハワイ・ロア大学（アメリカ）と姉妹校提携
58. 12. 10	第四代学長に和泉雄三就任
61. 1. 25	創立20周年記念式典、図書館・増築校舎落成
61. 12. 10	第五代学長に大野和雄就任
62. 6. 15	体育館・武道館・学生会館落成
63. 4. 1	函館有斗高等学校を函館大学付属有斗高等学校と改称、函館女子商業高等学校を 函館大学付属女子商業高等学校と改称
63. 7. 2	野又学園創立50周年記念式典挙行

平成元. 12. 10	第六代学長に河村博旨就任
2. 4. 1	函館大学付属女子商業高等学校を函館大学付属女子高等学校と改称
4. 4. 1	臨時的定員増（入学定員200名を300名とする）
5. 5. 21	新講義棟落成
6. 7. 5	ハワイ・ロア大学とハワイ・パシフィック大学との合併により、ハワイ・パシフィック大学（アメリカ）と姉妹校提携
8. 2. 22	ニューカッスル大学（オーストラリア）と姉妹校提携
8. 7. 30	野又シン学園長逝去
8. 7. 31	野又肇学園長就任
9. 4. 1	函館大学付属女子高等学校に男女共学制導入、函館大学付属柏稜高等学校と改称
9. 5. 29	バララット大学（オーストラリア。現フェデレーション大学）と姉妹校提携
12. 3. 31	教職課程（中学校・職業）廃止
12. 4. 1	恒常的定員増（入学定員300名、収容定員1200名）
12. 12. 21	教職課程（高校・情報）認定
13. 4. 1	5専攻塾・6コース制開始
13. 10. 19	南開大学（中華人民共和国）と姉妹校提携
13. 11. 12	新講義棟（塾棟）・図書館棟増築・音楽練習棟落成
13. 11. 22	ウォルバーハンプトン大学（イギリス）と姉妹校提携
13. 11. 26	チ・チェスター学園大学（イギリス）と姉妹校提携
13. 11. 27	バース・スパ大学（イギリス）と姉妹校提携
14. 9. 3	中部大学校（大韓民国）と姉妹校提携
14. 12. 10	第七代学長に小笠原愈就任
15. 3. 5	教職課程（中学校・英語、高校・英語）認定
15. 5. 16	A O面談室の設置
15. 6. 17	高大連携教育の本格的実施開始
16. 4. 1	入学定員減（300名を200名とする）
16. 4. 1	教職教育センター開設
16. 11. 17	英語国際ビジネス学科設置認可
17. 1. 19	北海道知内高等学校と高大連携協定締結
17. 3. 11	南開大学浜海学院と姉妹校提携
17. 4. 1	企業家養成専攻塾及び福祉ビジネス専攻塾新設
17. 10. 7	北海道八雲高等学校と高大連携協定締結

平成18. 1. 14	放送大学と単位互換協定締結
18. 12. 10	溝田春夫副学長に就任
19. 7. 26	北海道森高等学校と高大連携協定締結
19. 8. 9	溝田春夫学長職務代理者に就任
19. 11. 1	第八代学長に溝田春夫就任
20. 3. 19	日本高等教育評価機構大学機関別認証評価にて認定
20. 9. 22	南開大学浜海学院と本科生共同育成プログラムDDP合意
20. 12. 24	教職課程中学社会・高校公民認定
21. 1. 30	第2学生寮新築落成
22. 4. 1	入学定員減200名を150名とする
	英語国際ビジネス学科募集停止
	3コース制導入 企業経営コース
	市場創造コース
	英語国際コース
22. 11. 1	ピア・サポートセンター開設
22. 4. 29	第二代理事長野又肇旭日中綬章叙勲
23. 6. 15	北海道戸井高等学校と高大連携協定締結
24. 3.	第1学生寮取り壊し
25. 4. 1	入学定員減150名を120名とする
	バイエリアサテライト（函館市末広町）開設
25. 4. 1	付設函館大学北海道産業開発研究所と函館大学経営研究所を統合して函館大学 地域総合研究所に改組
26. 4. 1	野又淳司副学長就任
26. 10. 1	日本高等教育評価機構審査受審
27. 3. 10	日本高等教育評価機構大学機関別認証評価にて認定
27. 3. 30	函館市と相互協力協定締結
27. 4. 1	入学定員減120名を100名とする
27. 4. 1	第三代理事長に野又淳司就任、第九代学長を兼務する
27. 4. 1	若松裕之教授、学部長に就任
27. 8. 26	長栄大学（台湾）と姉妹校提携

XI

資料



函館大学学則

第一章 総 則

(目的および使命)

- 第1条 函館大学は、北海道道南の学術の中心として広く知識を授けると共に商業および経済に関する高度の学芸を教育研究し、北海道開発および産業の興隆並びに文化の発展に役立つ専門的職業教育を施すことを目的とし、知・情・意の高度にして円満なる人格の持主としての職業人を養成することを使命とする。
2. 前項の目的および使命を達成するため、本学はその教育研究活動等の状況について自ら点検および評価を行い、その結果を公表するものとする。
3. 前項の点検および評価の実施に関する事項は、別に定める。
- 第1条の2 前条の目的達成のために次の学科を設置し、教育研究上の目的を以下のとおり定める。
1. 商学科
広くビジネスに関連する専門の学芸を教育研究し、豊かな人間性を備えた幅広い職業人を養成する。

第二章 学部、学科、収容定員および修業年限

(学部・学科および収容定員)

- 第2条 本学において設置する学部、学科およびその収容定員は、次のとおりとする。
- 商学部・商学科
入学定員 100名
収容定員 400名

(修業年限)

- 第3条 本学の修業年限を4年とする。ただし、在学期間は8年を超えることができない。

第三章 学年、学期および休業日

(学年)

- 第4条 学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(学期)

- 第5条 学年を分けて次の二期とする。
- 前期 4月1日から9月30日まで
後期 10月1日から翌年3月31日まで

(休業日)

- 第6条 本学における休業日を次のとおり定める。
1. 日曜日および国民の祝日に関する法律(昭和23年7月20日法律第178号)に規定する休日
1. 学園創立記念日 9月19日
1. 夏季休業日
8月1日から9月23日まで
1. 冬季休業日
12月16日から1月8日まで
1. 春季休業日
3月1日から3月31日まで
2. 前項の規定にかかわらず学長は臨時に休業日を設け、または休業日を変更することができる。

(授業日時数)

- 第7条 授業日時数は試験等の日時を含め、年間35週、210日とする。

第四章 教育課程

(開設科目およびその単位数)

第8条 本学において開設する科目およびその単位数は別表Ⅰのとおりとする。

(教職に関する専門教育科目および関連教育科目)

第9条 前条に定めるもののほか、教育職員免許状を取得する者のため教職に関する科目をおく。開講科目および単位数は、別表Ⅱのとおりとする。

第五章 履修の方法、学習の評価および卒業認定

(履修の方法)

第10条 本学の学生は、以下に定める科目及び単位数を含め、合計124単位以上を履修しなければならない。

(1) 基礎教養科目

- ①一般教養 人文・社会・自然を含め24単位以上
- ②外国語 4単位以上
- ③情報 2単位以上
- ④総合 4単位以上
- ⑤保健体育 4単位以上

(2) 専門科目

専門ゼミナールⅠ・Ⅱまたは英語特別演習Ⅰ・Ⅱ、及び商学実習Ⅰを含め62単位以上

2. 前項の規定にかかわらず外国人留学生（本学において教育を受ける目的をもって入国し、本学に入学した外国人留学生をいう、以下同じ）にあつては、第8条に定める日本語等科目の履修単位をもって前項の規定によって履修す

べき基礎教養科目、専門科目のいずれかの単位に代えることができる。

3. 第1項の規定にかかわらず編入生については以下に定める履修条件を満たすものとする。

- (1) 本学において、外国語2単位を含む64単位以上の科目を履修すること
- (2) 他大学および本学が教育上有益と認めた教育施設で取得した単位を本学の単位として認定した単位、及び本学で履修した単位を合わせ、専門科目を62単位以上履修すること。
- (3) 専門ゼミナールⅠ・Ⅱまたは英語特別演習Ⅰ・Ⅱを履修すること。

4. 教職課程において、高等学校一種免許状「商業」を取得する者にあつては、別に定めるところに従い「商業」の必修科目および選択科目を、中学校教諭一種免許状「英語」あるいは高等学校教諭一種免許状「英語」を取得する者にあつては、別に定めるところに従い「英語」の必修科目および選択科目を、中学校教諭一種免許状「社会」あるいは高等学校一種免許状「公民」を取得する者にあつては、別に定めるところに従い「社会」、「公民」の必修科目および選択科目をそれぞれ履修し、単位を取得しなければならない。
5. 他の大学等の開設科目の履修については別途定める。

(受講科目の登録)

第11条 学生は当該年度において履修すべき授業科目を毎年度初めの一定期間内に登

録しなければならない。ただし、編入学生（外国人留学生）にあつては、毎年度初めまたは学期の初めの一定期間に登録しなければならない。

2. 履修の変更および放棄については別途定める。

（単位の認定）

第12条 各科目の履修を修了した者には認定のうえ単位を与える。

2. 単位の認定は、科目試験等により行う。

（入学者の既修得単位の認定）

第12条の2 新たに本学の第1年次に入学した学生が他の大学または短期大学において修得した単位については、当該単位を本学において履修修得したものとして認定することができる。ただし、この認定に関連して修業年限の短縮は行なわない。

2. 前項により認定しうる単位は、第12条の3による認定単位と合わせて60単位を超えないものとする。
3. この規定に定める認定に必要な事項は、別に定める。

（単位の互換）

第12条の3 教育上有益と認めるときは、他の大学または短期大学との協議にもとづき、学生に当該大学または短期大学の授業科目を履修させることができる。

2. 学生が前項の規定により履修した授業科目について修得した単位を第12条の2による認定単位と合わせて60単位を限度として、本学において修得した単位とみなすことができる。

3. 前二項の規定は、学生が外国の大学または短期大学に留学する場合に準用する。

（試験等の時期）

第13条 試験等の時期は、原則として期末とするが、授業科目の担当者が必要と認めた時は臨時にこれを行うことができる。

（試験等の受験資格）

第14条 当該科目を履修登録していない者は試験を受けることはできない。

（追試験）

第15条 不可抗力により期末における科目試験を受験できなかった学生に対しては、本人の申告により別に定めるところに従い当該科目について追試験を行うことができる。

（再試験）

第16条 3年次（隔年開講科目受講者）および4年次の学年末に1回限り、再試験を行うことができる。

2. 再試験の実施に関する事項は別に定める。

（学習の評価）

第17条 試験等の評価は優（A）・良（B）・可（C）・不可（D）をもって表わし、可以上を合格とする。

2. 第12条の2により入学時本学が認定した単位はEで表わす。
3. 第12条の3により修得した単位はEで表わす。

（単位の計算方法）

第18条 各科目に対する単位の計算方法は次のとおりとする。

但し、各授業科目に対する単位数は1単位の履修時間を教室内および教室外を合わせて45時間とし、次の基準によって計算する。

1. 講義については1時間の講義に対し、教室外における2時間の準備、または学習を必要とすることを考慮し、毎週1時間15週の講義をもって1単位とする。
2. 演習については2時間の演習に対し、1時間の準備を必要とすることを考慮し、毎週2時間15週の演習をもって1単位とする。1時間の演習に対し、2時間の準備を必要とすることを考慮すべき科目は、毎週1時間15週の演習をもって1単位とする。
3. 実験実習および体育実技については毎週3時間15週の実験実習および実技をもって1単位とする。

(卒業の要件)

- 第19条 本学を卒業するためには、4年以上在学し、第10条に規定する単位を取得しなければならない。
2. 前項の規定にかかわらず外国人留学生にあっては、第10条第2項の規定を前項に定める卒業の要件に準用する。
 3. 第1項の規定にかかわらず編入学生にあっては本学を卒業するためには、入学前の既修得単位を卒業条件として認定し、本学入学後第10条第3項に規定する単位を加え合計124単位以上を取得しなければならない。

(学位授与)

第20条 前条に定める課程を修めた者には卒業を認め、学士（商学）の学位を授与する。

(卒業の延期)

第20条の2 学則第19条に定める卒業の要件を充足する者が、卒業の延期を希望するときは、学長に願い出その許可を得なければならない。

2. 卒業の延期に関する取扱いとは別に定める。

(資格の取得)

第21条 教育職員免許状を得ようとする者は第19条に規定する卒業の要件を充足し、かつ「函館大学教職課程に関する規則」に則り、教育職員免許法および同法施行規則に定める科目、および単位を取得しなければならない。

2. 本学において取得できる教員免許状は、次のとおりとする。

(1) 商学科

高等学校教諭	一種免許状「商業」
中学校教諭	一種免許状「社会」
高等学校教諭	一種免許状「公民」
中学校教諭	一種免許状「英語」
高等学校教諭	一種免許状「英語」

第六章 入学、転学科、退学、転学および休学

(入学の時期)

第22条 入学の時期は毎学年の初めとする。ただし、編入学生（外国人留学生）にあっては、学期の初めとすることができる。

(入学資格)

第23条 本学に入学することのできる者は、次

の各号の1に該当し、かつ本学における選考に合格した者とする。

1. 高等学校を卒業した者
2. 通常の課程による12年の学校教育を修了した者（通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者を含む）
3. 外国において、学校教育における12年の課程を修了した者または、これに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
4. 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
5. 文部科学大臣の指定した者
6. 高等学校卒業程度認定試験規則（平成17年文部科学省令第1号）により文部科学大臣の行う高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規定による大学入学資格検定に合格した者を含む）
7. その他本学において、相当の年令に達し、高等学校を卒業した者と同以上の学力があると認めた者

（入学検定料）

- 第24条 本学に入学を志願する者は本学所定の書類に入学検定料を添えて提出しなければならない。
- 但し、入学検定料については別表Ⅲによる。
2. すでに納めた入学検定料はこれを返還しない。

3. 提出の時期、方法、同時に提出すべき書類等については別に定める。

（再入学）

- 第25条 願いにより本学を退学した者が、退学後4年以内に再入学を希望するときは選考のうえ相当学年に入学を許可することがある。
2. 退学期間は、第3条の在学期間に算入する。
 3. 再入学後の授業料は、再入学を許可された学年に相当する再入学年度の額とする。

（編入学）

- 第26条 他の大学等から編入学を希望する者があるときは、欠員のある場合に限り選考のうえ入学を許可することがある。
2. 前項により本学に編入学を許可された者は、他大学等で取得した単位の全部または一部を本学の単位として認めることがある。この認定は教授会の議を経て学長が行う。
 3. 編入学の場合の入学検定料は別表Ⅲによる。その他の必要な手続きは別に定める。

（入学に関する手続等）

- 第27条 本学に入学を許可された者は指定の期間内に入学金その他の学費および、本学の指定する書類を提出しなければならない。
2. 前項の手続を怠った者は入学許可を取り消すものとする。

（保証人）

- 第28条 入学を許可された者は保証人を定め本

学の指定する期間内に届出なければならない。

2. 保証人は学生の在学中の一切の事項について責任を持つものとする。
3. 保証人は父母または成年の親族とし、独立の生計を営む者とする。
4. 保証人が死亡またはその他の事由によってその責務を尽し得ないときには新たに保証人を定め、直ちに届出なければならない。

(退学)

第29条 退学しようとする者はその事由を詳記し、保証人連署のうえ、学長に願い出その許可を得なければならない。

(転学)

第30条 他の大学へ転学を希望する者は、保証人連署のうえ学長に願い出その許可を得なければならない。

(留学)

第30条の2 学則第12条の3の規定にもとづく外国の大学または短期大学に留学しようとする者は、学長に願い出てその許可を得なければならない。

2. 前項により留学した期間は、通算で1年以内に限り第3条および第10条ならびに第19条の修業年限および在学期間に算入する。

(休学)

第31条 疾病その他やむを得ない事情により引き続き3カ月以上修学できないときは、その事由を記し、保証人連署のうえ、学長に願い出その許可を得て休学することができる。

2. 疾病を事由とする休学願には、医師の診断書を添付しなければならない。
3. 休学期間は、通算2年以内とし第3条の在学期間に算入しない。

(復学)

第32条 休学期間満了のとき、または休学期間内でもその事由が消滅したときは、学長の許可を得て復学することができる。

(除籍)

第33条 次の各号の1に該当する者は、教授会の議を経て学長が除籍する。

1. 第3条に規定する在学年限を超えた者
2. 死亡または行方不明の者
3. 疾病その他の事由で成業の見込みがないと認められた者
4. 授業料の納付を4カ月以上怠った者

第七章 授業料、入学金、その他の費用

(入学金・その他の学費)

第34条 入学金、授業料、施設設備費は、在籍基本料は、別表Ⅲのとおりとし、納入時期、納入方法等必要な事項は別に定める。

(本学に4年を超えて在学する場合の授業料、施設設備費、在籍基本料)

第34条の2 本学に4年を超えて在学する場合、及び、学則第20条の2により卒業の延期を許可された場合の授業料は別表Ⅲの②を適用し、当該年度の履修開始までに納入するものとする。この場合において施設設備費、在籍基本料はこれを徴収しない。

(退学等の場合の授業料、施設設備費、在籍基本料)

第35条 退学した者、転学した者、除籍された者、退学を命ぜられた者、または停学中の者は当該期の授業料、施設設備費、在籍基本料を納入しなければならない。

(休学の場合の授業料、施設設備費)

第36条 休学中の学生については、その休学当月の翌月から復学当月の前月までの授業料、施設設備費、在籍基本料はこれを徴収しない。

(その他の費用)

第37条 入学金、授業料、施設設備費、在籍基本料の他に、実験実習費およびその他教育に必要な費用を徴収することがある。

(学費の猶予)

第38条 学費の支払いが困難な学生に対しては、学費の全部若しくは、一部の徴収を当該年度に限り猶予することがある。

2. 前項の規定により学費の猶予をうけるべき学生は毎期これを定める。

(授業料、施設設備費の不還付)

第39条 既納の授業料、施設設備費等納付金は還付しない。但し、退学および休学等に限り在籍期分を超えて支払われた授業料、施設設備費、在籍基本料等納付金は本人の申し出によりこれを返還する。

第八章 教職員組織

(教職員)

第40条 本学に学長・教授・准教授・専任講師・助教・助手・事務職員等の職員を置く。

但し、必要に応じて副学長、学部長を置くことができる。

第40条の2 学長は、校務をつかさどり、所属職員を統督する。

第40条の3 副学長は、学長を助け、命を受けて校務をつかさどる。

第40条の4 学部長は、学長を助け、命を受けて校務をつかさどる。

(教職員の職務)

第41条 教授および准教授等の職務内容は、次の各号のとおりである。

1. 教授は、専攻分野について、教育上、研究上、又は実務上の特に優れた知識、能力及び実績を有するものであって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する。
2. 准教授は、専攻分野について、教育上、研究上、又は実務上の特に優れた知識、能力及び実績を有するものであって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する。
3. 専任講師は、教授又は准教授に準ずる職務に従事する。
4. 助教は、専攻分野について、教育上、研究上、又は実務上の知識、能力及び実績を有するものであって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する。
5. 助手は、その所属する組織における教育研究の円滑な実施に必要な業務に従事する。

(教員組織)

第41条の2 本学は、教育研究上の目的を達成

するため、教育研究組織の規模並びに授与する学位の種類及び分野に応じて、必要な教員を置く。

2. 本学は、教育研究の実施に当たり教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制を確保し、教育研究に係る責任の所在が明確になるよう教員組織を編成する。

第九章 教授会

(教授会)

第42条 本学に教授会を置く。

(教授会の構成)

第43条 教授会は、学長・副学長・学部長・教授・准教授・専任講師・助教を以て組織する。

(教授会の招集等)

第44条 学長は教授会を招集し、その議長となる。但し、学長に事故あるときは副学長が議長となる。

但し、学長・副学長とも事故あるときは学部長が議長となり、学部長もともに事故あるときはあらかじめ学長が指名した教授が議長となる。

2. 学長は教授会の構成員の3分の1以上から議題を示し要求があった時は、要求のあった日から2週間以内にこれを招集しなければならない。

(教授会の開催)

第45条 教授会は構成員の3分の2以上出席しなければ開催する事が出来ない。

2. 教授会の議事は出席員の過半数を以て決し、学長の承認を経て成立する。

3. 教授会の審議した事項にして、著しく学校法人の経理に関係あるものはその実施については理事会の議を経るものとする。

(教授会の審議事項)

第46条 教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする。

- ①学生の入学、卒業及び課程の修了
- ②学位の授与
- ③前二号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学長が教授会の意見を聴くことが必要であると認めるもの

第十章 聴講生、科目等履修生、特別科目等履修生、外国人学生

(聴講生)

第47条 本学において特定の授業科目を聴講することを希望する者があるときは、別に定めるところに従い聴講生として許可することがある。

2. 聴講料は別表Ⅲのとおりとし、当該科目を受講する当初に一括して納付するものとする。

(科目等履修生)

第47条の2 本学において特定の授業科目を履修することを希望する者があるときは、別に定めるところに従い科目等履修生として許可することがある。

2. 科目等履修生の授業料は別表Ⅲのとおりとし、当該科目を履修する当初に一括して納付するものとする。

3. 科目等履修生は第12条に従って認定したうえ単位を授与する。

(特別科目等履修生)

第47条の3 本学と他の大学等との協定に基づき、特定の授業科目を履修することを希望する者がいるときは、別に定めるところに従い特別科目等履修生として許可することがある。

2. 特別科目等履修生の授業料等は別表Ⅲのとおりとし、当該科目を履修する当初に一括して納付するものとする。
3. 特別科目等履修生は第12条に従って認定した上で単位を授与する。

(外国人学生)

第48条 外国人で本学に入学を希望する者は、教授会で選考のうえ入学を許可する。

第十一章 賞 罰

(表彰)

第49条 学業成績および人物優秀な学生または他の業績の優秀な学生に対して、学長は教授会の議を経て表彰することができる。

2. 学業成績および人物優秀で特待生として表彰された者に対しては、当該学年の授業料の2分の1を免除する。

(罰則)

第50条 本学の学則に違反し、または本学の学生としてあるまじき行為があったときは、学長は教授会の議を経て懲戒する。

2. 前項の懲戒は退学、無期停学、有期停学、戒告、譴責とする。
3. 前項の退学は次の各号の1に該当する

学生に対して行う。

1. 性行不良で改善の見込みがないと認められた者
2. 学力劣等で成業の見込みがないと認められた者
3. 正当の理由がなくて出席常でない者
4. 大学の秩序を乱し、その他学生としての本分に反した者

第十二章 公開講座

(公開講座の開設)

第51条 本学において必要があると認めるときは、公開講座を設けることがある。

第十三章 附属施設

(図書館)

第52条 本学に附属図書館を置く。

2. 図書館に関し必要な事項は別に定める。

(研究所)

第53条 本学に函館大学地域総合研究所を置く。

2. 前項の研究所に関し必要な事項は別に定める。

(地域連携センター)

第53条の4 本学に地域連携センターを置く。

2. 前項の地域連携センターに関し必要な事項は別に定める。

(学生寮)

第54条 本学に学生寮を置く。

2. 学生寮に関し必要な事項は別に定める。

付 則

1. この学則は教授会および野又学園理事会の議を経て変更できる。
2. この学則は、昭和40年4月1日から施行する。
3. この学則の全面改正は、昭和47年7月1日から施行する。
4. この学則の一部改正（第6条、第18条、第23条、第26条）は昭和51年4月1日から施行する。
5. この学則の一部改正（別表Ⅱ教育課程、別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和51年4月1日から施行し、昭和51年度入学者から適用する。
6. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和52年4月1日から施行し、昭和52年度入学者から適用する。
7. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和53年4月1日から施行し、昭和53年度入学者から適用する。
8. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和54年4月1日から施行し、昭和54年度入学者から適用する。
9. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和55年4月1日から施行し、昭和55年度入学者から適用する。
10. この学則の一部改正（第46条）は、昭和55年11月5日から施行する。
11. この学則の一部改正（第15条、第16条、第21条、第47条、第49条）は昭和56年4月1日から施行する。
12. この学則の一部改正（別表Ⅰ・Ⅱ教育課程、別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和56年4月1日から施行し、昭和56年度入学者から適用する。
13. この学則の一部改正（第16条、第23条、第43条）は昭和57年4月1日から施行する。
14. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和57年4月1日から施行し、昭和57年度入学者から適用する。
15. この学則の一部改正（第10条、第23条、別表Ⅰ教育課程）は昭和58年4月1日から施行する。
16. この学則の一部改正（第31条、別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和58年4月1日から施行し、昭和58年度入学者から適用する。
17. この学則の一部改正（第12条の2を規定）は昭和59年4月1日から施行する。
18. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和59年4月1日から施行し、昭和59年度入学者から適用する。
19. この学則の一部改正（第12条の3、第26条、第54条）は昭和60年4月1日から施行する。
20. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和60年4月1日から施行し、昭和60年度入学者から適用する。
21. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和61年4月1日から施行し、昭和61年度入学者から適用する。
22. この学則の一部改正（第10条、第12条の2第20項、第16条、第19条、第30条の2、第30条の2第2項、別表Ⅰ教育課程、別表Ⅱ教育課程）は、昭和62年4月1日から施行する。
ただし、昭和62年3月31日に4年次に在籍し、引続き、昭和62年4月1日以降も在籍する者、および昭和62年3月31日以前に退学し、昭和62年4月1日以降4年次に再入学を許可された者に対する第8条、第10条、第19条、別表Ⅰの適用は、原則として従前の学則による。
23. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金、授業料、その他の学納金）は、昭和62年4月1日から施行し、昭和62年度入学者から適用する。
24. この学則の一部改正（第9条、第21条、別表Ⅰ、別表Ⅱ）は、平成2年4月1日から施行し、平成2年度入学生から適用する。平成2年度前に本学に入学し、引き続き本学に在学

する者に対しては、従前の学則によるものとし、その他の者に対する取扱いは、教育職員免許法等関係法令の定めるところによるものとする。

25. この学則の一部改正（第34条、第36条、第37条、別表Ⅲ、入学金、その他の学納金）は、平成2年4月1日から施行し、平成2年度入学生から適用する。
なお、平成2年3月31日以前に入学した者の学納金についても、施設設備費、維持費を授業料に統合して一本化する。ただし、納付金総額は、従前どおりとする。
26. この学則の一部改正（第49条の2）は、平成2年4月1日から施行し、平成2年度入学生から適用する。
ただし、平成2年3月31日以前に入学した者に対しては、従前の授業料の額を免除する。
27. この学則の一部改正（別表Ⅰ教育課程、別表Ⅲ入学金・授業料その他の学納金）は、平成3年4月1日から施行し、平成3年度入学生から適用する。
28. この学則の一部改正（第6条）は、平成3年4月1日から施行する。
29. この学則の一部改正（第20条）は、平成4年3月16日から施行する。
30. この学則の一部改正（第2条、別表Ⅰ教育課程、別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成4年4月1日から施行する。ただし平成4年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。なお、第2条の規定にかかわらず、平成4年度から平成11年度までの間の入学定員は300名とする。
31. この学則の一部改正（第23条、別表Ⅰ教育課程表、別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成5年4月1日から施行する。ただし、第23条は平成3年11月14日から適用する。なお、平成5年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。

32. この学則の一部改正（第12条、別表Ⅰ教育課程表、別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成6年4月1日から施行する。
ただし、平成6年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。
33. この学則の一部改正（第1条、別表Ⅰ教育課程表、別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成7年4月1日から施行する。
ただし、平成7年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。
34. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成8年4月1日から施行する。
ただし、平成8年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。
35. この学則の一部改正（別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成9年4月1日から施行する。
ただし、平成9年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。
36. この学則の一部改正（別表Ⅰ教育課程表）は、平成10年4月1日から施行する。
37. この学則の一部改正（第8条、第10条、第19条、別表Ⅰ教育課程表）は、平成11年1月1日から施行する。
38. この学則の一部改正（第10条、第19条）は、平成12年4月1日から施行する。
39. この学則の一部改正（第12条の2、第12条の3、第47条の2、別表Ⅰ教育課程、別表Ⅲ入学金・授業料・その他の学納金）は、平成12年4月1日から施行する。ただし平成12年3月31日以前に入学した者に対する学納金は従前の学則による。
40. この学則の一部改正（第2条）は、平成12年4月1日から施行する。
41. この学則の一部改正（第21条、別表Ⅱ）は、平成12年4月1日から施行し、平成12年度入学生から適用する。平成12年度以前に本学に

入学し、引き続き本学に在学する者に対しては、従前の学則によるものとし、その他の者に対する取扱いは、教育職員免許法等関係法令の定めるところによるものとする。

42. この学則の一部改正（第1条）は、平成12年4月1日から施行する。
43. この学則の一部改正（第10条の4、第21条の2、別表Ⅰ、別表Ⅱ）は平成13年4月1日から施行する。ただし、教職課程に関して、入学年度及び免許状による適用の取扱いは下表のとおりとし、その他の者に対する取扱いは、教育職員免許法等関係法令の定めるところによるものとする。

免許状 入学年度	「商 業」	「情 報」
平成9年度以前	平成12年4月1日以前の学則適用	平成13年4月1日改正の学則適用外
平成10年度	平成12年4月1日以前の学則適用	平成13年4月1日改正の学則適用
平成11年度	平成12年4月1日以前の学則適用	平成13年4月1日改正の学則適用
平成12年度以降	平成12年4月1日改正の学則適用	平成13年4月1日改正の学則適用
編入学生	編入した学年に該当する学則適用	編入した学年に該当する学則適用

44. この学則の一部改正（第6条）は、平成13年4月1日から施行する。
45. この学則の一部改正〔第10条、第19条、別表Ⅰ（必修科目、科目区分）〕は、平成13年4月1日から施行し、平成13年度入学生から適用する。ただし、平成12年度入学生については、本学に4年以上在学し、一般教育科目については、人文・社会・自然の3分野にわたり26単位以上および教養ゼミナール（S.L）、経済学、法学の計36単位以上、外国語科目については、第一外国語8単位、第二外国語4単位以上、計12単位以上、保健体育科目については、講義2単位、実技2単位、計4単位、専門教育科目については、専門ゼミナールⅠ、専門ゼミナールⅡ、専門ゼミナールⅢ、商学総論、

簿記原理、経営学総論、情報科学概論、原書講読を含め72単位以上、合計124単位以上履修しなければならない。また、平成12年度以前に本学に入学し、引き続き本学に在学する学生に対しては、専門教育科目として開設される経済学をもって一般教育科目の経済学に充当し、外国語科目として開設される原書講読をもって専門教育科目の原書講読に充当し、英会話Ⅰ、英会話Ⅱ、ロシア語Ⅰ、ロシア語Ⅱを専門教育科目の単位に参入する。平成11年度以前に本学に入学し、引き続き本学に在学する学生に対しては、教養ゼミナール（S.L）をもって教養ゼミナール（S.L）Ⅰに充当する。

46. この学則の一部改正〔第18条、第25条、別表Ⅰ（開設科目）〕は、平成13年4月1日から施行する。
47. この学則の一部改正〔第16条、第20条の2、第34条の2、別表Ⅲ②〕は、平成14年2月1日から施行する。
48. この学則の一部改正〔第10条第4項、第21条の2、別表Ⅰ、別表Ⅱ〕は平成15年4月1日から施行する。

ただし、教職課程に関して、入学年度及び免許状による適用の取扱いは下表のとおりとし、

免許状 入学年度	「商 業」	「情 報」	「英 語」
平成9年度以前	平成12年4月1日以前の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用外	平成15年4月1日改正の学則適用外
平成10年度	平成12年4月1日以前の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用外
平成11年度	平成12年4月1日以前の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用
平成12年度以降	平成15年4月1日改正の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用
編入学生	平成15年4月1日改正の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用	平成15年4月1日改正の学則適用

その他の者に対する取扱いは、教育職員免許法等関係法令の定めるところによるものとする。

49. この学則の一部改正（第10条第3項、第11条、第22条、別表Ⅰの2）は、平成15年4月1日から施行し、適用は平成15年度以降の編入学生、また平成14年度編入学生に遡及するものとし、それ以前の編入学生にあっては従前の学則とする。
50. この学則の一部改正（第2条）は平成16年4月1日から施行する。なお、第2条の規定にかかわらず、平成16年度から平成18年度までの収容定員を以下のとおりとする。

平成16年度収容定員	1,100名
平成17年度収容定員	1,000名
平成18年度収容定員	900名
51. この学則の一部改正（第34条の2、別表Ⅲ②及び（2））は、平成16年4月1日から施行する。
52. この学則の一部改正（第53条の2）は、平成16年4月1日から施行する。
53. この学則の一部改正（第16条第1項）は平成16年4月1日から施行する。
54. この学則の一部改正（第21条第1項）は、平成16年4月1日から施行し、平成16年度入学生から適用とし、平成15年度以前に入学した者は従前の学則による。
55. この学則の一部改正（第36条、第39条）は平成16年6月1日から施行する。
56. この学則の一部改正（第2条、第21条）は、平成17年4月1日から施行し、平成16年度入学生以前の学生については、従前の学則による。ただし、平成17年度から平成19年度における商学部・商学科の収容定員数は、第2条の規定にかかわらず次のとおりとする。

平成17年度	950名
平成18年度	800名
平成19年度	650名

57. この学則の一部改正（第8条、第10条、第28条の2、別表Ⅰの2）は、平成17年4月1日から施行し、平成17年度入学生から適用する。
58. この学則の一部改正（別表Ⅰの2）は、平成17年4月1日から施行し、平成17年度入学生から適用する。
59. この学則の一部改正（別表Ⅲ）は、平成17年4月1日から施行する。
60. この学則の一部改正（別表Ⅰの1 商学科）は、平成17年4月1日から施行し、平成17年度入学生から適用する。
61. この学則の一部改正（第28条第1項、同条第3項、第29条、第30条）は平成18年4月1日から施行し、平成18年度入学生から適用する。
62. この学則の一部改正（第10条第6項、第47条の3、別表Ⅲ）は、平成18年4月1日から施行する。
63. この学則の一部改正（別表Ⅰの1 商学科）は、平成18年4月1日から施行し、平成17年度生に遡及し適用する。
64. この学則の一部改正（第53条の3、第53条の3第2項）は、平成18年4月1日から施行する。
65. この学則の一部改正（第19条）は、平成18年4月1日から施行する。
66. この学則の一部改正（第40条、41条、41条の2、43条、46条）は平成19年4月1日から施行する。
67. この学則の一部改正（別表Ⅰの1、別表Ⅰの2）は平成19年4月1日から施行する。
68. この学則の一部改正（学則第34条及び別表Ⅲ、第34条の2、第35条、第36条、第37条、第39条）は平成19年7月1日から施行する。ただし、平成20年3月31日以前に入学したものに對する学納金は従前の学則による。
69. この学則の一部改正（第1条第1項、第1条の2）は平成20年4月1日から施行する。
70. この学則の一部改正（第10条第4項、第21条第2項、別表Ⅰの1、別表Ⅰの2、別表Ⅱ）

- は、平成21年4月1日から施行する。
71. この学則の一部改正（第40条、第43条、第44条の1）は平成21年4月1日から施行する。
 72. この学則の一部改正（第21条の2、別表Ⅰの1、別表Ⅰの2、別表Ⅱ）は、平成21年4月1日から施行する。
 73. この学則の一部改正（中学社会及び高校公民の教職課程追加に関する事項：第10条の4、第21条第2項、別表Ⅰの1、別表Ⅱ）は平成19年度以降の入学者に適用する。
 74. この学則の一部改正（第8条、第9条、第10条第1項・同条第4項・同条第5項、第17条、第21条第2項、同条第3項、第23条第6項、第28条の2、別表Ⅰ、別表Ⅱ）は平成22年度入学生から適用する。
 75. この学則の一部改正（第10条第2項・同条第3項）は、2年次編入については平成23年度編入生より、3年次編入については平成24年度編入生より適用する。
 76. この学則の一部改正（古典文学の科目名変更、会計学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ及び証券論の単位数変更）は、平成23年4月1日より施行する。
 77. この学則の一部改正（第17条第2項及び第3項）は、平成24年4月1日より施行する。
 78. この学則の一部改正（教育課程表に商学特講Ⅰ、Ⅱを追加）は、平成24年4月1日より施行する。
 79. この学則の一部改正（教育課程表に「専門ゼミナールⅠ（地域学）」「専門ゼミナールⅡ（地域学）」を追加）は、平成24年4月1日より施行する。
 80. この学則の一部改正（第2条、第53条）は、平成25年4月1日より施行する。なお、平成25年度においては収容定員570人、平成26年度においては収容定員540人、平成27年度においては収容定員510人として読み替えるものとする。
 81. この学則の一部改正（第1条の2（英語国際ビジネス学科に関する記述を削除）は平成25年4月1日から施行する。
 82. 平成25年4月1日より、英語国際ビジネス学科から商学科への転学科を行った学生には別表Ⅰを適用する。また、当該学生については、履修すべき科目のうち「卒業研究」「専門ゼミナールⅢ」を「専門ゼミナールⅡ」「英語特別演習Ⅱ」とする。
 83. 平成25年4月1日より、第21条2項を商学科に転学科した学生に適用する。
 84. この学則の一部改正（第10条・第21条の変更、第53条の2および第53条の3の削除、別表Ⅲの変更）は、平成26年4月1日より施行する。
 85. この学則の一部改正（第2条）は、平成27年4月1日より施行する。なお、平成27年度においては収容定員490人、平成28年度においては収容定員440人、平成29年度においては収容定員420人として読み替えるものとする。
 86. この学則の一部改正（第11条・第14条・第42条・第46条の変更、第40条の2、第40条の3、第40条の4、第53条の4の追加、教育課程に「異文化理解」を追加）は、平成27年4月1日より施行する。

校地・校舎面積推移表

校 地

年 度	校地取得と減少		当該年度校地面積	備 考
昭和37年	校地取得	30,806㎡	30,806㎡	
41年	〃	21,275	52,081	
42年	〃	8,314	60,395	
43年	〃	5,647	66,042	
49年	校地減少	△511	65,531	道路用地として函館市に売却
50年	〃	△870	64,661	道路用地として函館市に売却
58年	〃	△1,785	62,876	短大校地へ
63年	〃	△323	62,553	測量による錯誤訂正
平成 4年	〃	△3,058	59,495	短大校地へ
6年	校地取得	5,000	64,495	短大・有斗より移行
7年	〃	5,000	69,495	短大より移行
8年	〃	5,000	74,495	有斗より移行
9年	〃	5,288	79,783	有斗より移行
20年	〃	403	80,186	
現 在 保 有 数			80,186㎡	80,186㎡ (H24/5/1現在)

校 舎

年 度	校舎取得と減少		当該年度校舎面積	備 考
昭和39年	校舎建築	1,433㎡	1,433㎡	
40年	〃	2,829	4,262	
41年	〃	2,088	6,350	
43年	〃	68	6,418	
〃	校舎減少	△4,114	2,304	十勝沖地震により校舎解体する
44年	校舎建築	4,155	6,459	本館新築
50年	〃	1,253	7,712	講義棟増築
57年	〃	197	7,909	
58年	〃	60	7,969	
60年	〃	3,611	11,580	図書館、研究室棟新築
61年	〃	4,370	15,950	体育館棟新築
平成 4年	校舎減少	△2,269	13,681	短大へ移行
4年	校舎建築	4,011	17,692	講義棟増築
13年	〃	3,034	20,726	新講義棟増築
24年	合 宿 所	△231	20,495	
現 在 保 有 数			20,495㎡	20,727㎡ (H24/5/1現在)

学 生 寮

年 度	建物取得と減少		当該年度面積	備 考
昭和41年	寄宿舎建築	613㎡	613㎡	
42年	〃	619	1,232	
平成12年	〃	333	1,565	クリアポートⅠ
13年	〃	113	1,678	ライフドリーム
13年	〃	381	2,059	シティボックス
13年	〃	232	2,291	ボンセジュール
21年	〃	1,704	3,995	第2学生寮新築
23年	減 少	△1,232	2,763	第1学生寮取壊し
23年	〃	△113	2,650	ライフドリーム所管変更
現 在 保 有 数			2,650㎡	

年 度	敷地取得と減少		当該年度面積	備 考
昭和41年	寄宿舎敷地	1,785㎡	1,785㎡	
平成12年	〃	497	2,282	クリアポートⅠ
13年	〃	497	2,779	シティボックス
13年	〃	396	3,175	ボンセジュール
23年	〃	3,844	7,019	第2学生寮新築
23年	減 少	△1,785	5,234	第1学生寮取壊し
現 在 保 有 数			5,234㎡	

校舎配置図

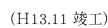




(音樂練習棟)



3 階



4 階



学費年別推移表

項目 年度	検 定 料	入 学 金	授 業 料	施 設 充 実 費	維 持 費	小 計	協 学 会	学 友 会 入 会 費	学 友 会	小 計	合 計
昭和40	5,000	50,000	72,000	20,000	－	147,000	(入学時 のみ)	(入学時 のみ)	(4年間分)		147,000
41	5,000	50,000	72,000	12,000	－	139,000	－	－	－		139,000
42	5,000	50,000	72,000	20,000	6,000	153,000	－	500	4,000	4,500	157,500
43	5,000	50,000	76,000	25,000	6,000	162,000	2,400	500	4,000	6,900	168,900
44	5,000	50,000	80,000	32,000	8,000	175,000	2,400	1,000	6,000	9,400	184,400
45	5,000	50,000	84,000	32,000	10,000	181,000	2,400	1,000	6,000	9,400	190,400
46	5,000	50,000	88,000	32,000	14,000	189,000	2,400	1,000	6,000	9,400	198,400
47	5,000	50,000	88,000	32,000	22,000	197,000	2,400	1,000	6,000	9,400	206,400
48	5,000	50,000	88,000	32,000	26,000	201,000	4,000	1,000	6,000	11,000	212,000
49	5,000	50,000	88,000	32,000	28,000	203,000	4,000	1,000	6,000	11,000	214,000
50	8,000	50,000	120,000	40,000	50,000	268,000	6,000	1,000	6,000	13,000	281,000
51	8,000	60,000	140,000	60,000	60,000	328,000	6,000	1,000	9,000	16,000	344,000
52	10,000	60,000	150,000	70,000	70,000	360,000	10,000	1,000	9,000	20,000	380,000
53	10,000	70,000	160,000	70,000	70,000 (90,000)	380,000 (400,000)	15,000	1,000	9,000	25,000	405,000 (425,000)
54	15,000	90,000	180,000	70,000	80,000 (90,000)	435,000 (445,000)	15,000	1,000	9,000	25,000	460,000 (470,000)
55	15,000	90,000	200,000	80,000	80,000 (100,000)	465,000 (485,000)	15,000	1,000	9,000	25,000	490,000 (510,000)
56	17,000	100,000	220,000	80,000	80,000 (100,000)	497,000 (517,000)	25,000	1,000	9,000	35,000	532,000 (552,000)
57	17,000	120,000	240,000	90,000	100,000	567,000	25,000	1,000	9,000	35,000	602,000
58	20,000	120,000	270,000	100,000	100,000	610,000	25,000	1,000	9,000	35,000	645,000
59	20,000	120,000	290,000	100,000	120,000	650,000	25,000	1,000	9,000	35,000	685,000

項目 年度	検 定 料	入 学 金	授 業 料	施 設 充 実 費	維 持 費	小 計	協 学 会	学 友 会 入 会 費	学 友 会	小 計	合 計
昭和60	22,000	120,000	310,000	100,000	120,000	672,000	25,000	1,000	9,000	35,000	707,000
61	22,000	120,000	340,000	100,000	120,000	680,000	25,000	1,000	9,000	35,000	715,000
62	22,000	130,000	340,000 (350,000) (360,000) (370,000)	110,000 (120,000) (130,000) (140,000)	120,000	700,000 (590,000) (610,000) (630,000)	25,000	1,000	9,000	35,000	725,000 (625,000) (645,000) (665,000)
63	22,000	140,000	350,000 (360,000) (370,000) (380,000)	120,000 (130,000) (140,000) (150,000)	120,000	730,000 (610,000) (630,000) (650,000)	25,000	1,000	9,000	35,000	765,000 (645,000) (665,000) (685,000)
平成元	23,000	140,000	360,000 (370,000) (380,000) (390,000)	130,000 (140,000) (150,000) (160,000)	120,000	750,000 (630,000) (650,000) (670,000)	25,000	1,000	9,000	35,000	785,000 (665,000) (685,000) (705,000)
2	25,000	140,000	640,000 (660,000) (680,000) (700,000)	—	—	780,000 (660,000) (680,000) (700,000)	25,000	1,000	9,000	35,000	815,000 (695,000) (715,000) (735,000)
3	25,000	140,000	680,000 (700,000) (720,000) (740,000)	—	—	820,000 (700,000) (720,000) (740,000)	25,000	1,000	11,000	37,000	857,000 (737,000) (757,000) (777,000)
4	30,000	150,000	750,000 (770,000) (790,000) (810,000)	—	—	900,000 (770,000) (790,000) (810,000)	25,000	1,000	11,000	37,000	937,000 (807,000) (827,000) (847,000)
5	30,000	150,000	840,000 (860,000) (880,000) (900,000)	—	—	990,000 (860,000) (880,000) (900,000)	25,000	1,000	11,000	37,000	1,027,000 (897,000) (917,000) (937,000)
6	30,000	150,000	930,000 (950,000) (970,000) (990,000)	—	—	1,080,000 (950,000) (970,000) (990,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000 (992,000) (1,012,000) (1,032,000)
7	30,000	150,000	1,020,000 (1,040,000) (1,060,000) (1,080,000)	—	—	1,170,000 (1,040,000) (1,060,000) (1,080,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,212,000 (1,082,000) (1,102,000) (1,122,000)

※昭和62年度からステップ制導入

※平成2年から授業料1本化

項目 年度	検 定 料	入 学 金	授 業 料	施 設 充 実 費	維 持 費	小 計	協学会費	学 友 会 入 会 費	学友会費	小 計	合 計
平成 8	35,000	150,000	1,070,000 (1,090,000) (1,110,000) (1,130,000)	—	—	1,220,000 (1,090,000) (1,110,000) (1,130,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,262,000 (1,132,000) (1,152,000) (1,172,000)
9	35,000	150,000	1,120,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
10	35,000	150,000	1,120,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
11	35,000	20,000	150,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
12	35,000	20,000	150,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
13	35,000	20,000	150,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
14	35,000	20,000	150,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
15	35,000	20,000	150,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
16	35,000	20,000	150,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
17	35,000	150,000	1,120,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)

昭和62年度からステップ制導入

項目 年度	検 定 料	入 学 金	授 業 料	施 設 充 実 費	在 籍 基 本 料	小 計	協学会費	学 友 会 入 会 費	学友会費	小 計	合 計
平成18	35,000	150,000	1,120,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
19	35,000	150,000	1,120,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	—	—	1,270,000 (1,140,000) (1,160,000) (1,180,000)	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000 (1,182,000) (1,202,000) (1,222,000)
20	35,000	150,000	880,000	240,000	—	1,270,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000
21	35,000	150,000	880,000	240,000	—	1,270,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,312,000
22	35,000	100,000	740,000	180,000	60,000	1,080,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000
23	35,000	100,000	740,000	180,000	60,000	1,080,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000
24	35,000	100,000	740,000	180,000	60,000	1,080,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000
25	35,000	100,000	740,000	180,000	60,000	1,080,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000
26	35,000	100,000	740,000	180,000	60,000	1,080,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000
27	35,000	100,000	740,000	180,000	60,000	1,080,000	30,000	1,000	11,000	42,000	1,122,000



学 生 異 動 表

年度	項目	入学志願者数	入 学 者 数	退 学 そ の 他	在 籍 者 数	卒 業 者 数
昭和40		195	107	4	96	
41		188	150	6	225	
42		318	236	1	426	
43		273	220	20	643	95
44		211	178	12	824	123
45		195	165	10	730	181
46		199	181	21	724	191
47		214	189	15	685	154
48		237	202	39	683	140
49		277	241	40	750	142
50		348	307	48	874	140
51		324	259	81	936	152
52		306	243	67	941	173
53		300	233	62	935	213
54		396	262	72	919	178
55		327	222	57	898	180
56		273	197	58	848	188
57		276	183	45	782	188
58		255	171	28	727	172
59		247	169	33	695	161
60		228	181	42	677	170
61		268	214	32	691	137
62		357	296	37	823	140
63		681	354	42	1,003	145
平成元		1,336	348	31	1,163	187
2		2,476	343	36	1,293	233
3		2,256	342	47	1,359	279
4		3,002	388	45	1,421	311
5		2,704	413	29	1,487	325
6		2,217	415	28	1,549	327
7		2,018	415	29	1,604	366
8		1,838	416	32	1,627	392
9		1,005	390	40	1,584	385
10		860	389	33	1,558	380
11		559	369	42	1,516	375
12		313	249	56	1,353	352
13		251	211	46	1,166	350
14		220	197	38	978	329
15		186	162	28	777	211
16		171	158	32	699	184
17		221	184	23	674	169
18		165	133	25	617	140
19		194	170	20	630	134
20		179	142	16	618	167
21		179	141	20	586	117
22		106	87	23	543	162
23		113	89	16	456	122
24		122	100	14	416	128
25		134	108	19	388	72
26		85	70	21	368	78
27		74	62		335	
計		29,877	11,647	1,661	308	9,638

現 教 職 員 (2015年4月1日現在)

職 名	専・兼	氏 名	学園就任年月	現職発令年月
学 長	専	野 又 淳 司	平成17. 4	平成27. 4
教授(学部長・地域総合研究所長)	〃	若 松 裕 之	昭和63. 4	平成12. 4
教 授	〃	片 山 郁 夫	昭和61. 4	平成10. 4
教 授	〃	永 盛 恒 男	昭和62. 4	平成13. 4
教 授 (就 職 部 長)	〃	今 井 敏 博	昭和62. 4	平成16. 4
教授(入試部長・学生部長)	〃	田 中 浩 司	平成10. 4	平成23. 4
教授(教務部長・図書館長)	〃	寺 田 隆 至	平成 4. 4	平成24. 4
教 授	〃	高 月 晋	昭和47. 4	平成16. 4
〃	〃	石 井 晋 良	昭和51. 4	平成23. 4
〃	〃	田 部 井 英 夫	平成 9. 4	平成24. 4
〃	〃	小 林 裕 幸	平成12. 4	平成26. 4
〃	〃	藤 川 隆	平成23. 4	
准 教 授	〃	三 浦 俊 和	昭和55. 4	平成 3. 4
准教授(図書委員長)	〃	西 村 淳	昭和63. 4	平成 6. 4
准教授(学生委員長)	〃	坂 野 学	昭和61. 4	平成10. 4
准教授(入試委員長)	〃	津 金 孝 行	平成 3. 4	平成11. 4
准教授(国際交流委員長)	〃	山 田 康 夫	平成 7. 4	平成11. 4
准教授(地域連携委員長)	〃	大 橋 美 幸	平成17. 4	
准教授(就職委員長)	〃	佐 藤 元 治	平成 7. 4	平成19. 4
准教授(教務委員長)	〃	壁 谷 一 広	平成24. 4	
准 教 授	〃	松 喜 美 夫	昭和53. 4	平成27. 4
専 任 講 師	〃	井 上 祐 輔	平成27. 4	
〃	〃	阿 部 ジョスリン	平成26. 4	平成27. 4
名 誉 教 授	－	永 野 彌 三 雄	昭和50. 4	平成12. 4
〃	－	河 村 博 旨	昭和42. 4	平成17. 4
〃	－	溝 田 春 夫	昭和56. 4	平成27. 4
客 員 教 授	兼	磯 村 元 史	平成10. 4	
非 常 勤 講 師	〃	三 浦 汀 介	昭和62. 4	
〃	〃	シマダ レナ ー テ	昭和62. 4	平成24. 4
〃	〃	後 藤 貴 美 子	平成13. 9	
〃	〃	田 村 光 規	平成14. 4	平成27. 4
〃	〃	山 崎 幸 路	平成16. 4	平成26. 4
〃	〃	小 城 春 雄	平成17. 4	平成21. 4
〃	〃	荒 井 克 二	平成19. 4	
〃	〃	中 村 和 之	平成21. 4	平成25. 4

職 名	専・兼	氏 名	学園就任年月	現職発令年月
非 常 勤 講 師	兼	河 鍊 洙	平成23. 4	
〃	〃	林 美 都 子	平成24. 4	
〃	〃	鳩 貴 子	平成24. 4	
〃	〃	百 合 拡 泰	平成24. 4	
〃	〃	小 林 美 紗	平成24. 4	平成27. 4
〃	〃	武 田 隆 雄	平成25. 4	
〃	〃	上 野 廣 幸	平成25. 4	
〃	〃	大 西 正 光	平成25. 4	
〃	〃	小 岩 洋	平成26. 4	
〃	〃	西 原 弘 樹	平成26. 7	
〃	〃	角 田 美 知 江	平成27. 4	
事 務 局 長	(兼)	堀 田 寿 生	平成 9. 7	平成26. 4
地 域 連 携 セ ン タ ー	専	黒 澤 幹 生	昭和49. 4	平成27. 4
入 試 課 長	〃	吉 田 孝 夫	平成12.10	平成23. 4
総 務 ・ 学 務 課 長	〃	綱 島 由 人	平成19. 6	平成23. 4
キ ャ リ ア 開 発 課 長	〃	高 橋 勝 美	平成22. 5	
図 書 館 課 長 補 佐	〃	竹 山 久 芳	平成 4. 4	平成24. 4
キ ャ リ ア 開 発 係 長	〃	川 原 真 理 子	平成 3. 4	平成27. 4
経 理 係 長	(兼)	麓 志 乃	平成 5. 4	平成25. 4
学 生 係 長	専	阪 内 俊 喜	平成15.11	平成19. 4
入 試 係 長	〃	木 村 仁	平成20. 4	平成25. 4
事 務 主 任	〃	筆 村 美 奈 子	平成 2. 4	平成27. 4
〃	〃	小 本 真 由 美	平成 2. 7	平成22.10
〃	〃	村 口 あ ゆ み	平成 7. 4	平成27. 4
〃	〃	伊 藤 拓 也	平成23. 4	平成27. 4
〃	〃	小 原 拓 也	平成25. 5	
事 務 職 員	(兼)	金 子 宏 美	平成10. 4	平成20. 4
〃	専	中 山 俊 之	平成20. 4	
〃	〃	本 田 泰 代	平成23. 4	平成24. 4
〃	〃	長 沼 孝 征	平成27. 4	
〃	〃	勝 山 敬 太	平成27. 4	
図 書 館 臨 時 職 員	兼	矢 本 多 美 子	平成元. 4	平成26. 4
〃	〃	石 垣 朋 子	平成17. 4	
〃	〃	吉 田 可 奈	平成18. 3	平成24. 4
保 健 室 臨 時 職 員	〃	紺 井 敦 子	平成19. 4	
事 務 臨 時 職 員	〃	松 倉 裕 子	平成26. 5	

旧教職員

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	職名	氏名	就任年月日	退任年月日
助教授	荒木 猛	昭和56.9.1	昭和61.3.31	教授	佐久間 政弘	平成 3.9.1	平成12.3.31
教授	和泉 雄三	昭和42.8.1	昭和62.3.31	教授	鈴木 旭	平成 5.9.1	平成12.3.31
教授	永野 弥三雄	昭和50.4.1	昭和62.3.31	講師	鮫川 松五郎	平成 2.4.1	平成12.3.31
教授	蘇田 三千穂	昭和48.8.1	昭和62.3.31	教授	金谷 茂	平成12.4.1	平成12.11.30
教授	井口 伸	昭和51.4.1	昭和62.3.31	教授	大江田 清志	平成 3.4.1	平成13.3.31
助教授	ケン・スクーランド	昭和59.4.1	昭和62.3.31	教授	清水 紘史	平成 3.9.1	平成13.3.31
助教授	吉田 雅敏	昭和62.4.1	昭和63.3.31	教授 (名誉教授)	和泉 雄三	昭和42.8.1	平成13.4.25
専任講師	加藤 健二	昭和60.4.1	平成元.3.31	教授	鈴木 正義	平成 8.9.1	平成14.3.31
専任講師	バーバラ・ブース	昭和61.4.1	平成元.3.31	教授	渡辺 英郎	平成12.4.1	平成14.3.31
専任講師	タマス・ダムキ	昭和63.4.1	平成 2.3.31	教授	宮崎 正孝	昭和46.4.1	平成14.3.31
教授	榎森 進	昭和56.4.1	平成 3.3.31	専任講師	ブライアン・ダッフ	平成 5.4.1	平成14.3.31
教授	伊島 光男	昭和63.4.1	平成 3.3.31	名誉教授	伊藤 結城夫	昭和40.4.1	平成14.5.19
専任講師	小澤 伸光	昭和61.4.1	平成 3.3.31	客員教授	横山 彰	平成12.4.1	平成14.3.31
専任講師	案浦 崇	昭和60.4.1	平成 3.3.31	教授	上平 幸好	昭和41.4.1	平成15.3.31
専任講師	桜井 勝朗	昭和60.4.1	平成 3.3.31	教授	田中 三夫	平成12.4.1	平成15.3.31
助教授	外山 茂樹	昭和54.4.1	平成 4.3.31	教授	安東 璋二	平成12.4.1	平成15.3.31
専任講師	渕江 哲郎	昭和62.4.1	平成 4.3.31	助教授	世良 耕一	平成 6.4.1	平成15.3.31
教授	黒坂 正次	昭和50.4.1	平成 5.3.31	客員教授	佐藤 道夫	平成10.4.1	平成15.3.31
教授	和泉 雄三	平成 3.4.1	平成 5.3.31	客員教授	川村 静也	平成14.4.1	平成15.3.31
専任講師	ランダル・カミングス	平成 2.4.1	平成 5.5.31	客員教授	濱野 啓介	平成14.4.1	平成15.3.31
専任講師	鄧 鳳声	平成 4.4.1	平成 5.3.31	客員教授	伊藤 強	平成14.4.1	平成15.3.31
教授	佐藤 裕	平成 3.4.1	平成 7.3.31	教授	赤松 潤	平成 3.4.1	平成16.3.31
専任講師	山本 寛	平成 3.4.1	平成 7.3.31	客員教授	永野 泰道	平成10.4.1	平成16.3.31
専任講師	クリスタベル・バトラー	平成 2.10.1	平成 7.3.31	客員教授	石本 一詔	平成12.4.1	平成16.3.31
専任講師	本間 恵美子	平成元.10.1	平成 8.3.31	客員教授	橋本 保雄	平成12.4.1	平成16.3.31
専任講師	今野 昌信	平成 3.4.1	平成 9.3.31	客員教授	梨本 勝	平成12.4.1	平成16.3.31
教授	大坂 昭男	平成 2.4.1	平成10.3.31	客員教授	山内 鉄也	平成12.4.1	平成16.3.31
教授	大嶋 隆	平成 3.9.1	平成10.3.31	専任講師	会沢 信彦	平成10.4.1	平成16.3.31
教授	山崎 義彦	平成 3.9.1	平成10.3.31	教授 (名誉教授)	河村 博旨	昭和42.4.1	平成17.3.31
教授	中川 正	平成 3.9.1	平成10.3.31	教授	川畑 孝	平成13.4.1	平成17.3.31
助教授	坂田 聡	平成 6.9.1	平成10.3.31	専任講師	米田 薫	平成16.4.1	平成17.3.31
教授 (名誉教授)	大野 和雄	昭和40.4.1	平成11.3.31	客員教授	島田 征夫	平成12.4.1	平成17.3.31
教授 (名誉教授)	神田 弘	昭和43.4.1	平成11.4.28	客員教授	浜田 正行	平成12.4.1	平成17.3.31
教授	永野 彌三雄	昭和50.4.1	平成12.3.31	客員教授	吉野 源太郎	平成13.4.1	平成17.3.31
教授	藤田 徹	平成 3.9.1	平成12.3.31	客員教授	赤木 恵	平成14.4.1	平成17.3.31
教授	小川 弥八郎	平成 3.9.1	平成12.3.31	教授	島崎 健二	平成12.4.1	平成18.3.31

XI 資 料

職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日
客員教授	伊 藤 強	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
教 授	高 橋 真	平成63. 4. 1	平成19. 3.31
教 授	藤 嶋 暁	平成 6. 4. 1	平成19. 3.31
学 長	小笠原 愈	平成14.12.10	平成19.10.31
准 教 授	日 野 隆 生	平成10. 4. 1	平成20. 3.31
教 授	岡 田 恒 雄	平成19. 6. 1	平成20. 3.31
客員教授	島 村 矩 生	平成11.10. 1	平成20. 3.31
専任講師	スコット・ハーディ	平成 9. 4. 1	平成21. 3.31
専任講師	高 間 佐知子	平成18. 4. 1	平成21. 3.31
教 授	新 谷 典 彦	昭和50. 4. 1	平成22. 2.27
専任講師	金 山 健 一	平成17. 4. 1	平成24. 3.31
専任講師	川 勾 亜紀奈	平成19. 4. 1	平成24. 3.31
専任講師	湯 浅 弥	平成24. 4. 1	平成25. 3.31
専任講師	中 井 郷 之	平成24. 4. 1	平成26. 3.31
専任講師	ドナルド・ミラー	平成14. 4. 1	平成26. 3.31
教 授	佐 藤 義 博	平成10. 4. 1	平成26. 3.31
学長・教授	溝 田 春 夫	昭和56. 4. 1	平成27. 3.31
教 授	田 村 光 規	平成19. 6. 1	平成27. 3.31
准 教 授	隅 田 孝	平成21. 4. 1	平成27. 3.31
非常勤講師	村 田 貞 雄	昭和53. 4. 1	昭和61. 3.31
非常勤講師	福 岡 二 郎	昭和57. 4. 1	昭和61. 3.31
非常勤講師	麻 生 徹	昭和43. 4. 1	昭和62. 3.31
非常勤講師	水 谷 善 一	昭和42. 4. 1	昭和62. 3.31
非常勤講師	ピーター・ハウレット	昭和62. 4. 1	昭和63. 3.31
非常勤講師	山 本 英 二	昭和61. 4. 1	昭和63. 3.31
非常勤講師	永 田 孝 一	昭和57. 4. 1	昭和63. 3.31
非常勤講師	太刀川 直 孝	昭和50. 4. 1	昭和63. 3.31
非常勤講師	佐 竹 道 盛	昭和60. 4. 1	平成元. 3.31
非常勤講師	桜 井 竜 丸	昭和58. 4. 1	平成元. 3.31
非常勤講師	木 原 康 男	昭和62. 4. 1	平成元. 3.31
非常勤講師	岡 田 恒 雄	昭和43. 4. 1	平成 2. 3.31
非常勤講師	羽根田 秀 実	平成元. 4. 1	平成 2. 3.31
非常勤講師	乳 井 英 雄	平成元. 4. 1	平成 2. 3.31
非常勤講師	尾 形 猛	昭和62. 4. 1	平成 3. 3.31
非常勤講師	ジュディス・フェニー	平成元. 4. 1	平成 3. 3.31
非常勤講師	黒 坂 正 次	平成元. 4. 1	平成 3. 3.31

職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日
非常勤講師	鍋 島 浩	平成元. 4. 1	平成 3. 3.31
非常勤講師	貞 方 昇	昭和61. 4. 1	平成 4. 3.31
非常勤講師	中 島 正 美	昭和59. 4. 1	平成 4. 3.31
非常勤講師	小 熊 宏 栄	平成 4. 4. 1	平成 4. 3.31
非常勤講師	奥 田 亨	平成 4. 4. 1	平成 5. 3.31
非常勤講師	紀 藤 典 夫	平成 4. 4. 1	平成 5. 3.31
非常勤講師	奥 平 忠 志	昭和54. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	角 田 和 明	平成 3. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	越 後 和 弘	平成 3. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	外 山 茂 樹	平成 4. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	望 月 弥 平	平成 4. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	鈴 木 邦 彦	平成 4. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	石 原 正 行	平成 5. 4. 1	平成 6. 3.31
非常勤講師	増 田 洋	昭和63. 4. 1	平成 7. 3.31
非常勤講師	貞 方 昇	平成 5. 4. 1	平成 7. 3.31
非常勤講師	下 澤 正 彦	平成 6. 4. 1	平成 8. 3.31
非常勤講師	長 尾 一 史	平成 6. 5. 1	平成 8. 3.31
非常勤講師	田 上 寛	平成 6. 4. 1	平成 9. 3.31
非常勤講師	クリスタベル・バトラ	平成 7. 4. 1	平成 9. 3.31
非常勤講師	阿 部 光 房	平成 7. 4. 1	平成 9. 3.31
非常勤講師	千 葉 雄 一郎	平成 7. 4. 1	平成 9. 3.31
非常勤講師	藤 原 啓 男	平成 7.10. 1	平成 9. 3.31
非常勤講師	関 野 洋 一	平成 7. 4. 1	平成10. 3.31
非常勤講師	天 野 宣 敬	平成 2. 4. 1	平成10. 3.31
非常勤講師	佐 藤 義 博	平成 6. 4. 1	平成 9. 9.30
非常勤講師	兵 頭 利 明	平成 8. 4. 1	平成10. 3.31
非常勤講師	大 塚 博 之	平成 8. 4. 1	平成10. 3.31
非常勤講師	岡 林 茂	平成 9. 4. 1	平成10. 3.31
非常勤講師	大 沢 泉	平成 4. 4. 1	平成11. 3.31
非常勤講師	真 野 昭 英	平成 9. 4. 1	平成11. 3.31
非常勤講師	山 越 晴 美	平成10. 4. 1	平成11. 3.31
非常勤講師	長谷川 幸 孝	平成10. 4. 1	平成11. 3.31
非常勤講師	茅 野 靖 雄	平成10. 4. 1	平成11. 3.31
非常勤講師	村 上 昌 弘	平成 8.10. 1	平成11. 9.30
非常勤講師	鮫 川 松 五郎	昭和59. 4. 1	平成 2. 3.31
非常勤講師	金 谷 茂	昭和58.10. 1	平成12. 3.31

職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日	職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日
非常勤講師	島 崎 健 二	昭和61.10. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	山 村 幸 生	平成12.10. 1	平成14. 3.31
非常勤講師	田 中 三 夫	平成 2. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	宮 西 洋 太 郎	平成13. 4. 1	平成14. 3.31
非常勤講師	蓮 間 従 道	平成 3. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	伊 藤 強	平成13. 4. 1	平成14. 3.31
非常勤講師	石 本 一 詔	平成 5. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	吉 川 英 一	平成13. 4. 1	平成14. 3.31
非常勤講師	渡 邊 英 郎	平成 6. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	岩 井 俊 憲	平成13. 4. 1	平成14. 3.31
非常勤講師	目 黒 好 子	平成 6. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	名 取 晃 一	昭和61.10. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	奥 平 理	平成 7. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	佐 藤 憲 一	平成 6. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	村 上 昌 弘	平成 8. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	トリョフスビツキ一アナト一リ	平成 7. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	高 橋 久 志	平成 9. 5. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	今 城 周 造	平成 8. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	安 東 璋 二	平成10. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	永 田 均	平成12. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	天 野 宣 敬	平成11. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	金 光 秀 雄	平成13. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	木 田 治	平成11. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	岡 本 恵	平成13. 5.14	平成15. 3.31
非常勤講師	阿 部 保 子	平成11. 4. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	鈴 木 正 義	平成14. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	清 水 雅 志	平成11.10. 1	平成12. 3.31	非常勤講師	秤 屋 雄 一	平成14. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	吉 岡 正 敏	昭和42.10. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	水 野 さ と み	平成14. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	小 林 弘	平成元. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	織 田 裕 子	平成14. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	相 澤 キ ミ	平成元. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	倉 本 智 和	平成14. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	大 隅 寛	平成元. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	佐 藤 伸	平成14. 9.24	平成15. 3.31
非常勤講師	桜 田 清 光	平成 6. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	斎 田 宣 伸	平成11.10. 1	平成12. 3.31
非常勤講師	松 田 健 一	平成 6. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	大久保 裕 晴	平成11.10. 1	平成12. 3.31
非常勤講師	吉 野 源 太 郎	平成11. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	永 野 彌 三 雄	平成12. 4. 1	平成13. 3.31
非常勤講師	田 村 仁 志	平成11. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	宮 西 詔 路	昭和55. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	光 末 香 恵 美	平成12. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	鎌 田 孝 夫	平成 7. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	岡 田 幸 子	平成12. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	小 堀 寛	平成12. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	安 積 正 彦	平成12. 4. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	富 田 俊 子	平成12. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	秤 屋 雄 一	平成12. 5. 1	平成13. 3.31	非常勤講師	三 上 敦 文	平成12. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	横 山 彰	平成12. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	岩 井 俊 憲	平成13. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	酒 井 和 博	昭和59. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	小山内 真由美	平成13.10. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	宇田川 拓 雄	昭和62. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	山 越 晴 美	平成14. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	加 藤 晃	平成 6. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	村 木 永 親	平成14. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	小笠原 愈	平成11. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	伊 藤 武	平成15. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	藤 原 博 之	平成12. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	北 井 優 子	平成15. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	太 田 博 史	平成12. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	岩 田 真 理 子	平成15. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	合 谷 美 江	平成12. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	荻 野 慶 人	平成13. 4. 1	平成16. 3.31
非常勤講師	白 井 有 里 子	平成12. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	茅 野 靖 雄	平成10. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	白 渕 裕 峰	平成12. 4. 1	平成14. 3.31	非常勤講師	大 野 俊 文	平成12. 4. 1	平成17. 3.31

職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日
非常勤講師	沖 山 良 夫	平成12. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	奥 山 昌 弘	平成12. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	幹 泰 郎	平成12.10. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	呉 起 東	平成13. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	茅 野 靖 雄	平成13. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	竹 田 公 昭	平成13. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	渡 辺 一 弘	平成13. 3. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	前 川 雅 彦	平成14. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	上 平 幸 好	平成15. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	矢 代 和 祐	平成15. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	宮 西 洋太郎	平成16. 4. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	高 橋 修	平成16. 9. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	浅 井 厚 史	平成16.12. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	太 田 晶 子	平成11. 9. 1	平成17. 3.31
非常勤講師	宮 崎 正 孝	平成14. 4. 1	平成18.11.13
非常勤講師	本 多 栄 司	昭和46. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	戸 澤 昭 紀	平成12.10. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	古 旗 英 捷	平成15. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	橋 田 恭 一	平成15. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	川 畑 孝	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	佐 藤 憲 一	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	鎌 田 孝 男	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	中 野 正 利	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	三 浦 栄 治	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	野 末 勝 宏	平成17. 4. 1	平成18. 3.31
非常勤講師	飯 島 俊 夫	平成17. 9.20	平成18. 3.31
非常勤講師	目 黒 明日香	平成元. 4. 1	平成19. 3.31
非常勤講師	安 東 璋 二	平成15. 4. 1	平成19. 3.31
非常勤講師	田 中 三 夫	平成15. 4. 1	平成19. 3.31
非常勤講師	村 井 英 夫	平成17.10. 1	平成19. 3.31
非常勤講師	高 橋 廣 一	平成18. 4. 1	平成19. 3.31
非常勤講師	岡 田 恒 雄	平成 6. 4. 1	平成19. 5.31
非常勤講師	田 村 光 規	平成14. 4. 1	平成19. 5.31
非常勤講師	高 橋 かつ子	平成10. 9. 1	平成20. 1.31
非常勤講師	萩 野 慶 人	平成13. 4. 1	平成20. 3.31
非常勤講師	葛 西 聖 一	平成15. 4. 1	平成20. 3.31

職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日
非常勤講師	高 橋 真	平成19. 4. 1	平成20. 3.31
非常勤講師	鎌 田 孝 男	平成19. 4. 1	平成20. 3.31
非常勤講師	森 山 治	平成19. 4. 1	平成20. 3.31
非常勤講師	檜 木 博 史	平成 2. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	萩 澤 一 郎	平成 6. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	佐 原 正 三	平成12. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	渡 部 功	平成12. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	高 木 哲	平成12. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	山 那 順 一	平成13. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	宮 永 正 良	平成13. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	大 村 公 男	平成14. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	佐 藤 孝 子	平成15. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	福 田 薫	平成16. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	西 谷 裕 幸	平成20. 4. 1	平成21. 3.31
非常勤講師	竹 花 和 晴	平成13. 4. 1	平成22. 3.31
非常勤講師	デルカーチ・フョードル	平成15. 4. 1	平成22. 3.31
非常勤講師	デービッド・スパーリング	平成 9. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	広 瀬 龍 太	平成15. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	鈴 木 武 嗣	平成15. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	松 原 知代子	平成18. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	高 田 徹	平成19. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	上 山 恭 男	平成11. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	松 山 高 治	平成21. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	平 井 克 宗	平成21. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	堀 田 剛 史	平成21. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	田 中 理	平成11. 9. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	福 士 隆 三	平成元. 4. 1	平成23. 3.31
非常勤講師	中 川 清 吾	昭和58. 4. 1	平成25. 3.31
非常勤講師	田 中 慶 子	平成元. 4. 1	平成25. 3.31
非常勤講師	渡 邊 英 郎	平成14. 4. 1	平成25. 3.31
非常勤講師	小笠原 雅	平成14. 4. 1	平成25. 3.31
非常勤講師	秦 賢 蔵	平成21. 4. 1	平成25. 3.31
非常勤講師	島 崎 健 二	平成18. 4. 1	平成25.10.31
非常勤講師	小 林 美 紗	平成24. 4. 1	平成26. 3.31
非常勤講師	デービッド・スパーリング	平成24. 4. 1	平成26. 3.31
非常勤講師	摺 木 健 志	平成25. 4. 1	平成26. 3.31

職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日	職 名	氏 名	就任年月日	退任年月日
非常勤講師	阿 部 保 子	平成13. 9. 1	平成27. 3.31	用 務 員	小 西 哲 子	昭和44. 4. 1	平成14. 3.31
非常勤講師	本 田 真 大	平成25. 4. 1	平成27. 3.31	事 務 局 長	石 崎 福 邦	昭和54. 3. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	畠 山 大	平成26. 4. 1	平成27. 3.31	事 務 員	上 田 香 織	平成 3. 4. 1	平成15. 3.31
非常勤講師	小 林 清 広	平成26. 4. 1	平成27. 3.31	学 生 課 長	宮 腰 泰 直	昭和44. 4. 1	平成15.10.31
非常勤講師	秀 島 健 寛	平成26. 4. 1	平成27. 3.31	事 務 員	齋 藤 恵	平成13. 4. 1	平成16. 3.31
事 務 員	大 橋 彩 子	昭和54. 4. 1	昭和62. 4. 1	事 務 員	新 谷 昭 彦	平成15. 4. 1	平成17. 5.23
事 務 員	菅 原 智 子	昭和54. 4. 1	昭和62. 4. 1	事 務 局 長	佐 藤 博 昭	平成13. 4. 1	平成17. 3.31
事 務 員	大 木 千佳子	昭和56. 4. 1	昭和62. 4. 1	電 算 係 長	竹 山 久 芳	平成12. 4. 1	平成17. 3.31
臨 時 職 員	五十嵐 泉	昭和54. 4. 1	昭和62. 4. 1	総 務 係 長	片 岡 洋 子	昭和40. 4. 1	平成18. 3.31
臨 時 職 員	吉 田 横 子	昭和62. 4. 1	平成元. 3.31	学 生 課 長	谷 口 幸 夫	平成13. 4. 1	平成18. 3.31
事 務 員	高 橋 順 子	昭和60. 4. 1	平成 2. 3.31	事 務 局 長	新 関 喜美男	昭和50.11. 1	平成18. 5.31
事 務 員	坂 本 依 子	昭和60. 4. 1	平成 2. 3.31	事 務 員	佐 藤 梢	平成16. 4. 1	平成18.11. 7
事 務 員	小笠原 歩	昭和62. 4. 1	平成 2. 3.31	保健室看護婦	小 林 京 子	平成13. 4. 1	平成19. 3.31
事 務 局 長	江 縁 廣	昭和56. 4. 1	平成 3. 3.31	総 務 課 長	岡 嶋 雅 昭	昭和57. 4. 1	平成20. 3.31
総 務 課 長	桜 谷 昭 市	昭和57. 4. 1	平成 3. 3.31	キャリア開発課長	大 山 紀 明	昭和45. 4. 1	平成20. 3.31
事 務 員	表 公 子	昭和54. 4. 1	平成 3. 3.31	学生部参事	濱 谷 清 治	平成18. 4. 1	平成20. 3.31
事 務 員	小 林 真紀子	昭和59. 4. 1	平成 3. 3.31	キャリア開発課長	干 場 勝	昭和57. 4. 1	平成21. 3.31
事 務 員	野 崎 美 華	平成 2. 4. 1	平成 3. 3.31	図書館係長	遠 藤 啓 暁	昭和45. 4. 1	平成21. 3.31
図書館係長	飯 田 石 勝	昭和44. 4. 1	平成 5. 3.31	事 務 員	鈴 木 克 尚	平成 5. 4. 1	平成21. 3.31
事 務 員	吉 本 友 紀	平成 2. 4. 1	平成 5. 3.31	学 務 課 長	小 林 裕 一	昭和59. 4. 1	平成22. 3.31
事 務 員	木 村 美 佐	昭和57. 4. 1	平成 7. 3.31	新潟県地区 連絡事務所長	夏 川 チ エ	平成11. 4. 1	平成22. 3.31
事 務 員	平野井 麻紀子	昭和62. 4. 1	平成 7. 3.31	事 務 職 員	高 橋 孝 太	平成17. 4. 1	平成22. 3.31
学生寮職員	大 塚 政 久	昭和58. 6. 1	平成 7. 3.31	放送大学臨時職員	田 畑 洋 治	平成18. 6. 1	平成22. 3.31
学生寮職員	大 塚 節 子	昭和58. 6. 1	平成 7. 3.31	放送大学臨時職員	谷 本 護	平成18. 6. 1	平成22. 3.31
事 務 員	阿 部 元 樹	昭和39. 1.31	平成 8. 3.31	臨 時 職 員	東 谷 祥 子	平成19. 9. 1	平成22. 3.31
事 務 員	山 田 陽 子	平成元. 4. 1	平成 8. 3.31	臨 時 職 員	米 谷 麻 弥	平成20. 2. 1	平成22. 3.31
事 務 員	小 林 さとみ	平成 2. 4. 1	平成 8. 3.31	図書館課長	小 澤 叡	平成11. 4. 1	平成23. 3.31
技 術 職 員	田 中 次 郎	昭和42. 4. 1	平成 8. 3.31	学務・総務課長	國 安 秀 之	平成 9. 4. 1	平成23. 3.31
図書館課長	川 島 孝 夫	平成 6. 4. 1	平成11. 3.31	臨 時 職 員	遠 藤 孝 志	平成22.11.22	平成24. 3.31
用 務 員	本 間 幸 子	昭和54. 4.31	平成12. 3.31	放送大学臨時職員	石名坂 克 明	平成22. 4. 1	平成26. 3.31
事 務 員	稲 村 早 苗	平成 4. 4. 1	平成13. 3.31	放送大学臨時職員	佐 藤 慎 雄	平成22. 4. 1	平成26. 3.31
事 務 員	武 石 有美子	平成 8. 4. 1	平成13. 3.31	臨 時 職 員	西 尾 莉 恵	平成24. 4. 1	平成26. 3.31
青森県東地区 連絡事務所長	佐々木 恒 朗	平成11. 2. 1	平成13. 1.31	臨 時 職 員	干 場 美 佳	平成24. 4. 1	平成25. 3.31
青森県西地区 連絡事務所長	斎 藤 彰	平成11. 4. 1	平成13. 3.31	事務副主任	荒 木 弘 子	昭和63. 4. 1	平成27. 3.31
名古屋地区 連絡事務所長	神 谷 誠	平成11. 5. 1	平成13. 3.31	事 務 員	桑 原 亜里紗	平成13. 4. 1	平成27. 3.31
技 術 職 員	小 西 庄 作	昭和44. 4. 1	平成14. 3.31	臨 時 職 員	荒 関 理 恵	平成25. 9. 1	平成27. 3.31

部・館長・室長、委員会所属

昭和52年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生指導部長	和泉 雄三								
図書館長	村田 喜一								
教務部長	石 南国								
就職指導部長	神田 弘								
学生指導部次長	大野 和雄								
産業開発研究所長	石 南国								
経営研究所長	佐藤 裕								
教務委員	佐藤 裕	河村 博旨	三根 久徳	桑原 常明	白川 満伸	高木 重俊	宮崎 正孝	石井 晋良	
学生指導委員	黒坂 正次	松川 次郎	大野 和雄	増尾 久徳	上平 幸好	高月 晋	蘇田三千穂	新谷 典彦	
就職指導委員	亀谷 栄	永野彌三雄	黒坂 正次	松川 次郎	近藤 元	河村 博旨	桑原 常明	新谷 典彦	
図書委員	伊藤結城夫	佐藤 裕	三根 真	高木 重俊	蘇田三千穂	井口 伸	石井 晋良	キャサリン・アールド	
入試委員	和泉 雄三	神田 弘	石 南国	伊藤結城夫	高木 重俊	宮崎 正孝	森 正雄		
函大商学論究編集委員	永野彌三雄	増尾 久徳	桑原 常明	蘇田三千穂	井口 伸				
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	高木 重俊	宮崎 正孝				

昭和53年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生指導部長	黒坂 正次								
学生指導部次長	増尾 久徳								
図書館長	石 南国								
教務部長	和泉 雄三								
教務部次長	上平 幸好								
就職指導部長	神田 弘								
就職指導部次長	河村 博旨								
産業開発研究所長	大野 和雄								
経営研究所長	佐藤 裕								
教務委員	近藤 元	三根 誠	高月 晋	蘇田三千穂	大野 和雄				
学生指導委員	松川 次郎	永野彌三雄	白川 満伸	井口 伸	松 喜美夫				
就職指導委員	伊藤結城夫	桑原 常明	高木 重俊	石井 晋良	佐藤 裕				
図書委員	亀谷 栄	宮崎 正孝	新谷 典彦	キャサリン・アールド					
入試委員	黒坂 正次	神田 弘	河村 博旨	上平 幸好	増尾 久徳	高月 晋	高木 重俊	森 正雄	
函大商学論究編集委員	永野彌三雄	増尾 久徳	桑原 常明	蘇田三千穂					
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	高木 重俊					

昭和54年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生指導部長	黒坂 正次								
学生指導部次長	増尾 久徳								
教務部長	和泉 雄三								
教務部次長	上平 幸好								
就職指導部長	神田 弘								
就職指導部次長	河村 博旨								
図書館長	伊藤結城夫								
産業開発研究所長	大野 和雄								
経営研究所長	佐藤 裕								
教務委員	佐藤 裕	大野 和雄	松川 次郎	三根 誠	高月 晋	蘇田三千穂	新谷 典彦	松本 肇	
	外山 茂樹								
学生指導委員	永野彌三雄	松川 次郎	近藤 元	桑原 常明	石井 晋良	井口 伸	白川 満伸		
就職指導委員	伊藤結城夫	永野彌三雄	桑原 常明	石井 晋良	宮崎 正孝	松 喜美夫	外山 茂樹		
図書委員	近藤 元	井口 伸	蘇田三千穂	新谷 典彦	白川 満伸	松 喜美夫	キャサリン・アールド		
入試委員	各部長	佐藤 裕	大野 和雄	三根 誠	高月 晋	宮崎 正孝	松本 肇	森 正雄	
函大商学論究編集委員	永野彌三雄	増尾 久徳	桑原 常明	蘇田三千穂	井口 伸				
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	松本 肇					

昭和55年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	黒坂 正次						
学生部次長	増尾 久徳						
教務部長	和泉 雄三						
教務部次長	上平 幸好						
就職部長	神田 弘						
就職部次長	河村 博旨						
図書館長	伊藤結城夫						
産業開発研究所長	和泉 雄三						
経営研究所長	佐藤 裕						
教務委員	佐藤 裕	大野 和雄	上平 幸好	蘇田三千穂	井口 伸		
学生委員	松川 次郎	増尾 久徳	宮崎 正孝	石井 晋良	三浦 俊和		
就職委員	河村 博旨	三根 誠	高月 晋	松 喜美夫	外山 茂樹		
図書委員	永野彌三雄	桑原 常明	白川 満伸	新谷 典彦	松本 肇	フレッド・アンダーソン	
入試委員	和泉 雄三	神田 弘	黒坂 正次	増尾 久徳	河村 博旨	上平 幸好	森 正雄
函大商学論究編集委員	永野彌三雄	河村 博旨	井口 伸	外山 茂樹			
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	松本 肇			

昭和56年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	黒坂 正次						
教務部長	永野彌三雄						
就職部長	三根 誠						
図書館長	伊藤結城夫						
産業開発研究所長							
経営研究所長	黒坂 正次						
教務委員	黒坂 正次	上平 幸好	白川 満伸	○高月 晋	新谷 典彦	井口 伸	外山 茂樹
学生委員	永野彌三雄	大野 和雄	○河村博旨	桑原 常明	宮崎 正孝	蘇田三千穂	三浦 俊和
就職委員	○増尾久徳	河村 博旨	白川 満伸	新谷 典彦	石井 晋良	松本 肇	フレッド・アンダーソン
図書委員	和泉 雄三	○大野和雄	高月 晋	井口 伸	外山 茂樹	荒木 猛	フレッド・アンダーソン
入試委員	黒坂 正次	松川 次郎	三根 誠	○宮崎正孝	石井 晋良	江森 進	溝田 春夫
電子研鑽室運営委員	和泉 雄三	神田 弘	伊藤結城夫	三根 誠	○上平幸好	榎森 進	松 喜美夫
函大商学論究編集委員	永野彌三雄	河村 博旨	井口 伸	外山 茂樹			
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	松本 肇			

○は委員長を示す

昭和57年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	大野 和雄						
図書館長	伊藤結城夫						
電子計算室長	佐藤 裕						
産業開発研究所長	和泉 雄三						
経営研究所長	永野彌三雄						
教務委員	大野 和雄	上平 幸好	桑原 常明	○白川満伸	蘇田三千穂	井口 伸	外山 茂樹
学生委員	桑原 常明	白川 満伸	○高月 晋	宮崎 正孝	蘇田三千穂	溝田 春夫	三浦 俊和
就職委員	永野彌三雄	伊藤結城夫	○河村博旨	新谷 典彦	フレッド・アンダーソン	三浦 俊和	荒木 猛
図書委員	神田 弘	○永野彌三雄	河村 博旨	高月 晋	外山 茂樹	フレッド・アンダーソン	荒木 猛
電算室運営委員	和泉 雄三	大野 和雄	○上平幸好	井口 伸	江森 進	溝田 春夫	松 喜美夫
入試委員	神田 弘	伊藤結城夫	三根 誠	○宮崎正孝	石井 晋良	榎森 進	松 喜美夫
函大商学論究編集委員	河村 博旨	白川 満伸	新谷 典彦	外山 茂樹			
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	荒木 猛			

○は委員長を示す

昭和58年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	大野 和雄						
図書館長	伊藤結城夫						
電子計算室長	佐藤 裕						
産業開発研究所長	和泉 雄三						
経営研究所長	永野彌三雄						
教務委員	大野 和雄	桑原 常明	宮崎 正孝	蘇田三千穂	○石井晋良	溝田 春夫	フレッド・アンダーソン
学生委員	白川 満伸	高月 晋	新谷 典彦	外山 茂樹	江森 進	溝田 春夫	○荒木 猛
就職委員	○和泉雄三	永野彌三雄	伊藤結城夫	三根 誠	上平 幸好	松 喜美夫	三浦 俊和
図書委員	○神田 弘	永野彌三雄	河村 博旨	三根 誠	新谷 典彦	石井 晋良	三浦 俊和
入試委員	和泉 雄三	神田 弘	伊藤結城夫	○井口 伸	外山 茂樹	松 喜美夫	フレッド・アンダーソン
電算室運営委員	大野 和雄	河村 博旨	白川 満伸	井口 伸	石井 晋良	外山 茂樹	溝田 春夫
函大商学論究編集委員	河村 博旨	白川 満伸	新谷 典彦	石井 晋良			
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	荒木 猛			
20周年記念事業委員	○和泉雄三	永野彌三雄	三根 誠	桑原 常明	新谷 典彦	石井 晋良	三浦 俊和
カリキュラム検討委員会	佐藤 裕	大野 和雄	河村 博旨	上平 好孝	白川 満伸	○蘇田三千穂	井口 伸
	外山 茂樹	榎森 進	松 喜美夫	荒木 猛			
姉妹子提携委員	佐藤 裕	○高月 晋	蘇田三千穂	溝田 春夫	フレッド・アンダーソン		

○は委員長を示す

昭和59年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	大野 和雄						
図書館長	伊藤結城夫						
電子計算室長	溝田 春夫						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	永野彌三雄						
教務委員	○河村博旨	高月 晋	宮崎 正孝	石井 晋良	溝田 春夫	荒木 猛	三浦 俊和
学生委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	河村 博旨	新谷 典彦	外山 茂樹	江森 進	荒木 猛
就職委員	○三根 誠	大野 和雄	上平 幸好	桑原 常明	白川 満伸	宮崎 正孝	松 喜美夫
図書委員	○榎森 進	大野 和雄	三根 誠	新谷 典彦	石井 晋良	松 喜美夫	三浦 俊和
電算室運営委員	○桑原常明	河村 博旨	白川 満伸	石井 晋良	外山 茂樹	荒木 猛	三浦 俊和
国際交流委員	○高月 晋	蘇田三千穂	井口 伸	溝田 春夫	フレッド・アンダーソン		
公開講座実施委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨	高月 晋	外山 茂樹	榎森 進
20周年記念事業委員	○和泉雄三	永野彌三雄	伊藤結城夫	三根 誠	桑原 常明	新谷 典彦	石井 晋良
	三浦 俊和	江縁 廣	櫻谷 昭市	阿部 元樹	石崎 福邦	大山 紀明	
函大商学論究編集委員	河村 博旨	白川 満伸	新谷 典彦	石井 晋良			
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	荒木 猛			
20周年記念誌編集委員	大野 和雄	上平 幸好	新谷 典彦	阿部 元樹			

○は委員長を示す

昭和60年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	大野 和雄						
図書館長	伊藤結城夫						
電子計算室長	溝田 春夫						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	永野彌三雄						
教務委員	○河村博旨	三根 誠	高月 晋	新谷 典彦	荒木 猛	松 喜美夫	三浦 俊和
学生委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	河村 博旨	井口 伸	石井 晋良	案浦 崇	桜井 勝朗
就職委員	○外山茂樹	大野 和雄	桑原 常明	白川 満伸	宮崎 正孝	溝田 春夫	荒木 猛
図書委員	○榎森 進	大野 和雄	上平 幸好	外山 茂樹	松 喜美夫	案浦 崇	加藤 健二
電算室運営委員	○新谷典彦	伊藤結城夫	桑原 常明	荒木 猛	三浦 俊和	桜井 勝朗	加藤 健二
国際交流委員	○高月 晋	蘇田三千穂	井口 伸	榎森 進	溝田 春夫	ケンスケ・ランド	三浦 俊和
公開講座実施委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨	高月 晋	外山 茂樹	榎森 進
	溝田 春夫	荒木 猛					

入試委員	○三根 誠	永野彌三雄	上平 幸好	桑原 常明	白川 満伸	蘇田三千穂	新谷 典彦
函大商学論究編集委員	新谷 典彦	石井 晋良	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	榎森 進	溝田 春夫	ケン・スクーランド	三浦 俊和
20周年記念事業委員	○和泉雄三	永野彌三雄	伊藤結城夫	三根 誠	桑原 常明	新谷 典彦	石井 晋良
	三浦 俊和	江縁 廣	櫻谷 昭市	阿部 元樹	石崎 福邦	大山 紀明	
20周年記念誌編集委員	○大野和雄	上平 幸好	新谷 典彦	櫻谷 昭市	阿部 元樹		
中長期構想委員	○大野和雄	河村 博旨	上平 幸好	高月 晋	榎森 進	溝田 春夫	江縁 廣
	櫻谷 昭市	石崎 福邦					
内外留学特別委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨	三根 誠		
図書館等建設委員	○和泉雄三	永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨	三根 誠	榎森 進
	溝田 春夫	江縁 廣	櫻谷 昭市	阿部 元樹	石崎 福邦	大山 紀明	飯田 石勝

○は委員長を示す

昭和61年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	大野 和雄						
図書館長	伊藤結城夫						
電子計算室長	溝田 春夫						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	永野弥三雄						
教務委員	○井口 伸	伊藤結城夫	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	加藤 健二	小澤 叡
学生委員	○石井晋良	蘇田三千穂	井口 伸	溝田 春夫	案浦 崇	桜井 勝朗	坂野 学
就職委員	○外山茂樹	永野彌三雄	伊藤結城夫	上平 幸好	蘇田三千穂	溝田 春夫	三浦 俊和
図書委員	○上平幸好	高月 晋	外山 茂樹	案浦 崇	加藤 健二	小澤 叡	坂野 学
電算室運営委員	○新谷典彦	伊藤結城夫	蘇田三千穂	宮崎 正孝	片山 郁夫	桜井 勝朗	加藤 健二
国際交流委員	○高月 晋	永野彌三雄	河村 博旨	宮崎 正孝	榎森 進	ケン・スクーランド	三浦 俊和
公開講座実施委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨	高月 晋	外山 茂樹	榎森 進
	溝田 春夫						
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	榎森 進	溝田 春夫	加藤 健二	
内外留学特別委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨			
コース制検討委員	○大野和雄	永野彌三雄	河村 博旨	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦	井口 伸
	外山 茂樹	桜井 勝朗	江縁 廣	石崎 福邦			

○は委員長を示す

昭和61年度（12月15日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	宮崎 正孝						
図書館長	伊藤結城夫						
電子計算室長	溝田 春夫						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	永野弥三雄						
教務委員	○井口 伸	伊藤結城夫	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	加藤 健二	小澤 叡
学生委員	○石井晋良	蘇田三千穂	井口 伸	溝田 春夫	案浦 崇	桜井 勝朗	坂野 学
就職委員	○外山茂樹	永野彌三雄	伊藤結城夫	上平 幸好	蘇田三千穂	溝田 春夫	三浦 俊和
図書委員	○上平幸好	高月 晋	外山 茂樹	案浦 崇	加藤 健二	小澤 叡	坂野 学
入試委員	○河村博旨	和泉 雄三	新谷 典彦	石井 晋良	榎森 進	片山 郁夫	松 喜美夫
電算室運営委員	○新谷典彦	伊藤結城夫	蘇田三千穂	宮崎 正孝	片山 郁夫	桜井 勝朗	加藤 健二
国際交流委員	○高月 晋	永野彌三雄	河村 博旨	宮崎 正孝	榎森 進	バーバラ・ブース	三浦 俊和
公開講座実施委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	和泉 雄三	河村 博旨	高月 晋	外山 茂樹	榎森 進
	溝田 春夫						
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	宮崎 正孝	榎森 進	溝田 春夫	加藤 健二	
内外留学特別委員	○永野彌三雄	伊藤結城夫	大野 和雄	河村 博旨			
コース制検討委員	○和泉雄三	永野彌三雄	河村 博旨	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦	井口 伸
	外山 茂樹	桜井 勝朗	江縁 廣	石崎 福邦			

○は委員長を示す

昭和62年度（4月1日付）部長と委員長各々委嘱

学生部長	宮崎 正孝						
図書館長	高月 晋						
電子計算室長	溝田 春夫						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	外山 茂樹						
教務委員	○伊藤結城夫	宮崎 正孝	片山 郁夫	案浦 崇	加藤 健二	小澤 叡	淵江 廣
学生委員	○上平幸好	新谷 典彦	溝田 春夫	坂野 学	永盛 恒男	淵江 廣	今井 敏博
就職委員	○榎森 進	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	三浦 俊和	案浦 崇	加藤 健二
図書委員	○新谷典彦	石井 晋良	溝田 春夫	桜井 勝朗	小澤 叡	坂野 学	永盛 恒男
入試委員	○河村博旨	石井 晋良	榎森 進	片山 郁夫	松 喜美夫	三浦 俊和	桜井 勝朗
電算室運営委員	○片山郁夫	宮崎 正孝	松 喜美夫	案浦 崇	永盛 恒男	吉田 雅敏	今井 敏博
国際交流委員	○外山茂樹	宮崎 正孝	高月 晋	宮崎 正孝	バーバラ・ブース	吉田 雅敏	今井 敏博
公開講座実施委員	○伊藤結城夫	河村 博旨	高月 晋	外山 茂樹	榎森 進	溝田 春夫	松 喜美夫
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	榎森 進	加藤 健二	坂田 聡		
内外留学特別委員	○河村博旨	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		
国際交流コーディネーター	高月 晋						

○は委員長を示す

昭和63年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	河村 博旨						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	榎森 進						
就職部長	高月 晋						
電子計算室長	溝田 春夫						
国際交流コーディネーター	宮崎 正孝	高月 晋					
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	外山 茂樹						
教務委員	○河村博旨	宮崎 正孝	外山 茂樹	片山 郁夫	小澤 叡	今井 敏博	
学生委員	○上平幸好	石井 晋良	松 喜美夫	坂野 学	永盛 恒男	西村 淳	
就職委員	○高月 晋	榎森 進	石井 晋良	片山 郁夫	伊島 光男	案浦 崇	
図書委員	○榎森 進	伊藤結城夫	案浦 崇	坂野 学	高橋 真		
入試委員	○新谷典彦	河村 博旨	上平 幸好	外山 茂樹	溝田 春夫	松 喜美夫	加藤 健二
電算室運営委員	○溝田春夫	新谷 典彦	桜井 勝朗	小澤 叡	淵江 廣	若松 裕之	
国際交流委員	○宮崎正孝	高月 晋	三浦 俊和	桜井 勝朗	加藤 健二	タマス・ダマキ	
公開講座実施委員	○伊藤結城夫	河村 博旨	高月 晋	榎森 進	溝田 春夫	松 喜美夫	
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	榎森 進	坂野 学			
内外留学特別委員	○河村博旨	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		

○は委員長を示す

平成元年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	河村 博旨						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	榎森 進						
就職部長	高月 晋						
電子計算室長	溝田 春夫						
国際交流コーディネーター	宮崎 正孝	高月 晋					
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	外山 茂樹						
教務委員	○河村博旨	宮崎 正孝	外山 茂樹	片山 郁夫	小澤 叡	今井 敏博	
学生委員	○上平幸好	石井 晋良	松 喜美夫	坂野 学	永盛 恒男	西村 淳	
就職委員	○高月 晋	榎森 進	石井 晋良	片山 郁夫	伊島 光男	案浦 崇	
図書委員	○榎森 進	伊藤結城夫	三浦 俊和	案浦 崇	坂野 学	高橋 真	
入試委員	○新谷典彦	河村 博旨	上平 幸好	外山 茂樹	溝田 春夫	松 喜美夫	加藤 健二
電算室運営委員	○溝田春夫	新谷 典彦	桜井 勝朗	小澤 叡	淵江 廣	若松 裕之	
国際交流委員	○宮崎正孝	高月 晋	三浦 俊和	桜井 勝朗	加藤 健二	バーバラ・ブース	タマス・ダマキ
公開講座実施委員	○伊藤結城夫	河村 博旨	高月 晋	榎森 進	溝田 春夫	松 喜美夫	
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	榎森 進	加藤 健二	坂田 聡		
内外留学特別委員	○河村博旨	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		
学長選挙手続検討委員	○大野和雄	伊藤結城夫	河村 博旨	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	榎森 進	外山 茂樹	江縁 廣				

○は委員長を示す

平成2年度（10月2日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	新谷 典彦						
学生部長	高月 晋						
図書館長	上平 幸好						
就職部長	榎森 進						
電子計算室長	大野 和雄						
国際交流コーディネーター	宮崎 正孝						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	外山 茂樹						
教務委員	○新谷典彦	石井 晋良	外山 茂樹	坂野 学	今井 敏博	若松 裕之	
学生委員	○高月 晋	大野 和雄	石井 晋良	外山 茂樹	松 喜美夫	淵江 廣	西村 淳
就職委員	○榎森 進	高月 晋	宮崎 正孝	伊島 光男	片山 郁夫	松 喜美夫	今井 敏博
図書委員	○上平幸好	伊藤結城夫	榎森 進	片山 郁夫	案浦 崇	淵江 廣	
入試委員	○溝田春夫	上平 幸好	新谷 典彦	三浦 俊和	案浦 崇	永盛 恒男	高橋 真
電算室運営委員	○大野和雄	溝田 春夫	桜井 勝朗	小澤 叡	永盛 恒男	西村 淳	
国際交流委員	○宮崎正孝	伊島 光男	三浦 俊和	桜井 勝朗	高橋 真	ランダル・カミングス	
公開講座実施委員	○伊藤結城夫	河村 博旨	高月 晋	榎森 進	溝田 春夫	松 喜美夫	
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	榎森 進	加藤 健二	坂田 聡		
内外留学特別委員	○河村博旨	伊藤結城夫	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		
学長選挙手続検討委員	○大野和雄	伊藤結城夫	河村 博旨	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	榎森 進	外山 茂樹	江縁 廣				
コース制改善委員	○河村博旨	伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	榎森 進	伊島 光男					

○は委員長を示す

平成3年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	新谷 典彦						
学生部長	高月 晋						
図書館長	上平 幸好						
就職部長	溝田 春夫						
電子計算室長	大野 和雄						
国際交流コーディネーター	宮崎 正孝						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	外山 茂樹						
教務委員	○新谷典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	坂野 学	今井 敏博	若松 裕之	山本 寛
学生委員	○高月 晋	大野 和雄	外山 茂樹	三浦 俊和	淵江 廣	若松 裕之	
就職委員	○溝田春夫	上平 幸好	宮崎 正孝	松 喜美夫	大江田清志	今井 敏博	西村 淳
	坂田 聡						
図書委員	○上平幸好	石井 晋良	片山 郁夫	赤松 潤	淵江 廣	本間恵美子	
入試委員	○外山茂樹	新谷 典彦	石井 晋良	三浦 俊和	坂野 学	永盛 恒男	高橋 真
電算室運営委員	○大野和雄	伊藤結城夫	高月 晋	永盛 恒男	西村 淳	津金 孝行	
国際交流委員	○宮崎正孝	伊藤結城夫	溝田 春夫	高橋 真	本間恵美子	ランダル・カミングス	今野 昌信
公開講座実施委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	高月 晋	溝田 春夫	松 喜美夫		
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	案浦 崇	桜井 勝朗			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	榎森 進	加藤 健二	坂田 聡		
内外留学特別委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		
学長選挙手続検討委員	○河村博旨	伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	溝田 春夫	外山 茂樹	石崎 福邦				
コース制改善委員	○河村博旨	伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	溝田 春夫						

○は委員長を示す

平成4年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	新谷 典彦						
学生部長	高月 晋						
図書館長	上平 幸好						
就職部長	溝田 春夫						
電子計算室長	大野 和雄						
国際交流コーディネーター	宮崎 正孝						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長							
教務委員	○新谷典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	大江田清志	若松 裕之	山本 寛	寺田 隆至
学生委員	○高月 晋	大野 和雄	三浦 俊和	若松 裕之	本間恵美子	坂田 聡	
就職委員	○溝田春夫	上平 幸好	宮崎 正孝	松 喜美夫	大江田清志	今井 敏博	西村 淳
	坂田 聡						
図書委員	○上平幸好	石井 晋良	片山 郁夫	赤松 潤	三浦 俊和	本間恵美子	今野 昌信
入試委員	○石井晋良	新谷 典彦	赤松 潤	永盛 恒男	高橋 真	山本 寛	津金 孝行
電算室運営委員	○大野和雄	伊藤結城夫	高月 晋	永盛 恒男	若松 裕之	西村 淳	津金 孝行
国際交流委員	○宮崎正孝	伊藤結城夫	溝田 春夫	高橋 真	今井 敏博	ランダル・カミングス	今野 昌信
公開講座実施委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	高月 晋	溝田 春夫	松 喜美夫	三浦 俊和	
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	若松 裕之	西村 淳			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	溝田 春夫	本間恵美子			
内外留学特別委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		
学長選挙手続検討委員	○河村博旨	伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	溝田 春夫	石崎 福邦					
コース制改善委員	○河村博旨	伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝	新谷 典彦
	溝田 春夫						

○は委員長を示す

平成5年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	永盛 恒男						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	石井 晋良						
就職部長	新谷 典彦						
電子計算室長	赤松 潤						
国際交流コーディネーター	高月 晋						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	大野 和雄						
教務委員	○永盛恒男	上平 幸好	坂野 学	今井 敏博	若松 裕之	本間恵美子	寺田 隆至
学生委員	○上平幸好	片山 郁夫	三浦 俊和	今井 敏博	西村 淳	本間恵美子	坂田 聡
就職委員	○新谷典彦	松 喜美夫	赤松 潤	西村 淳	今野 昌信	津金 孝行	寺田 隆至
図書委員	○石井晋良	伊藤結城夫	宮崎 正孝	溝田 春夫	片山 郁夫	今野 昌信	
入試委員	○高橋 真	石井 晋良	大江田清志	永盛 恒男	坂野 学	若松 裕之	坂田 聡
電算室運営委員	○赤松 潤	伊藤結城夫	宮崎 正孝	溝田 春夫	三浦 俊和	山本 寛	津金 孝行
国際交流委員	○松 喜美夫	大野 和雄	高月 晋	高橋 真	山本 寛	ブライアン・ダッフ	
公開講座実施委員	○大野和雄	高月 晋	新谷 典彦	大江田清志	永盛 恒男	ブライアン・ダッフ	
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	若松 裕之	西村 淳			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	溝田 春夫	本間恵美子			
内外留学特別委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		

○は委員長を示す

平成6年度（4月8日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	永盛 恒男						
学生部長	溝田 春夫						
図書館長	新谷 典彦						
就職部長	上平 幸好						
電子計算室長	大野 和雄						
国際交流コーディネーター	高月 晋						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	大野 和雄						
教務委員	○永盛恒男	三浦 俊和	今井 敏博	若松 裕之	本間恵美子	西村 淳	津金 孝行
学生委員	○溝田春夫	石井 晋良	松 喜美夫	本間恵美子	寺田 隆至	田中 弘樹	
就職委員	○上平幸好	新谷 典彦	藤嶋 暁	西村 淳	今野 昌信	津金 孝行	寺田 隆至
図書委員	○新谷典彦	伊藤結城夫	大野 和雄	宮崎 正孝	坂野 学	今野 昌信	
入試委員	○高橋 真	石井 晋良	片山 郁夫	三浦 俊和	赤松 潤	永盛 恒男	坂田 聡
電算室運営委員	○大野和雄	高月 晋	宮崎 正孝	藤嶋 暁	坂野 学	ブライアン・ダッフ	
国際交流委員	○松 喜美夫	高月 晋	大江田清志	高橋 真	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	世良 耕一
公開講座実施委員	○大江田清志	河村 博旨	伊藤結城夫	高橋 真	永盛 恒男	世良 耕一	
函大商学論究編集委員	○石井晋良	片山 郁夫	若松 裕之	西村 淳			
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	溝田 春夫	本間恵美子			
内外留学特別委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋			
自己点検評価委員	○赤松 潤	上平 幸好	溝田 春夫	片山 郁夫	今井 敏博	若松 裕之	坂田 聡
学長選出手続改正委員	○赤松 潤	松 喜美夫	三浦 俊和	大江田清志	永盛 恒男	高橋 真	今井 敏博
	石崎 福邦						

○は委員長を示す

平成7年度（4月7日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	永盛 恒男						
学生部長	溝田 春夫						
図書館長	新谷 典彦						
就職部長	上平 幸好						
電子計算室長	大野 和雄						
国際交流コーディネーター	高月 晋						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	大野 和雄						
教務委員	○永盛恒男	三浦 俊和	今井 敏博	若松 裕之	本間恵美子	西村 淳	津金 孝行
学生委員	○溝田春夫	石井 晋良	松 喜美夫	本間恵美子	寺田 隆至	田中 弘樹	佐藤 義博
就職委員	○上平幸好	新谷 典彦	藤嶋 暁	西村 淳	今野 昌信	津金 孝行	寺田 隆至
図書委員	○新谷典彦	伊藤結城夫	大野 和雄	宮崎 正孝	坂野 学	今野 昌信	山田 康夫
入試委員	○高橋 真	石井 晋良	片山 郁夫	三浦 俊和	赤松 潤	永盛 恒男	坂田 聡
電算室運営委員	○大野和雄	高月 晋	宮崎 正孝	藤嶋 暁	坂野 学	ブライアン・ダッフ	佐藤 義博
国際交流委員	○松 喜美夫	高月 晋	大江田清志	高橋 真	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	世良 耕一
公開講座実施委員	○大江田清志	河村 博旨	伊藤結城夫	高橋 真	永盛 恒男	世良 耕一	山田 康夫
函大商学論究編集委員	○片山郁夫	赤松 潤	若松 裕之	西村 淳	寺田 隆至		
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	溝田 春夫	坂野 学	本間恵美子		
内外留学特別委員	○伊藤結城夫	大野 和雄	上平 幸好	高月 晋	宮崎 正孝		
自己点検評価委員	○赤松 潤	上平 幸好	溝田 春夫	片山 郁夫	今井 敏博	若松 裕之	坂田 聡
学長選出手続改正委員	○赤松 潤	松 喜美夫	三浦 俊和	大江田清志	永盛 恒男	高橋 真	今井 敏博
	石崎 福邦						
課外入試検討委員	○河村博旨	上平 幸好	溝田 春夫	松 喜美夫	永盛 恒男	高橋 真	寺田 隆至

○は委員長を示す

平成8年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	高橋 真						
学生部長	新谷 典彦						
図書館長	赤松 潤						
就職部長	大江田清志						
電子計算室長	若松 裕之						
国際交流コーディネーター	高月 晋						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	大野 和雄						
教務委員	○高橋 真	永盛 恒男	西村 淳	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 義博	
学生委員	○新谷典彦	溝田 春夫	松 喜美夫	三浦 俊和	藤嶋 暁	坂野 学	
就職委員	○大江田清志	宮崎 正孝	溝田 春夫	松 喜美夫	若松 裕之	今野 昌信	世良 耕一
図書委員	○赤松 潤	大野 和雄	宮崎 正孝	高月 晋	坂野 学	寺田 隆至	
入試委員	○今井敏博	赤松 潤	高橋 真	坂田 聡	津金 孝行	寺田 隆至	佐藤 義博
電算室運営委員	○若松裕之	上平 幸好	高月 晋	今野 昌信	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	
国際交流委員	○藤嶋 暁	上平 幸好	石井 晋良	三浦 俊和	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	
公開講座実施委員	○西村 淳	新谷 典彦	片山 郁夫	大江田清志	永盛 恒男	世良 耕一	
函大商学論究編集委員	○片山郁夫	赤松 潤	若松 裕之	西村 淳	寺田 隆至		
函大論究編集委員	○伊藤結城夫	上平 幸好	溝田 春夫	坂野 学	本間恵美子		
内外留学特別委員							
自己点検評価委員	○坂田 聡	大野 和雄	石井 晋良	片山 郁夫	今井 敏博	山田 康夫	

○は委員長を示す

平成8年度（9月17日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	高橋 真						
学生部長	新谷 典彦						
図書館長	赤松 潤						
就職部長	大江田清志						
電子計算室長	若松 裕之						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	大野 和雄						
教務委員	○高橋 真	永盛 恒男	西村 淳	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 義博	
学生委員	○新谷典彦	溝田 春夫	松 喜美夫	三浦 俊和	藤嶋 暁	坂野 学	
就職委員	○大江田清志	宮崎 正孝	溝田 春夫	松 喜美夫	若松 裕之	今野 昌信	世良 耕一
図書委員	○赤松 潤	大野 和雄	宮崎 正孝	高月 晋	坂野 学	寺田 隆至	
入試委員	○今井敏博	赤松 潤	高橋 真	坂田 聡	津金 孝行	寺田 隆至	佐藤 義博
電算室運営委員	○若松裕之	上平 幸好	高月 晋	今野 昌信	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	
国際交流委員	○藤嶋 暁	上平 幸好	石井 晋良	三浦 俊和	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	
公開講座実施委員	○西村 淳	新谷 典彦	片山 郁夫	大江田清志	永盛 恒男	世良 耕一	
函大商学論究編集委員	○片山郁夫	赤松 潤	若松 裕之	西村 淳	寺田 隆至		
函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	坂野 学	田中 弘樹			
内外留学特別委員							
自己点検評価委員	○坂田 聡	大野 和雄	石井 晋良	片山 郁夫	今井 敏博	山田 康夫	

○は委員長を示す

平成9年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	高橋 真						
学生部長	新谷 典彦						
図書館長	赤松 潤						
就職部長	大江田清志						
電子計算室長	若松 裕之						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○高橋 真	永盛 恒男	西村 淳	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 義博	
学生委員	○新谷典彦	溝田 春夫	松 喜美夫	三浦 俊和	藤嶋 暁	坂野 学	
就職委員	○大江田清志	宮崎 正孝	溝田 春夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	世良 耕一
図書委員	○赤松 潤	宮崎 正孝	高月 晋	坂野 学	寺田 隆至	スコット・ハーディ	
入試委員	○今井敏博	赤松 潤	高橋 真	坂田 聡	津金 孝行	寺田 隆至	佐藤 義博
電算室運営委員	○若松裕之	上平 幸好	高月 晋	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	スコット・ハーディ	
国際交流委員	○藤嶋 暁	上平 幸好	石井 晋良	三浦 俊和	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	
公開講座実施委員	○西村 淳	新谷 典彦	片山 郁夫	大江田清志	永盛 恒男	世良 耕一	
函大商学論究編集委員	○若松裕之	赤松 潤	西村 淳	寺田 隆至			
函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	坂野 学	田中 弘樹			
内外留学特別委員							
自己点検評価委員	○坂田 聡	石井 晋良	片山 郁夫	今井 敏博	田部井英夫	山田 康夫	

○は委員長を示す

平成10年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	高橋 真						
学生部長	新谷 典彦						
図書館長	赤松 潤						
就職部長	大江田清志						
電子計算室長	若松 裕之						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○高橋 真	永盛 恒男	西村 淳	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 元治	田中 浩司
学生委員	○新谷典彦	溝田 春夫	松 喜美夫	三浦 俊和	藤嶋 暁	坂野 学	会沢 信彦
就職委員	○大江田清志	宮崎 正孝	溝田 春夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	世良 耕一
図書委員	○赤松 潤	宮崎 正孝	高月 晋	坂野 学	寺田 隆至	スコット・ハーディ	日野 隆生
入試委員	○今井敏博	赤松 潤	高橋 真	津金 孝行	寺田 隆至	佐藤 元治	日野 隆生
電算室運営委員	○若松裕之	上平 幸好	高月 晋	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	スコット・ハーディ	佐藤 義博
国際交流委員	○藤嶋 暁	上平 幸好	石井 晋良	三浦 俊和	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	佐藤 義博
公開講座実施委員	○西村 淳	新谷 典彦	片山 郁夫	大江田清志	永盛 恒男	世良 耕一	
函大商学論究編集委員	○若松裕之	赤松 潤	西村 淳	寺田 隆至			
函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	坂野 学	田中 弘樹			
内外留学特別委員							
自己点検評価委員	石井 晋良	片山 郁夫	今井 敏博	田部井英夫	山田 康夫	田中 浩司	

○は委員長を示す

平成10年度（※は4月21日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	高橋 真						
学生部長	新谷 典彦						
図書館長	赤松 潤						
就職部長	大江田清志						
電子計算室長	若松 裕之						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○高橋 真	永盛 恒男	西村 淳	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 元治	田中 浩司
学生委員	○新谷典彦	溝田 春夫	松 喜美夫	三浦 俊和	藤嶋 暁	坂野 学	会沢 信彦
就職委員	○大江田清志	宮崎 正孝	溝田 春夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	世良 耕一
図書委員	○赤松 潤	宮崎 正孝	高月 晋	坂野 学	寺田 隆至	スコット・ハーディ	日野 隆生
入試委員	○今井敏博	赤松 潤	高橋 真	津金 孝行	寺田 隆至	佐藤 元治	日野 隆生
電算室運営委員	○若松裕之	上平 幸好	高月 晋	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	スコット・ハーディ	佐藤 義博
国際交流委員	○藤嶋 暁	上平 幸好	石井 晋良	三浦 俊和	ブライアン・ダッフ	田中 弘樹	佐藤 義博
公開講座実施委員	○西村 淳	新谷 典彦	片山 郁夫	大江田清志	永盛 恒男	世良 耕一	
* 函大商学論究編集委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	世良 耕一	佐藤 元治			
* 函大論究編集委員	○上平幸好	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫			
* 内外留学特別委員	○上平幸好	高月 晋	宮崎 正孝	石井 晋良	田部井英夫		
自己点検評価委員	○片山郁夫	石井 晋良	今井 敏博	田部井英夫	山田 康夫	田中 浩司	

○は委員長を示す

平成11年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	高月 晋						
就職部長	大江田清志						
電子計算室長	津金 孝行						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	赤松 潤	松 喜美夫	今井 敏博	田中 弘樹	田中 浩司	会沢 信彦
学生委員	○上平幸好	宮崎 正孝	三浦 俊和	高橋 真	西村 淳	坂野 学	山田 康夫
就職委員	○大江田清志	溝田 春夫	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	寺田 隆至	佐藤 元治
図書委員	○高月 晋	上平 幸好	藤嶋 暁	津金 孝行	寺田 隆至	世良 耕一	
入試委員	○今井敏博	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	山田 康夫
	日野 隆生						
電算室運営委員	○津金孝行	溝田 春夫	大江田清志	ブライアン・ダッフ	スコット・ハーディ	佐藤 義博	
国際交流委員	○高橋 真	宮崎 正孝	石井 晋良	ブライアン・ダッフ	世良 耕一	スコット・ハーディ	
公開講座実施委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	田中 弘樹	日野 隆生	佐藤 元治	田中 浩司	
函大商学論究編集委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	世良 耕一	佐藤 元治			
函大論究編集委員	○上平幸好	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫			
内外留学特別委員	○新谷典彦	高月 晋	赤松 潤	永盛 恒男	佐藤 義博		
自己点検評価委員	○片山郁夫	三浦 俊和	坂野 学	佐藤 元治	田中 浩司		

図書館長は4/10付 ○は委員長を示す

平成11年度（※は4月10日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	上平 幸好						
* 図書館長	高月 晋						
就職部長	大江田清志						
* 電子計算室長	津金 孝行						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	赤松 潤	松 喜美夫	今井 敏博	田中 弘樹	田中 浩司	会沢 信彦
学生委員	○上平幸好	宮崎 正孝	三浦 俊和	高橋 真	西村 淳	坂野 学	山田 康夫
就職委員	○大江田清志	溝田 春夫	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	寺田 隆至	佐藤 元治
図書委員	○高月 晋	上平 幸好	藤嶋 暁	津金 孝行	寺田 隆至	世良 耕一	
入試委員	○今井敏博	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	山田 康夫
	日野 隆生						
電算室運営委員	○津金孝行	溝田 春夫	大江田清志	ブライアン・ダッフ	スコット・ハーディ	佐藤 義博	
国際交流委員	○高橋 真	宮崎 正孝	石井 晋良	ブライアン・ダッフ	世良 耕一	スコット・ハーディ	
公開講座実施委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	田中 弘樹	日野 隆生	佐藤 元治	田中 浩司	
函大商学論究編集委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	世良 耕一	佐藤 元治			
函大論究編集委員	○上平幸好	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫			
内外留学特別委員	○新谷典彦	高月 晋	赤松 潤	永盛 恒男	佐藤 義博		
自己点検評価委員	○片山郁夫	三浦 俊和	坂野 学	佐藤 元治	田中 浩司		

○は委員長を示す

平成12年度（4月1日付、*は4月10日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	上平 幸好						
*図書館長	高月 晋						
就職部長	大江田清志						
*電子計算室長	津金 孝行						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	赤松 潤	松 喜美夫	今井 敏博	田中 弘樹	田中 浩司	会沢 信彦
学生委員	○上平幸好	宮崎 正孝	三浦 俊和	高橋 真	西村 淳	坂野 学	山田 康夫
就職委員	○大江田清志	溝田 春夫	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	寺田 隆至	佐藤 元治
図書委員	○高月 晋	上平 幸好	藤嶋 暁	津金 孝行	寺田 隆至	世良 耕一	
入試委員	○今井敏博	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	山田 康夫
	日野 隆生						
電算室運営委員	○津金孝行	溝田 春夫	大江田清志	ブライアン・ダッフ	スコット・ハーディ	佐藤 義博	
国際交流委員	○高橋 真	宮崎 正孝	石井 晋良	ブライアン・ダッフ	世良 耕一	スコット・ハーディ	
公開講座実施委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	田中 弘樹	日野 隆生	会沢 信彦		
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳	ブライアン・ダッフ			
函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	田中 弘樹	田中 浩司			
内外留学特別委員	○新谷典彦	高月 晋	赤松 潤	永盛 恒男	佐藤 義博		
自己点検評価委員	○片山郁夫	三浦 俊和	坂野 学	佐藤 元治	田中 浩司		

○は委員長を示す

平成12年度（☆は4月21日付、*は10月21日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	上平 幸好						
*図書館長	高月 晋						
就職部長	大江田清志						
*電子計算室長	津金 孝行						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	赤松 潤	松 喜美夫	今井 敏博	田中 弘樹	田中 浩司	会沢 信彦
学生委員	○上平幸好	宮崎 正孝	三浦 俊和	高橋 真	西村 淳	坂野 学	山田 康夫
就職委員	○大江田清志	溝田 春夫	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	寺田 隆至	佐藤 元治
図書委員	○高月 晋	上平 幸好	藤嶋 暁	津金 孝行	寺田 隆至	世良 耕一	
入試委員	○今井敏博	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	山田 康夫
	日野 隆生						
電算室運営委員	○津金孝行	溝田 春夫	大江田清志	ブライアン・ダッフ	スコット・ハーディ	佐藤 義博	
国際交流委員	○高橋 真	宮崎 正孝	石井 晋良	ブライアン・ダッフ	世良 耕一	スコット・ハーディ	
公開講座実施委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	田中 弘樹	日野 隆生	会沢 信彦		
☆函大商学論究編集委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	世良 耕一	佐藤 元治			
*函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	田中 弘樹	田中 浩司			
内外留学特別委員	○新谷典彦	高月 晋	赤松 潤	永盛 恒男	佐藤 義博		
自己点検評価委員	○片山郁夫	三浦 俊和	坂野 学	佐藤 元治	田中 浩司		

○は委員長を示す

平成12年度（☆は11月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	高月 晋						
☆就職部長	藤嶋 暁						
電子計算室長	津金 孝行						
☆入試部長	今井 敏博						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹						
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	赤松 潤	松 喜美夫	今井 敏博	田中 弘樹	田中 浩司	会沢 信彦
学生委員	○上平幸好	宮崎 正孝	三浦 俊和	高橋 真	西村 淳	坂野 学	山田 康夫
就職委員	○藤嶋 暁	溝田 春夫	石井 晋良	大江田清志	永盛 恒男	西村 淳	寺田 隆至
	佐藤 元治						
図書委員	○高月 晋	上平 幸好	藤嶋 暁	津金 孝行	寺田 隆至	世良 耕一	
入試委員	○今井敏博	新谷 典彦	片山 郁夫	松 喜美夫	若松 裕之	田部井英夫	山田 康夫
	日野 隆生						
電算室運営委員	○津金孝行	溝田 春夫	大江田清志	ブライアン・ダッフ	スコット・ハーディ	佐藤 義博	
国際交流委員	○高橋 真	宮崎 正孝	石井 晋良	ブライアン・ダッフ	世良 耕一	スコット・ハーディ	
公開講座実施委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	田中 弘樹	日野 隆生	会沢 信彦		
☆函大商学論究編集委員	○田部井英夫	藤嶋 暁	世良 耕一	佐藤 元治			
函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	田中 弘樹	田中 浩司			
内外留学特別委員	○新谷典彦	高月 晋	赤松 潤	永盛 恒男	佐藤 義博		
自己点検評価委員	○片山郁夫	三浦 俊和	坂野 学	佐藤 元治	田中 浩司		

○は委員長を示す

平成13年度（4月1日付、☆は5月15日付、＊は10月20日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	片山 郁夫						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	高月 晋						
就職部長	溝田 春夫						
電子計算室長	石井 晋良						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹	ブライアン・ダッフ	スコット・ハーディ	坂野 学			
産業開発研究所長	石井 晋良						
経営研究所長							
教務委員	○片山郁夫	若松 裕之	藤嶋 暁	田中 弘樹	世良 耕一	寺田 隆至	
学生委員	○上平幸好	宮崎 正孝	永盛 恒男	西村 淳	田部井英夫	スコット・ハーディ	
就職委員	○溝田春夫	松 喜美夫	藤嶋 暁	西村 淳	今井 敏博	日野 隆生	
図書委員	○高月 晋	赤松 潤	三浦 俊和	今井 敏博	坂野 学	佐藤 元治	
入試委員	○松 喜美夫	上平 幸好	溝田 春夫	新谷 典彦	片山 郁夫	若松 裕之	
電算室運営委員	○石井晋良	高橋 真	津金 孝行	三浦 俊和	田中 浩司	佐藤 元治	
国際交流委員	○高橋 真	高月 晋	田中 弘樹	坂野 学	ブライアン・ダッフ	会沢 信彦	
公開講座実施委員	○永盛恒男	田部井英夫	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 義博	ブライアン・ダッフ	
☆函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳	ブライアン・ダッフ			
＊函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	田中 弘樹	田中 浩司			
内外留学特別委員	○宮崎正孝	赤松 潤	寺田 隆至	スコット・ハーディ	佐藤 義博	日野 隆生	
自己点検評価委員	○新谷典彦	石井 晋良	山田 康夫	田中 浩司	世良 耕一	会沢 信彦	

○は委員長を示す

平成14年度（4月1日付、＊は4月25日付、☆は5月15日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	片山 郁夫						
学生部長	上平 幸好						
図書館長	高月 晋						
就職部長	溝田 春夫						
電子計算室長	石井 晋良						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹	スコット・ハーディ	坂野 学				
＊産業開発研究所長4/25	河村 博旨						
経営研究所長	河村 博旨						
教務委員	○片山郁夫	若松 裕之	藤嶋 暁	田中 弘樹	世良 耕一	寺田 隆至	
学生委員	○上平幸好	永盛 恒男	西村 淳	田部井英夫	スコット・ハーディ		
就職委員	○溝田春夫	松 喜美夫	藤嶋 暁	西村 淳	今井 敏博	日野 隆生	
図書委員	○高月 晋	赤松 潤	三浦 俊和	今井 敏博	坂野 学	佐藤 元治	
入試委員	○松 喜美夫	上平 幸好	溝田 春夫	新谷 典彦	片山 郁夫	若松 裕之	
電算室運営委員	○石井晋良	高橋 真	津金 孝行	三浦 俊和	田中 浩司	佐藤 元治	
国際交流委員	○高橋 真	高月 晋	田中 弘樹	坂野 学	ドナルド・ミラー	会沢 信彦	
公開講座実施委員	○永盛恒男	田部井英夫	津金 孝行	山田 康夫	佐藤 義博	ドナルド・ミラー	
☆函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳	ドナルド・ミラー			
函大論究編集委員	○上平幸好	三浦 俊和	坂野 学	佐藤 義博			
内外留学特別委員	○赤松 潤	寺田 隆至	スコット・ハーディ	佐藤 義博	日野 隆生		
自己点検評価委員	○新谷典彦	石井 晋良	山田 康夫	田中 浩司	世良 耕一	会沢 信彦	

○は委員長を示す

平成15年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	永盛 恒男						
学生部長	高月 晋						
図書館長	溝田 春夫						
就職部長	藤嶋 暁						
電子計算室長	若松 裕之						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流コーディネーター	高橋 真	スコット・ハーディ	坂野 学	ドナルド・ミラー			
産業開発研究所長	河村 博旨						
経営研究所長	河村 博旨						
教務委員	○永盛恒男	今井 敏博	田部井英夫	日野 隆生	会沢 信彦		
学生委員	○高月 晋	片山 郁夫	松 喜美夫	三浦 俊和	寺田 隆至		
就職委員	○藤嶋 暁	石井 晋良	溝田 春夫	西村 淳	今井 敏博	田中 弘樹	
図書委員	○溝田春夫	高月 晋	藤嶋 暁	三浦 俊和	田中 弘樹		
入試委員	○松 喜美夫	若松 裕之	永盛 恒男	高橋 真	津金 孝行	ドナルド・ミラー	
電算室運営委員	○若松裕之	西村 淳	津金 孝行	佐藤 義博	スコット・ハーディ		
国際交流委員	○高橋 真	石井 晋良	坂野 学	スコット・ハーディ	ドナルド・ミラー		
公開講座実施委員	○田部井英夫	新谷 典彦	寺田 隆至	田中 浩司	会沢 信彦		
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳				
函大論究編集委員	○三浦俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博			
内外留学特別委員	○新谷典彦	坂野 学	山田 康夫	田中 浩司	佐藤 元治		
自己点検評価委員	○片山郁夫	山田 康夫	佐藤 義博	佐藤 元治	日野 隆生		

○は委員長を示す

平成16年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	永盛 恒男						
学生部長	三浦 俊和						
図書館長	溝田 春夫						
就職部長	藤嶋 暁						
電子計算室長	若松 裕之						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流コーディネーター	高橋 真	スコット・ハーディ	坂野 学	ドナルド・ミラー			
産業開発研究所長	新谷 典彦						
経営研究所長							
教務委員	○永盛恒男	高橋 真	今井 敏博	田部井英夫	日野 隆生	会沢 信彦	
学生委員	○三浦俊和	片山 郁夫	松 喜美夫	寺田 隆至	米田		
就職委員	○藤嶋 暁	石井 晋良	溝田 春夫	今井 敏博	西村 淳	田中 弘樹	
図書委員	○溝田春夫	藤嶋 暁	三浦 俊和	田中 弘樹			
入試委員	○松 喜美夫	若松 裕之	永盛 恒男	高橋 真	津金 孝行	ドナルド・ミラー	
電算室運営委員	○若松裕之	西村 淳	津金 孝行	佐藤 義博	スコット・ハーディ		
国際交流委員	○高橋 真	石井 晋良	坂野 学	スコット・ハーディ	ドナルド・ミラー		
公開講座実施委員	○田部井英夫	新谷 典彦	寺田 隆至	田中 浩司	米田		
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳				
函大論究編集委員	○三浦俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博			
内外留学特別委員	○新谷典彦	坂野 学	山田 康夫	田中 浩司	佐藤 元治		
自己点検評価委員	○片山郁夫	山田 康夫	佐藤 義博	佐藤 元治	日野 隆生		

○は委員長を示す

平成17年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	永盛 恒男						
就職部長	溝田 春夫						
電子計算室長	津金 孝行						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流部長	高橋 真						
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	溝田 春夫	藤嶋 暁	松 喜美夫	山田 康夫	日野 隆生	
学生委員	○片山郁夫	三浦 俊和	西村 淳	寺田 隆至	大橋 美幸	金山 健一	
就職委員	○溝田春夫	新谷 典彦	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	田中 浩司	
図書委員	○永盛恒男	今井 敏博	田部井英夫	佐藤 義博	大橋 美幸	佐藤 元治	
入試委員	○松 喜美夫	若松 裕之	高橋 真	山田 康夫	田中 弘樹	ドナルド・ミラー	
電算委員	○津金孝行	新谷 典彦	石井 晋良	片山 郁夫	佐藤 義博	日野 隆生	
国際交流委員	○高橋 真	三浦 俊和	坂野 学	スコット・ハーディ	ドナルド・ミラー	韓 文熙	
公開講座実施委員	○今井敏博	津金 孝行	田中 浩司	スコット・ハーディ	金山 健一	韓 文熙	
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳				
函大論究編集委員	○三浦俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博			
内外留学特別委員	○寺田隆至	藤嶋 暁	田部井英夫	坂野 学	田中 弘樹	佐藤 元治	
自己点検評価委員	(法人)	石崎 福邦	下野				
	○小笠原 愈	若松 裕之	溝田 春夫	片山 郁夫	藤嶋 暁	三浦 俊和	新関喜美男
	黒澤 幹生	干場 勝	岡嶋	國安 秀之	鈴木 克尚		

○は委員長を示す

平成18年度（6月15日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	永盛 恒男						
就職部長	溝田 春夫						
電子計算室長	津金 孝行						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流コーディネーター	高橋 真	ドナルド・ミラー	スコット・ハーディ	坂野 学	韓 文熙		
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教務委員	○若松裕之	溝田 春夫	藤嶋 暁	松 喜美夫	山田 康夫	日野 隆生	
学生委員	○片山郁夫	三浦 俊和	西村 淳	寺田 隆至	大橋 美幸	金山 健一	
就職委員	○溝田春夫	新谷 典彦	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	田中 浩司	
図書委員	○永盛恒男	今井 敏博	田部井英夫	佐藤 義博	大橋 美幸	佐藤 元治	
入試委員	○松 喜美夫	若松 裕之	高橋 真	山田 康夫	田中 弘樹	ドナルド・ミラー	
電算室運営委員	○津金孝行	新谷 典彦	石井 晋良	片山 郁夫	佐藤 義博	日野 隆生	
国際交流委員	○高橋 真	三浦 俊和	坂野 学	スコット・ハーディ	ドナルド・ミラー	韓 文熙	
公開講座実施委員	○今井敏博	津金 孝行	田中 浩司	スコット・ハーディ	金山 健一	韓 文熙	
函大商学論究編集委員	○新谷典彦	石井 晋良	西村 淳	韓 文熙			
函大論究編集委員	○溝田春夫	松 喜美夫	田中 弘樹	田中 浩司	大橋 美幸		
内外留学特別委員	○寺田隆至	藤嶋 暁	田部井英夫	坂野 学	田中 弘樹	佐藤 元治	
自己点検評価委員	(法人)	石崎 福邦	新関喜美男	野又 淳司			
	○小笠原 愈	若松 裕之	溝田 春夫	片山 郁夫	藤嶋 暁	今井 敏博	三浦 俊和
	黒澤 幹生	岡嶋	國安 秀之	鈴木			

○は委員長を示す

平成19年度（11月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	永盛 恒男						
就職部長	新谷 典彦						
電子計算室長	津金 孝行						
入試部長	松 喜美夫						
国際交流部長	三浦 俊和						
国際交流コーディネーター	三浦 俊和	スコット・ハーディ	坂野 学	ドナルド・ミラー	韓 文熙		
産業開発研究所長	新谷 典彦						
経営研究所長	溝田 春夫						
教職教育センター長	佐藤 義博						
キャリア開発センター長	新谷 典彦						
産学官連携研究センター長	溝田 春夫						
教務委員	○若松裕之	溝田 春夫	松 喜美夫	山田 康夫	寺田 隆至	日野 隆生	佐藤 元治
教養教育会議	○溝田春夫	若松 裕之	三浦 俊和	田中 弘樹	佐藤 義博	佐藤 元治	金山 健一
学生委員	○片山郁夫	三浦 俊和	西村 淳	大橋 美幸	金山 健一	松下 元則	
就職委員	○新谷典彦	溝田 春夫	石井 晋良	永盛 恒男	西村 淳	田中 浩司	
図書委員	○永盛恒男	今井 敏博	田部井英夫	佐藤 義博	大橋 美幸		
入試委員	○松 喜美夫	溝田 春夫	山田 康夫	田中 弘樹	ドナルド・ミラー	金山 健一	
電算室運営委員	○津金孝行	新谷 典彦	石井 晋良	片山 郁夫	佐藤 義博	日野 隆生	
国際交流委員	○三浦俊和	坂野 学	スコット・ハーディ	ドナルド・ミラー	韓 文熙	松下 元則	
公開講座実施委員	○今井敏博	津金 孝行	田中 浩司	スコット・ハーディ	韓 文熙		
函大商学論究編集委員	○西村 淳	石井 晋良	韓 文熙				

函大論究編集委員	○三浦俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博	金山 健一		
内外留学特別委員	○寺田隆至	田部井英夫	坂野 学	田中 浩司	佐藤 元治		
自己点検評価委員	○小笠原 愈	溝田 春夫	若松 裕之	片山 郁夫	今井 敏博	三浦 俊和	黒澤 幹生
	干場 勝	大山 紀明	岡嶋 雅昭	國安 秀之	石崎 福邦	新関喜美男	野又 淳司
F D 委員	○若松裕之	溝田 春夫	片山 郁夫	山田 康夫	寺田 隆至	金山 健一	

○は委員長を示す

平成20年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	永盛 恒男						
就職部長	石井 晋良						
入試部長	今井 敏博						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹	スコット・ハーディ	坂野 学	ドナルド・ミラー	韓 文熙		
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教職教育センター長	佐藤 義博						
キャリア開発センター長	石井 晋良						
産学官連携研究センター長	溝田 春夫						
教務委員（F D 委員）	○若松裕之	今井 敏博	坂野 学	山田 康夫	寺田 隆至	佐藤 元治	
教養教育会議	○若松裕之	片山 郁夫	田中 弘樹	寺田 隆至	金山 健一		
学生委員	○片山郁夫	石井 晋良	三浦 俊和	佐藤 義博	大橋 美幸	松下 元則	
就職委員	○石井晋良	田部井英夫	松 喜美夫	西村 淳	田中 浩司	佐藤 元治	
図書委員	○永盛恒男	西村 淳	津金 孝行	佐藤 義博	松下 元則		
入試委員	○今井敏博	松 喜美夫	津金 孝行	山田 康夫	ドナルド・ミラー	金山 健一	
電算室運営委員	○津金孝行	新谷 典彦	石井 晋良	片山 郁夫	佐藤 義博	日野 隆生	
国際交流委員 （内外留学特別委員）	○田中弘樹	三浦 俊和	坂野 学	スコット・ハーディ	ドナルド・ミラー	韓 文熙	
公開講座実施委員	○田部井英夫	永盛 恒男	田中 浩司	大橋 美幸	スコット・ハーディ	韓 文熙	
函大商学論究編集委員	○西村 淳	石井 晋良	韓 文熙				
函大論究編集委員	○三浦俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博	金山 健一		
自己点検評価委員	○溝田春夫	石井 晋良	若松 裕之	片山 郁夫	永盛 恒男	今井 敏博	三浦 俊和
	黒澤 幹生	干場 勝	小林 裕一	國安 秀之	堀田 寿生	石崎 福邦	新関喜美男
	野又 淳司						
ハラスメント対策委員	○溝田春夫	黒澤 幹生	片山 郁夫	若松 裕之			
防火対策委員	○溝田春夫	黒澤 幹生	干場 勝	小林 裕一	小澤 叡	國安 秀之	堀田 寿生

○は委員長を示す

平成21年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	永盛 恒男						
就職部長	石井 晋良						
入試部長	今井 敏博						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹	坂野 学	ドナルド・ミラー				
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教職教育センター長	佐藤 義博						
キャリア開発センター長	石井 晋良						
産学官連携研究センター長	溝田 春夫						
教務委員（F D 委員）	○若松裕之	田中 弘樹	坂野 学	寺田 隆至	松下 元則		

教養教育会議	○若松裕之	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博		
学生委員	○片山郁夫	石井 晋良	今井 敏博	三浦 俊和	大橋 美幸		
就職委員	○石井晋良	永盛 恒男	田部井英夫	西村 淳	寺田 隆至		
図書委員	○永盛恒男	片山 郁夫	佐藤 義博	佐藤 元治	隅田 孝		
入試委員	○今井敏博	松 喜美夫	津金 孝行	山田 康夫	松下 元則		
国際交流委員 (内外留学特別委員)	○田中弘樹	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫	ドナルド・ミラー		
公開講座実施委員	○田部井英夫	佐藤 義博	田中 浩司	大橋 美幸	金山 健一		
函大商学論究編集委員	○西村 淳	永盛 恒男	津金 孝行				
函大論究編集委員	○田中浩司	田中 弘樹	松 喜美夫	大橋 美幸			
自己点検評価委員	○溝田春夫	石井 晋良	若松 裕之	片山 郁夫	永盛 恒男	今井 敏博	黒澤 幹生
	小林 裕一	國安 秀之	堀田 寿生	石崎 福邦	新関喜美男	野又 淳司	
ハラスメント対策委員	○溝田春夫	黒澤 幹生	片山 郁夫	若松 裕之			
防火対策委員	○溝田春夫	黒澤 幹生	干場 勝	小林 裕一	小澤 叡	國安 秀之	堀田 寿生

○は委員長を示す

平成22年度（5月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	永盛 恒男						
就職部長	石井 晋良						
入試部長	今井 敏博						
国際交流コーディネーター	田中 弘樹	坂野 学	ドナルド・ミラー				
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教職教育センター長	佐藤 義博						
キャリア開発センター長	石井 晋良						
産学官連携研究センター長	溝田 春夫						
教務委員（FD委員）	○若松裕之	田中 弘樹	坂野 学	寺田 隆至	松下 元則		
教養教育会議	○若松裕之	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫	佐藤 義博		
学生委員	○片山郁夫	石井 晋良	今井 敏博	三浦 俊和	大橋 美幸		
就職委員	○石井晋良	永盛 恒男	田部井英夫	西村 淳	寺田 隆至		
図書委員	○永盛恒男	片山 郁夫	佐藤 義博	佐藤 元治	隅田 孝		
入試委員	○今井敏博	松 喜美夫	津金 孝行	山田 康夫	松下 元則		
国際交流委員 (内外留学特別委員)	○田中弘樹	三浦 俊和	坂野 学	山田 康夫	ドナルド・ミラー		
公開講座実施委員	○田部井英夫	佐藤 義博	田中 浩司	大橋 美幸	金山 健一		
函大商学論究編集委員	○津金孝行	片山 郁夫	永盛 恒男	隅田 孝			
函大論究編集委員	○坂野 学	三浦 俊和	山田 康夫	佐藤 義博	金山 健一		
自己点検評価委員	○溝田春夫	石井 晋良	若松 裕之	片山 郁夫	永盛 恒男	今井 敏博	黒澤 幹生
	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	網島 由人	野又 淳司		
ハラスメント対策委員	○溝田春夫	黒澤 幹生	片山 郁夫	若松 裕之			
防火対策委員	○溝田春夫	黒澤 幹生	小澤 叡	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	網島 由人

○は委員長を示す

平成23年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	今井 敏博						
就職部長	永盛 恒男						
入試部長	田中 浩司						

国際交流コーディネーター	坂野 学	ドナルド・ミラー					
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教職教育センター長	佐藤 義博						
キャリア開発センター長	永盛 恒男						
産学官連携研究センター長	溝田 春夫						
教務委員（FD委員）	○若松裕之	佐藤 義博	寺田 隆至	佐藤 元治	松下 元則		
教養教育会議	○若松裕之	佐藤 義博	坂野 学	山田 康夫	大橋 美幸		
学生委員	○片山郁夫	西村 淳	坂野 学	三浦 俊和	大橋 美幸		
就職委員	○永盛恒男	津金 孝行	松下 元則	西村 淳	寺田 隆至		
図書委員	○今井敏博	松 喜美夫	大橋 美幸	佐藤 元治	隅田 孝		
入試委員	○田中浩司	松 喜美夫	津金 孝行	山田 康夫	隅田 孝		
国際交流委員 （内外留学特別委員）	○坂野 学	田部井英夫	佐藤 元治	山田 康夫	ドナルド・ミラー		
公開講座実施委員	○佐藤義博	田部井英夫	三浦 俊和	大橋 美幸	ドナルド・ミラー		
函大商学論文編集委員	○津金孝行	永盛 恒男	片山 郁夫	隅田 孝			
函大論文編集委員	○坂野 学	三浦 俊和	山田 康夫	佐藤 義博			
自己点検評価委員	○溝田春夫	若松 裕之	片山 郁夫	永盛 恒男	今井 敏博	田中 浩司	黒澤 幹生
	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	網島 由人	阪内 俊喜	野又 淳司	堀内 淳一
ハラスメント対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	片山 郁夫	若松 裕之			
防火対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	網島 由人	

○は委員長を示す

平成24年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	若松 裕之						
学生部長	片山 郁夫						
図書館長	今井 敏博						
就職部長	永盛 恒男						
入試部長	田中 浩司						
国際交流コーディネーター	坂野 学	ドナルド・ミラー					
産業開発研究所長							
経営研究所長							
教職教育センター長	佐藤 義博						
キャリア開発センター長	永盛 恒男						
産学官連携研究センター長							
教務委員（FD委員）	○若松裕之	佐藤 義博	寺田 隆至	佐藤 元治	壁谷 一広		
教養教育会議	○若松裕之	佐藤 義博	坂野 学	山田 康夫	大橋 美幸		
学生委員	○片山郁夫	三浦 俊和	西村 淳	坂野 学	大橋 美幸		
就職委員	○永盛恒男	寺田 隆至	西村 淳	津金 孝行	佐藤 元治		
図書委員	○今井敏博	松 喜美夫	大橋 美幸	隅田 孝			
入試委員	○田中浩司	松 喜美夫	津金 孝行	山田 康夫	隅田 孝		
国際交流委員 （内外留学特別委員）	○坂野 学	山田 康夫	ドナルド・ミラー	壁谷 一広	中井 郷之		
公開講座実施委員	○佐藤義博	三浦 俊和	大橋 美幸	ドナルド・ミラー	中井 郷之		
函大商学論文編集委員	○津金孝行	片山 郁夫	永盛 恒男	隅田 孝			
函大論文編集委員	○坂野 学	三浦 俊和	山田 康夫	佐藤 義博			
自己点検評価委員	○溝田春夫	野又 淳司	片山 郁夫	若松 裕之	永盛 恒男	今井 敏博	田中 浩司
	黒澤 幹生	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	網島 由人	阪内 俊喜	堀内 淳一
ハラスメント対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	片山 郁夫	若松 裕之			
防火対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	網島 由人	

○は委員長を示す

平成25年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	寺田 隆至						
学生部長	三浦 俊和						
図書館長	坂野 学						
就職部長	永盛 恒男						
入試部長	田中 浩司						
国際交流コーディネーター	山田 康夫	壁谷 一広	坂野 学				
函館地域総合研究所長	若松 裕之						
教務委員（FD委員）	○寺田隆至	片山 郁夫	大橋 美幸	佐藤 元治	壁谷 一広		
学生委員	○三浦俊和	若松 裕之	津金 孝行	山田 康夫	中井 郷之		
就職委員	○永盛恒男	今井 敏博	松 喜美夫	西村 淳	佐藤 元治		
図書委員	○坂野 学	若松 裕之	佐藤 義博	田中 浩司	隅田 孝		
入試委員	○田中浩司	松 喜美夫	西村 淳	津金 孝行	隅田 孝		
国際交流委員 （内外留学特別委員）	○山田康夫	片山 郁夫	佐藤 義博	坂野 学	壁谷 一広		
公開講座実施委員	○大橋美幸	永盛 恒男	今井 敏博	三浦 俊和	中井 郷之		
函館大学地域総合研究所	○若松裕之	西村 淳	津金 孝行	大橋 美幸	中井 郷之		
函大商学論究編集委員							
函大論究編集委員							
自己点検評価委員	○溝田春夫	野又 淳司	片山 郁夫	若松 裕之	永盛 恒男	田中 浩司	寺田 隆至
	三浦 俊和	坂野 学	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	綱島 由人	阪内 俊喜
	堀内 淳一	黒澤 幹生					
個人情報管理委員	○溝田春夫	野又 淳司	永盛 恒男	田中 浩司	寺田 隆至	三浦 俊和	
ハラスメント対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	片山 郁夫	若松 裕之			
防火対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	綱島 由人	

○は委員長を示す

平成26年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長	寺田 隆至						
学生部長	三浦 俊和						
図書館長	坂野 学						
就職部長	永盛 恒男						
入試部長	田中 浩司						
国際交流コーディネーター	○山田康夫	壁谷 一広	坂野 学				
函館大学地域総合研究所長	若松 裕之						
教務委員（FD委員）	○寺田隆至	片山 郁夫	大橋 美幸	佐藤 元治	壁谷 一広	堀田 寿生	綱島 由人
学生委員	○三浦俊和	若松 裕之	津金 孝行	山田 康夫			
就職委員	○永盛恒男	今井 敏博	松 喜美夫	西村 淳	佐藤 元治		
図書委員	○坂野 学	若松 裕之	田中 浩司	隅田 孝			
入試委員	○田中浩司	松 喜美夫	西村 淳	津金 孝行	隅田 孝		
国際交流委員 （内外留学特別委員）	○山田康夫	片山 郁夫	坂野 学	壁谷 一広			
公開講座実施委員	○大橋美幸	永盛 恒男	今井 敏博	三浦 俊和			
函大商学論究編集委員							
函大論究編集委員							
函館大学地域総合研究所	○若松裕之	西村 淳	津金 孝行	大橋 美幸			
自己点検評価委員	○溝田春夫	野又 淳司	片山 郁夫	若松 裕之	永盛 恒男	田中 浩司	寺田 隆至
	三浦 俊和	坂野 学	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	綱島 由人	阪内 俊喜
	堀内 淳一	黒澤 幹生					
個人情報管理委員	○溝田春夫	野又 淳司	堀田 寿生	永盛 恒男	田中 浩司	寺田 隆至	三浦 俊和

ハラスメント対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	堀田 寿生	三浦 俊和	寺田 隆至		
防火対策委員	○溝田春夫	野又 淳司	堀田 寿生	高橋 勝美	吉田 孝夫	綱島 由人	

○は委員長を示す

平成27年度（4月1日付）部長と委員長同一委嘱

教務部長(図書館長兼務)	寺田 隆至						
学生部長	田中 浩司						
図書館長	寺田 隆至						
就職部長	今井 敏博						
入試部長(学生部長兼務)	田中 浩司						
函館大学地域総合研究所長	若松 裕之						
教務委員	○壁谷一広	西村 淳	三浦 俊和	藤川 隆	堀田 寿生	綱島 由人	
FD委員	○永盛恒男	壁谷 一広	坂野 学	大橋 美幸	勝山 敬太	竹山 久芳	木村 仁
	伊藤 拓也						
IR委員	○片山郁夫	佐藤 元治	山田 康夫	藤川 隆	角田美知江	長沼 孝征	小本真由美
	川原真理子						
学生委員	○坂野 学	津金 孝行	山田 康夫	片山 郁夫	角田美知江		
就職委員	○佐藤元治	大橋 美幸	永盛 恒男	井上 祐輔			
図書委員	○西村 淳	壁谷 一広	三浦 俊和	藤川 隆			
入試委員	○津金孝行	坂野 学	山田 康夫	片山 郁夫	角田美知江		
国際交流委員	○山田康夫	津金 孝行	坂野 学	片山 郁夫	角田美知江		
地域連携委員	○大橋美幸	佐藤 元治	永盛 恒男	井上 祐輔			
函大商学論究編集委員	○西村 淳	壁谷 一広	三浦 俊和	藤川 隆			
函大論究編集委員	○西村 淳	壁谷 一広	三浦 俊和	藤川 隆			
函館大学地域総合研究所	○若松裕之	西村 淳	津金 孝行	大橋 美幸			
自己点検評価委員	○野又淳司	若松 裕之	堀田 寿生	田中 浩司	寺田 隆至	今井 敏博	高橋 勝美
	吉田 孝夫	綱島 由人					
個人情報管理委員	○野又淳司	若松 裕之	堀田 寿生	田中 浩司	寺田 隆至	今井 敏博	
ハラスメント対策委員	○野又淳司	若松 裕之	堀田 寿生	田中 浩司	寺田 隆至		
防火対策委員	○堀田寿生	若松 裕之	高橋 勝美	吉田 孝夫	綱島 由人		

○は委員長を示す

歴代会長・副会長一覧

函館大学同窓会

年 度	会 長	副 会 長
昭和44	飯 田 石 勝	宮 腰 泰 直
45	大 山 紀 明	前 田 哲 夫
46	大 山 紀 明	前 田 哲 夫
47	大 山 紀 明	前 田 哲 夫
48	大 山 紀 明	前 田 哲 夫
49	大 山 紀 明	前 田 哲 夫
50	大 山 紀 明	前 田 哲 夫
51	松 倉 清 治	見 上 武
52	松 倉 清 治	見 上 武
53	松 倉 清 治	見 上 武
54	松 倉 清 治	見 上 武
55	松 倉 清 治	見 上 武
56	松 倉 清 治	見 上 武
57	松 倉 清 治	見 上 武
58	松 倉 清 治	見 上 武
59	松 倉 清 治	見 上 武
60	松 倉 清 治	見 上 武
61	松 倉 清 治	見 上 武
62	見 上 武	松 尾 正 寿
63	見 上 武	松 尾 正 寿
平成元	見 上 武	松 尾 正 寿
2	見 上 武	松 尾 正 寿
3	見 上 武	松 尾 正 寿
4	見 上 武	松 尾 正 寿
5	見 上 武	松 尾 正 寿
6	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
7	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
8	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
9	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
10	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
11	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
12	高 橋 勝 美	松 尾 正 寿
13	松 尾 正 寿	野 崎 隆 夫
14	松 尾 正 寿	野 崎 隆 夫
15	松 尾 正 寿	野 崎 隆 夫
16	松 尾 正 寿	野 崎 隆 夫
17	松 尾 正 寿	野 崎 隆 夫
18	松 尾 正 寿	伊 藤 龍 一
19	松 尾 正 寿	伊 藤 龍 一
20	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
21	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
22	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
23	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
24	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
25	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
26	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一
27	木 村 一 雄	伊 藤 龍 一

函館大学協学会

年 度	会 長	副 会 長
昭和43	菊 田 小 太 郎	岩 平 正 吉
44	菊 田 小 太 郎	田 中 友 勝
45	菊 田 小 太 郎	田 中 友 勝
46	田 中 友 勝	能 山 精 祐
47	田 中 友 勝	能 山 精 祐
48	田 中 友 勝	能 山 精 祐
49	田 中 友 勝	大 森 要 吉
50	田 中 友 勝	大 槻 輝 彦
51	田 中 友 勝	大 槻 輝 彦
52	田 中 友 勝	大 槻 輝 彦
53	田 中 友 勝	品 田 隆 光
54	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
55	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
56	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
57	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
58	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
59	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
60	田 中 友 勝	時 田 侑 彦
61	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
62	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
63	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
平成元	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
2	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
3	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
4	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
5	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
6	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
7	川 越 耕 吉	時 田 侑 彦
8	川 越 耕 吉	橋 本 守 亨
9	山 村 幸 生	橋 本 守 亨
10	山 村 幸 生	橋 本 守 亨
11	山 村 幸 生	橋 本 守 亨
12	山 村 幸 生	高 橋 亨
13	山 村 幸 生	高 橋 亨
14	大 桃 泰 行	高 橋 亨
15	大 桃 泰 行	高 橋 亨
16	大 桃 泰 行	高 橋 亨
17	大 桃 泰 行	高 橋 亨
18	大 桃 泰 行	高 橋 亨
19	大 桃 泰 行	高 橋 亨
20	大 桃 泰 行	高 橋 亨
21	宮 川 照 平	高 橋 亨
22	宮 川 照 平	高 橋 亨
23	宮 川 照 平	高 橋 亨
24	宮 川 照 平	高 橋 亨
25	吉 川 達 也	高 橋 亨
26	吉 川 達 也	高 橋 亨
27	吉 川 達 也	高 橋 亨

校歌・学園歌

函館大学校歌

親潮速き

(壮厳に)

Maestoso ♩=96

作詞 土田 秀雄

作曲 館野 信平

お や し お は や き か い ー き ょ う ー を と

ど ろ と よ す る あ ら な ー み ー も

の り こ え ゆ か ん ひ た す ら に ほ っ き よ く せ い を あ お ぎ つ つ

し ん り の う み に さ お さ せ ば も く し ー ひ ら け て ひ と の よ の ま

こ と の へ い わ あ ら ー わ れ ん

お お こ れ ぞ こ れ と も が き を ひ と つ に む す ぶ の ぞ み な れ

た た え ん か な や わ れ ら が ぼ こ う

三

狭霧晴れゆく蝦夷松の
林のかなた郭公鳴く
思案の朝を踏みゆけば
心開くる思いあり
友とし学ぶ幸ありて
誠に結ぶ学園の
道をひとすじに進まん
お、これぞこれ友垣を
一つに結ぶ望みなれ
讃えんかなや我等が母校

二

帆なみも霞む大平原
かもめ群れとぶ北の海
尽させぬ富を開きつつ
担う文化の豊けさよ
恵み分ちて諸びと、
手に手をとらば人の世の
楽園こゝに開けなん
お、これぞこれ友垣を
一つに結ぶ望みなれ
讃えんかなや我等が母校

一

親潮速き海峡を
とどろと寄する荒波も
乗り越え行かんひたすらに
北極星を仰ぎつつ
真理の海に棹させば
黙示ひらけて人の世の
まことの平和あらわれん
お、これぞこれ友垣を
一つに結ぶ望みなれ
讃えんかなや我等が母校

学 園 歌

(新緑薫る)

(壮厳に)

Maestoso ♩=96

作詞 武田 勉

作曲 野又 貞夫

し んりょ く か お ー る は く え ん に

わ が ま な び や は そ び え た つ

き ぼ う に も ゆ ー る わ こ う ど が

き よ く あ か る く は つ ら つ と

つ ど い む つ み て も ろ と も に

し ん り の み ち を す す み ゆ く

わ が が く え ん に さ か え あ れ

三

朝霧ついて厳かに
自由の鐘は鳴り渡る
輝く伝統享けつぎて
永く久しく逞(たくま)しく
集い睦みて諸共に
躍進日本を創りゆく
我が学園に栄えあれ

二

仰ぐ北斗の星影は
高き理想のしるしなれ
まことの心養いて
強く正しく撓(たわ)みなく
集い睦みて諸共に
輝く文化築きゆく
我が学園に栄えあれ

一

深緑薫る柏苑に
我が学舎(まなびや)は聳え立つ
希望に燃ゆる若人が
清く明るく澁刺と
集い睦みて諸共に
真理の道を進みゆく
我が学園に栄えあれ

新聞記事に見る大学のあゆみ

(新聞記事著作権処理済)

函大、市役所破り優勝

全道サッカー選手権
地区予選



全道サッカー選手権地区予選
函大の選手たち

スピードで圧倒

全日本出場を目指す

【函館市】函大サッカー部は、全道サッカー選手権地区予選で、市役所を破り優勝した。この勝利で、全日本選手権出場を目指す。試合は、市役所が前半から積極的にボールを回し、後半には、函大の守備が崩れ、市役所がゴールを奪った。函大は、後半に反撃したが、市役所の守備が堅く、ゴールを奪うことができなかった。

◀1999/6/15 北海道新聞より

▼2000/5/26 函館新聞より

橋本さん函大で講義

ホテルビジネス論開講



【函館市】ホテルビジネス論の講義を開講した。講師は、ホテル業界の専門家である橋本さん。講義では、ホテルの経営戦略、マーケティング、人事管理などについて詳しく講義した。参加者は、ホテル業界に興味がある学生や社会人など、約30名が参加した。

【函館市】函大の学生は、今年度の全道サッカー選手権地区予選で、市役所を破り優勝した。この勝利で、全日本選手権出場を目指す。試合は、市役所が前半から積極的にボールを回し、後半には、函大の守備が崩れ、市役所がゴールを奪った。函大は、後半に反撃したが、市役所の守備が堅く、ゴールを奪うことができなかった。

函大、アジアで初提携

南開大(天津)と姉妹校に

5月に代表団来函

【函館市】函大は、中国天津市の南開大学と姉妹校提携を結んだ。この提携は、函大が初めてアジア圏と結んだ提携である。提携の目的は、両校間の学生交流、教員交流、共同研究などを行うことにある。南開大学は、中国の著名な大学であり、工学、理学、経済学など幅広い分野で研究を行っている。函大は、この提携を通じて、国際化を進め、学生の国際感覚を養うことに努める。

▲2001/2/22 函館新聞より

マスコミ関連2コース新設

学部・学科へ 専攻塾制度も導入

新年度から函大

【函館市】函大は、新年度からマスコミ関連の2コースを新設する。このコースは、マスコミの現場で働くための実践的な知識とスキルを身につけることを目的としている。また、専攻塾制度も導入される。この制度は、特定の分野に専攻する学生に対して、より高度な学習機会を提供するための制度である。函大は、これらの取り組みを通じて、学生の就職率を向上させ、社会に貢献することを目指す。

▲2001/2/25 函館新聞より

つた。また、このころから、学生
の生活が活動的で自由
になりだした。

○開設式は、野矢と佐々木
の親友又義理部長、岡村村長
長、ジャマニ部部長の横倉
久郎長、軽信部の多田出
矢部長の4人がテーパーカ
ラで長い杖を十分けり合
うて大いに技術を楽しんで
ほい。大分けでなく他地
域社会にも開校し、役立っ
てもらいた」とある(以下略)。

したあとも、岡村が早速、バ
ンケットを開き「これからは
大きな意も大丈夫と」
郷へ黄色い紙をよく。

法人野又
生誕100年記



野又学園の同窓生ら創立者生誕100年祝う

函館大など七校を運営する学校法人野又学園の創立者、故野又貞夫さんの生誕百周年を記念し、同窓会主催の懇親パーティが十二日夜、函館国際ホテルで開かれた。同窓会連合同窓会の松田紀昭会長が、野又肇理事長に胸像の目録を贈り、スピーチで除幕された。野又理事長「写真」は「同窓生の思いが伝わり、感動が胸にいつぱいです」と謝辞を述べた。

胸像は各校に贈られた。

成果や活動紹介

アカデミック
フォーラム

[illegible]

は企業との共同研究などを紹介、研究成果を明らかにした。別会場では特別講演として、教官や企業の研究員が、各自が取り組んでいる研究成果や活用の可能性などを発表した。

【神山香峰子】

函館大学 専攻塾導入に対応

[illegible]XI 資 料
新聞記事に見る大学のあゆみ



山内さん（左）の指導で、撮影に臨む学生たち

客員教授山内鉄也監督の講義「映像制作論」実践 函大生が映画制作

3回目口ケ

年内編集、来年1月
最後の授業で試写会

[illegible]

国語大の学生4人が、日本映画製作者協会の理事・岡大英典教授・山内鉄造さん（国語）が主任を務める「国語大映画制作部」の部長として、授業の一環として映画制作に力を入れている。脚本から撮影、出國費まで、学生の手で、自ら制作した映画が、日本大学で公開された。

英語教職課程を新設

函館大学が新年度から

[illegible]

2. 【阿部里子】
0120・00・117

◀ 2002/10/10 函館新聞より

刺激を受けた全国学生ゼミ大会発表

卒論も函館活性化を

[illegible]

静かなる
挑戦
産学連携

函館大学(下)

を指し、
 だが、大食は学生生活を達成感ではなく、研究の未熟さを知らしめた。「ほかの学生は自分たちで、
 と思ふ。以上は研究終了の「離れ」だと思ふ。
 りた。同年代の学生たちは、
 アイスカシオンから、
 んだことが多かった。
 同サットをテーマに
 た研究は、この大会で最
 最後には幕を閉じた。
 が、学生生活の研究は自
 らながら、卒業生は、
 自ら新し、テーマを総
 し、卒業生に取り組
 ことになった。
 千歳出の須藤さん、
 「同年代生に入って、
 館や地ノメンサット



共同論文を輪読する須藤さん（左）ら学生

にかかわることができ、トのども燃れることに人々、今回の経験を示した。卒論もぜひ、困難な状況と語る。ブに今度は一人ずつ、活字化をテーマに取り上げたい。研究の難しさと面白さ、成感を指摘そうじにしたい。その中でサミシが分かりかけてきた10【早稲田大】

▲ 2003/1/9 函館新聞より

◀ 2003/3/13 函館新聞より

255

教授（中国文
院に5カ月間

函大 5部門で最優秀賞

4部門で敢闘賞も受賞

少林寺拳法全日本学生大会

気持ち一つに演武

女子団体戦



「少林寺拳法全日本学生大会」が、2007年10月21日（日）に、東京都立体育館で開催された。函大は、少林寺拳法部が、4部門で敢闘賞、5部門で最優秀賞を受賞した。女子団体戦では、大宅・七戸組が、技のキレ・気合いがすべてが完ぺきと評価され、大宅・七戸組が、最優秀賞を受賞した。

成長し合い栄冠

上山・山田・川浪組



上山・山田・川浪組は、女子団体戦で、最優秀賞を受賞した。彼らは、成長し合い、栄冠を手にした。

▲ 2007/10/21 函館新聞より

函大 大学基準で適正

東京の財団法人が認証評価



「より努力、地域貢献に力」
東京の財団法人が認証評価
函大は、東京の財団法人が、大学基準で適正と評価された。これは、函大が、より努力、地域貢献に力を入れていることが、評価されたことである。

▲ 2008/3/26 函館新聞より

函大 初戦突破

全日本大学野球選手権

エース 佐藤公 変化球さえる

投手	打者	得点	打点	安打	二塁打	三塁打	本塁打	盗塁	犠打	犠飛	エラー	内野安打	外野安打	併殺打	三振	四球	暴投	捕逸	凡退	その他	合計
佐藤公	佐藤公	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
...

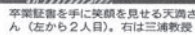
▲ 2008/6/11 函館新聞より

大田でバスを手兼トニーとして4年間働く経験をなし、開発費や持込力に費した。体面をメンタル面の維持にしたいと学んだ。

卒業後、熊本に戻り、2003年10月

函大出身の競輪選手・服部さん

▲ 2009/11/7 北海道新聞より



「先生たちに感謝
天満さん社
初大函

[illegible]

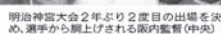
函大生が募金活動

[illegible]

函大2年ぶり神宮へ

道大学野球
代表決定戦

佐藤将
MVP

[illegible]XI 資 料
新聞記事に見る大学のあゆみ

函大 6年ぶり全国V



チーム力で接戦制す ボウリング大学選手権

ボウリングの部は、日本大学選手権大会（以下、全大ボウ）で、6年ぶりとなる全国優勝を挙げた。優勝したのは、函大ボウリング部だ。この優勝は、チームの団結力と、選手たちの努力の結晶である。大会では、激しい接戦が続いたが、最終的には、チームの力で優勝を収めた。この優勝は、チームの士気を大いに高めた。また、この優勝は、チームの歴史に輝く一ページとなる。チームのメンバーは、この優勝を機に、さらなる活躍を期している。

5選手の出場点とアベレージは次の通り。

選手名	3年	4年	5年	6年	合計	アベレージ
①藤原 大	3203点	3192点	3184点	3184点	12763点	3191点
②佐藤 大	3203点	3192点	3184点	3184点	12763点	3191点
③小島 大	3203点	3192点	3184点	3184点	12763点	3191点
④小島 大	3203点	3192点	3184点	3184点	12763点	3191点
⑤小島 大	3203点	3192点	3184点	3184点	12763点	3191点

大会では、激しい接戦が続いたが、最終的には、チームの力で優勝を収めた。この優勝は、チームの士気を大いに高めた。また、この優勝は、チームの歴史に輝く一ページとなる。チームのメンバーは、この優勝を機に、さらなる活躍を期している。

▲ 2011/12/10 函館新聞より



萌えキャラで函館売り込め

全国で今春発売へ

函大学生が8商品開発

函館大学（函大）の学生たちが、萌えキャラをテーマにした商品を開発し、全国で今春発売へ向けて準備を進めている。この商品は、函大の学生たちが、自分たちの母校を愛する気持ちを込めて開発した。商品は、萌えキャラのデザインが施されたグッズで、全国で人気を博している。函大の学生たちは、この商品を機に、函大の知名度を高め、函大の魅力を伝えることに力を入れている。

▲ 2012/2/29 函館新聞より

旧金森美術館教育に利用 函大が学外拠点開設



公開講座なども予定

函大は、旧金森美術館の建物を利用して、学外拠点（学外学習センター）を開設した。この拠点は、学外学習の場として活用される。また、公開講座なども予定されている。この拠点は、学外学習の場として活用される。また、公開講座なども予定されている。この拠点は、学外学習の場として活用される。また、公開講座なども予定されている。

▲ 2013/3/29 北海道新聞より

函大 目指せ強豪撃破



ソフトテニスの日本学生選手権大会（日本学生ソフトテニス選手権大会）で、函大ソフトテニス部は、強豪チームと対戦する。函大は、この大会で、強豪チームを撃破し、優勝を目指す。この大会は、全国の学生たちが参加する大会で、非常にレベルが高い。函大は、この大会で、強豪チームと対戦する。函大は、この大会で、強豪チームを撃破し、優勝を目指す。

2013/8/3 函館新聞より▶

263

函大開学50周年



開学50周年の節目
迎える函館大校舎

地域と共に発展

兩館大（兼田春天学長）は今年、開学50周年の節目を迎える。商学部のみ、単科大学という強みを生かした、専攻分野に对应できる有益な人材を育成してきた。小規模ならではのきめ細やかな指導や地域と連携した授業「商学部塾」による実践教育に力を入れる。10月に開学50年の式典が、記事事業の検討も進めている。

（山崎大和）

た。87年には留学・会計コース、経営情報コース、国際英文秘書コースの3コース制を導入、2010年に企業経営コース、市場創造コース、英語国際コースに再編した。学部ながら、英語の教員免許を取得できる。

初代学長を務めた野又貞夫氏（故人）が、1965年に高丘町に開学。しかし、新築した本館校舎は68年5月16日の十勝沖地震により全壊。震災復興校舎は69年に落成し

革を行いながら歴史を刻んできた。

卒業生が活躍

これまで卒業生は9,560人を数え、函館市議会の松尾

指導きめ細やか／実践教育に力

[illegible]

就職実績高く

▲ 2015/2/16 函館新聞よ

▲ 2015/2/16 函館新聞より

地域振興 若い力を

函館市と函大が相互協力協定



相互協力協定書を交わす工藤市長（左）と
溝田学長

園都市と園庭大学は30日、地域振興にかかわる各分野で協力関係を築く相互協力協定を交わした。工藤寿樹市長、蒲田春夫学長が協定書を交わした。地域福祉、環境問題、観光振興など多岐に渡る分野で学生主体の活動などを通して、地域活性化に貢献する。(金井正二)

にこそ、でも問題を発見し解決する力を養い、教育にとつても良い効果がある」と話した。

観光・福祉・環境問題：11項目で連携

同大学は1966年の創設以来、今年で50周年を迎える。この機会に、月々の開催「ハーフマソン」化に向けて、11項目の連携・協力を定めた「ハーフマソン」調査を予定している。観光満足度調査、福祉満足度調査、環境満足度調査、健康満足度調査、生活満足度調査、学習満足度調査、職業満足度調査、人間関係満足度調査、自己満足度調査、社会貢献満足度調査、国際化満足度調査の11項目で連携・協力を定めた「ハーフマソン」調査を予定している。

長は「国字部は扱う分野が幅広いのが特徴。年に1度は市役所側と課題について協議の場を持ちたい」と話した。

▲ 2015/3/31 函館新聞より

少人数でも質の高い教育を

函館大学などグループ9校を運営
学園・野又淳司新理事長に聞く

[illegible][illegible]

新幹線に青函交流の期待

地域産業発展へ人材育成図る

[illegible]

▲ 2015/4/19 函館新聞より

函大 57季連続V

道学生ハンドボール春季リーグ1部



道学生ハンドボール春季リーグ優勝。記録を更新した函大（写真左から）ツイン・ハンドボール部。



函大ハンドボール部（松浦美夫監督、部員14人）が14～17日に江別市などで開かれた第42回北海道学生ハンドボール春季リーグ戦1部（道学生ハンドボール連盟主催）で5戦全勝し、優勝した。同リーグ連覇（春、秋季）を57季連続（通算67回目）、連勝を283（2分）と伸ばした。一方で課題も見つかり、チームは11月に函館アリーナで開かれる全日本学生選手権（インカレ）に向け、気持ちを引き締めている。（山崎純一）

記録更新も内容に課題

松浦監督は大会前、選手たちに「記録更新は素晴らしいが、それだけでなく、試合内容も向上させる必要がある」と話した。昨年の春季リーグ戦で、チームは全勝を挙げたが、試合内容には課題が見られた。特に、後半の失点が多いことが、監督の懸念事項の一つである。また、インカレ出場のため、選手たちは11月の大会に向けて、さらなる練習を積み重ねている。

▲ 2015/5/25 函館新聞より

函館大同窓会

函大50周年で100万円寄付へ

函館大同窓会（木村一雄会長）は、今年創立50周年の節目を記念し、函大野又学長に「100万円寄付」を依頼する。4月15日、函大（栄広町）で開かれた懇談会の席上、木村会長が野又学長に寄付の手紙を渡した。（山崎純一）

記念事業に活用して

同窓会は、この機会に、同窓会としての役割を改めて果たす。寄付金は、同窓会の活動に活用される。また、同窓会では、毎年、同窓生への交流を促進するための行事を開催している。

あすの懇親会で野又学長に目録

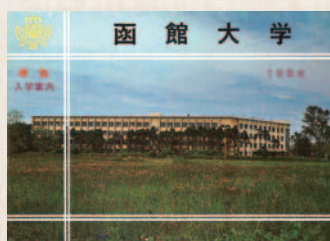
同窓会では、明日（16日）の懇親会で、野又学長に寄付の目録を提出する。また、同窓会では、毎年、同窓生への交流を促進するための行事を開催している。

2015/7/3 函館新聞より▶

大学案内



1966年



1968年



1969年



1970年



1971年



1972年



1973年



1974年



1975年



1977年



1978年



1979年



1980年



1981年



1982年



1983年



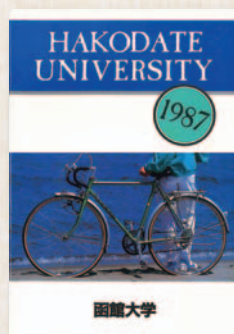
1984年



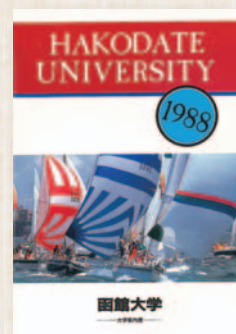
1985年



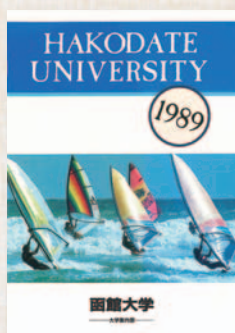
1986年



1987年



1988年



1989年



1990年



1991年



1992年



1993年



1994年



1995年



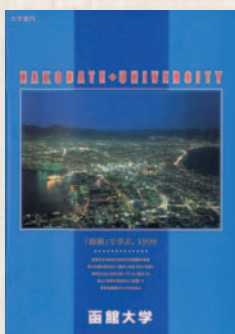
1996年



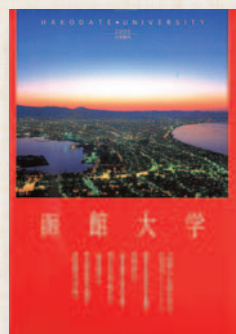
1997年



1998年



1999年



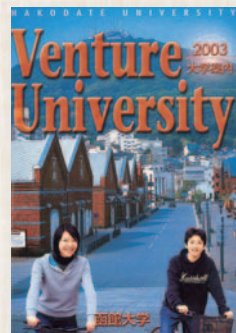
2000年



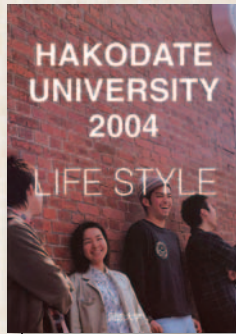
2001年



2002年



2003年



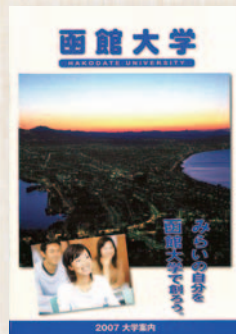
2004年



2005年



2006年



2007年



2008年



2009年



2010年



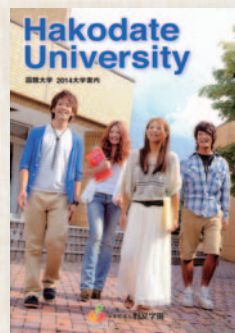
2011年



2012年



2013年



2014年



2015年



編集後記

商学部1学部1学科でスタートした函館大学は、初代学長や多くの教職員の思いをよそに、現在も1学部1学科のままです。しかし、この50年の間に、日本一になったクラブ、世界大会で優勝したクラブを出し、全道優勝したクラブは数えきれません。また、世界のどこにも例のない専攻塾、河合塾のアクティブラーニング調査での全国3位、就職ランキングの東北・北海道の私学1位など教育、就職の成果は、赫々たるものがあります。この小さな大学でよくこれだけの成果をあげたものだという感慨を持つのは筆者のみではないと思います。

もちろん、この成果は、開学以来、連綿と教育・研究および組織の整備に努力してこられた先輩教職員のみならず、そして何より学生の研鑽のたまものであることはいうまでもありません。本誌は、そうした函館大学の足跡を一端なりとも残し、次の世代への架け橋となることを期して編纂したものです。もとより、私たちの能力はその目的にかなうものではありませんが、その意のあるところをお汲み取りいただければと思います。

私たち現役の教職員は、次の50年に向けて前進を続けなければなりません。大学の置かれた環境はますます厳しくなり、求められる施策はどんどん高度なものになってきておりますが、なお一層の研鑽と問題に誠実に向き合うことで、伝統を引き継ぎ、飛躍を期す所存です。小さいながらも大きな仕事を続ける函館大学へ、今後ご注目いただき、ご支援いただきますようお願い申し上げます。

2015年10月

函館大学50周年記念誌編纂委員会委員長

若 松 裕 之

【函館大学50周年記念誌編纂委員会 委員一覧】

委員長 若 松 裕 之

委 員 田 中 浩 司 三 浦 俊 和 坂 野 学

事務局 黒 澤 幹 生 竹 山 久 芳

創立50周年記念 函館大学史



平成27年10月31日

編 集	函館大学50周年記念誌編纂委員会
発 行	学校法人 野又学園 函館大学 〒042-0955 函館市高丘町51番1号 電話 (0138) 57-1181
印 刷	有限会社 三 和 印 刷 〒040-0061 函館市海岸町8番11号 電話 (0138) 45-0845

